

性は低いと思われたため、不確定な要素を含みながらも本文では貯蔵穴の可能性を想定した。

上記の他にも、円形を基調とする平面形で、壁の下場に丸みを持つ「U状」の断面形を呈する土坑についても、Ⅲの袋状的な様相やⅣの深い掘込み的な様相の看取されたものがあるが、不確定な状況が強いいため、種別では「土坑」とし、「一覧表」の備考等に貯蔵穴と想定される可能性を示唆している。

以上、貯蔵穴についてまとめたが、確定的な遺構は殆どなく、全て不確定な内容を含みながらも貯蔵穴の可能性を想定したものである。貯蔵穴の属性として挙げた項目についても、検討が不十分であることは否めず、さらにはこれらの属性と他の種別を示唆する属性が混在する様相の土坑が看取され、判別が困難な状況も認められる。特に土壌との判別では、貯蔵穴の掘込み(凹み)を利用した埋葬形態の可能性なども想定され、また袋状を呈する断面形ではあるがセクション観察から柱穴とされる土坑などもある。こうした問題の詳細を検証するための所見が乏しいことは、今回の調査における反省点であるとともに、今後の課題としたい。

柱穴

「柱穴」は、セクション観察において柱痕や充填土・裏込めの層が明確に認められたものを判別し、これに類する様相のセクションが認められるものについても可能性を推定した。また確定的な柱穴を踏まえ、形状的に柱穴の可能性が想定されるものについても示唆している。

柱穴については、セクション観察によってⅠ、柱痕と考えられる縦位に分層される層があり、これに伴うように充填土と考えられる層や、裏込めと思われる集中的な雑混入が壁際を主体に認められること、Ⅱ、セクション観察による柱痕等は不明瞭であるが、形状などにおいてⅠに類する様相が認められること、などを特徴とした。こうした状況において、覆土の状況は単一的な堆積を主体とする均質な層で自然的と思われるが、形状的には柱穴の様相の見られる土坑も看取される。これについては、形状や覆土自体が柱痕を示唆する可能性が想定される。また、壁際に礫が主体的に混入する形態について、柱を支える裏込め的な機能による可能性が推測されたものは、前述した土壌の属性とは区別して捉えた。

上記の属性によって柱穴と判別された土坑のうち、組になる配列が明確に認められたものを柱穴列として遺構名称を変更した。また、5-51号・53号・79B号・85号の各土坑は、5-10号住居跡の西側から南側に沿うような配列にあり、柱穴列の可能性が想定される。また、5-194号・199号・204号・212号の各土坑は、ほぼ東西軸に沿うように一定の間隔を置いて線状に並ぶ様相が看取されるが、柱穴列とするには確定的な所見に乏しい。

また、柱穴とするには不確定な内容を含むが、特徴的な形態として「対ピット状」とした土坑がある。これは、2基の土坑で構成され、楕円形を基調とする平面形の長軸が平行するように並列して組になると考えられるもので、柄鏡形の住居跡に見られる「対ピット」に類する様相と思われる。この形態の土坑には、遺構確認時には陥穴状の外形を呈する1基の土坑として検出されるが、底面付近や底面において楕円形の2基の土坑に分かれる形状のものがあり、この形状を確認面と判別するのは困難な状況である。この形態の土坑では、5-79A号土坑のセクションで柱痕や充填土層が明確に確認され、柱穴の可能性を想定した。しかし、本土坑では、並列する土坑の東側において、この南西壁際の覆土下位から、同一個体片がまとまる状況で「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁～胴部の大型片が出土している。土器の出土位置は、充填土層中あたると考えられ、主体となる破片は内面を下に向けたほぼ平位の状態で出土しており、口縁側が南を向いている。土器が充填土層中に含まれる点では混入した可能性が推測されるが、主体的な出土状況を呈する点は土壌の属性に通じる内容である。このため、セクションでは柱穴、出土遺物では土壌の特徴が混在する様相であり、検

討を要する事例である。出土遺物から、時期は後期前葉と考えられる。

このような対ピット状を呈する土坑は、上記の他にも5-179号、247号、326A号、組になると思われる単位では5-125A号・134号、5-229号・273号などがある。また配石では、5-383B号、組になる単位では5-24号・92号、79号・80号、101号・103号などがある。また、類する可能性のものでは5-275号土坑などがある。しかし、前述のようにこれらを全て柱穴と推定するには所見に乏しく、不明確なものや判別を保留したものがある。特に、5-179号土坑では、覆土中に配石と思われる隙を伴う状況が認められ、5-247号土坑では、重複する位置関係と思われる5-18号住居跡との関連性などが推測される。このような住居跡との関連性では、5-79A号が5-10号住居跡、5-179号土坑が5-12号住居跡、5-125A号・134号が5-45号住居跡の南側に位置する様相にあり、また対ピット状に類する形態である5-196号・228号の各土坑は、5-28号住居跡に相当するピット群に包括して捉えている。こうした状況も含め、この形態の土坑については問題を含むものである。

また、記載が前後するが、5-79A号土坑における遺物出土状況に類する様相を呈する事例も看取される。これは、柱穴と想定した土坑から後期前葉と考えられる比較的大型の土器片が出土しているもので、この例では5-51号・85号・243号の各土坑などがある。また、住居跡に変更した例も含めれば、5-46号住居跡のピットとした5-266号(ピット8に変更)・286号(ピット9に変更)・327号(ピット10に変更)などの例もある。出土した土器片は、前述の5-79A号も含め、概ね縄之内1式併行期に相当すると考えられ、5-1号柱穴列の8柱穴においても大型の土器片が出土している。これについては、単なる偶発的な混入によるか、何らかの意図的な混入であるかは判然としないが、特徴的な事例と思われる。

以上、柱穴についてまとめたが、対ピット状を呈する土坑の問題や、出土遺物に見られる特徴などについては、詳細を検証するための所見に乏しく、今後の検討課題としたい。

陥穴

「陥穴」については、土壌の記載でも若干触れたが、平面・断面の形状や規模などの形態的な特徴を主体として推定している。陥穴と考えられる土坑は、確認面にあたる上面形が楕円形・長楕円形・長方形・隅丸長方形などを呈し、長軸規模が150cm前後から200cmを越えるものが主体的である。また、深さは100cmを越えるものが殆どであり、確認面からの最大は5-3号土坑で187cmを測る。

陥穴で特徴的なことは、壁面崩落により形状が変形していると推定されるものが多数看取される点である。特に、上面と底面において平面形に差異が認められる土坑は、本来は底面に示される平面形であったものが、崩落などによって上面が開いて変形したものと考えられる。また壁面形状では、6区で検出されたものを中心に袋状を呈するものが多数見受けられ、壁際を主体に堆積するロームやAs-YPkのブロック状堆積などの状況から、崩落による形状と考えられる。この壁面崩落においては、掘削深度の違いもあるため一概ではないが、特にⅧ-2層(As-YPk層)に相当する壁面の崩落が顕著である。こうした崩落に関連する土坑では、6-114号や121号の各土坑が代表的である。これらの土坑の覆土は、壁際・下部・中央部の層に大別され、壁際のローム塊やAs-YPkのブロック状堆積などを主体とする不規則な堆積状況を呈している。これについては、人為的な可能性も想定されたが、壁面の地滑り的な崩落に起因する可能性を想定している。

これに対し、自然堆積と人為的な埋没過程が推定される土坑も看取される。この様相が認められる土坑としては、6-55号・60号・65号・74号・103号・112号・113号・118号、7-1号・16号・23号などの各土坑などがある。以下、上記の土坑における覆土の概略について述べたい。

第4章 検出された遺構・遺物

6-55号土坑では、上半部と下半部で堆積状況に差が認められる。上半部は壁際と中央部の層に大別され、縦に分層できる。下半部はレンズ状の堆積を呈する上・下層に大別され、崩落と思われるローム塊が壁際に堆積し、下層は軽石を多量に混入する層である。上・下半部ともに均質な層で、下半部は自然堆積と考えられるが、上半部は人為的な様相があり不明確である。

6-60号土坑では、壁際から下部の層と中央部の層に大別される。レンズ状を呈する均質な層で自然堆積と考えられるが、中央部の層は人為的な様相があり不明確である。

6-65号土坑では、上半部と下半部で堆積状況に差が認められる。上半部は壁際の層と中央部の層とに大別され、中央部は単一的な層が縦に分層される。下半部は崩落と思われるロームを多量に混入する層が堆積し、レンズ状や水平を呈する堆積である。上・下半部ともに均質な層で自然堆積と考えられるが、上半部の中央部は人為的な様相があり不明確である。

6-74号土坑では、上半部と下半部で堆積状況に差が認められる。上半部は縦に堆積する層が並び、下半部はレンズ状や水平を呈する堆積である。上・下半部ともに均質な層で、下半部は自然堆積と考えられるが、上半部は人為的な様相があり不明確である。

6-103号土坑では、壁際及び下部層と中央部の層に大別される。壁際には崩落と思われるローム塊が堆積し、中央部は縦に分層される。全体的に均質な層で壁際及び下部は自然堆積と考えられるが、中央部は人為的な様相があり不明確である。

6-112号土坑では、壁際及び下部層と中央部の層に大別される。壁際には崩落と思われる軽石のブロック状堆積があり、中央部は単一的な層が縦に堆積する。全体的に均質な層で壁際及び下部は自然堆積と考えられるが、中央部は人為的な様相があり不明確である。

6-113号土坑では、上半部と下半部で堆積状況に差が認められる。上半部は壁際と中央部に大別され、縦に分層できる。壁際には崩落と思われるローム塊や軽石のブロック状堆積がある。下半部は水平を呈する堆積である。全体的に均質な層で自然堆積と考えられるが、上半部には人為的な様相があり不明確である。

6-118号土坑では、壁際及び下部層と中央部の層に大別される。壁際や下部には崩落と思われるローム塊や軽石のブロック状堆積があり、中央部は単一的な層が縦に堆積する。全体的に均質な層で壁際及び下部は自然堆積と考えられるが、中央部は人為的な様相があり不明確である。

7-1号土坑では、壁際及び下部層と中央部の層に大別される。壁際には崩落と思われるローム塊が堆積し、中央部は単一的な層が縦に堆積する。全体的には均質な層で壁際及び下部は自然堆積と考えられるが、中央部は人為的な様相があり不明確である。

7-16号土坑では、上部中央に縦に堆積する層がある。均質な層で自然堆積と考えられるが、上部中央の層は人為的な様相があり不明確である。

7-23号土坑では、上半部と下半部で堆積状況に差が認められる。上半部は、縦や斜に堆積する層が並び、下半部はレンズ状や水平を呈する堆積である。全体的に均質な層で自然堆積と考えられるが、上半部は人為的な様相があり不明確である。

上記の各土坑の所見として、人為的な様相の部分については漸移的な自然堆積層や、壁際の崩落層によって土坑中央部に土坑状の空間が生じる可能性などを想定していた。しかし、その後の検討では、別遺構の重複や掘返しなどによる人為的な造作の可能性も示唆されたため、詳細は不明確な様相を呈している。

また、重複を認識した可能性として6-122号土坑がある。この土坑は、上面が楕円形、底面が長方形を呈する平面形であるが、底面の南半部に楕円形の掘り込みがある。この掘り込みと北半部にあたるテラス状の

平坦面との接部にあたる壁面には、切り合いの際に生じたと思われる鋭角状断面の稜線が看取され、重複する土坑の可能性が想定される。この点では、底面の掘込みが別遺構にあたり、覆土の1・2層がこれに伴う覆土と推測されるが、調査時の明確な所見はなく不確定である。

この他に、陥穴の特徴である逆茂木痕などについては、この可能性が想定される小穴が検出された土坑はあるが、確定的なものは稀少である。特に、底面がⅢ-2層(As-YPk層)に相当する土坑では、形状が不明瞭であった。また、重複関係で特徴的な陥穴として、住居跡と関係するものでは4-24号、5-182号・213号の各土坑、柱穴列としては5-3号・4号の各土坑がある。4-24号土坑は4-1号・2号住居跡と重複し、炉跡を切る関係で新しいと考えられる。5-182号土坑は5-8号住居跡と重複し、セクションや出土遺物の様相などから、住居跡を切る関係で新しいと考えられる。5-213号土坑は5-46号住居跡のビット5と重複するが、新旧関係は不確定である。5-3号・4号土坑は、5-2号柱穴列と重複し、5-3号土坑が5柱穴、5-4号土坑が6柱穴と切り合う関係にあるが、新旧関係は不確定である。

さらに出土遺物で特徴的な陥穴としては、3-2号土坑と6-56号土坑がある。

3-2号土坑では、北東側に近接する確認面上から、燃糸文系土器の深鉢口縁部へ胴部片が出土している。土坑に近接する状況から、発掘調査時には本土坑に関連する可能性を推定して取り上げている。しかし、土坑の覆土中から同類の土器が出土する状況は認められなかったため、本土坑に伴う可能性は不確定な状況でもある。遺物の時期は、早期前葉の末頃と推定される。

6-56号では、覆土中から、晩期の壺形土器の口縁部片が1点出土している。土器は、変形工字文の系統にあるものと考えられるが、この他の出土遺物の様相は中～後期が主体的である。このため、長期間にわたる埋没過程時に混入した可能性が想定されるが、検討を要する。

また、上記した「長期間にわたる埋没過程」に関連する例として、6-116号土坑が挙げられる。この土坑は、本章第1節の概要でも述べたように、覆土中に含まれていた炭化物の年代測定値がAD665～775(補正による暦年代幅)を示している。この結果によれば、少なくとも7世紀後半～8世紀後半以前に構築された年代観が示唆されたことになるが、覆土や形状等、また遺構外を含め該期の遺物が極めて少ない状況などから推測された所見としては、本土坑は縄文時代の所産と考えられる。また、年代測定と併せて実施したテフラ検出分析結果との比較においても年代観の齟齬が認められ、何らかの作用による土壌汚染の可能性が示唆されている。これにより、本文では6-116号土坑を縄文時代の所産としている。

しかし、明確な擾乱等が確認されていない状況では、この年代観も不確定な要素を含むことになろう。現状での齟齬を許ろうとすれば、縄文時代の陥穴が8世紀後半代にも凹みとして残っていたとする想定も可能と思われるが、想像に近い内容であり具体性に乏しい。従って、6-116号土坑の年代観については多大な問題を含むもので、今後の調査による類似土坑の蓄積を待って再検証する必要があると思われる。この点については、平成12年度に実施された八ツ場ダム関連の発掘調査において、同様の問題を含む可能性の土坑が発見されていることを付記しておきたい。

以上、陥穴についてまとめたが、重複や掘返的な行為が想定されるもの、また6-116号土坑の例などについては、詳細を検証する所見に乏しい内容となってしまったことは否めず、反省点として認識するとともに今後の調査における課題としたい。

土坑

「土坑」は、種別の推定が困難なものを示し、「一覧表」では「？」の記号で表記したものである。土坑と

したものは、I. 各種別の属性が混在する状況、また属性的な様相は認められるが不確定であるため判別が困難なもの、II. 属性に乏しいため種別の推定が困難なもの、に大別され、その殆どはIIに属するものである。Iに属するものについては、想定される種別を「一覧表」の備考等に示しており、また前述した対ピット状の形態を呈する5-179号・247号土坑などは、これに含めて表記している。

Iに属する土坑で代表的なものは、5-110号土坑である。本土坑は、楕円形を呈する平面形で、この北側の覆土下位から、別個体ではあるが深鉢胴部の大型片がまとまる状態で出土している。また断面形状では袋状を呈する様相があり、覆土のセクション観察では縦位に分層される柱痕状の層が認められる。以上の要素は、土壇・貯蔵穴・柱穴として挙げた各属性に相当し、主体的な種別の判別が難しい状況にある。出土遺物から、時期は後期前葉と考えられる。

この他、土壇的な様相のものでは5-76号土坑などがあり、自然的な覆土と思われるが形状的には土壇的な様相を呈している。貯蔵穴的な様相のものでは、6-109号や110号の各土坑などがあるが、6-110号土坑については柱穴的な様相も看取される。柱穴的な様相のものでは、5-227号や246号の各土坑などがあり、裏込め的な様相の礎混入が看取される。陥穴的な様相のものでは、9-3号土坑などがあり、平面形状などは陥穴的な様相であるが、削平などを考慮しても掘込みが浅いように思われる。

上記に挙げた土坑他にも、形状的な様相などから有機的と思われる土坑が多数看取される。しかし、各種別の属性とした要素に乏しい内容であり、これらについては一様に「土坑」として扱っている。不確定な想定ながらも可能性を示唆するとすれば、平面・断面形状や規模等が比較的しっかりしている有機的な土坑については、土壇や貯蔵穴とされるものがあるように思われる。特に、貯蔵穴の可能性が想定された土坑が少ないような傾向にあり、土坑としたものの中に類別があるように思われるが、不明確な状況である。

これらの他に特徴的なものでは、5-10号・21号、6-21号の各土坑の覆土には自然堆積と人為埋没が混在する様相が看取される。同じく覆土の特徴では、6-88号土坑の覆土には充填土的なローム主体土の堆積が看取され、6-97号土坑の覆土は規則的な自然堆積と思われるが、ロームを多量に含む不均質層が認められ、不明確な様相を呈している。さらに重複で特徴的なものでは5-129号土坑があり、5-7号住居跡の床面で確認され、同住居跡の炉跡を切る状況が認められる。このため、住居跡廃絶から近い時期に掘られた可能性が考えられ、炉跡に関連する何らかの造作に伴う様相が想定される。

以上、土坑としたもので特徴的なものについてまとめたが、不明確な内容をまとめた状況であり、こうした土坑の問題等については今後の課題としたい。

(6) 土坑出土遺物

本遺跡で検出された土坑から出土した遺物の総点数は、土器が約3,965点・石器類が約312点(うち製品約119点)を数える。また、個々の遺構からの出土点数は、「土坑一覧表」に示したとおりである。これらの遺物は土坑の覆土中から出土したものが主体的で、特に土器は小破片が殆どで、遺構の時期を明確に示唆するものは少ない状況である。このため、本文ではこれらの中から特徴的と思われる資料を図示しており、遺構の中には未掲載とした遺物から時期を推定しているものがあることをお断りしておきたい。以下、図示し得た遺物について、土器・石器に分けて各遺構ごとに観察する。

土坑出土土器・土製品等 (第235～255図：PL114～122)

3-2号土坑 3点を図示したが、これらは土坑の北東側に近接する確認面から出土したもので、厳密には2Y-20グリッドの4層(VI層相当)上面から出土したものを本土坑の遺物として取り上げたものである。1は同一個体の深鉢口縁及び胴部片、2・3は深鉢の胴部片である。1は破片から器形を推定したもので、口径19.8cmを測る。平口縁で、口端部を肥厚して作出し、口端上に磨きを施す。外面口端下には横位の撫でを施し、これにより口端部は僅かに外傾する形状を呈し、燃糸(L)を縦位施文する。2・3も燃糸(L)を施文するもので、2は横位ないし斜位、3は縦位施文すると思われるが、摩耗しており不明瞭である。また3の胎土には片岩を多く含む。

4-3号土坑 5点を図示した。4は深鉢の口縁部片、5は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片、この他は胴部片である。1・2は2条単位の隆帯による懸垂文で縦区画するもので、1は斜位の沈線文と、懸垂文内には太めの沈線による斜位の短沈線文を充填し、2は原体RLを斜位施文するが不明瞭である。3は地文に燃糸(L)を縦位施文する。4は波状口縁と思われ、低い隆帯を口端下から斜位に施し、これに交差する斜位隆帯を施すX状の文様が看取される。また隆帯の交点上に沿う沈線が看取され、この部分が突起状に高まる。5は2条単位の並行沈線を懸垂する文様部が看取される。

4-4号土坑 3点を図示した。3点とも深鉢の胴部片で、1は綾杉状、2は斜位、3は縦位の沈線文を施文し、1は横位隆帯1条とこの上位に沿う沈線を巡らした下位、2は3条単位の隆帯による懸垂文で縦区画して施す。

4-5号土坑 1点を図示した。1は底部片で径8.6cmを測り、僅かに懸垂する沈線が看取され、底面は無文である。

4-7号土坑 1点を図示した。1は覆土下位から主体的に出土した深鉢口縁～胴部の大形片である。口径40.8cm・最大径41.2cm・残存高16.6cmを測る。平口縁で、口縁部は低い隆帯とこれに沿う幅広の浅い沈線で渦巻状の単位文を持つ文様部を描出する。胴部は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位ないし斜位施文するが、懸垂文内にも縄文が看取され、懸垂文の上端から浅い沈線を1条斜位に垂下する。器面が脆く、二次的な被熱によると思われる。

4-10号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1は地文に原体LRを縦位施文し、2は半截竹管の平行沈線による沈線文を縦位に施す。

4-20号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、懸垂する隆帯とこれに沿う沈線で縦区画し、綾杉状の沈線文を施す。

4-29号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。平口縁で、口端下が無文帯を呈し、この下位

に斜位の沈線が僅かに看取される。

5-1号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の口縁部片で、平口縁である。1は口端部が僅かに内折し、内面口端下に浅い沈線を1条施す。外面は刻みを持つ細い横位隆帯を2条巡らし、この下位には横位沈線が1条看取される。2は粗い撫でによる無文で、浅い沈線状を呈する整形痕が看取される。

5-2号土坑 8点を図示した。1は深鉢の口縁部片、8が底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、内面口端下に折り返し状を呈する段部を持ち、外面には浅い撫での横位沈線が1条看取される。2は低い隆帯と幅広い浅い沈線で凹状などと思われる曲線的な区画文を描出し、また渦巻状を呈すると思われる弧状沈線が看取される。3は大きく剝離する部分があるが、懸垂する浅い沈線が1条看取される。4は横位隆帯を1条巡らし、この下位には沈線による区画文の端部が方形状に看取される。5・6は地文に沈線文を施すもので、5は紐状を呈する縦位の隆帯に沿ってやや斜位に施し、6は2条単位の隆帯で縦区画して斜位に施文する。また5の沈線文は半截竹管の平行沈線による。7は2条単位の低い隆帯でU状の区画文を描出し、沈線文を斜位に充填後、隆帯に沿って浅い沈線を施す。8は底面に網代痕を持つ。

5-3号土坑 3点を図示した。3点とも深鉢の胴部片である。1は地文に原体LRを縦位施文する。2は縦矢羽状の沈線文を施す。3は櫛歯状工具による条線文を施文後に磨り消しを施し、2条単位の沈線をV状に垂下する。

5-5号土坑 15点を図示した。1は浅鉢と思われる口縁部片、6は深鉢の口縁部片、12~15は底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、撫で整形による無文である。2は沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。3は隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状文を描出し、隆帯間に短線状の刻みを施す。4は縦矢羽状・5は斜位の沈線文を地文とするもので、4はやや斜位及び蛇行して垂下する隆帯、5は2条単位の隆帯による懸垂文で区画する。6は波状口縁と思われ、口端部が僅かに内折し、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らし。外面には刻みを持つ細い横位隆帯が2条看取され、隆帯間に8字状貼付文を施す。7~10は並行沈線による帯状の区画で文様を描出するもので、7は三角形状を呈する区画文の端部、8は渦巻状などと思われる曲線的な文様部、9は三角形の区画文部、10は三角形を相対する菱形の文様部が看取され、10を除いて原体LRを充填する縄文帯を持ち、7・8は区画文内、9は帯状内に充填する。11は磨き整形が顕著な無文である。12は径9.0cm、13は径8.0cm、14は12.0cmを測り、底面に網代痕を持つ。15も底面に網代痕を持ち、割れ口に炭化物が付着する。

5-6号土坑 7点を図示した。1は深鉢口縁の把手部片、5は深鉢の口縁部片、2は深鉢の口縁部(頸部)片、この他は深鉢の胴部片である。1は把手頂部に隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状文を施し、これから3条の隆帯とこれに沿う沈線を縦位に垂下する。2は隆帯を横位の連弧状に施して口縁部を画し、この下位の頸部は無文である。また内面に剝離部があり、器面が脆く、二次的な被熱によると思われる。3は横位沈線を1条巡らして頸部を画し、この上位には原体RLを横位施文する。胴部には2条単位の沈線によるやや幅広い懸垂文を施して縦区画し、同原体を縦位施文する。4は2条単位と思われる沈線による懸垂文で縦区画し、原体LRを縦位施文後に2条単位の細線文を懸垂文に沿って垂下する。5は僅かに高まる波状口縁と思われ、隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状単位文や横位の楕円状区画文を描出し、区画文内には沈線文を縦位に充填し、単位文の上位には沈線で円形文や蕨手状文を施す。単位文からは2条単位の隆帯による懸垂文とこれに沿う沈線を施して縦区画し、縦位の沈線文を施文する。6は横位から2条単位の隆帯を懸垂して縦区画し、沈線文を縦位に施文後、中段に2条単位の横位沈線を施して画する。内面に細かな剝離があり、二次的な被熱による可能性がある。7は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、縦矢羽状の沈線文を施す。

5-8号土坑 6点を図示した。1・2は深鉢の口縁部片、3～5は深鉢の胴部片、6は注口土器の口縁部片である。1は弧状の隆帯が看取され、渦巻状などの曲線的な文様を描出するものと思われる。2は平口縁で、口端部には折り返し状を呈する段部を持ち、横位沈線を1条巡らした下位に原体LRを縦位施文する文様部が看取される。3は横位に連続すると思われる円形刺突文と、この下位に2条単位で垂下すると思われる沈線が看取される。4は沈線による懸垂文で縦区画し、条間の粗い原体LRを縦位施文する。5は隆帯で渦巻状の単位文を描出し、これから2条単位の隆帯を横位や縦位に施して区画すると思われ、沈線文を縦位に施文後、隆帯に沿って沈線を施す。6は橋状把手と円孔を持つ口縁部と思われるが、橋状部を欠損する。円孔部に沿って沈線を弧状に施し、また口端上に沈線を1条巡らす。

5-9号土坑 2点を図示した。1は底面付近から主体的に出土した深鉢口縁～胴部の大型片で、5-44号土坑や5M-6グリッド出土の破片と接合しており、遺構間接合が認められた稀少な例である。2は深鉢と思われる胴部片である。1は口径42.5cm・残存高22.3cmを測り、平口縁で、口縁部が僅かに内湾する形状を呈する。押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす他は、横位や一部に縦位の無で整形が顕著な無文で、口縁部には磨きを施す。2は刻みを持つ隆帯を縦位に垂下する。

5-15号土坑 3点を図示した。1は注口土器の口縁部片、2は深鉢の口縁部片、3は深鉢の胴部片である。1は橋状把手を持つ口縁部で、口端部は微隆帯で肥厚して外傾する形状を作出する。把手は断面長方形の粘土紐をA状に組んで口端部に繋げる橋状を呈し、上端部を欠損する。文様は橋状把手の両側に並行する2条の沈線で半円状の区画文を描出すると思われ、区画内には原体RLの横位充填と思われる縄文が僅かに看取される。2は刻みを持つ細い横位隆帯が1条と、隆帯間に施すと思われる8字状の貼付文が看取され、この下位には横位沈線による帯状の文様部が看取され、貼付文下に弧状の褶曲部を持ち、帯状内には原体LRを横位充填する。3は横位沈線から斜位沈線を垂下する区画文部が看取され、区画内にはさらに並行する浅い斜位沈線が看取される。

5-17号土坑 1点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢と思われる口縁部片である。突起を持つ口縁と思われ、口端は平坦な形状を呈し、内面側に切込み状の押圧を施した内折する小突起状の単位を持つ。外面側には突起と思われる剝離部が看取され、この口端上には刺突が2点看取される。胴部には沈線で渦巻状を呈する区画文を描出し、区画内に原体LRを横位ないし斜位充填する。

5-21号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢ないし「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片で、1は懸垂する沈線、2は弧状に垂下する沈線による区画文部が看取され、区画内には1が原体LR、2が原体RLを横位ないし斜位充填する。

5-24号土坑 1点を図示した。1は底面から主体的に出土した深鉢口縁～胴部の大型片である。口径31.0cm・残存高31.0cmを測り、平口縁で、括れ部がなく直線的に立ち上がる器形を呈する。外面に断面が三角形の横位隆帯を1条巡らす他は、横位やこれから右下への斜位の無で整形が顕著な無文である。胴部上半から口縁部下位にかけては色調が暗褐色で、部分的にタール状の付着物が看取される。

5-28号土坑 2点を図示した。1は深鉢の胴部片、2は底部片である。1は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、横位に巡る文様部が看取され、帯状内には原体RLを横位充填する。2は径9.0cmを測り、底面に傷状の短沈線が看取される。

5-30号土坑 4点を図示した。4が底部片、2が深鉢の胴部片、この他は深鉢の口縁部片である。1・2は並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様部が看取されるもので、1はこの上位に刻みを持つ細い横位隆帯が1条、2は横位沈線に沿う細沈線が1条看取され、帯状内には1が原体LR、2が原体RLを横位充

填する。3は平口縁で、口端部に刻みを施し、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には5条看取される幅狭な並行沈線を横位に巡らし、さらにやや幅広い最上段の沈線間には連鎖状を呈する入組状(クランク状)の沈線文を横位に1条充填する。4は径13.0cmを測り、底面には丘状の凹凸が看取される。

5-32号土坑 1点を図示した。1は底部片で、底面外縁には撫でを施し、この内側には縄文ないし縄網状の丘状と思われる文様が看取される。

5-34号土坑 4点を図示した。2は深鉢の口縁部片、1は深鉢の胴部片、3は注口土器の胴部片、4は小型の深鉢と思われる底部片である。1は低い横位隆帯を1条巡らし、これから同様の隆帯を懸垂して縦区画し、原体LRを縦位施文後、隆帯に沿って撫でを施す。2は波状口縁で、口端部に貼付文状の小突起を持ち、平位の8字状文の一部と思われる。口端部は内折し、内面口端下に横位の微隆帯を1条施し、突起下にあたる微隆帯上位に円形刺突を1点施す。外面は磨き整形による無文である。3は上位に弧状沈線が看取され、この下位には沈線で方形ないし菱形状と思われる区画文を描出し、弧状沈線や区画に沿って条線文を施す。また蛇行状に垂下すると思われる沈線が1条看取される。4は径3.3cmを測り、1~2条単位の沈線による懸垂文が看取され、底面は撫で整形による無文である。

5-37号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1は連続する刺突文を斜位や横位に施す。2は地文に原体LRを縦位施文後、沈線による磨き消し懸垂文で縦区画する。

5-38号土坑 4点を図示した。1は深鉢の口縁部(頸部)片、2は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、3は深鉢の口縁部片、4は底部片である。1は低い横位隆帯が1条と、これに沿う幅広い浅い沈線が看取される。2は刻みを持つ細い隆帯を1条弧状に垂下する。3は平口縁で、口端部が内折する形状を呈し、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯を2条巡らし、この下位には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様が看取され、帯状内には原体LRの細縄文を横位充填する。4は径7.0cmを測り、底面は磨き整形による無文である。

5-39号土坑 2点を図示した。2点とも「碗形」を呈する鉢と考えられ、1は口縁部片、2は胴部片で、胎土等の諸要素から同一個体の可能性がある。1は波状を呈する口縁と思われ、並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、端部が腕手状を呈する横位や、これから斜位に垂下する文様部が看取され、帯状内には原体LRを充填する。2は連鎖状の刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、この上位には沈線による帯状の区画の端部が看取される。また横位隆帯の下位は磨き整形による無文である。

5-40号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。口端に欠損部があるが平口縁と思われ、隆帯やこれに沿う幅広い浅い沈線で渦巻状の単位文や楕円状の区画文を描出し、区画内には原体RLを斜位ないし縦位充填後、区画内側に沿って撫での沈線を施す。

5-41号土坑 2点を図示した。1は深鉢の胴部片、2は底部片である。1は横位沈線が1条と、この上位から垂下して繋がる弧状沈線が1条看取される。2は底面に縄網状を持つ。

5-44号土坑 2点を図示した。1は深鉢の胴部片、2は底部片である。1は沈線による懸垂文で縦区画し、縞状の沈線文を施す。2は底面に縄網状を持つ。

5-48号土坑 3点を図示した。3は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、この他は深鉢の胴部片である。1は幅広い間隔で懸垂する沈線が2条看取される。2は沈線による帯状の区画で渦巻状文を描出し、沈線間の帯状内には原体LRを充填する。3は平口縁で、口端部に沿って横位沈線を1条巡らす。

5-51号土坑 5点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2・3は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片、4は深鉢の胴部片、5は底部片である。1は平口縁で、押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす。2は大型

片で最大径25.0cmを測り、2条単位と思われる並行沈線で文様を描出する。頸部には横位に巡らして画し、8字状に押圧を施した貼付文を付す。胴部には貼付文下に円形ないし渦巻状の単位文や、これを挟むような三角形の区画文を描出し、頸部の帯状内や区画内には原体LRを充填する。また外面にはタール状の黒色物質が付着する。3は並行沈線でU状を相対してH状に懸垂する単位文を描出し、この上段にはU状内に縦位沈線を1条、下段にはO状の両側に沿うと思われる沈線を充填する。また単位文から延びる横位沈線が1条看取され、この上位に沿って連続すると思われる円形刺突文を上下に2列施す。4は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、斜位から弧状に垂下する文様部が看取され、波状を呈する頂部下に渦巻状ないし対弧状の曲線的な単位文を持つ構成と思われる。帯状内には原体LRを沈線に沿って充填する。5は径7.0cmを測り、底面は撫で整形で、擦痕状の細かい条線が看取される。

5-53号土坑 5点を図示した。3は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片、4・5は底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は2条単位の微隆帯をやや弧状に垂下して区画し、原体LRを縦位施文後に隆帯に沿って沈線を施す。2は沈線による懸垂文で縦区画すると思われ、条線文を縦位に施文する。3は頸部に刻みを持つ細い横位隆帯を2条巡らし、貼付文と思われる剝離部が看取される。この下位から3条単位と思われる並行沈線を垂下して区画し、懸垂する単位を挟むハ字状ないし対弧状の構成と思われ、原体LRを縦位施文後に頸部の横位隆帯に沿って沈線を施す。4は径6.8cm、5は7.0cmを測り、底面には僅かに4で縄文と思われる圧痕状の凹み、5で原体LRと思われる縄文が看取されるが、何れも不明瞭で判然としな。

5-54号土坑 7点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は「金魚鉢形」を呈する鉢と思われ口縁部片、3～5は深鉢の胴部片、6は注口土器の胴部片、7は底部片である。1は押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす、隆帯の一部が剝離する。2は平口縁で、口端は内傾する平坦な形状を呈し、口端下は横位の磨き整形が顕著で整形痕が残った沈線状を呈し、頸部には横位沈線が1条看取される。3・4は胎土等の諸要素から同一個体と思われ、3は微隆帯を1条懸垂してこれに沿う撫でを施し、4は撫で整形が顕著な無文で外面に黒斑がある。5は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、三角形の区画文部が看取され、区画内に原体LRの細縄文を充填する。6は幅狭に並行する2条単位の横位沈線を上下に巡らして帯状に区画し、帯状内には鋸歯状に連続する斜位の条線文を充填する。7の底面は撫で整形による無文で、内面に炭化物ないし煤状の黒色物質が付着する。

5-55号土坑 8点を図示した。2・3・7は深鉢の口縁部片、8は底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は3条単位の並行沈線を懸垂して縦区画し、この両側に沿って連続する円形刺突文を1列施すと思われる。2・3は平口縁で、口端部が内折する形状を呈する。2は内面口端下に横位沈線を1条巡らし、外面には原体LRを横位施文すると思われるが、摩耗しており不明瞭である。3は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、横位からやや歪んで斜位に垂下する文様部が看取され、帯状内には原体LRを充填し、さらに横位沈線が1条沿う部分が看取される。4～6は並行沈線による帯状の区画で文様を描出するもので、4は三角形、5は斜位、6は弧状から斜位に繋がる曲線的な文様部が看取され、帯状内には何れも原体LRを充填する。7は平口縁と思われ、口端には押圧を単位に刻み状を呈する横位の短沈線を施し、連続的に連続するものと思われる。口端下には微隆帯を1条横位に巡らし、隆帯上に原体LRを横位施文する。8は径13.2cmを測り、直線的に外傾して開く器形を呈し、下位に摩耗したような部分が看取される。また底面には網代痕を持つ。

5-56号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、幅狭に並行する3条の横位沈線が看取される。

5-60号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、微隆帯を1条懸垂し、隆帯に沿って撫でを施す。

5-61号土坑 7点を図示した。1は覆土中位から主体的に出土した深鉢口縁～胴部の大型片である。また

2・3は深鉢の口縁部片、4は深鉢の胴部片、5・6は底部片、7は土製円盤である。1は口径29.8cm・残存高22.7cmを測り、「鐘形」を呈する器形と思われる。2単位と思われる扁平な台形状の突起を持つ口縁で、この中央には押圧による折り返し状の内折部を持つ。外面には4単位と思われる8字状の貼付文を施し、並行沈線による帯状の区画で三角形の区画文を横位に連結させる幾何学的な文様帯を描出し、帯状内や重状の区画内には原体LRを充填する。また貼付文下の文様帯は弧状に彎曲し、内面には口端下に並行する2条の横位沈線を巡らす。2・3は平口縁で、口端部が内折し、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、この下位には横位沈線による帯状の文様帯が看取され、帯状内には2が原体RL、3が原体LRを横位充填する。4は並行沈線による帯状の区画で文様を描出するが、横位に巡る下位の沈線には途切れる部分があり、この下位には凹状を呈する縦位の区画文から横位に巡らす文様帯が看取され、帯状内や区画内には原体Lを充填する。5・6は径8.0cmを測り、5の底面には網代痕があり、6の底面には縄文と思われる文様が看取されるが、摩耗しており判然としにくい。7は底部片を転用したもので網代痕を持ち、側面はほぼ全周を研磨する。

5-79A号土坑 8点を図示した。1は覆土下位から主体的に出土した「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁〜胴部の大型片である。また2・5は深鉢の口縁部片、3は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片、4は深鉢の胴部片、6〜8は底部片である。1は口径36.6cm・残存高20.3cmを測り、丈が低く扁平な器形を呈する。波状口縁で、口端部は内折する形状を呈し、横位沈線を1条巡らして波状部下の沈線上に円孔を持つ。外反部(口頸部)は横位の磨き整形が顕著な無文で、頸部には重状を呈する縦位の楕円状単位文と、この間に帯状を呈する横位の長楕円状文を沈線で描出する。胴部には横位沈線や3条単位の並行沈線で円形状の区画文を描出し、さらにこの単位の下端を横位弧状に連結して区画し、区画内には原体LRを横位及び斜位充填する。また円形状の区画文下には横位弧状や渦巻状を呈する沈線文を施す。2は波状口縁で、波状部には押圧状の円形刺突を1点施し、幅広の浅い沈線で楕円状と思われる区画文を描出し、原体RLを横位充填する。3は2〜3条単位の並行沈線で渦巻状の単位文を介する曲線的な文様を描出する。4は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、弧状から斜位に垂下する文様帯が看取され、帯状内には原体LRを充填し、引き直しと思われる沈線の重複部が看取される。5は平口縁で、口端下から条線文を縦位に垂下して施文する。条線はやや太目で、櫛歯状工具によると思われる。6は径7.5cmを測り、3条単位の沈線による懸垂文が6単位看取される。底面は無で整形による無文である。7は径10.0cmを測り、底面は外縁に沿って撫でを施し、この内側に網代状の圧痕が看取されるが、摩耗しており不明瞭である。8は径8.0cmを測り、底面に網代痕を持つ。

5-79B号土坑 5点を図示した。2・3は深鉢の口縁部片、1は深鉢の胴部片、4・5は土製円盤である。1は連続する刺突文を横位に施し、刺突文は3列看取される。2は平口縁で、口端下に押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす。3は平口縁で、口端部が内折する形状を呈し、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯を2条巡らし、隆帯間には中位にも刺突の単位を持つ8字状貼付文を施す。この下位には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様帯が看取される。4は沈線と原体Lの縄文が看取され、沈線は懸垂文、縄文は縦位施文と思われる。側面は約1/2周を研磨する。5は底部片を転用したもので網代痕が看取されるが、摩耗しており不明瞭である。側面は部分的に研磨する。

5-81号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1はやや弧状を呈する横位隆帯が1条と、この上・下位に斜位の沈線文が看取される。2は並行する斜位の沈線を交差させ、斜格子状文を描出するもので、沈線は櫛歯状工具によるが、先が櫛歯状を呈する単位が看取される。

5-85号土坑 1点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片である。大型片で最大径21.0cm・残

存高18.0cmを測り、頸部には並行沈線を横位に巡らし、沈線間の帯状内に沿って連続する円形刺突文を1列充填する。胴部には2～3条単位の並行沈線で渦巻状の単位文や、これを横位や斜位に連結して三角形に区画する文様を描出し、単位文の下位にはさらに渦巻状の沈線文を施す。

5—92号土坑 3点を図示した。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部、2・3は深鉢の胴部片である。1は口径12.0cm・残存高5.0cmを測り、5単位と思われる波状口縁で、外面の口端下に段部を持ち、この上位には横位、下位には横位後に縦位の磨き整形を施す。また波状部には押圧状の凹みや刺突状の傷が看取される。内面には波状部に円形刺突を施し、この下位に横位沈線を1条巡らす。器形的には変形土器の可能性も想定され、検討を要する。2は櫛歯状工具による条線文を縦位に施文する。3は微隆帯を1条懸垂し、これに沿って撫でを施す。また横位の整形痕が浅い沈線状を呈する部分が看取される。

5—95号土坑 4点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は底部片、3・4は土製円盤である。1は波状口縁で、波状部に円孔を持つ。外面には口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、この上位には弧状沈線や横位沈線が看取され、下位には並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、方形状を呈する区画文の端部が看取される。帯状内には原体LRを充填すると思われるが不明瞭で、区画文内には横位沈線が1条看取される。内面には円孔上位に沿って弧状沈線を施し、口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。また波状部の沈線は端部に円形刺突を伴う。2は底面に網状痕を持つ。3は原体LRの斜位施文と思われる縄文、4は2～3条の垂下する沈線が看取され、側面は3が部分的な研磨、4は打ち欠きのみの整形である。

5—109号土坑 4点を図示した。1・3は深鉢の口縁部片、2は深鉢の胴部片、4は注口土器と思われる胴部片である。1は刻みを持つ細い横位隆帯が2条看取される。2は並行沈線による帯状の区画で三角形ないし菱形状と思われる幾何学的な文様を描出し、帯状内に原体LRを充填する。3は平口縁と思われ、口端部は鋭角状の断面形を呈し、内面口端下に並行する2条の横位沈線を巡らす。外面には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様部が看取され、帯状内に原体LRを横位充填する。4は幅狭に並行する多条の沈線(集合沈線)をやや斜位を呈する横位や縦位に垂下する文様部が看取される。

5—110号土坑 3点を図示し、全て覆土下位からの出土である。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、2・3は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、口端部には押圧による折り返し状の内折部を持ち、内面口端下に並行する2条の横位沈線を巡らす。外面は撫で整形による無文である。2・3は無文で、2は外・内面ともに磨き整形、3は横位及び縦位の撫で整形を基調とし、一部に磨きが施される。

5—111号土坑 1点を図示した。1は深鉢ないし鉢と思われる口縁部片である。平口縁で、撫で整形が左上から右下方向への斜位ないし弧状に施される無文で、外・内面の口端下には浅い沈線状を呈する横位の整形痕が看取される。

5—116号土坑 3点を図示した。3点とも深鉢の胴部片である。1は沈線による懸垂文で縦位区画し、原体LRを縦位施文する。懸垂文内には浅い撫でを垂下し、沈線に沿って微隆線状を呈する部分が看取される。2は円形を呈する粒状の刺突文を地文とする。3は胴部下半に膨らみを持つ下膨れ的な器形と思われる。幅狭に並行する3条単位の横位沈線を上・下段に巡らして帯状に区画し、帯状内には横位に連続する横S状ないしクランク状の沈線文を充填する。帯状の区画の上位には僅かに縦位の沈線が看取される。

5—117号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、地文に縦位の沈線文を施す。

5—119号土坑 1点を図示した。1は浅鉢の口縁部片である。波状口縁で、内折する形状と思われ、円形刺突文を2点と、端部に円形刺突を伴う横位沈線を1条施す。

5—122号土坑 3点を図示した。3は深鉢の口縁部片、この他は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片である。

1は割れ口部で僅かに看取される斜位や縦位・横位の沈線で区画し、原体LRを縦位や斜位施文する。2は2条単位の並行沈線で文様を描出し、三角形状と思われる区画文部が看取され、区画内に原体LRを充填する。1・2は同一個体の可能性がある。3は並行沈線を横位に巡らす文様部が看取され、沈線間の帯状内には原体LRを横位充填する。内面には幅狭に並行する横位沈線が割れ口部を含め3条看取され、さらに補修孔と思われる円孔が1点看取される。

5-123号土坑 2点を図示した。1は覆土下位から出土した深鉢と思われる胴部の大型片である。また2は深鉢の胴部片である。1は最大径15.7cm・残存高15.6cmを測り、緩い括れを持ち、上半は外反し、下半はやや膨れる器形を呈する。棒状工具による彫りの深いための沈線で、渦巻状から曲線的な剣先状を呈する単位の区画文、弧状に垂下する帯状の区画文、横位沈線から巻上がる渦巻状の区画文などで構成される文様帯を描出し、区画内には原体Rを充填すると思われ、一部区画外にも看取されるが、全体に摩耗しており不明瞭である。また上端の弧状の割れ口部に沿って沈線が1条看取される。中位から上位の器面は二次的な被熱により脆く、煤状の黒色付着物が看取される。文様構成や器形などから弥生中期の壺形土器の可能性も示唆され、検討を要する。2はやや弧状に垂下する態で整形が顕著で、横位沈線が1条看取される。

5-125号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は平口縁で、口端は鋭角状の断面形を呈し、内面口端下に横位隆帯を1条巡らして鈎状部を作出する。外面には横位隆帯を1条巡らし、これから懸垂する隆帯とこれに沿う沈線を描いて縦位施文後、2条単位と思われる横位沈線を描いて段状に画すると思われる。2はやや弧状を呈する斜位の沈線文を施し、この上位には鍍杉状に入り組む部分が看取される。

5-131号土坑 1点を図示した。1は底面から出土した深鉢胴部の大型片である。直線的に開く器形と思われる、左側上端に斜位隆帯が1条看取され、上位には原体LRを横位及び斜位施文後、不規則な磨り消しを施す。この下位は横位の態で整形が顕著な無文である。

5-136号土坑 2点を図示した。2点とも底面に網代痕のある底部片で、1は径6.2cm、2は径10.0cmを測り、1の外面には黒色物質が付着する。網代痕が類似し、同一個体の可能性があるが不確定である。

5-138号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。波状口縁で、やや幅広の浅い沈線で楕円状などの区画文を描出すと思われ、原体RLを横位充填する。

5-146号土坑 4点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁部片、2は深鉢の口縁部片、3は注口土器と思われる口縁部片、4は土製円盤である。1は僅かに波状を呈する口縁で、口端部は内折する形状を呈し、波状部には長方形の孔を持つ。この頂部には斜位の短沈線を3条施して紐状の文様を描出し、孔部の両側に円形刺突を施し、これから横位沈線を1条巡らす。この下位は無文で、頭部にあたる下端の割れ口部には横位沈線が僅かに看取される。2は平口縁で、「鐘形」を呈する器形と思われる。幅狭に並行する数条の横位沈線(上段で4条看取)を上・下段に巡らして帯状に区画すると思われ、区画内には上下で相対する横位の波状沈線を巡らし、この沈線間と上位の波状部には楕円状の沈線文、下位の波状部にはこれに沿う弧状沈線を施し、沈線間の楕円状文内には原体LRを横位充填する。また上段の並行沈線の中段には区切り部が看取され、内面には炭化物が付着する。3は平口縁で、口端は平坦な形状を呈する。口端下には橋状把手と思われる欠損部があり、これから並行する2条の微隆帯を横位に巡らして帯状に区画し、区画内には橋状部を挟んで沈線で横位の長方形区画文を描出す。また上段の微隆帯上位に沿って横位沈線を1条巡らす。4は磨き整形による無文で、側面は打ち欠きのみの整形である。

5-147号土坑 1点を図示した。1は底部片で径7.8cmを測り、粗い態で整形で、底面に網代痕を持つ。

5-148号土坑 1点を図示した。1は覆土中から出土した深鉢口縁～胴部的大型片で、口径16.1cm・残存高13.5cmを測る。3単位と思われる突起を持つ波状口縁で、口端部は内折する形状を呈する。突起には外面から左側に8字状を呈する上下2点の円形刺突文、右側に1点の円形刺突文、中央に円孔を施す。口端には刻みを施し、外面には口端下に突起間を繋ぐ横位沈線を1条施し、この中間には縦位の貼付文による区切り部を持つ。この下位には幅狭に並行する3条単位の横位沈線を巡らし、沈線間の帯状内には原体LRを横位充填し、突起下から垂下する対弧状の区切り文を2段施す。内面口端下には幅狭に並行する2条の横位沈線を巡らす。

5-149号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。平口縁で、並行する2条の横位沈線を巡らし、この下位に補修孔と思われる円孔が看取される。内面には口端下に横位沈線を1条巡らす。また胎土中にローム粒を含む。

5-151号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は平口縁で、隆帯とこれに沿う幅広の浅い沈線で区画文を描出し、区画内に原体LRを横位充填する。幅広の沈線に重複するやや細めの沈線が看取され、重ね引き(引き直し)と思われる。2は懸垂する隆帯と蛇行して垂下する隆帯で縦区画し、沈線文を斜位施文後、隆帯に沿って沈線を施す。

5-155号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、斜位ないしやや弧状に垂下する微隆帯が1条看取され、これに沿って無でを施す。

5-157号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。1～3条単位の細い横位隆帯を段状に巡らして帯状に区画し、区画内には短沈線文を縦位に充填後、隆帯に沿う沈線や渦巻状の沈線文を施す。また上段の帯状の区画内上位には交互刺突を1条横位に巡らし、下段の隆帯には斜位の凹状隆帯が重なる部分が看取される。

5-160号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1は隆帯による懸垂文で縦区画し、沈線文を縦位に垂下して施文後、2条単位の沈線を横位からやや弧状に施して隆帯に繋げるが、この上位に沿う沈線が1条看取される。2は隆帯による懸垂文とこれに沿う浅い沈線で縦区画し、沈線文を斜位に施文する。

5-161号土坑 4点を図示した。1は土坑内中央、2は土坑内北側の覆土中位から主体的に出土した深鉢で、1は口縁～胴部、2は口縁～底部の大型個体片である。また3は深鉢の胴部片、4は底部片である。1・2は直線的に開く「朝顔形」の器形を呈し、何れも平口縁で、口端部は僅かに内折する形状を呈し、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らし、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものである。1は口径31.0cm・残存高30.8cmを測り、刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、隆帯上に8字状の貼付文を施す。この下位には上下を横位に画する中段に楕円状の区画文を横位に並列する構成の文様帯を描出し、上下の帯状内や楕円状の区画内に原体LRを充填する。また貼付文下の文様帯は弧状に褶曲し、外面には割れ口付近に円形の凹部が1点看取され、穿孔途中の補修孔であろうか。2は口径23.9cm・器高30.7cm・底径11.3cmを測り、刻みを持つ細い横位隆帯を2条巡らし、隆帯間に8字状の貼付文を施す。この下位には斜状を呈する菱形状の区画文を横位に並列する構成の文様帯を描出し、帯状内に原体LRを充填する。また貼付文下には弧状の褶曲部を持つ。文様帯の下位は横位の磨き整形が顕著な無文で、底面には網代痕を持つ。3は蛇行ないし渦巻状を呈すると思われる弧状の隆帯や懸垂する沈線で区画し、斜位の沈線文を施す。4は底面に網代痕を持つ。

5-164号土坑 6点を図示した。1～3・6は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。1は平口縁で、やや内湾する形状を呈し、内面口端下に段部を持つ。外面には半載竹管による平行沈線を単位とする斜位の沈

線文を施し、沈線間は半隆起状を呈する。2は平口縁で、口端はやや鋭角状の断面形を呈する。沈線で連弧状ないし楕円状の区画文を描出し、区画内には刻み状を呈する縦位の短沈線文を充填する。この下位には弧状や縦位に垂下する沈線文を施す。3は平口縁で、低い隆帯で楕円状の区画文を描出し、区画内に縦位の沈線文を充填後、区画内に沿って沈線を施す。胴部には縦位の沈線文が僅かに看取される。4は斜位に垂下する蛇行状の隆帯を1条とこれに沿う撫でを施し、この上位には斜位の沈線文を施文するがやや不明瞭である。また下位には横位のL状沈線が看取され、この下位から縦位の沈線文を施文する。5は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、斜位から弧状に垂下する曲線的な文様部が看取され、帯状内には原体LRを沈線に沿って充填施文する。6は平口縁で、口端部が僅かに内折する形状を呈する。口端下には沈線で半円状の区画文を描出し、連弧状を呈するものと思われる。この下位には横位沈線による帯状の文様部が看取され、区画内や帯状内には原体RLを充填する。

5-167号土坑 8点を図示した。1・3・5・6は深鉢の口縁部片、2は浅鉢の口縁部片、この他は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、口端部を肥厚し、口端下には外面に折り返し状を呈する段部、内面に鈎状を呈する段部を持ち、外面の段部下位には原体LRを縦位施文する。2は平口縁で、磨き整形が顕著な無文である。3は隆帯やこれに沿う幅広い浅い沈線で、渦巻状の単位文や楕円状と思われる区画文を描出す。4はやや斜位に垂下する微隆帯が看取され、原体LRを縦位及び斜位施文後、隆帯に沿って撫でを施す。5は平口縁で、口端部を肥厚して外・内面に段部を持ち、外面の段部下位には弧状に垂下する沈線と、これに沿って連続する円形刺突文が1列看取される。6は3条単位と思われる横位沈線を巡らして頸部を画し、この上位には縦位のO状と思われる沈線文を施し、これから横位沈線に沿って連続する円形刺突文を1列施す。5・6の2点は同一個体と思われる。7は懸垂する低い隆帯で縦区画し、縦矢羽状の沈線文を施す。8は横位隆帯と、これから刻みを持つ2条の隆帯を懸垂して区画し、この結部に円形の貼付文を施す。区画内には原体RLを縦位施文する。

5-170号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。平口縁で、口端部を肥厚して外面に段部を持つ。この下位にはL状に懸垂する隆帯を施して縦区画し、条線文を縷線状と思われる斜位に施文する。条線は6～7条単位と思われる櫛歯状工具による。

5-174号土坑 4点を図示した。3は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、4は注口土器と思われる胴～底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は沈線文を縦位に施文する。2は沈線による懸垂文で縦区画し、縦矢羽状の沈線文を施す。3は平口縁で、口端部は内折する形状を呈し、口端と内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。外面は撫で整形による無文である。4は底径7.6cmを測り、並行する3条の弧状沈線が看取され、楕円状など曲線的な区画文の端部と思われる。沈線間には1条の横位沈線やこれらに切られる沈線が看取される。区画内には僅かに縄文が看取され、原体Lないし原体LRを横位充填すると思われるが不明瞭である。底面は外縁に撫でを施し、この内側には網代状の圧痕が看取されるが、摩耗しており判然としない。

5-175号土坑 3点を図示した。1は埋設されていた深鉢口縁～胴部の個体、この他は覆土から出土した深鉢の胴部片である。1は最大径18.8cm・残存高13.7cmを測り、「樽形」の器形を呈し、口端部を欠損する。口縁部には縦位の紐状突起を4単位施し、突起下の両側には対になる小渦巻状の隆帯文を伴う。突起間には隆帯で横位の楕円状区画文を描出し、区画内に沿って交互刺突を楕円状に巡らし、この下位には横位沈線を2条施す区画や隆帯に沿って撫でを施す区画が看取される。胴部には2条単位の隆帯で紐状突起下から垂下する渦巻状単位文を4単位描出して区画し、斜位の沈線文を充填する。2は地文に原体RLを縦位施文後、沈線で渦巻状文を描出す。3は沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。

5—179号土坑 5点を図示した。2・3は「金魚鉢形」を呈する鉢と思われる口縁部片、4は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片、1は深鉢の胴部片、5は底部片である。1は刻みを持つ隆帯を1条横位に巡らし、さらにこれから弧状に垂下して区画し、斜位や重弧状と思われる短沈線文を施す。2は平口縁で、口縁部が外傾する形状を呈し、内面口端下に浅い無での横位沈線を1条巡らす。外面には頸部に重ね引きによる横位沈線を1条巡らし、この下位には沈線による区画文の端部が僅かに看取される。3は平口縁で、口縁部は肥厚して作出し、口端上に横位沈線を1条巡らす。器面が脆く、二次的な被熱によると思われる。4は頸部を横位沈線で画すると思われるが、2条単位の並行沈線を斜位に垂下して三角形の区画文を描出し、区画内に原体Rを縦位充填すると思われるが、器面が脆く摩耗しており不明瞭で、二次的な被熱によると思われる。3・4は胎土等が近似し、同一個体の可能性がある。5は径9.3cmを測り、底面に網状の圧痕が看取されるが、摩耗しており不明瞭である。

5—180号土坑 4点を図示した。1は深鉢の胴部片、3は浅鉢と思われる口縁部片、この他は深鉢の口縁部片である。1は沈線文をやや弧状を呈する縦位に施文する。2は低い隆帯と幅広の浅い沈線で楕円状の区画文を描出し、原体RLを横位充填し、区画の接部に押圧状の円形刺突を施す。胴部は2条単位と思われる沈線による幅広の懸垂文で縦位区画し、同原体を縦位施文する。3は平口縁で、内折する形状と思われ、微隆帯や沈線で渦巻状や楕円状と思われる曲線的な文様を描出し、渦巻状と思われる上端部に円形刺突を施す。4は平口縁で、内面口端下にやや幅広の浅い横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯が1条看取される。

5—182号土坑 23点を図示した。比較的大型の破片が目立ち、重複する5—8号住居跡から混入した可能性が考えられ、特に11の深鉢口縁—胴部の大型片は5—8号住居跡出土の破片と接合関係が認められている。この他、1～6・8・17～19は深鉢の口縁部片、16は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、20～23は底部片、この他は深鉢の胴部片である。1・2は同一個体で、波状口縁と思われる。2条単位の隆帯をやや弧状を呈する横位に巡らして区画文を描出し、刻み状を呈する縦位の短沈線文を充填する。1には把手とこの内面側に孔部が看取され、把手は橋状と思われるが上部を欠損し、この基部に2条単位の隆帯による渦巻状文を施す。2は隆帯上に渦巻状の突起を持つ。3は平口縁で、弧状に垂下する隆帯が1条看取され、隆帯に沿って外縁側には連続する円形刺突文を1列、内縁側には沈線を施す。4は波状口縁で、隆帯とこれに沿う沈線で斜位の凹状を入り組ませるような曲線的な区画文を描出し、区画内には短沈線文を斜位ないし弧状に充填する部分が看取される。5は波状口縁で、隆帯やこれに沿う沈線で渦巻状の単位文や楕円状と思われる区画文を描出し、条線文を縦位充填後、区画内に沿って沈線を施す。胴部は横位沈線を1条巡らして頸部を画し、この下位には2条単位の沈線による懸垂文で縦位区画し、条線文を縦位に施文する。外面にタール状及び炭化物、内面に炭化物が付着する。6は波状口縁で、細い沈線文を縦位に施した後、この上位に重複する細い沈線を横位に数条巡らす。7は隆帯による懸垂文で縦位区画し、沈線文を斜位に施文する。8は口径20.8cm・残存高10.3cmを測り、平口縁で、渦巻状の単位を持つ横位隆帯を1条巡らして帯状に区画し、沈線文を縦位に充填する。この下位には沈線文を縦位及び斜位施文する。9は沈線文を縦位の重弧状に施文し、さらに斜位の短沈線が2条看取される。10は地文に条線文を波状に垂下して施文後、沈線による懸垂文を施す。11は口径30.0cm・残存高29.0cmを測り、平口縁で、口縁部が緩く括れて外反する器形を呈する。口縁部には隆帯や幅広の浅い沈線で渦巻状の単位文間に入り組むような楕円状の区画文を描出し、区画内に原体LRを斜位ないし縦位充填後、隆帯に沿って無でを施す。胴部には2条単位の沈線による懸垂文で縦位区画し、同原体を縦位施文するが、懸垂文の沈線には重ね引きによる重複部が看取される。12～15は2条単位の沈線による懸垂

文で縦区画し、何れも原体 RL を縦位施文するもので、このうち12・15には懸垂する沈線が1条、14には垂下する蛇行沈線が1条看取され、また13・14の外面には炭化物が付着する。16は平口縁で、口端部に刻みを施し、押圧による折り返し状の内折部を持つ。内面口端下には並行する2条の横位沈線を巡らし、外面は磨き整形による無文で、タール状の付着物が看取される。17は波状口縁で、口端部は内折する形状を呈する。外面には波状部に8字状貼付文を施し、この下位には貼付文下で弧状に褶曲する横位沈線による帯状の文様部が看取され、帯状内には原体 LR を充填する。内面には波頂部に縦位の短沈線を施し、この両側に円形刺突を施し、口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。18は8字状の貼付文を施し、この下位には並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、横位から貼付文下に沿って弧状に褶曲する文様部が看取され、帯状内には原体 LR を充填し、また外面にはタール状の付着物が看取される。19は平口縁で、内面口端下には幅狭に並行する4条の横位沈線が看取され、外面は磨き整形による無文である。20は径9.0cm、21は径7.6cm、22は径6.0cm、23は径7.0cmを測り、21で縦位の条線文が看取される他は撫で・磨き整形による無文で、底面は23で網代状の圧痕が看取される他は無文である。

5-185号土坑 5点を図示した。1・5は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。1は平口縁で、口端部は肥厚して作出し、口端の断面形は鋭角状を呈し、内面口端下に段部を持つ。外面には重ね引きによる横位沈線を巡らし、この下位には隆帯で渦巻状の単位文を描出する。単位文からは横位隆帯を1条巡らし、この上位に沿って交互刺突を1条、下位には2条単位の横位沈線を巡らす。また単位文からは2条単位の隆帯を懸垂して縦区画し、区画内には斜位の沈線が僅かに看取される。2は2条単位の隆帯によるやや幅広い懸垂文で縦区画し、この上端には弧状の隆帯が看取される。懸垂文内には弧状隆帯から蛇行隆帯を1条垂下し、これを挟んで沈線文を縦矢羽状に充填する。縦区画内には上位から重弧状・斜位・横位・斜位に沈線文を施した後、蛇行沈線を1条垂下する。3は隆帯で歪むような楕円状と思われる曲線的な区画文を描出し、区画内に沈線文をやや斜位に充填後、隆帯に沿って沈線を施す。4は蛇行隆帯とこれに沿う沈線を垂下して区画し、斜位の沈線文を施す。5は刻みを持つ細い横位隆帯が2条看取される。

5-188号土坑 2点を図示した。2点は同一個体と思われる深鉢の胴部片である。1は低い隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状の単位文を描出し、地文には条線文を縦位施文し、これを切る横位沈線が看取される。2は2条単位の低い隆帯を懸垂して縦区画し、これに沿う縦位の条線文を施す。

5-193号土坑 1点を図示した。1は覆土下位から主体的に出土した浅鉢口縁～胴部の大型片である。1は口径37.4cm・残存高10.1cmを測り、平口縁で、口端部が内折する形状を呈する。横位の撫で整形が顕著で、浅い沈線状を呈する整形痕が看取される。

5-197号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は波状を呈する口縁と思われ、やや幅広い浅い沈線で渦巻状の単位文を描出するが、剝離が顕著で不明瞭である。2はやや弧状に垂下する沈線による区画文部が看取され、区画内に原体 L の細網文を縦位充填する。

5-198号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、地文に原体 LR を斜位施文後、2条単位の沈線による懸垂文を施し、さらに斜位沈線が1条看取される。また傷状の横位の短沈線が1条看取される。

5-200号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は注口土器と思われる胴部片である。1は平口縁で、幅狭に並行する4条の横位沈線が看取される。内面には口端下に微隆帯を1条横位に巡らし、これに沿って浅い横位沈線を施し、この下位には幅狭に並行する3条の横位沈線が看取される。2は底部付近と思われ、外面は磨き整形が顕著な無文で剝離痕があり、内面には整形時の押圧痕が看取される。

5-211号土坑 3点を図示した。1は埋設されていた深鉢口縁～胴部の個体、この他は北側の調査区壁を拡

張した際に包含層から出土した破片を一括したもので、2は深鉢の口縁部片、3は胴部片である。1は口径36.2cm・残存高24.2cmを測り、平口縁で、口縁部が緩く括れて外反する器形を呈する。口縁部には隆帯とこれに沿う幅広い浅い沈線で渦巻状の単位文間に入り組むような楕円状の区画文を描出し、区画内には原体LRLを縦位充填後、内側に沿って撫でを施す。胴部には2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、原体LRLを縦位施す。口縁部の渦巻状単位文は下に巻き込むものが3単位、上に巻き込むものが3単位の計6単位、胴部の懸垂文は8単位が看取される。2は平口縁で、口端下から縦位の条線文を施す。条線は3～4条単位の櫛歯状工具による。3は蛇行隆帯を垂下して区画し、斜格子状の沈線文を施す。

5-212号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、条線文を縦位や波状、斜位に垂下して施す。条線は4～7条単位の櫛歯状工具による。

5-213号土坑 5点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片、5が底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は頸部に8字状貼付文を施し、これから2条単位の並行沈線を横位に巡らして画し、さらに貼付文下から沈線を懸垂する区画文の端部が方形状に看取される。2は横位沈線が1条看取される他は、磨き整形が顕著な無文である。3は沈線文を斜位に施し、沈線は先が櫛歯状を呈する工具による。4は横位から斜位の撫で整形による無文であるが、外面にタール状の黒色物質が付着する。5は径10.0cmを測り、内面中央が高まる器形で、底面に網代痕がある。

5-214号土坑 1点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片で、並行する2条単位の横位沈線と、この上・下位に沿うやや細い横位沈線で頸部を画し、この下位に原体LRを斜位施す縄文が看取される。

5-215号土坑 3点を図示した。1・2は深鉢の口縁部片、3は胴部片である。1は円錐状を呈する突起部で、上部と下部の2段構成をなし、上部と中段には突起部を巡る横位沈線、基部には内面側に沿う横位沈線を施して画する。外面には突起部下に刻みを持つ細い隆帯を2条懸垂する。内面には突起部下を肥厚し、基部の両側に円形刺突に沿って沈線を巡らした円形状文を施し、この間に横位の短沈線と楕円状沈線文を段状に重ねて施し、この下位には段部を持つ。2は「鐘形」を呈する器形と思われ、刻みを持つ細い横位隆帯が1条と、この下位には横位沈線による帯状内に垂下する斜位沈線が看取される。3は横位や斜位の撫で整形が顕著な無文である。

5-216号土坑 8点を図示した。1・2・5は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。1は平口縁で、地文に原体LRを口端下には横位、以下には縦位施す後、やや幅広い浅い沈線をやや弧状に垂下し、口状の区画文を描出すと思われる。2は平口縁で、口端下に横位の撫でによる無文帯を持ち、この下位の割れ口部には横位の微隆帯とこれに沿う浅い沈線が僅かに看取される。3は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、原体LRを縦位施す。縦区画内にはさらに口状文を描出すと思われる、垂下する弧状沈線が1条看取される。4はやや弧状に垂下する沈線文と斜位の沈線文を綾杉状に施すと思われる。5は平口縁で、口端部が僅かに内折する形状を呈する。沈線で文様を描出し、方形状や弧状を呈する帯状と思われる区画文の端部が看取される。6～8は沈線による帯状の区画で文様を描出すもので、6・7は弧状に垂下、8は渦巻状の文様部が看取され、区画内や沈線間の帯状内には何れも原体LRを充填施す。

5-227号土坑 5点を図示した。1は浅鉢と思われる口縁部片、2は深鉢の口縁部(頸部)片、5は深鉢の口縁部片、3・4は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、内折する形状と思われる。上下に施す円形刺突間を対弧状の短沈線で繋ぐ単位文を描出し、また口端下に沿う横位沈線が1条看取される。2は無文帯の頸部片と思われ、この下位を画する横位沈線が1条看取される。3・4は並行沈線で文様を描出すもので、3は2条単位と思われる沈線で渦巻状ないし藤手状の曲線的な文様を描出す。4は幅広い帯状の区画が弧状に

垂下する曲線的な文様部が看取され、帯状内には原体LRの細縄文を充填する。5は刻みを持つ細い横位隆帯が1条と、この下位に横位沈線を1条巡らして帯状に区画する文様部が看取され、帯状内には原体LRを横位充填後、区画内中段に横位沈線を1条巡らす。

5-234号土坑 1点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部片で、弧状沈線と並行する3条単位の斜位沈線が看取され、渦巻状の単位文を斜位に連結して区画する構成と思われ、区画内に原体RLを横位充填する。

5-237号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は鉢の口縁部片である。1は波状口縁で、低い隆帯と幅広い浅い沈線で渦巻状の単位文を介在すると思われる区画文を描出し、区画内に原体RLを横位充填する。2は平口縁で、幅状に並行する6条の横位沈線を巡らし、沈線間には原体LRの細縄文を横位充填後、左下がりの区切り文を2単位施す。

5-238号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。平口縁で、内面口端下を肥厚して罅状の段部を持つ。外面には交互刺突を伴う横位の波状隆帯を1条巡らし、この下位には原体RLを縦位施文後、2条単位の横位沈線を施す。

5-239号土坑 3点を図示した。2は深鉢の口縁部片、1は深鉢の胴部片、3は底部片である。1は懸垂する隆帯で縦区画し、横位の沈線文を施文する。2は刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、隆帯上には8字状の貼付文を施す。この下位には横位のU状や斜位の沈線が看取され、沈線で曲線的な文様を描出すると思われる。3は径7.5cmを測り、底面は無で整形による無文である。

5-243号土坑 2点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁～胴部片、2は土製円盤である。1は平口縁で、口端部は僅かに内折する形状を呈し、横位沈線を1条巡らす。外反(口頸)部は無文で、頸部には並行沈線を横位に巡らして画し、沈線間の帯状内に沿って連続する刺突文を1列充填する。胴部には並行沈線で文様を描出し、渦巻状の単位文を3条単位の沈線で横位弧状ないし斜位に連結して区画する構成と思われ、区画内には原体LRを横位充填する。2は無文で、側面はほぼ全周を研磨する。

5-245号土坑 2点を図示した。1・2とも底面に網代痕を持つ底部片で、1は径10.6cmを測り、やや張り出す器形を呈する。

5-247号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の口縁部片である。1は隆帯とこれに沿う沈線で楕円状の区画文を描出し、区画内には原体LRを横位充填し、また隆帯上には同原体を縦位施文する。2は平口縁で、口端は方形の断面形を呈し、横位の無で整形が顕著な無文である。

5-249号土坑 1点を図示した。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部(頸部)片で、円形の貼付文を持つ横位隆帯を1条巡らし、この下位に沿って連続する円形刺突文を1列施す。

5-256号土坑 1点を図示した。厳密には本土坑からの出土ではなく、東側に重複する落ち込み(凹み)から出土した土器を一括したものである。1は深鉢の底部で径7.0cmを測り、撫で・磨き整形が顕著であるが、下位から底面にかけて摩滅しており、器面を研磨して半球状の形状を作出した二次的な整形痕と思われる。

5-261号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は平口縁で、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯を4条巡らし、この下位には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様部が看取され、帯状内には原体LRの細縄文を横位充填する。2は横位沈線による帯状内に斜位のU状を呈する沈線が看取され、帯状内には原体Lを横位充填する。

5-263号土坑 1点を図示した。1は土製品で腕輪と思われ、卵形状の楕円形と思われる平面形を呈し、約1/2周を残存する。表・裏面ともに押圧及び撫で整形後に磨きを施し、押圧の整形痕による凹みが多数看

取される。断面形は表面から裏面にかけて八字状に開く形状を呈する。長径は表面が6.7cm・裏面が7.5cm、短径は推定で表面が6.0cm・裏面が7.0cmを測り、表面に黒斑がある。

5-267号土坑 1点を図示した。1は底面に網状痕を持つ底部片である。

5-269号土坑 1点を図示した。1は底部片で径7.0cmを測り、底面に網状痕を持つ。

5-270号土坑 1点を図示した。1は注口土器の胴部片で、口縁部は外反する器形を呈し、この括れ部に橋状の小突起を持ち、橋状部には円形刺突から縦位の短沈線を1条垂下する。小突起からは微隆帯を1条巡らし、また微隆帯とこれに沿う沈線を対弧状に垂下して縦位の楕円状区画文を描出する。

5-274号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、地文に原体LRと思われる縄文が僅かに看取されるが不明瞭で、器面に剝離した痕跡が認められる。

5-275号土坑 3点を図示した。2は深鉢の口縁部片、1は胴部片、3は土製円盤である。1は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。2は平口縁と思われ、押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らすと思われるが、欠損しており隆帯部が貼付文状に看取される。3は沈線による帯状の区画内に原体LRを充填する文様が看取され、側面は打ち欠きのみの整形である。

5-276号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は波状口縁で、端部に円形刺突を伴う横位の短沈線を施した平位の楕円状小突起を持つ。この下位は撫で整形による無文である。2は円形状文と思われる弧状沈線や、この下位に沿って弧状の褶曲部を持つ横位沈線による帯状の文様が看取され、帯状内に原体LRを斜位充填する。

5-278号土坑 3点を図示した。3点とも深鉢の胴部片で、1は地文に原体LRを縦位施文後、沈線による懸垂文で縦区画する。2・3は同一個体と思われ、微隆帯を対弧状に連続して垂下し、連続する結部には円形の貼付文を施す。

5-280号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1は沈線による懸垂文で縦区画し、沈線文を縦矢羽状に施文する。2は2条単位と思われる並行沈線を屈折する斜位(く字状)に垂下する文様が看取され、沈線間にはやや弧状を呈する斜位沈線が1条看取される。

5-281号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の口縁部片である。1は平口縁で、低い隆帯と沈線を横位に巡らして帯状の区画文を描出し、区画内に原体RLを横位充填する。この下位の胴部には2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、同原体を縦位施文する。2は波状口縁で口端部が僅かに内折し、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には細い横位隆帯を2条巡らし、この下位には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様が看取され、帯状内に原体LRを横位充填する。

5-282号土坑 1点を図示した。1は注口土器の注口部片で、芯部に粘土を肥厚して作出する。基部に沈線を1条巡らし、下面側に8字状の貼付文を施す。

5-284号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、並行する斜位沈線を交差させ、斜格子状文を描出する。沈線は先が櫛歯状を呈する工具による。

5-291号土坑 2点を図示した。1は土坑東側の覆土上面から出土したもので、2点とも浅鉢の口縁部片である。1は大型片で口径48.0cm・残存高10.4cmを測り、平口縁で、口縁部は括れて外反し、口端は平坦な形状を呈する。括れ部に浅い横位沈線を1条巡らす他は磨き整形が顕著で、外面に赤色塗彩痕が看取される。2は平口縁で、口端は平坦な形状を呈する。磨き整形が顕著で、外・内面に赤色塗彩痕が看取される。

5-307号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は注口土器の胴部片である。1はやや波状を呈する口縁で、口端は鋭角状の断面形を呈する。口端下に横位隆帯を1条巡らし、この下位に原体LRを縦位施文

する。2は並行する2条の横位沈線を巡らし、この下位には連鎖状を呈する入組状(クランク状)の沈線文を横位に1条巡らす。この下位には沈線で区画文を描出し、方形状を呈する区画文の端部が看取され、区画内に沿って条線文を充填する。

5-308号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、並行する2条の横位沈線を巡らし、この下位に原体RLを横位施文する文様部が看取される。

5-309号土坑 5点を図示した。1を除く4点は覆土からの出土で、2は深鉢の胴部片、3は底部、4・5は土製円盤である。1は深鉢胴部の個体で、本土坑の北西側に重複していた埋設土器を一括したものである。1は最大径22.2cm・残存高17.7cmを測り、内湾するような膨らみを持つ器形を呈する。2条単位の微隆帯によるやや幅広い懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文後、隆帯に沿って撫でを施す。懸垂文は残存部で4単位が看取され、推定で8単位と思われる。2は沈線で文様を描出し、帯状と思われる弧状や褶曲する文様部が看取され、区画内に原体LRを充填する。3は径8.5cmを測り、原体RLの縦位施文による縄文が僅かに看取される他は磨き整形が顕著で、底面も磨き整形による無文である。4・5は何れも無文で、側面は4がほぼ全周、5が部分的に研磨を施す。

5-310号土坑 2点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁部片、2は土製円盤である。1は波状口縁で、波状部は円孔を持つ環状を呈する。外面は円孔部の右側に円形刺突を施し、これを端部に円孔部から口端下に沿って横位に巡る沈線を1条施す。内面には円孔部の両側に円形刺突を施し、これを繋ぐように弧状沈線を円孔部上位に沿って施す。2は無文で、側面約3/4周を研磨する。

5-313号土坑 5点を図示した。3は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁部片、4は「金魚鉢形」を呈する鉢の胴部(頸部)片、この他は深鉢の胴部片である。1は横位隆帯を1条巡らし、この上位には横位の波状隆帯を1条施す。下位には横位の弧状隆帯が1条と、横位隆帯に沿う沈線、刻み状を呈する縦位の短沈線文が看取される。2は隆帯を横位弧状や斜位に施して区画し、横位弧状の隆帯上には端部に円形刺突を伴う沈線を1条施す。また斜位隆帯に沿って沈線を施し、この下位には斜位の沈線文が看取される。また外面には刺突部がある。3は波状口縁で、波状部は円孔を持つ環状を呈する。この頂部には横位沈線と、この外面側に沿う短沈線を施す。外面には円孔部の上位から右側に沿って撫でを施す。内面には円孔部に沿って撫でを施し、この右側に円形刺突とこれに沿う撫でが看取される。4は頸部にU状沈線内に縦位の短沈線を1条充填する単位文を施し、これから並行する2条の横位沈線を巡らし、この端部には竹管による円形刺突を施す。この下位には原体LRを横位施文した縄文が僅かに看取される。また胎土中に植物質を僅かに含む。5は押圧状の円形刺突を1点施し、これに重複する条線を斜位ないしやや弧状に垂下して施す。

5-314号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、5~6条単位の節歯状工具による条線文を縦位に施文する。

5-315号土坑 2点を図示した。1は鉢の口縁部片、2は底部片である。1は平口縁で、口端に横位沈線を1条巡らす。この下位には幅狭に並行する4条の横位沈線を巡らし、沈線間にはクランク状に途切れる左下がりの区切り文を施す。2は磨き整形が顕著な無文で、底面に網代痕があり、緻密な胎土である。

5-318号土坑 1点を図示した。1は土製円盤で、弧状や斜位のU状を呈する沈線文が看取され、側面は打ち欠きのみの整形である。

5-319号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様部が看取され、帯状内に原体LRを横位充填する。

5-320号土坑 6点を図示した。1を除く5点は覆土からの出土で、2は注口土器の口縁部片、3は「金魚

鉢形」の鉢と思われる胴部(頸部)片、4は「鐘形」の深鉢と思われる胴部片、5は底部片、6は土製円盤である。1は深鉢口縁～胴部の個体で、本土坑の北側に重複していた埋設土器を一括したものである。1は口径40.0cm・残存高11.2cmを測り、平口縁で、胴部から口縁部は直立するような器形を呈する。微隆帯を1条横位に巡らし、これから2条単位の微隆帯を幅広の間隔で懸垂して縦区画し、区画内は原体LRを縦位充填する縄文帯と無文帯の構成をとり、隆帯に沿って撫でを施す。また横位の微隆帯上には原体LRを横位施文する。2は平口縁で、口端部が外反し、円形の貼付文状の突起を付し、この下を貫く円孔を持つ。外面には突起から横位沈線を1条巡らし、突起下には両側に円形の貼付文を施す。貼付文間には2条単位の微隆帯とこの間に撫でを垂下し、また貼付文から横位に延びる微隆帯が1条僅かに看取される。3は頸部内面に突出する段部を持つ。外面には円形刺突文とこれを挟む対弧状の沈線を施して単位文を描出し、これから並行する2条の横位沈線を巡らして頸部を画する。この下位には原体LRを横位施文する縄文帯が看取される。4は沈線で曲線的な文様を描出すと思われ、クランク状の横位沈線を1条巡らし、この上・下位に横位の円状を呈する沈線文や、上端には沈線文に沿う横位弧状の沈線が1条看取される。5は底面の外縁に磨き整形を施し、この内側に網代痕を持つ。6は並行する2条の沈線をやや弧状に施す文様が看取され、側面は打ち欠きのみ整形である。

5-323号土坑 1点を図示した。1は底部片で径10.0cmを測り、横位の撫で整形を施し、底面には網代痕を持つ。

5-324号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。口縁部に無文帯を持ち、この下位に双環状の突起を付すが、この頂部は欠損する。突起からは端部が円状に繋がる2条単位の横位の微隆帯を2段施し、この間に撫での沈線を施す。突起及び横位隆帯の下位には斜位の沈線文を八字状に施す。

5-326号土坑 3点を図示した。1を除く2点は覆土からの出土で、2は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、3は深鉢の胴部片である。1はB号とした土坑の底面から主体的に出土した深鉢口縁～胴部下位の大型個体片である。1は口径36.6cm・最大径39.6cm・残存高36.5cmを測り、4単位と思われる波状口縁で、胴部から口縁部は緩い膨らみから括れて外反し、口縁上位(口端部)は内折する器形を呈する。波状部には渦巻状沈線文とこれを対弧状に挟む重弧状の沈線文による単位文を描出し、これから口端下には横矢羽状を呈する刻みを巡らす。この下位には並行沈線で相対する単位の三角形区画文を横位に並列する幾何学的な文様帯を描出し、文様帯は上下の2段構成をとる。区画文内及び沈線間には原体LRを沈線に沿って充填施文する縄文帯と無文帯の交互構成をとる。胴部中位には黒斑及び煤状の付着物が看取される。2は平口縁で、口端部は鋭角状の断面形を呈し、口端下に横位沈線を1条巡らす他は、横位の撫で及び磨き整形による無文である。3は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、横位から垂下する渦巻状と思われる曲線的な文様部が看取され、帯状内には原体LRを充填する。

5-330号土坑 3点を図示した。2は深鉢の口縁部片、1は深鉢の胴部片、3は注口土器の注口部片である。1は沈線による帯状の区画で文様を描出し、斜位ないし弧状に垂下する文様部が看取され、沈線間の帯状内に沿って連続する刺突文を1列充填する。2は平口縁と思われ、外面は横位の撫で整形が顕著な無文、内面には幅狭に並行する2～3条の沈線で半円状と思われる文様を描出す。3は芯部に粘土を肥厚して作出し、磨き整形が顕著で、基部に沈線を1条巡らす。

5-338号土坑 10点を図示した。破片が集中して出土している状況であり、同一個体と思われる3～7は埋設土器であった可能性がある。1～4は深鉢の口縁部片、10は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、この他は深鉢の胴部片である。1・2は波状口縁で、沈線で渦巻状や扇手状などの単位文や楕円状と思われる区

面文を描出するもので、1は口端下に沿う斜位沈線が1条看取され、2は口端部が外反する形状で、口端下に横位沈線を1条巡らす。3・4は平口縁で、横位隆帯を1条とこの上位に沿う横位沈線を1条巡らして画し、この下位には沈線で単位文や区画文を描出し、3で蕨手状と思われる単位文、4で楕円状と思われる区画文が看取され、4の区画内には原体RLを横位充填する。5～8は2条単位、9は1条看取される沈線による懸垂文で縦区画するもので、区画内には9が原体LR、この他の4点が原体RLを縦位施文し、8はさらに蛇行すると思われる沈線を1条垂下する。10は口端部を欠損するが、この下位に横位沈線が1条看取され、以下は横位及び縦位の撫で整形による無文である。

5-341号土坑 5点を図示した。破片が集中して出土している状況であり、同一個体と思われる1～3は埋設土器であった可能性があり、これらは5-326土坑出土の破片との接合関係が認められる。前述の3点は深鉢の胴部片、この他は深鉢の口縁部片である。1～3は微隆帯を1条懸垂し、これに沿って撫でを施す他は、撫でや部分的に粗い磨き整形が施される無文である。4は平口縁で、撫での弱い原体による縄文を施文する。原体は無節Lの縦位ないし斜位施文と思われるが、単節RLの擦り戻しの可能性もあり不確定である。5は平口縁で、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ横位隆帯を1条巡らし、この下位には横位沈線による幅広い帯状の文様部が看取され、帯状内には原体LRを横位充填する。

5-345号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、並行する横位沈線を巡らし、この下位にはハ字状に垂下すると思われる沈線が看取され、区画内には原体LRを横位ないし斜位充填する。

5-351号土坑 1点を図示した。1は小型深鉢と思われる底部で、径3.4cmを測る。縦位の撫で整形後、部分的に磨きを施した無文で、底面も撫で整形による無文である。割れ口部を研磨して整形し、口縁部を二次的に作出した可能性がある。

5-353号土坑 3点を図示した。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、2は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片、3は注口土器の胴部片である。1は平口縁で、内折する形状を呈し、並行する2条の横位沈線で帯状の区画を描出し、区画内に沿って連続する円形刺突文を1列充填する。2は弧状沈線の下端に横位沈線が看取され、渦巻状文の下端を横位に連結する文様部と思われる。3は重状を呈する同心円状の沈線文を描出し、これから連鎖状を呈する入組状(クランク状)の沈線文を1条垂下する。

5-354号土坑 7点を図示した。2・4～7は深鉢の口縁部片、3は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、1は深鉢の胴部片である。1は隆帯を斜位から弧状に垂下して文様を描出し、隆帯に沿って撫でを施す。また原体Lないし原体LRの縦位施文と思われる縄文が看取されるが、摩耗しており不明瞭である。2は平口縁で、口端部は内折する形状を呈し、横位沈線を1条巡らした下位に刻みを施す。この下位は横位の撫で・磨き整形による無文である。3は波状口縁で、口端部は内傾する形状を呈する。外面は撫で・磨き整形による無文で、内面には口端下に縦位の短沈線が2条と、円形刺突が1点看取される。4・5は同一個体と思われ、平口縁で、口端部は内折する形状を呈する。刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、隆帯上に8字状の貼付文を施す。この下位には並行沈線による帯状の区画で三角形状の区画文を単位に構成される幾何学的な文様を描出し、貼付文下には弧状の褶曲部を持ち、帯状内や重状を呈する区画内には原体LRの細縄文を充填する。6は平口縁で、口端部は僅かに内折する形状を呈し、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、この下位には並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、段状に巡る横位の文様部が看取され、帯状内には原体LRの細縄文を横位充填する。また下段の文様部には沈線の重複部が看取され、垂下する文様の端部と思われる。7は平口縁で、口縁部は外反する器形で、橋状の把手を持つ。把手の基部から横位の微隆帯を1条巡らし、隆帯上に刻みを施す。この下位には横位に連続して巡る爪形刺

突文を施す。

5-355号土坑 2点を図示した。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片、2は底部片である。1は平口縁で、円形の刺突文と貼付文を上下に施して8字状文を描出し、これから横位沈線を1条と、この下位にやや弧状を呈する横位沈線を1条施す。2は径13.2cmを測り、磨き整形で上位に剝離部があり、底面には網代痕を持つ。

5-356号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、地文に横位に連続して巡る爪形刺突文を施す。

5-357号土坑 3点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は深鉢の胴部片、3は土製円盤である。1は波状口縁と思われ、内面口端下に並行する2条の横位沈線を巡らす。外面には刻みを持つ細い横位隆帯が2条看取される。2は並行する3条の横位沈線を巡らし、この下位には原体LRを横位ないし斜位施文する文様部が看取される。3は刻みを持つ細い隆帯を横位に1条、縦位に2条垂下し、縦位隆帯に沿って沈線を施し、隆帯間の上端に円形刺突を1点施す。側面は打ち欠きのみの整形である。

5-358号土坑 1点を図示した。1は底面に網代痕を持つ底部片である。

5-360号土坑 2点を図示した。1は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁部片、2は土製円盤である。1は口端部が内折する形状と思われるが口端を欠損し、割れ口部を含め並行する2条の横位沈線を巡らし、この下位は無文である。2は並行する2条の沈線間に沿って連鎖状の刺突を1列充填し、地文に原体LRを横位施文する。側面は部分的に研磨する。

5-362号土坑 2点を図示した。1は深鉢の胴部片、2は土製円盤である。1は4条看取される並行沈線を斜位に垂下する文様部が看取される。2は磨き整形による無文で、側面は約2/3周を研磨する。

5-363号土坑 1点を図示した。1は台付鉢の脚部片で、横位の撫で整形が顕著で、一部に粗い磨きが施される。

5-364号土坑 2点を図示した。1は深鉢の胴部片、2は土製円盤である。1は曲線的な単位文と思われる縦位の弧状沈線が看取され、これからやや斜状に並行する2条の横位沈線を巡らし、沈線間の帯状内に沿って連続する円形刺突文を1列充填する。この下位には原体LRを横位施文する。2は無文による無文で、側面は打ち欠きのみの整形である。

5-367号土坑 2点を図示した。1は「金魚鉢形」の鉢と思われる胴部片、2は深鉢の胴部片である。1は上位に横位沈線、下位に斜位沈線が看取される区画内に原体LRを横位充填する。2は沈線による懸垂文で縦区画し、原体LRを斜位施文する。また斜位沈線が1条看取され、垂下する蛇行沈線と思われる。

5-369号土坑 4点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2・3は深鉢の胴部片、4は土製円盤である。1は波状口縁と思われ、やや弧状を呈する横位の微隆帯が1条と、この下位に沿って連続する円形刺突文が1列看取される。微隆帯の上位は横位の撫で整形が顕著な無文帯である。2は2条単位の沈線を弧状に施してU状と思われる区画文を描出し、原体LRを横位施文する。3は粗い撫で整形で、縦位や斜位の条線が看取され、三角形の文様を描出すと思われる。4は原体LRの細縄文を施文する縄文が看取され、側面は打ち欠きのみの整形である。

5-372号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は「金魚鉢形」の鉢と思われる口縁部片である。1は平口縁と思われ、口端部を肥厚して外面に段部を持ち、口端には区切れ部を持つ横位沈線を1条施す。この下位には並行する2条の縦位沈線やこの上端から繋がる弧状沈線を1条垂下して区画文を描出し、この外縁には原体LRの横位施文による縄文が僅かに看取される。2は波状口縁で、波状部は孔部を持つ環状を呈すると思われるが、孔部から上位を欠損する。外面には円形刺突を1点施し、刺突や孔部に沿って入組む沈

線を施し、横位の8字状文を描出すると思われる。内面には貼付文状の円形刺突を施し、孔部と併せて横位の8字状文を描出すると思われる。

6-10号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、底部付近の破片と思われ、粗い磨き整形が施される。斜位の沈線が1条看取されるが、植物等の圧痕によるものと思われる。

6-11号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。波状口縁と思われ、横位隆帯を1条巡らし、この下位に原体RLを横位施文後、隆帯の下位に沿って横位沈線を施す。また隆帯の上位に沿っては幅広の浅い沈線を施す。

6-12号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、2条単位の隆帯による懸垂文とこれに沿う沈線で縦区画し、沈線文を斜位に施文すると思われる。

6-17号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、4～5条単位の節歯状工具による条線文を縦位に施文する。内面に炭化物が付着する。

6-20号土坑 3点を図示した。3は深鉢と思われる口縁部片、1は深鉢の胴部片、2は深鉢ないし鉢と思われる胴部片である。1は低い横位隆帯が1条看取され、この下位に沈線文を縦位ないし斜位に施文する。2は幅狭に並行する横位沈線が2条看取され、途中に剝離部がある。この下位は磨き整形が顕著な無文である。3は平口縁で、内面口端下に浅い沈線状の段部が看取される。外面には原体LRを横位施文後、この下位に幅広の浅い横位沈線を1条巡らす。文様や器形的には弥生の壺形土器の可能性もあろうか。

6-53号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、条線文をやや弧状に垂下して施文する。

6-55号土坑 4点を図示した。1・2は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。1は平口縁で、幅広の浅い沈線で楕円状と思われる区画文を描出し、区画内に原体LRを横位充填する。2は平口縁で、微隆帯を1条横位に巡らして口縁部の幅広な無文帯を画する。3は半截竹管による平行沈線を単位とする縦位の沈線文を施す。4は沈線による帯状の区画でJ字状文を描出して区画し、区画内に原体Lを横位充填する。またこの下位には横位沈線が看取され、段状の構成をとるものと思われる。

6-56号土坑 1点を図示した。1は壺形土器と思われる口縁部片である。平口縁で、内湾する胴部上半(肩部)から幅の狭い口縁部が僅かに外反するように立上がる器形で、さらに口端部は僅かに外傾するような形状を呈する。口縁部には横位の撫で・磨きを施し、胴部上半(肩部)には幅狭に並行する横位沈線を上段に2条、下段に4条巡らし、中段の帯状の区画内に沈線で変形工字状の文様を描出する。この文様帯の下位には原体RLの縦位施文と思われる縄文が看取される。沈線は彫りが深く、沈線間は半隆起線状を呈し、変形工字状の上・下位の沈線には重ね引き(引き直し)と思われる重複部が看取され、沈線は棒状工具によると思われる。外面に炭化物が付着する。

6-57号土坑 5点を図示した。1・2・5は深鉢の口縁部片、4は「金魚鉢形」を呈する鉢の口縁部片、3は深鉢の胴部片である。1は平口縁で、口端部を肥厚して内面口端下に突部を持つ。外面には横位隆帯を1条とこれに沿う横位沈線を巡らし、この下位には原体LRを斜位施文後、褶曲するように蛇行すると思われる隆帯を1条垂下し、隆帯に沿って沈線を施す。2は波状口縁で、粗い磨き整形による無文で、外面に炭化物が付着する。3は2条単位と思われる沈線による懸垂文を施して縦区画する。4は波状口縁で、口端部は内折する形状を呈する。波状部に横位の弧状沈線を1条と、この両側に円形刺突を上下に2点施して単位文を描出し、また横位のJ字を呈する沈線が僅かに看取される。内面には波状部に円形刺突を1点施す。5は平口縁で、内面口端下に横位沈線を1条巡らす。外面には幅狭に並行する2条の横位沈線を巡らし、この下位に斜位の沈線文を施すと思われる。

6—58号土坑 4点を図示した。1は深鉢の口縁部片、4は底部片、この他は深鉢の胴部片である。1は波状口縁で、隆帯を横位や弧状に施して区画し、この下位には原体LRを縦位施文後、横位沈線を1条巡らす。2は2条単位の隆帯による懸垂文とこれに沿う撫でを施して縦区画し、短沈線を斜位及び縦位に施す。3は条線文を縦位に施文する。4は径9.0cmを測り、撫で整形でやや摩耗しており、底面には押圧状の整形痕が看取される。外面には黒斑が顕著である。

6—59号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の口縁部片である。1は平口縁で、口端部を肥厚して内面口端下に突部を持つ。外面には横位隆帯を1条とこの上位に沿う沈線を1条巡らし、この下位には1条の斜位隆帯や弧状隆帯を2条垂下して曲線的な文様を描出すると思われる。2は低い隆帯で楕円状と思われる区画文を描出し、隆帯に沿って撫でを施す。器面が弛く摩耗しており、二次的な被熱によると思われる。

6—60号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、2条単位の横位沈線を巡らし、沈線間に沿って交互刺突を1列充填する。この下位には原体LRを縦位施文する。

6—61号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、2条単位と思われる沈線による懸垂文で縦区画する。赤色塗彩と思われる痕跡が僅かに看取される。

6—62号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、微隆帯を1条横位に巡らす他は、撫で整形による無文である。

6—63号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片である。平口縁で、口縁部に橋状と思われる把手を持つが、橋状部を欠損する。把手の基部には縦に貫通する円孔とこれに沿う弧状沈線を1条施し、さらに割れ口部には横位の短沈線が1条看取される。把手の基部からは横位隆帯を1条と、橋状下に沿ってやや弧状に垂下する低い隆帯と沈線を1条施し、横位隆帯の上位に沿って沈線を施す部分が看取される。横位隆帯の下位には斜位の沈線文を施すと思われる。

6—68号土坑 1点を図示した。1は深鉢の口縁部片で、隆帯とこれに沿う幅広の浅い沈線で渦巻状の文様を描出し、原体LRを隆帯上には斜位、隆帯下位には横位施文する。

6—77号土坑 3点を図示した。1は深鉢口縁～胴部の大型片で、6H—11グリッド出土の土器片と接合関係が認められている。2は深鉢口縁部の大型片、3は胴部片である。1は口径20.5cm・残存高8.5cmを測り、平口縁で、緩く外反する頸部から口縁部が僅かに内傾するように立ち上がる器形を呈する。口端部を肥厚して内面口端下に突部を持ち、口端上に沿って横位沈線を1条巡らす。外面には口端にあたる上段に横位隆帯を1条と、また下段に渦巻状の突起を付す2条単位の横位隆帯を巡らして帯状に区画し、区画内に原体LRを縦位充填後、区画内側に沿って横位沈線を施す。胴部には地文に原体LRを縦位施文する。2は波状口縁で、波状部には隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状の単位文を描出し、単位文から上段に1条、下段に2条単位の横位隆帯を巡らして帯状に区画し、区画内に縦位の短沈線文を充填する。上段の隆帯上位と下段の隆帯間に沿って沈線を施す。この文様帯の下位は撫で整形による無文帯である。3は微隆帯で縦区画し、原体LRを縦位施文すると思われるが、器面が摩耗しており不明瞭である。

6—80号土坑 2点を図示した。2は深鉢の口縁部片、1は胴部片である。1は沈線による円状文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。器面が摩耗しており、二次的な被熱によると思われる。2は波状口縁で、口端下に沿う斜位から横位に繋がるとと思われる隆帯とこれに沿う沈線で区画文を描出し、区画内に縦位の沈線文を充填する。

6—103号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、微隆帯を1条とこれに沿う撫でを懸垂して縦区画し、これを挟んで原体RLを縦位施文する縄文帯と幅広の無文帯の構成をとる。

6-105号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片である。1は地文に原体LRを縦位施文後、2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、さらに蛇行沈線を1条垂下する。2は地文に燃糸(R)を斜位施文する。

6-114号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、低い隆帯で上半にU状、下半にV状の区画文を描出する。器面は粗い撫で・磨き整形で、隆帯は貼付ではなく、整形時に粘土を寄せて隆起させたものと思われる。

6-122号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は低い隆帯とこれに沿う幅広いの浅い沈線で楕円状の区画文を描出し、区画内に原体RLを横位充填する。また縦位の弧状沈線が看取され、渦巻状の単位文の一部と思われる。区画文の下位には浅い横位沈線が1条看取される。2は地文に綾杉状の沈線文を施す。

6-125号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片である。1は2条単位と思われるやや太目の沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。懸垂文の沈線間にはさらに2条単位の細い沈線による懸垂文を充填する。2は撫で整形が顕著な無文で、偏状の短沈線や擦痕状の細い条線が看取される。外面に円形の凹部が1点看取され、穿孔途中の補修孔であろうか。

7-15号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片である。1は沈線による懸垂文で縦区画し、原体Lを縦位施文する。2は6条単位と思われる条線文を縦位に施し、細かな剝離痕が多数看取され、二次的な被熱によると思われる。

7-21号土坑 2点を図示した。1は深鉢の口縁部片、2は胴部片である。1は波状口縁で、内面口端下に段部を持ち、口端上に沿って沈線を1条巡らす。外面には微隆帯を弧状ないし渦巻状に施すと思われるが、剝離しており不明瞭である。2は綾杉状の沈線文を施す。

7-22号土坑 2点を図示した。2点とも深鉢の胴部片で、1は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。2は地文に原体Lを斜位施文すると思われるが、原体RLの燃り戻しの可能性もあろうか。

7-23号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、沈線による懸垂文で縦区画し、原体LRLを縦位施文する。

7-27号土坑 1点を図示した。1は深鉢の胴部片で、沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを縦位施文する。

土坑出土石器 (第256図～263: PL122～124)

4-4号土坑 6点出土し、スクレイパーが1点・打製石斧が2点・磨石が2点・石製品が1点である。4はスクレイパーとしたもので、方形の平面形を呈し、表面に自然面の残る1次の剝片を素材としている。この下部にあたる側縁を主に剝離痕が認められ、また上部にあたる側縁にも細かな剝離痕が看取されるが不明瞭と思われ、剝片の可能性が強いものである。5・6は打製石斧である。5は刃部にあたる部分で、これから基部までを欠損している。刃部はやや鋭角的な弧状の平面形を呈し、側縁は左側が弧状に膨らみ、右側が直線的で、楕形ないし分銅形を呈するものと思われるが不確定である。6は分銅形を呈するが、側縁の括れ部は小さく抉っている。表面には自然面が残り、縦長の剝片が素材と思われ、刃部はやや直線的、基部は鋭角的な平面形を呈する。7・8は磨石である。7は円形状を呈する扁平な円礫を素材とし、両面に浅い凹みが看取される。8は円形状を呈する球状の円礫を素材とし、裏面には部分的な磨り面が看取される。9は石製品としたもので、円形状の平面形を呈する扁平な軽石を素材とし、両面に磨った痕跡が認められ、

地の面にあたる凹凸が残り、浅い凹み状に看取される。以上の石材は4・6が細粒輝石安山岩、5が黒色頁岩、7・8が粗粒輝石安山岩、9が軽石である。

4-29号土坑 出土した石器類2点のうち、スクレイパーが1点の他は剥片類である。2はスクレイパーとしたもので、表面に自然面の残る1次的な縦長の剥片を素材とするが、下端部側は横長に張り出す形状を呈し、左側縁を主に細かな剝離痕が看取される。以上の石材は珪質頁岩である。

5-1号土坑 出土した石器類5点のうち、石鏃が1点・打製石斧が1点・磨石が1点の他は剥片類である。3は比較的大型の石鏃で、基部は欠損している。側縁は僅かに凹凸が看取されるが全体には直線的で、二等辺三角形形状を呈するものと思われる。4は打製石斧の刃部にあたる破片で、両面に節理による剝離面が看取される。5は磨石で、長楕円状を呈すると思われる縦長の扁平な円礫を素材とするが、右側縁部を欠損している。以上の石材は3が黒曜石、4が黒色頁岩、5が粗粒輝石安山岩である。

5-3号土坑 出土した石器類4点のうち、打製石斧が1点・凹石が1点の他は剥片類である。4は打製石斧の基部で、刃部側にあたる半部を欠損している。表面には自然面が残り、側縁は左側にやや膨らむような部分、右側に僅かに弧状に抉れるような形状が看取され、楕形ないし分銅形を呈するものと思われるが不確定である。5は凹石で、やや不整な隅丸形状の平面形を呈する扁平な礫を素材とし、表面の中央に深い凹みを1点持ち、この縁部に浅い凹みが数点看取される。以上の石材は4が黒色頁岩、5が粗粒輝石安山岩である。

5-5号土坑 2点出土し、石鏃が1点・スクレイパーが1点である。16は凹基無茎鏃である。側縁は直線的な形状で、先端は鈍角で欠損している可能性があり、やや大型の三角形形状を呈する平面形である。17はスクレイパーとしたもので、比較的小型である。長方形形状を呈するやや縦長の平面形状を呈し、この左側縁に剝離痕が看取されるが不明確で、調整剥片などの可能性を含むものである。以上の石材は16が黒曜石、17が黒色頁岩である。

5-6号土坑 出土した石器類2点のうち、凹石が1点の他は剥片類である。8は凹石で、楕円状を呈する扁平な円礫を素材とし、両面の中央に縦位に並ぶ2点の凹みを持つ。また表面の下端には剝離状の欠損部が看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-8号土坑 出土した石器類5点のうち、石皿が2点の他は剥片類である。7・8は石皿の破片である。何れも大型と思われる扁平な円礫を素材とし、7の機能面は平坦である。8の機能面は明瞭な縁を持って皿状に湾曲し、裏面には多孔石の機能を有している。以上の石材は何れも粗粒輝石安山岩である。

5-10号土坑 出土した石器類2点のうち、打製石斧が1点の他は剥片類である。1は基部を欠損する打製石斧である。表面には自然面が残り、刃部は弧状の平面形で、側縁は左側が直線的で、右側は僅かに弧状に膨らむような形状を呈し、楕形を呈するものと思われる。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-16号土坑 1点出土し、打製石斧である。1は打製石斧の刃部片である。刃部の平面形は弧状を呈し、使用によると思われる摩滅痕が看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-17号土坑 出土した石器類3点のうち、石鏃が1点の他は剥片類である。2は石鏃で、縦長の剥片を素材とし、明瞭な柄み部を持たず、上端部は直線的な形状を呈する。刃部は右側縁を主に細かな剝離調整が看取される。以上の石材は黒色安山岩である。

5-26号土坑 出土した石器類7点のうち、スクレイパーが2点・多孔石が1点の他は剥片類である。1・2はスクレイパーとしたもので、何れも比較的小型である。1は縦長の台形状を呈する平面形で、この左側縁を主に細かな剝離痕が看取される。2はやや突出する上端部以外の側縁は直線的で、方形の平面形を呈

し、この3辺を主に細かな剝離痕が看取される。3は多孔石で、菱形の平面形を呈する礫を素材とし、側面にも凹みを持つ。以上の石材は1が黒色頁岩、2が珪質凝灰岩、3が粗粒輝石安山岩である。

5-30号土坑 出土した石器類4点のうち、石皿が1点の他は剝片類である。5は石皿であるが大平を欠損している。大型の扁平な円礫を素材とし、機能面は明瞭な縁を持って皿状に湾曲し、裏面には多孔石の機能を有している。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-32号土坑 出土した石器類2点のうち、打製石斧が1点の他は剝片類である。2は楕形を呈する打製石斧である。表面に自然面の残る1次的な縦長の剝片を素材とし、基部と刃部を主に剝離調整を施す。刃部は弧状、基部は僅かな突起が看取されるが直線的な平面形状を呈する。以上の石材は細粒輝石安山岩である。

5-37号土坑 2点出土し、磨石が1点・石皿が1点である。3は磨石で、やや不整な楕円状を呈する扁平な円礫を素材としている。4は石皿の破片で、大型と思われる扁平な円礫を素材とし、機能面は平坦で浅い凹みが数点看取される。以上の石材は何れも粗粒輝石安山岩である。

5-51号土坑 出土した石器類3点のうち、磨石が2点の他は剝片類である。6・7は磨石である。6は長楕円状を呈する縦長のやや扁平な円礫を素材とし、両面に浅い凹みが看取される。7は長方形の平面形で縦長の角柱状を呈する礫を素材とし、上・下端部や裏面に剝離状の欠損部がある。磨石としたが、形的には石皿とすべきものと思われる。以上の石材は何れも粗粒輝石安山岩である。

5-54号土坑 1点出土し、凹石としたものである。8は凹石としたもので、扁平な円礫を素材とする破片であり、平面形状は不確定で、表面の上端に凹みが看取される。また裏面には磨り面が認められ、石皿片の可能性を含むものである。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-55号土坑 1点出土し、磨製石斧である。9は小型の磨製石斧である。平面形は基部が鋭角状に窄まる楕形を呈し、刃部は直線的で剝離状の欠損部が看取される。全体的に丁寧に整形しており、縁状の整形痕が看取される。以上の石材は変質蛇紋岩である。

5-60号土坑 1点出土し、磨石である。2は磨石で、長楕円状を呈するやや縦長の扁平な円礫を素材とし、表面は中央に稜があり、両面ともに部分的な磨り面を持つ。また表面には浅い凹みが数点、右側面には細かな凹みが看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-79A号土坑 出土した石器類11点のうち、石鏃が1点・打製石斧が2点・磨石が1点・多孔石が1点の他は剝片類である。9は凹基鏃の脚部片で、比較的大型のものと思われるが、この他の形状等は不確定である。10・11は楕形を呈する打製石斧で、11は基部を欠損するが、何れも側縁は直線的な基部側から僅かに括れて刃部側が弧状に膨らむような形状を呈し、刃部はやや弧状の平面形を呈する。また10の基部は直線的な平面形で、11は裏面に節理による剝離面が看取される。12は磨石で、長楕円状を呈する縦長のやや扁平な円礫を素材とし、表面は中央の稜を境に磨り面が分かれ、表面の上端部や裏面の中央を主に浅い細かな凹みを持つ。13は多孔石で、楕円状を呈する球状の円礫を素材としている。以上の石材は9が黒曜石、10が黒色頁岩、11が変質安山岩、12・13が粗粒輝石安山岩である。

5-79B号土坑 出土した石器類6点のうち、スクレイパーが2点の他は剝片類である。6・7はスクレイパーとしたものである。6はやや不整な横長の長方形を呈する平面形で、表面に自然面の残る剝片を素材とし、この下端部にあたる側縁に細かな剝離痕が看取される。7は横長の平面形状を呈し、表面には僅かに自然面が残る。この下端部にあたる側縁に細かな剝離痕が看取されるが不明瞭で、剝片の可能性が高いものである。以上の石材は6が粗粒輝石安山岩、7が黒色頁岩である。

5-92号土坑 出土した石器類2点のうち、凹石が1点の他は剝片類である。4は凹石で、やや楕形に開く

隅丸長方形を呈する縦長の扁平な円礫を素材とし、表面には浅い凹みが数点、裏面には縦位に連続する浅い凹みが看取される。また表面の下端部には敲打による剝離痕が認められる。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-100号土坑 1点出土し、土坑の底面付近から出土した垂飾である。1は硬玉製の垂飾である。上端が鋭角的に穿する滴状の平面形を呈し、全体的には丁寧に研磨して整形しているが、地の面の凹部が僅かに看取される。また中央のやや右寄りに穿孔を1点施すが、表面の円孔左側に小さい円形の凹みが看取される。これは穿孔途中の孔部にあたるものと思われ、当初はこちらに穿孔する予定を変更した可能性が高い。以上の石材はひすい輝石である。

5-109号土坑 出土した石器類4点のうち、スクレイパーが1点・打製石斧が1点の他は剥片類である。5はスクレイパーとしたもので、不整な方形の平面形を呈し、右側にあたる側縁には筋理による剝離痕が看取される。また上・下端部にあたる側縁に剝離痕が看取される。6は撥形と思われる打製石斧であるが、基部付近の両側縁が弧状に緩く抉れるような形状を呈し、分銅形にも近い平面形状である。基部・刃部の平面形は僅かに弧状を呈し、裏面の刃部には摩滅痕が看取される。以上の石材は5が珪質凝灰岩、6が珪質頁岩である。

5-116号土坑 出土した石器類6点のうち、磨製石斧が1点・凹石が1点の他は剥片類である。4は磨製石斧で、刃部を欠損している。撥形に開く平面形と思われ、全体的に丁寧に研磨して整形しているが、表面の上端側を主として両面に浅い凹みが看取される。5は凹石の破片で、扁平な円礫を素材とするが平面形状等は不確定である。表面に浅い凹みが数点看取される。以上の石材は4が変玄武岩、5が粗粒輝石安山岩である。

5-124号土坑 1点出土し、磨製石斧である。1は磨製石斧である。撥形の平面形であるが、やや幅広い形状を呈する。全体的に丁寧に研磨して整形しており、線状の整形痕が認められるが、両面に浅い凹みも数点看取される。刃部の平面形は弧状を呈し、使用によると思われる摩滅部や剝離痕が認められる。以上の石材はひん岩である。

5-146号土坑 3点出土し、磨製石斧である。5~7は磨製石斧で、何れも全体的に丁寧に研磨して整形している。5は基部側のみで刃部側の半部を欠損するが、撥形に開く平面形と思われ、表面に凹みが数点看取される。6は比較的小型で、縦長で幅が狭く、細長いような短冊形の平面形を呈し、線状の整形痕が看取される。7は小型で、撥形に開く平面形であるが、基部は弧状の平面形を呈し、線状の整形痕が看取される。また刃部右側は欠損している。以上の石材は5が変玄武岩、6・7が変質蛇紋岩である。

5-151号土坑 2点出土し、石鏃が1点・磨石が1点である。3は凹基無茎鏃であるが、左側の端部と先端部を欠損している。側縁は全体に直線的な形状で、二等辺三角形の平面形を呈するものと思われる。4は磨石で、円形ないし楕円状を呈する扁平な円礫を素材とするが、半部を欠損しており、両面に浅い凹みが数点看取される。以上の石材は3が黒曜石、4が粗粒輝石安山岩である。

5-155号土坑 1点出土し、磨石である。2は磨石で、楕円状を呈する扁平な円礫を素材とし、裏面の中央に凹み、また下端部には敲打によると思われる剝離痕が看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-164号土坑 出土した石器類7点のうち、石鏃が1点・打製石斧が3点の他は剥片類である。7は石鏃としたもので、三角形の平面形を呈するが、基部は凹凸があり有茎状の突部が看取され、先端部を主に細かな剝離痕が看取される他は不明瞭で、未製品と思われる。8~10は打製石斧である。8・9は短冊形と思われ、8はやや幅広い・9はやや幅の狭い形状であるが、8は両側縁が僅かに弧状に反るような形状、9は左側

縁が直線的、右側縁が僅かに弧状に反るような形状を呈する。また基部は8が直線的・9が弧状、刃部は何れも斜状から弧状に丸みを持つような平面形を呈し、両面には何れも使用によると思われる摩滅部が看取される。10は撥形を呈するもので、基部は調査時に欠損したものを接合している。側縁は左側が直線的、右側が凹凸のある形状で、基部は僅かに凹状部が看取されるが直線的、刃部は両端が丸みを持つ直線的な平面形を呈する。以上の石材は7が黒曜石、8が粗粒輝石安山岩、9・10が黒色頁岩である。

5-167号土坑 出土した石器類4点のうち、石鏃が1点の他は剥片類である。9は基部を欠損する石鏃の先端部片で、比較的大型である。側縁は左側が直線的、右側がやや凹凸があり、三角形の平面形を呈するものと思われる。以上の石材は黒曜石である。

5-179号土坑 出土した石器類3点のうち、石鏃が1点・スクレイパーが1点の他は剥片類である。6は凹基無茎鏃で、左脚部と先端部を欠損するが、側縁は直線的な形状で平面形は二等辺三角形形状を呈するものと思われる。7はスクレイパーとしたもので、やや不整な縦長の長方形形状を呈する平面形で、右側縁を除いて連続する細かな剝離調整を施し、右側縁は段状の剝離痕が看取される。以上の石材は6が黒曜石、7が珪質頁岩である。

5-180号土坑 1点出土し、磨石である。5は磨石で、円形状を呈する球状の円礫を素材とし、磨り面は片面のみに認められる。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-182号土坑 出土した石器類27点のうち、石鏃が1点・石錐が1点・スクレイパーが1点・打製石斧が2点・磨製石斧が1点の他は剥片類である。24は石鏃としたものであるが、先端部の両側縁には微細な剝離痕が看取されるのみで明瞭な剝離調整は看取されず、基部に剝離調整が認められるが左側が折れるように欠損している。形状は不整な二等辺三角形形状を呈し、未製品と思われる。25は石錐で、縦長の剥片を素材として握み部を持たないもので、平面形は逆の二等辺三角形形状を呈し、左側縁を主に細かな剝離調整が看取される。26はスクレイパーとしたもので、小型である。下端部が鋭角な弧状を呈する逆三角形の平面形で、上端部を除く3辺に細かな剝離調整が施され、両面には節理による剝離面が看取される。27・28は打製石斧である。27は基部を欠損するが、直線的な側縁が僅かに斜状に開くように見られることから撥形と思われ、刃部は僅かに弧状の平面形を呈する。28は基部と刃部を欠損する破片であるが、側縁は直線的で短冊形を呈するものと思われ、表面には節理による剝離面、裏面には摩滅部が看取される。29は小型の磨製石斧で、刃部を欠損している。全体的に丁寧に研磨して整形しており、整形痕が線状に看取される。基部は直線的で、側縁は僅かに弧状に膨らむような形状で、撥形ないし幅広い短冊形を呈するものと思われる。以上の石材は24・25が黒曜石、26が珪質頁岩、27・28が粗粒輝石安山岩、29が蛇紋岩である。

5-188号土坑 出土した石器類4点のうち、スクレイパーが2点の他は剥片類である。3・4はスクレイパーとしたものである。3は小型で、縦長の剥片を素材とする不整な長方形の平面形を呈し、この上・下端部を主に細かな剝離痕が看取され、楔形石器とされるものと思われる。4は自然面の残る1次的な縦長の剥片を素材とするが、この下端部に看取される剝離痕が不明瞭で、剥片の可能性が強いものである。以上の石材は3が黒曜石、4が粗粒輝石安山岩である。

5-197号土坑 出土した石器類5点のうち、石棒が1点の他は剥片類である。3は小型の石棒で、ミニチュア的な製品と考えられる。全体的に丁寧に研磨して整形しており、三角形の平面形を呈する頭部を作出し、これ以下は棒状に磨り上げており、基部側は折れて欠損している。断面形はやや不整な楕円状を呈している。以上の石材は緑色片岩である。

5-214号土坑 1点出土し、スクレイパーである。2はスクレイパーとしたもので、横長の形状を呈し、下

端部は直線のから斜状に折れる平面形状で、この斜状部を主に細かな剝離痕が看取されるが不明瞭で、剥片の可能性が高いものである。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-215号土坑 2点出土し、スクレイパーと石錐である。4はスクレイパーとしたもので、何れも小型である。4はやや縦長の台形状を呈する平面形で、表面には節理による剝離面が認められ、下端部にあたる側縁に細かな剝離痕が看取されるが不明瞭で、調整剥片などの可能性が高いものである。5は縦長の剥片を素材とし、下端部にあたる側縁に突部を持つ不整な長方形の平面形を呈する。右側縁を除く3辺に細かな剝離痕が看取され、特に下端部の突部の両縁に剝離痕があり、また表面の先端部には微細剝離が看取されることから、これを刃部とする石錐と考えられる。以上の石材は4が細粒輝石安山岩、5が流紋岩である。

5-227号土坑 出土した石器類3点のうち、石皿が1点他は剥片類である。6は石皿の破片で、大型の扁平な円礫を素材とするが平面形状は不確定で、機能面は明瞭な縁を持って皿状に湾曲している。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-231号土坑 1点出土し、磨石である。1は磨石で、楕円状ないし長楕円状と思われる球状の円礫を素材とするが、半部を欠損している。磨り面は片面のみに認められ、浅い凹みが数点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-237号土坑 2点出土し、スクレイパーが1点・磨石が1点である。3はスクレイパーとしたもので、下端部が横長のやや不整な三角形形状を呈する平面形で、下端部を主に右側縁にも細かな剝離痕が看取されるが不明瞭で、剥片の可能性が高いものである。4は磨石で、楕円状を呈する扁平な円礫を素材とし、両面の中央に浅い凹みが数点、また側縁にも浅い凹みが看取される。以上の石材は3が細粒輝石安山岩、4が粗粒輝石安山岩である。

5-269号土坑 出土した石器類5点のうち、磨製石斧が1点・磨石が2点他は剥片類である。2は磨製石斧で、基部側のみで刃部側の半部を欠損している。全体に丁寧に研磨して整形しており、基部は弧状を呈し、全体には楕形に開く平面形と思われるが不確定である。また基部には敲打によると思われる剝離痕が看取される。3・4は磨石で、3は楕円状を呈する扁平な円礫、4は不整な隅丸長方形形状を呈する縦長の扁平な円礫を素材としている。また3は側縁の一部を欠損し、両面に浅い凹みが数点看取される。以上の石材は2が変玄武岩、3・4が粗粒輝石安山岩である。

5-270号土坑 1点出土し、スクレイパーである。2はスクレイパーで、縦長の台形状の平面形を呈し、左側縁から下端部を主に細かな剝離調整が看取され、左側縁は直線的、下端部は緩い弧状の平面形状を呈する。以上の石材は珪質頁岩である。

5-271号土坑 1点出土し、石錐である。1は石錐で、縦長の剥片を素材とする。刃部の先端部を欠損しており、明確な柄み部を持たないものである。以上の石材は黒曜石である。

5-272号土坑 1点出土し、磨石である。1は磨石としたもので、円形状を呈する球状の円礫を素材とするが、右側縁部を欠損している。磨り面は片面のみで、細かな凹みが多数看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-275号土坑 出土した石器類5点のうち、打製石斧が1点・凹石が1点他は剥片類である。4は打製石斧であるが、刃部側のみで基部側の半部を欠損している。側縁は弧状に膨らむような形状から僅かに括れる部分が看取され、楕形ないし斜形を呈するものと思われる。また刃部の平面形は弧状を呈する。5は凹石で、やや不整な長楕円状を呈する扁平な円礫を素材とし、表面は石皿状に緩く湾曲するような形状を呈し、両面に浅い凹みが数点、また表面には剝離状の欠損部が看取される。以上の石材は4が黒色頁岩、5が粗粒

輝石安山岩である。

5-279号土坑 1点出土し、凹石である。1は凹石で、長楕円状を呈すると思われるやや扁平な円礫を素材とするが、半部を欠損しており、両面に浅い凹みが数点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-280号土坑 出土した石器類3点のうち、磨石が1点の他は剥片類である。3は磨石で、円形状を呈する球状の円礫を素材とし、磨り面は片面のみに認められ、浅い凹みが数点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-281号土坑 出土した石器類3点のうち、スクレイパーが1点・打製石斧が1点の他は剥片類である。3はスクレイパーとしたもので、やや不整な三角形の平面形を呈する磨製石斧の側縁部にあたる破片を素材とし、左側から右側の上端側にかけての側縁を主に微細な剝離痕が看取される。4は短冊形の打製石斧で、基部は斜状、刃部は弧状の平面形を呈する。以上の石材は何れも頁岩である。

5-282号土坑 出土した石器類3点のうち、磨石が1点の他は剥片類である。2は磨石としたもので、長楕円状を呈する縦長のやや扁平な円礫を素材とし、表面の中央には稜を持ち、表面から側面にかけて浅い凹みが多数看取される。以上の石材は石英閃緑岩である。

5-306号土坑 1点出土し、石棒である。1は大型の石棒である。先端部には隅丸な三角形の平面形を呈する頭部を持ち、括れ部以下は下位側が太くなるように棒状に磨り上げており、基部側は折れて欠損している。断面形は円形状を呈している。以上の石材は緑色片岩である。

5-311号土坑 出土した石器類3点のうち、凹石が2点の他は剥片類である。1・2は凹石である。1は楕円状を呈する扁平な礫、2は不整な長楕円状を呈する縦長のやや扁平な円礫を素材とし、1は表面に深い凹みが1点とこの縁部や側縁に凹みが数点、2は表面に凹みが多数看取される。以上の石材は何れも珉質頁岩である。

5-315号土坑 出土した石器類2点のうち、スクレイパーとしたものが1点の他は剥片類である。3はスクレイパーとしたもので、縦長の剥片を素材とするが、この右側縁から下端部にかけて看取される剝離痕が不明確で、剥片の可能性が強いものである。以上の石材は黒色頁岩である。

5-319号土坑 1点出土し、凹石である。2は磨石で、円形状を呈する扁平な円礫を素材とし、表面には浅い凹みが数点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-320号土坑 3点出土し、凹石が1点・石皿が1点・石棒が1点である。7は凹石で、円形状を呈する球状の円礫を素材とし、浅い凹みが表面には多数、裏面には数点看取される。8は大型の石皿で、不整な長方形形状を呈する扁平な円礫を素材とし、機能面は緩く皿状に湾曲している。9は細形の石棒と考えられる破片で、全体的に丁寧に研磨して整形しており、線状の整形痕が看取される。破片であるが幅が狭く細長いような形状で、縦断面は板状に薄く、横断面は隅丸長方形形状を呈し、細形の石棒と考えたが、磨製石斧の可能性もあり検討を要する。以上の石材は7・8が粗粒輝石安山岩、9が緑色片岩である。

5-345号土坑 1点出土し、スクレイパーである。2はスクレイパーとしたもので、横長の形状を呈し、表面には自然面が残り、下端部にあたる側縁に細かな剝離痕が看取される。以上の石材は黒色頁岩である。

5-349号土坑 出土した石器類5点のうち、スクレイパーが1点の他は剥片類である。1はスクレイパーとしたもので、小型である。縦長の剥片を素材とする長方形の平面形を呈し、この上・下端部に細かな剝離痕が看取され、楔形石器とされるものと思われる。以上の石材は黒曜石である。

5-351号土坑 1点出土し、磨製石斧である。2は磨製石斧である。撥形に開く平面形を呈し、全体的に丁寧に研磨して整形しているが、地の面にあたる部分が僅かに残る。また刃部には再調整と思われる連続する

剝離調整が施されている。以上の石材は変玄武岩である。

5-353号土坑 1点出土し、石鏃である。4は凹基無茎鏃で、やや細長いような二等辺三角形の平面形を呈するが、側縁は僅かに弧状に反るような形状が看取される。以上の石材は黒曜石である。

5-357号土坑 出土した石器類10点のうち、石鏃が1点・スクレイパーとしたものが1点の他は剥片類である。4は平基無茎鏃で、二等辺三角形の平面形を呈し、基部も含めた3辺は直線的な形状を呈している。5はスクレイパーとしたもので、小型である。横長の形状を呈し、上・下端部に当たる側縁に剝離痕が看取される。以上の石材は4が珪質頁岩、5が流紋岩である。

5-360号土坑 1点出土し、凹石である。3は凹石で、やや不整な楕円状を呈する扁平な円盤を素材とし、表面の中央に凹みが1点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

5-362号土坑 出土した石器類3点のうち、石鏃が1点・打製石斧が1点の他は剥片類である。3は平基無茎鏃であるが、基部右側に僅かに凹状を呈する部分が看取され、基部左側及び先端部を欠損する。側縁は左側が僅かに弧状に丸みを持つ形状を呈し、右側は直線的であるが上位に括れるような凹部が僅かに看取され、平面形はやや不整な二等辺三角形を呈するものと思われる。4は打製石斧の破片で、刃部付近の側縁部にあたるものと思われ、側縁はやや斜状から弧状の丸みを持ち、撥形を呈するものと思われるが不確定である。以上の石材は3が黒曜石、4が粗粒輝石安山岩である。

5-372号土坑 出土した石器類4点のうち、石鏃が1点の他は剥片類である。3は凹基無茎鏃で、先端が窄まるような細長い二等辺三角形の平面形を呈し、側縁では僅かに弧状に反るような形状が看取される。以上の石材は黒曜石である。

6-20号土坑 1点出土し、打製石斧である。4は打製石斧で、両面に自然面が残り、扁平な円盤を素材として剝離調整を施したのと考えられ、側縁には右側に括れるような凹部が看取されるが全体的には両側縁ともに僅かに斜状に開く形状を呈することから、撥形を呈するものと思われる。また基部は直線的、刃部は緩い弧状の平面形を呈する。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

6-55号土坑 出土した石器類4点のうち、石鏃が1点の他は剥片類である。5は凹基無茎鏃であるが、先端部を欠損する。基部の脚は右側が突出するような不整な形状を呈し、側縁は右側が弧状に膨らむような形状、左側が直線的な形状を呈し、平面形は不整な二等辺三角形を呈するものと思われるが不確定である。以上の石材は黒曜石である。

6-57号土坑 2点出土し、打製石斧が1点・磨石が1点である。6は短冊形を呈する打製石斧で、表面には自然面が残り、基部はやや直線的、刃部は緩い弧状の平面形を呈する。また右側縁は僅かに凹凸のある形状、左側縁は僅かに弧状に反るような形状が看取される。7は磨石で、楕円状を呈する球状の円盤を素材とするが、半面を欠損しており、磨石面には凹みが2点看取される。以上の石材は6が変質安山岩、7が粗粒輝石安山岩である。

6-61号土坑 出土した石器類3点のうち、打製石斧が1点の他は剥片類である。2は打製石斧で、基部側のみで刃部側の半部を欠損している。基部・側縁部ともに直線的な形状であるが、側縁の刃部側には括れるような部分が看取され、刃部側の側縁が弧状に膨らむような形状を呈する撥形の平面形と思われる。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

6-80号土坑 出土した石器類2点のうち、スクレイパーが1点の他は剥片類である。3はスクレイパーとしたもので、横長の形状を呈し、上端部は折れていると思われ、下端部を主に剝離調整が施されている。下端部はやや斜状を呈する直線的な平面形状を呈する。以上の石材は黒色安山岩である。

第4章 検出された遺構・遺物

6-82号土坑 出土した石器類4点のうち、石鏃が1点の他は剥片類である。1は基部を欠損する石鏃で、先端は鈍角で欠損している可能性があり、側縁は僅かに凹凸はあるが直線的な形状で、平面形は二等辺三角形形状を呈するものと思われる。以上の石材は黒曜石である。

6-84号土坑 1点出土し、打製石斧である。1は楕形の打製石斧であるが、左側縁が直線的、右側縁が斜状の形状を呈する。節理による板状の剥片を素材とし、基部は弧状、刃部は斜状の平面形を呈し、表面には使用によると思われる摩滅部が看取される。以上の石材は細粒輝石安山岩である。

6-105号土坑 1点出土し、石棒である。3は石棒であるが、先端から側部を欠損しており、煤状の付着物が看取されることから被熱による剝離と思われる。頭部を持たずに棒状に磨り上げて整形しており、基部側は折れて欠損している。断面は不整な楕円状を呈するものと思われる。以上の石材は凝灰岩の可能性が示唆されている。

7-2号土坑 1点出土し、打製石斧である。1は短冊形を呈する打製石斧で、基部は直線的、刃部は緩い弧状の平面形を呈し、表面には使用によると思われる摩滅部が看取される。以上の石材は細粒輝石安山岩である。

5 遺構外出土遺物

(1) 土器・土製品等

平成8年度までの調査における遺構外からの出土土器は、破片の総点数で約70,000点余りを数える。各区ごとの内訳では、2・3区で約99点、4区で約3,501点、5区で約49,043点、6区で約16,785点、7区(一部6区を含む)で約114点、8区で約19点、9区で約14点、96区で約11点、97区で約11点などである。このように、点数的には5区の台地上からの出土量が圧倒的であり、次いで5区の西側に続く台地縁辺の緩傾斜地にあたる6区、また5区の東側にあたる4区の埋没谷の順となる。これらの傾向として、2・3区では東側に隣接する沢の旧河道部にあたる部分、4区では埋没谷部の包含層中から主体的に出土している。5区では、現道部を挟んで北側、6区では5区に隣接する東側に集中する傾向が看取される。また、層位的にはIV層出土の土器が主体的で、この次にはIII層からの出土数が多く、各時期の土器が混在する状況で層位的な出土土器の傾向等は看取されなかった。これらの土器は小破片が殆どで、時期等の概略は本章第1節で述べており、これらの土器の中から特徴的と思われる資料を図示した。以下、本章第1節の概要でも一部述べているが、類別を含めた分類項目を示し、これに沿って出土土器を各区ごとに観察する。

1期 早期

I群 燃糸文土器

2期 前期

I群 前葉土器(含繊維土器)・II群 後葉土器(諸磯式併行期)

3期 中期

I群 「三原田式」(加曾利E I式)併行期

- 1類 「三原田式」・2類 「焼町類型」・3類 井戸尻式・
4類 勝坂式・5類 浅鉢・6類 その他

II群 加曾利E II式併行期

- 1類 加曾利E II式・
2類 唐草文系(I・II期:加曾利E式との折衷的なものを1種、その他を2種とする。)・
3類 曾利式(I式を1種、II式を2種とする。)・4類 新潟系・5類 大木系・
6類 浅鉢・7類 吊手土器・8類 その他

III群 加曾利E III式併行期

- 1類 加曾利E III式・
2類 唐草文系(III期:加曾利E式との折衷的なものを1種、その他を2種とする。)・
3類 曾利式(III式を1種、IV式を2種とする。)・4類 新潟系・5類 大木系・
6類 浅鉢・7類 その他

IV群 加曾利E IV式併行期

- 1類 加曾利E 4式・2類 信州系(唐草文系IV期・曾利V式系)・
3類 大木系・4類 その他

V群 その他

- 1類 縄文地文割部片・2類 底部

第4章 検出された遺構・遺物

VI群 不明確土器

4期 後期

I群 称名寺I式併行期

- 1類 称名寺I式・2類 称名寺式関沢類型及び関連土器・
3類 加曾利E式系土器・4類 注口土器

II群 称名寺II式併行期

- 1類 称名寺II式・2類 称名寺II式末土器(「茂沢類型」及び関連土器)・
3類 庄痕隆帯文土器・4類 浅鉢(注口土器)・5類 その他

III群 堀之内1式併行期

- 1類 堀之内1式・2類 信州系の堀之内1式・3類 三十稲葉式・
4類 南三十稲葉式及び関連土器・5類 注口土器・6類 その他

IV群 堀之内2式併行期

- 1類 堀之内2式・2類 信州系の堀之内2式・3類 「石神類型」・
4類 在地的な土器・5類 注口土器・6類 その他

V群 加曾利B1式併行期

- 1類 加曾利B1式・2類 注口土器

VI群 加曾利B2式併行期

- 1類 加曾利B2式

VII群 その他

- 1類 粗製等無文土器・2類 注口土器注口部等・3類 底部

VIII群 不明確土器

5期 晩期

I群 変形工地区系

土偶・耳栓・円盤等土製品

時期不明土器

2・3区(第264図:PL125)

1期

I群 1～5が相当し、早期前葉に比定される燃糸文の土器である。

1・5は深鉢の口縁部片、この他は胴部片で、4・5は胎土中に片岩を含む。1は平口縁で、燃糸(R)をやや斜位に施文し、内面には円形の凹みがある。2は燃糸(L)を縦位施文し、3・4は燃糸(R)で3は横位や斜位、4は縦位ないし斜位施文する。5は平口縁で、太めの燃糸(R)を斜位施文する。

2期

I群 6～9が相当し、前期前葉に比定される黒浜式併行と思われる含織維土器である。

6～9は地文に縄文を施文するもので、6は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。6は平口縁で、口端に刺突を施し、原体LRを横位施文する。7・8は原体LRと原体RLの横位施文による羽状縄文を施すが、8は原体LRの縄文が不明瞭である。9は撚りの粗い原体Lないし原体LRを縦位施文する。

II群 10・11が相当し、前期後葉に比定される器礫式併行と考えられる土器である。

10は0段多条の原体 RL を縦位施文し、諸磯 a ないし b 式併行と思われる。11は半截竹管による集合沈線を横位波状や横位に巡らして文様を描出し、諸磯 b 式併行と考えられる。

3期

V群

1類 12が相当し、地文に原体 LR を縦位施文する深鉢の胴部片で、加曾利 E 式と思われるが不確定である。沈線状を呈する部分は破片の接合部である。また上位の割れ口には、輪積み時に施された刻みが看取される。

4期

VI群

1類 13・14が相当し、13は深鉢ないし浅鉢の口縁部片で平口縁と思われ、口端には欠損部があり、横位の撫で・磨き整形である。しかし胎土は石英や雲母を含む粗い要素もある。14は深鉢の胴部片で、上位の割れ口部に断面形が方形状を呈する横位沈線が1条看取される他は、横位の磨き整形が顕著な無文である。以上2点は、諸要素から本期以外の可能性もあり検討を要する。

4区 (第264～270図：PL125～127)

3期

I群

1類 1～9が相当し、半截竹管による平行沈線で文様を描出するもので、1～3は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。

1・2は平口縁、3は口端部を欠損し、1・2は口端下に横位隆帯を1条巡らし、多条の平行沈線間に交互刺突(横位の波状隆線)を段状に施し、1が3条・2が2条看取される。3は円形の突起や刻みを持つ隆帯、また平行沈線の下位に鋸歯状の刻みが看取されるが、剝離部があり不明瞭である。

4～9は地文に縄文や燃糸文を施文後に半截竹管による平行沈線で横位や縦位に区画するものである。

4・5は原体 RL を縦位施文後に横位1段、6は原体 RL を斜位に施文後に横位2段、7は燃糸(L)を縦位施文後に横位2段及び縦位、8は原体 RL を縦位施文後にクランク状の横位1段、9は原体 LR を縦位施文後に縦位に垂下する平行沈線が看取され、9の沈線間は半隆起状を呈する。

2類 10～15が相当し、半截竹管による半隆起状の平行沈線や深い沈線、隆帯などで曲線的な文様を描出するもので、10・11は深鉢の口縁部片、12は剝離した突起部、この他は胴部片である。

10・11は平口縁で、10は口端部を隆帯で肥厚し、横位に多条巡らす平行沈線の下位にはコルク状と思われる突起を持つ。11は上部に円形の凹みを伴う双環状の突起を持ち、平行沈線や交互刺突を施す。12は環状突起片と思われ、孔部に沿って半隆起状の平行沈線、上端部には刻みを施す。

13は弧状に垂下する隆帯の端部に小突起を持ち、平行沈線を隆帯に沿って施す。14は隆帯とこれに沿う沈線で褶曲的な文様を描出する。15は凹状を呈する隆帯を2条単位に懸垂し、斜位の沈線文が看取される。

3類 16が相当し、深鉢の胴部片である。縦位や鋸歯状(波状か)に垂下する隆帯で文様を描出し、隆帯に沿って幅広い浅い沈線を施す。

5類 17・18が相当し、「鼓形」を呈する浅鉢の口縁部片である。

17は交互刺突による横位の波状隆線、刻みを施す隆帯、上部に沈線を沿わせる隆帯、沈線及び刺突・刻みを施す隆帯などで横位の文様帯を区画し、区画内に原体 RL を横位充填する。18は口端部下の括れ部に横位

の波状隆帯を1条巡らす。

6類 19～24が相当し、段階的に古くなる可能性のものを含み、何れも深鉢の胴部片である。

19は蛇行隆帯を垂下して区画し、横位に多条施した棒状工具による沈線間に沿って交互刺突を2列施す。20は2条単位の一部に刻みを施す隆帯で楕円状に区画すると思われ、懸糸(L)を縦位施文する。勝坂式の系統であろうか。21は刻みを持つ斜位の隆帯とこの上位に沿う半截竹管の平行沈線を垂下し、原体RLを縦位施文する。22は刻みを持つ隆帯を懸垂し、地文は横位及び縦位の沈線文を施す。22は半截竹管の併行沈線を弧状に垂下し、地文は原体RLを縦位施文すると思われるが不明瞭で、胎土中に雲母を多量含む。24は地文に半截竹管による平行沈線を縦位に施す。

II群

1類 25～31が相当し、25が深鉢の口縁部片、26・27は無文帯の頸部片、28～31は胴部片である。

25は平口縁で、1条の横位隆帯下に渦巻状突起を弧状に連結する2条単位の隆帯を巡らして区画し、区画内には僅かに縄文が看取される。26は上端を横位隆帯、27は下位を横位沈線で区画する。

28～30は懸垂文で縦位区画して地文に原体LRを縦位施文する縄文を持つもので、懸垂文は28が3条・29が2条単位の隆帯、30が3条単位の沈線により、さらに28は3条単位と思われる沈線、30は蛇行沈線が垂下する。

31は原体RLを縦位施文後に2条単位の沈線で渦巻状と思われる文様を描出する。

2類1種 32が相当し、区画内に沈線文を充填する深鉢の口縁部片である。平口縁で、横位の沈線と隆帯による帯状の区画内に縦位と斜位の短沈線文を充填する。区画文は2段構成をとるものであろうか。

2類2種 33～36が相当し、33は深鉢口縁の把手部片、34は深鉢の口縁部片、35・36は胴部片である。

33は突起部と鈎状の平坦部からなり、突起頂部には沈線による渦巻状文、平坦部には2条単位の沈線を巡らす。外面には順手状や縦位の沈線文、また1～2条単位の隆帯を円状や縦位に垂下する。

34は波状口縁で、口端下を連弧状と思われる横位隆帯で区画し、縦位の短沈線文を充填する。波状部からは上端に貼付文状の円形文を持つ2条単位の隆帯による懸垂文を施して縦位区画する。

35・36は交互刺突による波状の微隆線が見られ、2条単位の隆帯で大柄の渦巻文等の文様を描出し、地文に沈線文を充填するものと思われる。35は横位隆帯を1条巡らして交互刺突を施し、この上位には弧状や渦巻状に垂下する隆帯が看取される。下位には渦巻状の突起を基点に垂下する文様を描出し、さらに突起からはやや太目の隆帯を1条懸垂する。地文は横位隆帯の上位には斜位、下位には重弧状に垂下する沈線文を施す。36は横位弧状に巡らした隆帯の上位に横位の交互刺突を施し、弧状隆帯の下位には1～2条単位の隆帯で文様を描出し、地文には斜位の沈線文を充填する。

3類1種 37が相当し、深鉢の口縁部片である。内湾する器形の口縁部が無文で、頸部に刻みを持つ横位隆帯を1条巡らして区画する。

4類 38が相当し、「初倉類型」に比定されると思われる深鉢の胴部片である。上部に半截竹管の平行沈線を沿せた隆帯を弧状に垂下し、また順手状の沈線を施す小突起などで区画し、刻み状の細い沈線文を斜位に充填する。

6類 39・40が相当し、「鼓形」を呈する浅鉢の口縁部片である。

何れも区画内に沈線文を充填するもので、39は隆帯や沈線で渦巻状文や楕円状の区画文、40は横位沈線を巡らした帯状と思われる区画文を描出し、沈線文は縦位に施す。

7類 41が相当し、吊手部にあたる破片である。上部から側面を隆帯で肥厚して区画し、側面中央には渦巻

状の隆帯文を施し、縦位の短沈線文を施して下位を横位沈線で区画する。

8類 42が相当し、深鉢の頸部片と思われる。捺糸(R)を横位に施文して区画し、この下位は斜位の無で整形による無文である。頸部無文帯に近い要素と思われ本群としたが、さらに検討を要するものである。

III群

1類 43~65が相当し、43~49は深鉢の口縁部片、50~56は深鉢胴部片、57~61は地文に条線文を施すもので、62は地文に刺突文を充填するもの、63~65は両耳壺に大別される。

43~47は低い隆帯や幅広い浅い沈線で渦巻状や楕円状の区画文を描出すると思われるもので、47が波状口縁の他は平口縁である。43は横位隆帯以下の文様帯部を欠損する。44は楕円状の区画内に原体 RL を横位充填する。45は隆帯・46は沈線による渦巻状の区画文内に縄文を持つもので、45は原体 RL を縦位充填すると思われるが剝離しており不明瞭で、46は原体 LR を口端下に横位・区画内に縦位充填する。47は文様帯部を欠損するが、内面にも浅い沈線による渦巻状の文様を施す。

48・49は連続する円形刺突文を巡らす口縁部で、連弧文の系統にあるものと考えられ、何れも平口縁である。48は2条の横位沈線間に沿って1列、49は横位沈線を2条巡らした上位(口端下)に2列施し、下位には48が地文に原体 RL を縦位施文し、49は剝離しており不明瞭である。

50~56のうち、50・51は頸部を画すると思われる横位隆帯の看取されるもの、52~53は沈線による懸垂文で縦区画するもの、55・56は縄文地に横位の弧状沈線を施すものである。50は低い横位隆帯を巡らし、原体 RL を隆帯上には横位、下位には縦位施文し、51は横位隆帯の下位に捺糸(L)を縦位施文するが、隆帯を剝離している。52は原体 RL を縦位施文後に2条単位の磨り消し懸垂文で区画し、53は懸垂文間にU状と思われる区画文を描出して原体 RL を縦位施文後に蛇行沈線を1条垂下し、54は沈線間が微隆起状を呈する4条単位の深い沈線を垂下して区画し、原体 LR を縦位施文する。55・56の地文は何れも原体 RL を縦位施文したもので、沈線は55が2条単位、56が多条施す。

57~61は櫛歯状工具による条線文を施すものを一括し、57が深鉢の口縁部片の他は胴部片である。61が縦位に施す他は波状等の曲線的に垂下して施文し、57は口端下に幅狭の無文部を持ち、58・59は横位隆帯が1条看取され、60は沈線による懸垂文で縦区画する。

62は深鉢の胴部片で、低い隆帯とこれに沿う沈線でU状を上下に相対させたH状の区画文を描出し、区画内に円形の刺突文を充填するもので、縄文を刺突に置き換えた施文と思われる。

63~64は両耳壺の把手部片で、把手上には隆帯をU状に施し、さらに64は渦巻ないし蹼手状部を持ち、65は基部から延びる横位や把手に沿う弧状の隆帯が看取される。

2類1種 66~74が相当し、地文に沈線文を持つもので、66が深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。

66は波状口縁で、波状部に隆帯で渦巻状の単位文を施すが欠損しており、これから横位隆帯を巡らして区画し、斜位や重弧状などの沈線文を施す。

67~74のうち、67・68は隆帯・69・70は沈線による懸垂文、71は蛇行沈線を垂下して縦区画し、72~74は地文のみ看取されるものである。69・71には頸部を画すると思われる横位隆帯が看取され、懸垂文は69が2条単位の他は何れも単位が不確定で、地文は67が縦矢羽状、68・72が綾杉状、69・74が斜位、70が横位の重弧状、71が縦位や斜位、73が斜位や綾杉状に施す。

2類2種 75~88が相当し、75・76が深鉢口縁の把手部片、77が口縁部片、78・79が口縁部ないし頸部片、この他に胴部片である。

75は頂部を肥厚して外傾する形状を呈し、口端に沿って沈線を1条巡らす。頂部からは左右で対になると

思われる交互刺突を弧状に垂下して施すが、左側を欠損しており不明瞭である。76は内面側に罅状の突部を持ち、外面には渦巻状などの曲線的な沈線文が看取されるが、摩耗しており不明瞭である。

77は平口縁で、渦巻状の突起から隆帯を弧状に垂下して区画し、斜位ないし横矢羽状の短沈線文を施す。78・79は刺突や交互刺突を施すもので、78は隆帯とこれに沿う沈線による方形状の文様に沿って連続する円形刺突を施す。79は横位の浅い沈線内に沿って交互刺突を施すもので、刺突文は3列看取される。

80～88のうち、80・81は上端が渦巻ないし蕨手状を呈する隆帯とこれに沿う沈線を懸垂すると思われ、特に81は入り組むような曲線的な文様である。82は渦巻状文と思われる弧状隆帯から2条単位の懸垂文、83・84は同一個体で横位隆帯による区画文から1条単位の隆帯による懸垂文で区画する構成をとり、地文は82が斜位や綾杉状、83・84が斜位に施す。85は2条単位の隆帯による渦巻文の端部で、隆帯間に刻み状の斜位の短沈線文を充填する。86・87は斜位や渦巻ないし蛇行と思われる弧状隆帯を垂下し、地文には86が斜位、87が斜位や縦位の沈線文を施す。88は地文のみが看取されるもので、縦位や横位の沈線文を施す。

5類 89が相当し、所謂「越後大木」とされる系統と思われる深鉢の胴部片である。縄文地に沈線で文様を描出するもので、地文に原体LRを縦位施文後、冑状と思われる区画文間に上端が渦巻状を呈する沈線を垂下する。

IV群

1類 90～99が相当し、90～94が深鉢口縁部片、95～97が深鉢胴部片、98が壺形土器、99は両耳壺に大別される。

90～94は口縁部の文様帯が消失し、93・94が波状口縁の他は何れも平口縁で、90は口端下まで縄文を施すもの、この他は口端下に幅狭な無文帯を持ち、91・92は1条の横位沈線で区画するもの、93は連続する円形刺突文を巡らすもの、94は1条の横位微隆帯で区画するものに大別される。

90は2条単位の沈線で冑状文を描出し、地文に原体Lないし原体LRを口端下には横位、以下には縦位に施文する。91は原体LRを沈線下には横位、以下は縦位施文、92は原体RLを縦位ないし斜位施文し、冑状文と思われる斜位沈線が1条看取される。93・94は内湾する器形を呈し、93は竹管による刺突を2列巡らした下位に原体RLを縦位施文する。94は微隆帯下位に原体LRを縦位施文し、やや弧状に垂下する磨り消し文を施す。

95・96は沈線で冑状などの区画文を描出するもので、95は原体Lを縦位施文後に冑状区画文や蕨手状の沈線を垂下し、96は冑状ないしA状文内に原体RLを縦位充填する。97は微隆帯を懸垂して縦区画し、原体LRを縦位施文する縄文帯と無文帯の構成をとる。

98は壺形土器の口縁部片で、低い隆帯を口縁に沿って弧状を呈する横位や弧状に垂下して曲線的な文様を描出し、横位隆帯下を貫く穿孔を弧状隆帯に沿うように施す。

99は両耳壺の頸部片と思われ、微隆帯で区画した下位に原体LRを縦位施文する。

V群

1類 100が相当し、地文に原体RLを縦位施文する深鉢胴部片で、加曾利E式と思われるが不確定である。

2類 101～103が相当し、101は径9.0cm・102は径6.0cmを測り、無で整形による無文で、101の底面中央には整形時の押圧による凹みが看取される。103は径6.6cmを測り、小型の深鉢と思われる。内湾する器形を呈し、無文で無でや押圧による整形痕が看取される。

VI群

104が相当し、深鉢の胴部片である。半截竹管による細い平行沈線を横位から縦位に懸垂して区画し、区

画内には原体 RL の縦位施文による縄文が僅かに看取される。横位の平行沈線の上位には棒状工具による横位沈線が1条廻り、この上位は無文帯である。中期前葉で五領ヶ台式とも思われたが不確定である。

4期

1群

1類 105～114が相当し、沈線で曲線的な文様を描出し、沈線間の帯状内に縄文帯と無文帯の構成をとるもので、105が深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。

105は平口縁で、横位から弧状に垂下する文様が看取され、原体 LR を充填する。

106～108はJ字状など、109は横位や褶曲する文様、110は縦位のS字状と思われる文様、111では縄文帯内に弧状と斜位に切り合う沈線が看取され、縄文帯は106が原体 RL の他は原体 LR を充填する。

112・113は原体 LR を充填する縄文帯内に沿って連続する円形刺突文を施すもので、112は∩状の縄文帯内に1列、113は1ないし2列と思われるが小破片のため不明確である。

114は刻みを持つ隆帯を1条垂下するもので、沈線間の帯状内には原体 RL を充填する。

2類 115～117が相当し、連続する円形刺突文を施す深鉢の口縁部片である。

116は口端部を欠損するが、この他は波状口縁で、115は横位の微隆帯に沿って2列、116は横位に微隆帯間に2列施し、単位文の一部と思われる弧状沈線が看取される。117は並行する横位沈線間の帯状内に1列充填する。

3類 118～122が相当し、118・119は深鉢の口縁部片、120・121は深鉢の胴部片、122は両耳壺に大別される。

118・119は微隆帯によって口縁部の無文帯を区画するもので、何れも平口縁で直線的にやや外傾する器形と思われる。118は横位に1条廻らし、119は口縁と微隆帯が並行せず、∩状の区画文を描出するものであろうか。微隆帯の下位には何れも原体 LR を縦位ないし斜位施文する。

120も横位微隆帯を1条廻らして無文帯を区画するものと思われ、下位にはA状の沈線文で区画して原体 LR を縦位施文する。121は微隆帯を懸垂して縦位区画し、原体 LR を縦位施文する縄文帯と無文帯の構成をとるが、無文帯の幅が広い。

122は把手部を欠損する胴部の大型片で、把手の基部も含め原体 RL を斜位施文する。

II群

1類 123～125が相当し、以上3点は同一個体と思われる深鉢の胴部片である。並行する3条の沈線で渦巻状等の曲線的な文様を描出して端部に8字状の貼付文を施し、沈線間には原体 LR を充填する。

3類 126～128が相当し、押圧による刻みを施した横位隆帯を1条廻らす深鉢の口縁部片で、127が口端部を欠損する他は平口縁である。

4類 129～132が相当し、口縁の把手・突起部片である。

129は捻転状を呈し、内折する口縁部に沈線で帯状の長楕円状文を施し、把手間を連結すると思われる。内面側には円孔を持ち、これに沿う沈線と円形の貼付文を施す。130は環状を呈し、上端には円形刺突とこの間を繋ぐ短沈線、内面には3点の円形刺突と短沈線を1条施すが、刺突の1点は左下の割れ口部で看取される。131は頂部に円孔を持ち、端部が腕手状を呈する横位沈線を相対して廻らし、内面にも同様の文様を描出する。132は頂部を欠損し、基部に腕手状の沈線文を施す。

III群

1類 133が相当し、深鉢の胴部片で原体 LR を横位施文した縄文地に並行する多条の斜位沈線を垂下する。

2類 134～148が相当し、外反する口縁部が無文、頸部の区画文から下位の胴部が文様帯となり、器形的には「金魚鉢形」を呈する鉢で、134～136が口縁部片、この他は頸部や胴部片である。

134は内面に文様を持ち、円孔下に円形の貼付文を施して並行する横位沈線間に刺突文を充填する。135は口端部を欠損するもので、無文地に3条の隆帯を口状に垂下し、頸部には横位沈線が1条看取される。136は平口縁で、口端に沿って横位沈線を1条巡らす。

137～148は並行する沈線で文様を描出するもので、137～143は胴部に渦巻状文を描出する文様構成と思われるもの、144～148は垂下する文様構成と思われるもので、148を除いて沈線間や区画内に縄文を施文する。

137～139は頸部に並行する沈線を巡らし、渦巻文を介在すると思われる区画内に原体LRを充填する。140～142は渦巻状文が看取されるもので、沈線は142が3条の他は2条単位と思われ、沈線間の帯状内に原体LRを充填する。143は2条単位の並行沈線による区画文間に連鎖状の短沈線文を垂下し、区画内には原体LRを充填する。

144は3条単位の沈線に対弧状文から垂下すると思われ、区画内には原体LRを充填する。146～147は縦位や斜位に垂下する構成で、沈線は147が3条の他は2条単位と思われ、区画内には何れも原体LRを充填する。148は横位から縦位に区画し、対弧状と思われる多条の沈線を垂下する。

3類 149～151が相当し、地文に刺突文を施すもので、149・150が深鉢の口縁部片、151が胴部片である。

149・150は平口縁で、149は微隆帯を横位に1条巡らした下位に細かな爪形刺突文を施す。150は1条の横位沈線や沈線による帯状の長楕円状文を巡らして区画し、区画内に沿って連続する円形刺突文を1～2列充填する。151は細かな爪形刺突文を施す。

5類 152が相当し、深鉢の口縁部片と思われるが不明確で、無文地に刺突状の刻みを持つ隆帯をV状に垂下し、この端部を横位に1条巡らすものに連結する。

IV群

1類 153～169が相当し、153～166は直線的に開く形状の「朝顔形」を呈する深鉢、167～169は胴部が括れて外反する形状の「鐘形」を呈する深鉢に大別される。

153～166のうち、153～159は口縁部片、160～166は胴部片で162は底部まで含み、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものである。

153～159は刻みを持つ細い横位隆帯を巡らすもので、153～157は1条巡らし、153・154は8字状、155は円形の貼付文を持ち、文様を描出する沈線は貼付文下で弧状に褶曲する。また何れも平口縁で、口端部は内折する形状を呈する。158は口端部を欠損し、2条巡らした間に貼付文を施す。159は口端部及び文様帯部を欠損し、1条のみ看取されるものである。文様は153～154が三角形や菱形状、この他は横位に巡る部分が看取され、帯状内には155・156が原体RL、159を除くこの他が原体LRを充填する。

160～166のうち、160～162は三角形や菱形状、163は弧状に垂下する曲線的な文様、164～166は横位に巡る部分が看取され、帯状内には160～164が原体LR、165が原体Lを充填し、166は縄文の看取されないものである。また162は径7.0cm・残存高9.2cmを測り、張り出す器形を呈する。

167～169のうち、167は口縁部片、168・169は同一個体と思われる胴部片である。167は平口縁で、外面は磨き整形による無文で、内面口端下に重状を呈する渦巻状沈線文を施し、下位に2条の横位沈線を巡らして区画する。168・169は横位の長楕円状区画を並列するような曲線的な文様構成で、帯状内には原体LRを充填施文する。

2類 170～172が相当し、口縁部が括れて外反する形状の「金魚鉢形」を呈する鉢で、170が口縁部片、171

は口縁へ胴部的大型片、172は胴部片である。

170は平口縁で、口端に折り返し状の内折部を持ち、外面は撫で・磨き整形による無文で、内面口端下には内折部に円形の貼付文と、これから横位沈線を1条巡らす。171は4V-7グリッドIV層と5区表土から出土した破片が接合したもので、口径19.2cm・残存高12.0cmを図る。平口縁で、内面口端下には円形刺突文を単位にこれを繋ぐ2条の横位沈線を巡らす。外面には刺突(刻み)を持つ隆帯を2条1対で頸部まで垂下し、この単位は3単位と思われる。頸部には沈線で対の隆帯間やこの単位間を連結する横位の帯状区画文、胴部には並行沈線で歯歯状に繋がる三角形の幾何学的な文様を描出し、帯状内には原体LRを充填する。また外面の括れ部には炭化物の付着が明瞭である。172は条線を横位から相対する弧状に垂下して文様を描出する。

3類 173が相当し、寸胴的な器形を呈する深鉢の胴部片で、上位を多条、下位を2条の並行する沈線で区画し、この間や下位に連鎖状に入り組む沈線文を横位や垂下して施す。

5類 174~178が相当し、174が口縁部片の他は胴部片である。

174は平口縁で、口端部が小さく外傾する形状で、並行沈線で曲線的な文様を描出し、沈線間の帯状内に原体LRを充填する。175・176と177・178はそれぞれ同一個体と思われる、前者は並行沈線で渦巻状文を単位に方形状や渦巻状に沿う弧状などの区画文を描出し、原体LRを充填施す。後者は微隆線を横位や弧状に施して区画し、微隆線間に連結する細かい円形刺突文を充填する。この文様帯の下位は撫で整形による無文である。

VII群

1類 179~181が相当し、179・180は深鉢の口縁部片、181は胴部片である。179・180は平口縁で、180は整形痕と思われる擦痕状の斜位の条線が看取される。181は懸垂状を呈する縦位の撫での整形痕が看取され、また整形痕と思われる擦痕状の斜位の条線が見られる。180と同一個体の可能性もあるが不確定である。

2類 182~184が相当し、182は橋状把手片、183・184は注口部片である。182は橋状に沿う縦位の撫でが顕著で、183は基部に沿う沈線が1条看取される。

3類 185~190が相当し、底面に網代底を持つものを一括する。径は185が12.0cm、186が11.2cm、187が13.0cm、188が14.0cm、189が6cm、190が11.0cmを測る。

土製円盤

191~193が相当し、文様は何れも無文で、191が全周、192が約1/2周、193が部分的に研磨を施す。

5区 (第271~306図: PL127~136)

2期

II群 1~3が相当し、前期後葉に比定される諸磯式併行と考えられる土器である。

1~3は半截竹管による集合沈線で文様を描出する深鉢胴部片で、1は横位ないし僅かに羽状、2は段状の横位、3は羽状に施し、1・2は諸磯b式、3は諸磯c式併行と考えられる。

3期

I群

4類 4が相当し、上部が双環状を呈する縦位の紐状突起で、器面から剝離したものである。

6類 5・6が相当し、段階的に古くなる可能性のものを含み、何れも深鉢の胴部片である。

5は刻みを施す横位隆帯を1条巡らし、この上位には隆帯に沿う横位沈線を1条、下位には撫糸(L)を縦

位施文して隆帯に沿う撫でを施す。内面が剝離しており、二次的な被熱によると思われる。6は懸垂する隆帯で区画し、斜位に垂下する4～5条単位の条線文を段状に垂下する。赤く柔らかい質感の胎土で、雲母を多量含む。

II群

1類 7～10が相当し、7～9が深鉢の口縁部片、10が胴部片である。

7は平口縁、8は口端部を欠損し、隆帯やこれに沿う沈線で段状の構成をとる区画文を描出するもので、区画の連結部や区画内には渦巻状の隆帯文を施し、原体 RL を横位充填する。また8には剝離した横位隆帯が1条看取される。9は渦巻状突起を弧状に連結する隆帯を巡らして区画し、区画内には原体 RL の横位充填と思われる縄文が僅かに看取される。隆帯下位には原体 RL を縦位施文する。

10は地文に原体 RL を縦位施文後、渦巻状沈線文を描出してこれから2条単位の沈線文を懸垂する。大木的な要素もあろうか。

2類 1種 11～19が相当し、何れも深鉢の口縁部片で、隆帯やこれに沿う沈線で区画文を描出して区画内に沈線文を充填するもので、11・12は波状口縁、13・14・16・18・19は平口縁と思われるが不確定で、この他は口端部を欠損する。

11～15は2条単位の隆帯で横位ないし連弧状に区画するもので、11は波状部に橋状把手を持ち、これから上位に1条、下位に2条単位の隆帯を巡らして区画する。12は波頂部を欠損し、13・14は同一個体、15は渦巻状文間を連結する構成で、この下位には蛇行沈線が垂下すると思われる。以上の沈線文は斜位や縦位に充填する。16・17は1条の隆帯で連弧状に区画し、縦位の沈線文を充填するもので、渦巻状文を連結する構成と思われる。18・19は1条の隆帯で楕円状に区画し、縦位の沈線文を充填する。

2類 2種 20～25が相当し、20・21は深鉢口縁の把手部片、22は深鉢口縁部片、この他は胴部片である。

20・21は山形に立ち上がる把手で円孔を持ち、20は円孔の上位には胸骨状を呈すると思われる隆帯の突起を施すが下端を欠損し、把手の両側面には渦巻状の沈線文を描出し、これから隆帯突起に沿って2条単位の沈線文を垂下する。円孔から下位には縷杉状を呈すると思われる斜位の沈線文を施す。21は頂部及び円孔から右半部を欠損する。外縁に沿って隆帯を施し、下位には隆帯とこれに沿う沈線による渦巻状文から2条単位と思われる横位隆帯を巡らして区画し、縦位の沈線文を施す。柔らかい質感の胎土で雲母を多量含む。

22は波状口縁で、2条単位の隆帯をやや波状を呈する横位に巡らして区画し、縦位の沈線文を充填し、隆帯下位には斜位の沈線文が看取される。横位隆帯には蕨手状を呈する部分があり、また波状部には渦巻状の隆帯文を持つと思われるが隆帯の一部を剝離する。

23・24は2条単位の隆帯で渦巻状文を描出するもので、23は隆帯間には刻み状の短沈線文、単位文間の空白部には曲線的な横位や縦位の沈線文を充填する。24は渦巻状文から横位に区画する隆帯が看取され、斜位の沈線文を充填する。

25は2条単位の隆帯間に刺突文を1列施し、この上位には横位の波状隆帯を1条巡らし、下位には円形の貼付文から細い隆帯を1条懸垂して縦矢羽状の沈線文を施す。

3類 2種 26・27が相当し、「龍目文」を施す深鉢で、26が口縁部片、27が胴部片である。

26は平口縁で、内面口端下に低い横位隆帯を1条巡らす。外面には半載竹管の平行沈線による斜位の沈線文を施し、沈線間はやや半隆起状を呈する。27は3条単位と思われる隆帯による懸垂文で縦位区画し、さらにこれからU状の隆帯を横位に突出し、縦位の沈線文を施す。

6類 28・29が相当し、「鼓形」を呈する浅鉢の口縁部片である。

28・29は同一個体と思われる、沈線で上下対の渦巻状単位文間に楕円状の区画文を描出し、区画内には原体 RL を横位充填する。

川群

1類 30～103が相当し、30～50は深鉢の口縁部片、51～72は深鉢胴部片で63は底部を含み、73～100は地文に条線文を施すもの、101は壺形土器、102・103は両耳壺に大別される。

30～50は隆帯や低い隆帯・幅広の浅い沈線などで区画文を描出し、区画内に縄文を施文するものであるが、欠損により縄文が看取されないものは可能性を含み、8～33・36・40・41～43・45は平口縁、35・38・44・46・49・50は波状口縁と思われる、この他は口端部を欠損する。

30～38は渦巻状の単位文間に楕円状等の区画文を描出すと思われるもので、30は比較的しっかりした隆帯で区画し、36・37は同一個体と思われる、35・38は渦巻状文を介在するクランク状部が看取されるもので、縄文は30・31・33・34～37が原体 RL を横位や斜位、38が原体 L を羽状に充填し、32は不明瞭で、34・37は胴部に同原体を斜位や縦位に施文する。

39～41は楕円状等の区画文を描出すと思われるもので、39は区画間の下位に円形刺突文を施し、40は撫での浅い沈線のみで方形状と思われる区画文を描出し、41は横位隆帯による区画内に横位沈線を施して段状に画する。縄文は39・41が原体 RL を斜位や横位、40が原体 LR を横位充填し、39は胴部に同原体を縦位施文する。

42～44は渦巻状文内に縄文を持つもので、縄文は何れも原体 RL を斜位や横位に充填する。

45～48は渦巻状文下に区画文が入り組む文様構成と思われるもので、45は渦巻状文内に縄文が看取され、47・48は入り組むクランク状部が看取されるもので、縄文は45・47・48が原体 RL を横位や斜位、46が原体 LR を横位充填する。また48は外面に炭化物が付着する。

49は刻みを持つ横位隆帯とこれに沿う幅広の沈線で区画すると思われるが、隆帯以下の文様部を欠損する。

50は沈線で連弧状と思われる区画文を描出し、原体 LR を横位充填する。

51～72は懸垂文で縦区画するもので、51は低い隆帯で単位不明確なもの、52～55は3条単位の沈線によるもの、56～64は2条単位の沈線によるもの、65～70は沈線で単位不明確なもの、71・72は懸垂文による縦区画内に円状沈線文を描出すものに大別され、71・72を除いて地文に縄文を施し、51・65・66には頸部を区画する低い横位ないし連弧状の隆帯が看取される。

51は隆帯上位に原体 RL を横位施文する縄文が看取され、下位の胴部には縦位施文する。52～55は何れも原体 RL を縦位施文し、55には縦区画内に蛇行沈線を1条垂下する。56～64では、56・60・62・63が原体 LR、この他が原体 RL を縦位施文し、61は縦区画の幅が狭く、64は縦区画内に沈線を1条懸垂する。また63は径5.0cmを測り、内面には煤状と思われる黒色物質の付着が顕著である。65～70では、65が隆帯上位に原体 LR を横位、下位の胴部には縦位施文、66～69が原体 RL を縦位施文し、66は隆帯上位も同様で、68は懸垂する沈線を1条、65は蛇行沈線を1条縦区画内に施す。70は二次比熱により器面が脆く、摩耗しており不明瞭である。

71は2条単位の低い隆帯による懸垂文で縦区画し、72は太い沈線で円状を相対するH状文を描出す。

73～100は櫛歯状工具による条線地文のものを一括し、73・74は深鉢の口縁部片、この他は胴部片で、75は縄文を条線文が切るもの、76・77は連弧文の系統と思われるもの、78～85は沈線による懸垂文や懸垂文状の構成が看取されるもの、86～100は地文のみ看取されるもので86～90が条線の比較的粗いもの、91～100が

密なものに大別される。

73は平口縁で、渦巻状文下に区画文が入り組む文様構成と思われ、区画内には条線文を斜位に充填する。74は低い横位隆帯とこの上位に沿う沈線で頸部を区画し、上位には隆帯で渦巻状文を描出すると思われ、横位に連続する円形刺突文を2列施し、下位の胴部には縦位の条線文を施す。

75は2条単位の沈線による懸垂文で縦区画し、上位には原体 RL を縦位施文する縄文を持ち、これを切るように縦位の条線文を垂下する。

76は2条単位、77は1条の斜位沈線が垂下するもので、連弧文構成の一部と思われ、何れも縦位の状施文を施す。

78～85のうち、懸垂文は78・83が2条単位と思われる他は単位が不明確で、81は懸垂文状の無文帯が看取され、82は縦区画内に蛇行沈線を1条垂下する。条線文は78～81が縦位であるが80には斜位の条線が看取され、82も縦位ではあるが蛇行沈線部には斜位の条線を施す。83～85は波状に垂下して曲線的に施文する。

86～90のうち、86～88は縦位に施文し、87は斜位の条線、88は粘土が付着する部分が看取される。89～90は波状に垂下して曲線的に施文する。91～100は線が細く細かな条線で、91～98が縦位、99が斜位、100が横位から垂下して施文する。なお、91～100については晩期の細密条線の可能性も考えられたが不確定である。

101は壺形土器と考えられる頸部片で、括れ部に横位沈線を1条巡らし、凹状と思われる区画文を描出し、原体 RL を充填し、区画間には渦巻状の沈線文を施す。

102・103は両耳壺の把手片で、把手部には隆帯や幅広の沈線で102が臍手ないしC字状、103がS字状と思われる文様を垂下し、胴部には何れも低い隆帯やこれに沿う沈線で区画文を描出し、102は凹状と思われる曲線的な区画文を描出する。

2類1種 104～128が相当し、地文に沈線文を持つもので、104～112は深鉢の口縁部片、113～127は深鉢胴部片、128は壺形土器に大別される。

104～112のうち、107は波状口縁、110も波状口縁と思われ、111が口端部を欠損する他は平口縁である。

104～107は渦巻状の単位文間に区画文を描出すると思われるもので、104・105は渦巻文を隆帯、区画文を沈線で描出し、104は楕円状の区画内に横矢羽状、105は斜位の沈線文を充填する。106・107は渦巻文の一部が看取される他は下位の文様部を欠損し、また上位の口端までは幅広の無文帯を呈する。

108・109は隆帯で渦巻状の単位文を描出して区画文を持たない構成と思われ、108は単位文下に2条単位の沈線による懸垂文を施して縦区画し、斜位の沈線文を施す。109は隆帯間には刻み状の斜位、この他には横位の沈線文が看取される。

110・111は横位沈線による帯状の区画内に沈線文を充填するもので、区画内には110は横矢羽状文を段状に充填すると思われ、111は縦位に施す。

112は口端部を肥厚して外・内面に段部を持ち、撫で整形による無文で、胎土に雲母を多量含む。前記のような文様を欠落する無文の口縁部と思われる。

113～127のうち、113～117は隆帯・118～120は沈線による懸垂文等で縦区画するもの、121～127は主に地文が看取されるものに大別される。

113・114は2条単位・115は単位不確定な懸垂文、116・117は蛇行隆帯を垂下するもので、113は頸部を画する連弧状と思われる隆帯が看取され、114は懸垂文間にU状の区切り部を持ち、地文は113が縦矢羽ないし綾杉状、114が斜位、115が綾杉状、116は蛇行隆帯を挟んで縦矢羽状を呈する斜位、117は斜位ないし横位の沈線文を施す。

118は3条単位・119は単位不確定な懸垂文、120は縦位の○状沈線文を懸垂状に施して区画するもので、118は頸部を画する連弧状と思われる隆帯が看取され、地文は118が斜位、119が横位の重弧状、120がやや曲線的な横位や斜位の沈線文を施す。

121~127のうち、121・122は縦矢羽ないし緩杉状、123は横位弧状や縦矢羽状、124は斜位の沈線文を施す。125~127は曲線的な沈線文を施すもので、125は頸部を画すると思われる横位隆帯が看取され、この上位には縦位、下位には弧状に垂下する沈線文、126は横位や垂下する弧状沈線文、127は横位の重弧状沈線文を施す。

128は壺形土器の胴部片と思われ、2条単位の低い隆帯による懸垂文で縦区画し、横位の矢羽状沈線文を施す。

2類2種 129~158が相当し、129~131が深鉢口縁の把手部片、132~137が口縁部片、この他に胴部片に大別される。

129は山形を呈する把手で、頂部には隆帯とこれに沿う沈線で渦巻状文を描出する。外面には橋状の突起を付すと思われるが欠損し、この基部の上面と両側面に厥手状の沈線文を施す。内面には2~3条の沈線で垂下する渦巻状文を描出し、この沈線の上端部は厥手状を呈する。130は突起部と頸部の平坦部からなり、突起頂部には沈線による渦巻状文を施し、これから2条単位の隆帯を縦位に垂下して縦位の短沈線文を施し、この下位には隆帯に沿うと思われる横位の弧状沈線が看取される。131は突起状の口縁部片で、渦巻状の隆帯文から横位沈線と横位隆帯を巡らして区画し、縦位の短沈線文を充填し、内面には横位からやや斜位に垂下する隆帯を1条施す。

132~137のうち、133が口端部を欠損し、135が剝離による破片である他は何れも波状口縁と思われる。132~135は隆帯による渦巻状文を単位に区画文を描出する構成と思われるもので、132・133は渦巻状文から2条単位の横位隆帯を巡らし、133はやや弧状を呈すると思われる。134は口端部を隆帯で肥厚して頸部を描出し、135は隆帯文が剝離したものである。

136は渦巻文を上下連結した単位文を波状部に施す構成と思われるもので、楕円状ないし横位弧状と思われる区画文を描出し、縦位の沈線文を充填する。

137は隆帯による懸垂文で縦区画する構成と思われるもので、内面口端下に横位隆帯を1条巡らして頸部の形状を作出する。外面には横位隆帯を1条巡らした下位に上端が渦巻状を呈する隆帯を懸垂して縦区画し、縦位の沈線文を施文後に2条単位の横位沈線で段状に区画する。懸垂文は腕骨状を呈するものであろうか。

138~158のうち、138~141は連続する円形刺突文を施すもの、142~148は渦巻状文を単位に区画文を描出する構成と思われるもの、149~152は隆帯で垂下する大柄の渦巻文を描出するもの、153~158は隆帯による懸垂文等が看取されるものに大別される。

138~141のうち、138は渦巻状文から2条単位の横位隆帯を巡らし、この下位に沿って1列施す。139は弧状を呈する2条単位の横位隆帯の下位に沿って1列施す。140はやや弧状を呈する横位沈線の上位に沿って1列巡らし、横位隆帯からは蛇行すると思われる隆帯を垂下して斜位の沈線文を施す。141は無文帯を画すると思われる横位沈線間に1列充填する。

142~148のうち、142~144は隆帯で比較的大型の渦巻文を描出するもので、142は単位文を挟んで低い隆帯やこれに沿う沈線で楕円状と思われる曲線的な区画文を描出し、区画内には斜位の沈線が看取される。143・144は単位文から横位隆帯が巡り、143はこの下位に横位や垂下する弧状沈線文を施す。144は渦巻状の

隆帯間に刻み状の短沈線文を充填し、横位隆帯の下位には縦位の沈線文を施す。

145・146は渦巻文を上下連結する単位文を持つと思われるもの、147・148は区画文の連結部から曲線的な隆帯を垂下するもので、145・146は単位文から隆帯を横位や懸垂して区画し、145の隆帯は2条単位で区画内に斜位の沈線文を施し、146は単位文部が突起状に高まる。147・148は連弧状の連結部から垂下し、147は上端が渦巻ないしU状を呈する隆帯を垂下し、148は低い隆帯とこれに沿う沈線を煎手状に垂下して区画し、縦位の沈線文を施す。

149は2条単位と思われるが隆帯を剥離し、隆帯間に刻み状の短沈線文を充填する。150は2条単位の隆帯、151は1条の隆帯、152は2条単位と思われる低い隆帯で描出し、地文には150が斜位の細い沈線文、151が横位ないし斜位、152が入り組む斜位(鱗状)の沈線文を施す。

153~156は隆帯による懸垂文、157・158は横位隆帯が看取されるもので、153は2条単位、154は腕骨状を呈する隆帯、155・156はU状を呈する隆帯で縦区画し、地文には153が懸垂文を挟んで菱形状を呈する斜位、154が弧状や縦位、155・156は縦位の沈線文を施し、155は段状に画する2条単位の横位沈線が看取される。157・158は横位隆帯の下位に縦位の沈線文を施す。

3類2種 159が相当し、深鉢の胴部片である。低い隆帯による懸垂文で縦区画し、区画内には歯状工具による刺突文を八字状に施す。

4類 160・161が相当し、波状口縁の波状部に隆帯で渦巻文を描出する深鉢の口縁部片である。

160は渦巻文から口端下に沿う横位隆帯や垂下する隆帯、161は渦巻文から2条単位で垂下する隆帯や沈線で区画し、何れも原体RLを横位充填する。「沖ノ原式」に相当するものであろうか。

6類 162~167が相当し、何れも口縁部片で、162を除いて「鼓形」を呈する器形と思われ、また167以外は文様の看取されないものである。

162は平口縁で、下端の割れ口に円孔が看取される。163~166は平口縁で、括れて外反する器形を呈し、163・164は括れ部に横位隆帯を巡らすか164は剥離している。167は沈線で楕円状の区画文を描出して原体LRを横位充填し、区画間に円形刺突文を施す。

IV群

1類 168~201が相当し、168~187は深鉢の口縁部片、188~195は深鉢胴部片、196~198は壺形土器、199~201は両耳壺に大別される。

168~187は口縁部の文様帯が消失するもので、184が口端部を欠損し、171・174・181・185・186・187が波状口縁、この他は平口縁が主と思われる。168~170は口端下まで細文を施すもの、171~174は口端下の幅狭な無文帯を1条の横位沈線で区画するもの、175~181は連続する刺突文を横位に巡らすもの、182~185は口端下の無文帯を1条の横位微隆帯で区画するもの、186・187は口端部が鋭角な断面を呈するものに大別される。

168・169は原体RLを口端下には横位、以下には縦位施文し、2条単位の沈線による磨り消し文を168はU状、169は渦巻状に施して区画文を描出する。170は横位沈線を1条巡らし、この上位も含め地文に原体RLを縦位施文する。

171は原体RLを沈線下位に横位、以下に縦位施文し、2条単位の沈線でU状と思われる区画文を描出する。172は沈線下位に幅広い沈線で方形の区画文を描出すると思われ、この間には原体LRを横位充填する。173は沈線下位をU状の沈線文で区画して原体LRを縦位充填する。174は沈線下位をA状の沈線文で区画して原体LRを横位や縦位充填する。

175は幅広の浅い横位沈線上に沿って円形刺突文を1列巡らし、この下位には原体LRを縦位施文する。176は2条の横位沈線間に沿って円形刺突文を1列充填する。177～179は横位沈線を1条巡らした上位(口端下)に沿って円形や刻み状の爪形刺突文を1列施すもので、沈線下位には177が2条単位の沈線で冑状の区画文を描出して原体RLを横位や縦位施文し、178は原体RLを横位施文し、冑状と思われる沈線が僅かに看取される。179は刺突及び横位沈線の他は無文地である。180は横位隆帯を1条巡らした上位に沿って円形刺突を1列施し、隆帯の下位には縦位に垂下する隆帯と原体LRの横位施文と思われる縄文が僅かに看取される。181は口端下に2列の円形刺突文を巡らし、この下位には沈線で冑状の区画文を描出すると思われ、原体RLを横位施文する。

182～185は内湾する器形を呈し、微隆帯の下位には182が原体RLを横位、183が隆帯下に横位、以下に縦位、184が原体LRを縦位施文し、184には横位隆帯から懸垂すると思われる隆帯の一部が僅かに看取される。185は沈線で曲線的な文様を描出すると思われ、弧状や斜位に垂下する沈線が看取される。

186は原体LRを横位沈線下に横位、以下に縦位施文し、187はやや内折する形状で口端下に無文帯を持ち、この下位には冑状に懸垂すると思われる沈線で区画し、原体LRを横位施文する。以上の2点は4期I群まで下る可能性を含む。

188～195は沈線や磨り消しなどで冑状等の曲線的な区画文を描出するもので、188は冑状の区画内に原体RLを縦位充填する。189は冑状を相対するH状の区画文で、原体RLを縦位充填すると思われる。190は二次的な被熱により脆く摩耗しており、弧状沈線と原体LRを思われる縄文が僅かに看取される。191はやや先が尖るように垂下するU状沈線で区画し、原体RLを縦位施文する。192・193は2条単位の沈線で区画文を描出するもので、192は冑状ないし蹠手状に区画して原体LRを充填し、193は上部を欠損するが浅い横位沈線が看取され、原体RLを沈線下には横位、以下には縦位施文し、冑状の磨り消し文で区画する。194はやや弧状を呈する横位沈線や冑状と思われる弧状に垂下する沈線で区画し、原体RLを縦位施文する。195は地文に原体LRを縦位施文後、撫でによる磨り消し文をやや弧状を呈する縦位に垂下し、冑状文の一部と思われる。

196～198のうち、196が口縁部片、この他に胴部片である。196は口縁部に橋状把手を持ち、この上下の両基部から横位隆帯を巡らして帯状に区画する。197・198は微隆帯で文様を描出するもので、197は2条単位の渦巻状文を描出すると思われ、隆帯間には赤色塗彩が顕著である。198は流線状を呈する横位の曲線的な文様を描出する。

199～201は両耳壺の把手部片である。199は把手上部を欠損し、胴部に原体LRを縦位施文する。200・201は把手上に原体LRを施文する。

2類 202～207が相当し、雨垂れ状の短沈線文を施す深鉢の胴部片である。202は横位隆帯下に沈線文を施し、203は横位や横位弧状の沈線間に施文する。204・205は沈線による懸垂文間に施文し、206・207は地文のみ看取されるものである。

V群

2類 208～214が相当し、このうち214は台付の脚部片である。径は208が径9.0cm、209が6.0cm、210が8.0cm、211が8.6cm、212が8.0cm、213が7.5cmを測り、208は懸垂する沈線が3条看取され、器面が脆く二次的な被熱によると思われる。209には懸垂文と思われる縦位沈線が看取される。底面には210で傷状の短沈線、211で短沈線が数条看取され、213は外縁が高まり、中央が凹む形状を呈する。

214は2条単位の沈線を懸垂文状に施し、内面には炭化物が付着する。

VI群

215・216が相当し、段階的に古くなる可能性を含む深鉢の胴部片である。215は浅い横位沈線を2条巡らした沈線間に刻みを充填し、この下位に沿って連続する方形の刺突文を1列施す。216は沈線による楕円状と思われる区画内に横位沈線を1条充填し、阿玉台式な構成とも思われるが不明確である。

4期

1群

1類 217～228が相当し、沈線で曲線的な文様を描出し、沈線間の帯状内が縄文帯と無文帯の構成をとるので、217～228は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

217～228のうち、217・223・226・227が波状口縁、この他は平口縁が主と思われる。217は波頂部を区画して垂下する凹状沈線文を施し、この下位には渦巻状部を持つ横位の帯状区画文を描出し、波頂部を含む凹状沈線文及び帯状の区画内には原体LRを充填する。218・219は渦巻状に巻き込む部分を持つ文様を描出し、原体LRを充填する。220～228は横位から斜位・縦位に垂下してJ字状等の文様を描出すると思われ、このうち222・223・224・227は垂下する部分で縄文帯が分離する構成をとり、227は口端に沿って横位沈線を1条巡らし、228は弧状の褶曲部を持つ横位沈線で帯状に区画する。縄文帯は224・226が原体RL、228が原体Lないし原体LR、この他が原体LRを充填する。

229～234はJ字状や蕨手状などの曲線的な文様部が看取されるもので、このうち229は把手を持つと思われるが基部を残して欠損し、この下位には相対する蕨手状文や曲線的な区画文を描出する。縄文帯は229・233が原体RL、この他が原体LRを充填する。235～240は弧状に垂下する文様部が看取されるもので、このうち235は弧状に看取される区画文部に対して無文帯が幅広の構成をとる。縄文帯は何れも原体LRを充填する。241～247はJ字状や鉸状文と思われる構成が看取されるものであるが、このうち241・242は横位から垂下する文様部、247は斜位に垂下する文様部が看取されるものである。縄文帯は245・247が原体RL、この他が原体LRを充填する。248～250は縄文帯間に沈線に沿うもので、248は斜位や凹状、249は縦位に垂下、250は斜位の沈線が看取され、縄文帯間に入り組む帯状の区画文の一部と思われ、縄文帯は何れも原体LRを充填する。251～253は横位の文様部が看取されるもので、このうち251は横位の区画内に沿って楕円状の沈線文を並列するような文様構成と思われ、文様帯の下位にも横位沈線を1条巡らし、外面に炭化物の付着が看取される。縄文帯は何れも原体LRを充填する。

254は縄文帯に沿って連続する刺突文を施すもので、凹状に看取される曲線的な区画文に沿って円形刺突文を1列施し、縄文帯は原体LRを充填する。

2類 255～270が相当し、255～260が突起を持つ深鉢口縁部片、261～264が口縁部片、265～270が胴部片に大別される。

255～260は波状口縁の波状部に突起を施すもので、突起は255～259が8字状、260がJ字状を呈するものと思われるが、255～257・259は頂部を欠損し、258は頂部を含めて8字状を呈するものである。

255は円形突起が看取され、これから口縁に沿う横位の隆帯を1条巡らし、この上位に沿って波状部から連続する円形刺突文を1列施す。突起からは2条単位の微隆帯を弧状に垂下して原体LRを施文する。256は円形突起と口縁に沿って連続すると思われる円形刺突文が看取される他は欠損する。257はの字状の突起から2条の微隆帯を横位に巡らした帯状内に沿って連続する円形刺突文を2列施し、この上位にも円形刺突文が看取される。258は頂部と波頂部から垂下する円形突起を組ませて8字状を描出し、突起上に沿って沈線を施す。突起からは口縁に沿う2条の横位沈線を巡らし、この帯状内に沿って連続する円形刺突文を1列

充填する。259は突起上に円形刺突文や部分的に沿う沈線を施し、これから2条の沈線と1条の微隆帯を口縁に沿う横位に巡らす。微隆帯下位には刺突文が看取され、突起下位には原体Lを斜位施文する。260は頂部に巻上がるような渦巻状突起と、これから垂下するJ字状ないし縦位の長楕円状突起を付し、突起上には沈線と曲部に円形刺突を施す。また突起からは横位に延びる微隆帯が1条看取される。

261~264は何れも波状口縁で、261~263は口縁に沿って連続する円形刺突文を施すもの、264は微隆帯で文様を描出するものである。261は2列、262は微隆帯の上位に1列と下位に2列の計3列が看取される。263は口端部が内折する形状を呈し、波頂部から刻みを持つ隆帯を1条垂下するが、上端部では隆帯上に沈線を施す。内折部には2条の横位沈線を巡らした帯状内に刺突文を1列充填し、この下位は横位沈線や隆帯に沿う沈線で区画して原体LRを縦位充填する。264は波状部JないしC字状と思われる文様を描出し、この上端には円形の貼付文を付し、原体RLを横位や縦位施文する。

265~270のうち、265~267は連続する刺突文を施すもの、268は刻み(刺突)を持つ隆帯で文様を描出するもの、269は微隆帯による区画文を持つもの、270は沈線で単位的な大形文を持つ区画文を描出するものに大別される。

265は円形の貼付文を施し、この下位に沈線で入り組むような曲線的な文様を描出し、沈線間の帯状内に円形刺突文を1列充填する。266は2条の横位微隆帯を巡らした帯状内に沿って円形刺突文を2列施し、267は2列と思われる円形刺突文をやや斜位に垂下する。

268は隆帯で渦巻状文を描出し、この端部には刻み、また横位沈線との結部と思われる部分には円形刺突を施す。

269は頸部を画する1条の横位微隆帯と、口縁部から垂下する2条の微隆帯との結部に円形貼付文を施し、この下位には沈線で渦巻状の曲線的な帯状区画文を描出して原体RLを充填する。

270は円形状と思われる曲線的な単位文を挟む区画文の端部と思われ、区画内には原体LRを充填する。

3類 271~287が相当し、何れも深鉢で271~276が口縁部の無文帯を区画して地文を持つもの、277~286が微隆帯で区画するが地文を持たないもの、287が沈線で文様を区画するものに大別される。

271~276のうち、271~274は1条の横位微隆帯で区画するもの、275・276は連鎖状の刻みを持つ横位隆帯を1条巡らして区画するものである。271~274のうち、273が平口縁の他は口端部を欠損し、直線のや外傾する器形を呈するもので、272の微隆帯はやや弧状を呈する。微隆帯の下位には271・272が原体LRを縦位施文し、273は微隆帯を横位から斜位に垂下して区画し、原体Lを充填する縄文帯と無文帯の構成をとり、微隆帯の結部に円形の貼付文を施す。274は微隆帯の下位に櫛歯状工具による密な条線文を縦位施文する。275は刻みを持つ隆帯の下位に原体LRを横位施文し、276は横位から懸垂する微隆帯とこれに沿う沈線で縦区画し、原体RLを充填する。

277~286のうち、277は口縁~胴部の大型片、278~281は口縁部片、282~286は胴部片に大別される。277~281のうち、280・281が口端部を欠損する他は平口縁で、277・278は口縁部に巡る1条の横位隆帯が看取される。279~281は横位から懸垂する構成で、この結部に円形の貼付文を施す。282は斜位及び弧状に垂下する結部に円形貼付文を施し、283は縦位、284・285は弧状、286は斜位に垂下する微隆帯が看取される。

287は胴部片で、横位から斜位に垂下する帯状の区画内に原体LRを充填する。

4類 288が相当し、注口部を欠損する口縁部片で、刻みを持つ隆帯とこの両側に沿って沈線を垂下した帯状内に原体LRを充填する。

II群

1類 289～308が相当し、289～293が深鉢口縁の把手・突起部片、294が口縁部片、295～308が胴部片に大別される。

289～293のうち、289・290は波頂部から垂下する橋状把手を持つものである。289は橋状部の右側上位に押圧によるM字状の断面形を呈する単位を持ち、沈線で∩状などの曲線的な文様を描出し、原体 RL を充填する。また∩状沈線上には円形刺突を1点施し、また∩状文を切る縦状沈線が1条看取される。290は内面側に円孔を持ち、把手基部から横位隆帯を1条巡らす。291は剥離したもので、渦巻状に巻き込む形状に沿って沈線を1条施し、沈線内に列点文を1列充填する。292・293は三角形を呈する突起を施すもので、292は太い沈線を沿わせて切り込むようなハ字状下に三角形の単位を持ち、この頂部や基部・内面に円形刺突を施す。293は口端に横位の8字状を呈する円形刺突から横位沈線を1条巡らし、外・内面にも円形刺突や貼付文を施す。

294は平口縁で、沈線で曲線的な文様を描出して縄文帯を持たないもので、横位から垂下する文様部が看取される。

295～308のうち、295～303は沈線で曲線的な文様を描出して縄文帯を持たないもの、304は縄文帯を持つもの、305～308は沈線間の帯状内に連続する刺突文を充填するものに大別される。

295～303のうち、295～297は垂下する弧状の文様部、298～300はJ字状や銚状など褶曲的な文様部、301は縦位や弧状に垂下する文様部、302は横位の文様部が看取されるものである。303は刻みを持つ隆帯を1条垂下し、弧状に垂下する文様部が看取される。

304は直線的に垂下する懸垂状の文様構成と思われ、縄文帯は原体 LR を充填する。

305～308のうち、305は曲線的な沈線間全てに円形刺突文を1列充填する。306は横位の沈線間に円形刺突文を1列充填する。307は連鎖状の刺突文を1列充填し、308は斜位に垂下する沈線と円形刺突文が3列看取される。

2類 309～325が相当し、309～315が突起の看取される深鉢の口縁部片、316～319が口縁部片、320～325が頸部や胴部片に大別される。

309～315は波状口縁の波状部に突起や貼付文が看取されるもので、309は口端部が内折する形状で、この波頂部両側には円形刺突文と、これから横位沈線を1条巡らす。波頂部からはJ字状の貼付文を垂下し、この下位は横位や斜位に垂下する沈線で区画すると思われ、原体 LR を横位施文する。310は端部に円形刺突を伴うC字状の貼付文を施し、内面には円形刺突が1点看取される。311～313は環状の突起を持つもので、311は環状部を上段として8字状を呈する貼付文を施すと思われ、これから横位隆帯を1条と、この上位に沿う横位沈線を1条巡らす。また横位沈線の端部には円形貼付文を施す。312は外・内面ともに円孔左側に沿うC字状の貼付文を施し、貼付文には外面が上・下端、内面が下端に円形刺突文を伴う。313は環状の頂部片で、円孔に沿って上位に沈線を沿わせるC字状と思われる貼付文を施す。314は円孔上位に沿う弧状沈線を1条と基部に円形刺突文を施し、これから横位沈線を1条巡らす。内面には基部に円形刺突文を2点施す。315は環状部を欠損するが、基部に円形刺突文を施し、下位には沈線で曲線的な文様を描出すると思われ、横位の弧状沈線が看取される。

316～319のうち、316は波状口縁の波状部に突起を持つものであるが突起部を欠損し、この他は平口縁を呈する。316は波状部の基部に円形の刺突や貼付文を施し、口端下に沿って横位沈線を1条巡らす。括れる頸部には8字状の貼付文から横位沈線を1条巡らす。317も8字状貼付文、318は縦位部を伴う円形貼付文を頸部に施して並行する2条の横位沈線を巡らす。317は貼付文下で垂下する沈線が看取される。319は口端

下に円形の刺突文や斜位の短沈線を施し、この下位の内折する括れ部には剥離痕が看取される。

320～325のうち、320は無文地の頸部に貼付文を施すもの、321～325は比較的太く彫りの深い並行沈線で区画文を描出して縄文を充填するものに大別される。320は結部に円形刺突を持ち、上位に沈線に沿わせる8字状の貼付文と思われるが上半部を欠損する。321は8字状・322は不明確な貼付文を持つ区画文を描出し、区画内には何れも原体LRを充填する。323・324は蕨手状ないし渦巻状に巻き込む文様部、325はA状に垂下する三角形の文様部が看取され、縄文は323・325が原体RL、324が原体LRを充填する。

3類 326～341が相当し、押圧や刺突による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす深鉢の口縁部片で、331・333・334・336が口端部を欠損し、341が波状口縁、328も口縁と隆帯が平行せず波状口縁と思われる他は平口縁と思われる。

326～341のうち、326～333は押圧が比較的大きめのもの、334～336が比較的小きめのもの、337・338は爪形の刻みを施すもの、339は連鎖状の刻みを施すものに大別され、332は口端が外傾するような形状を呈する。340は連鎖状の刻みを施すものであるが、口端が大きく外反する形状を呈する。341は爪形の刻みを施すものであるが、波状口縁に沿って隆帯を巡らし、この波状部には円形の単位文を施す。

4類 342～362が相当し、342～344が口縁の把手部片、この他は口縁部片に大別される。

342～344のうち、342は捻転状を呈するもので、内面側に円孔を持ち、この上位に突起状の高まりが看取される。343・344は舌状を呈するが344は頂部を欠損し、343は波状部を粘土で肥厚し、沈線で帯状の長楕円状文を口縁に沿って横位に巡らすと思われ、区画内に沿う沈線を1条充填する。内面には波頂部から垂下するJないし蕨手状の微隆帯文を施し、端部に円形の貼付文を持つ。344は側面左側にU状の沈線文、右側に円形刺突文が看取される。

345～362のうち、345～351は区画内に縄文を充填するもの、352は沈線間に刻みを施すもの、353～356は沈線で区画して充填文を持たないもの、357～360は単位文が看取されるもの、361・362は無文のものに大別される。

345～351のうち、345は微隆帯で区画するもの、346～348は沈線で区画するもの、349～351は連続する刺突文を持つものに大別される。345はU状に垂下する区画内に原体RLを充填し、区画文の頂部には円形刺突を施す。346は波状部下の小円孔を挟むV状沈線文を単位に帯状の長楕円状文を横位に巡らし、原体LRを横位充填する。内面には口端下に円形刺突と横位沈線を1条施す。347は蕨手状部を持つ横位の帯状区画文、348は連鎖状の刻みを持つ横位隆帯を1条巡らした上位に袋状を呈する横位の長楕円状区画文を描出し、縄文は何れも原体LRを充填する。349は原体LRを充填した横位の縄文帯内に沿って連続する円形刺突文を1列施す。350は楕円状と思われる区画を描出する沈線上や区画に沿って円形刺突文を1列施し、区画内には原体RLを充填する。351は浅い横位沈線上に沿って円形刺突文を1列施して帯状の区画文を描出すると思われ、区画内には原体RLを充填する。

352は並行する2条の横位沈線を巡らした帯状内に刻みを施す。

353～356は単位文間を横位の帯状区画文で連結する構成と思われるもので、353は円形貼付文から上位に沈線に沿わせるJないしC字状貼付文を単位文とし、354・355は同一個体と思われ、円形刺突文を沈線で囲む同心円状文を単位文とする。356は細い沈線による帯状部が看取される。

357～360のうち、357は円形刺突を沈線で囲む同心円状の単位文と並行する2条の横位沈線が看取され、358は同心円状ないし渦巻状の沈線文と思われ、縦位の弧状沈線や僅かに横位沈線が看取される。359は2点の円形刺突文とこれから弧状に垂下する沈線が看取される。360は内折する口端部を欠損するが、渦巻状な

いし同心円状と思われる単位文や円形刺突文・横位沈線が看取され、この下位は無文である。

361は無で整形による無文の口縁部が幅広く内折する形状を呈し、362は口端部が幅狭に内折する形状で横位の磨き整形が顕著な無文である。

田群

1類 363が相当し、縄文地に並行沈線で文様を描出する深鉢口縁部片である。平口縁で、原体LRを縦位施文後に横位から斜位に垂下する並行沈線を施す。

2類 364～508が相当し、364～493は口縁部が括れて外反する形状の「金魚鉢形」を呈する鉢、494～501は胴部が括れて外反する形状の「鐘形」などを呈する深鉢、502～508は内湾する形状の「碗形」を呈する鉢に大別される。

364～493のうち、364～407は口縁部片、408～493は頸部や胴部片に大別される。

364～407では、364～366は突起状の単位を持つもの、367～375は刺突文や貼付文などを施すもの、376～383は小捻転状を呈するようなC字状ないし弧状に微隆起する単位部を持つもの、384～391は口端部が内折する形状を主として単位文に貼付文や重渦巻状などの沈線を施すもの、392～396は口端部に刻みを施すもの、397～402は無文の口縁(口頸)部に隆帯を垂下するもの、403は無文の口縁(口頸)部に沈線を持つもの、404～406は口端部の横位沈線が看取されるもの、407は内折する口端部を欠損するものに大別される。

364は波状部に橋状の小突起を持ち、把手上には頂部の円形刺突文から沈線を1条垂下する。また内面側には円孔を持つ。365・366は波状部が小環状を呈し、365は円孔に沿って浅い沈線を施し、この下位には弧状に垂下する微隆帯や横位沈線などで文様を描出し、366は外・内面ともに円孔上位に円形刺突を施し、外面にはさらに押圧状の円形刺突文を施す。

367～373の口端部は外傾、374・375は括れて外反する形状を呈する。367・368は貼付文状の円形刺突文を施し、この下位には367で並行するような浅い2条の横位沈線、368で縦位や横位沈線が看取される。369は円形刺突文を囲む渦巻状沈線文や円形貼付文を施し、これから横位沈線を1条巡らす。この下位には並行してやや弧状に垂下する2条の微隆帯が看取される。370は円形の刺突文から並行する2条の横位沈線を巡らす。371は波状頂部の円形貼付文と繋がる8字状貼付文を施して幅広の横位沈線を1条巡らし、沈線の端部には円形刺突を伴う。372～374は口端に刺突や貼付文を施すもので、372は円形の貼付文と横位に並ぶ2点の円形刺突文を施し、さらに横位沈線を1条施す。373は平位の8字状貼付文と横位沈線を1条施し、この下位には弧状ないし斜位に垂下する沈線を施す。374は渦巻状の沈線文と横位沈線を1条施し、この端部に刺突を伴う。外反する括れ部の下位には原体LRを横位施文する。375は横位隆帯を巡らした下位に∩状の沈線文を描出して原体RLを縦位充填し、さらに円形刺突文を施す。

376～379の口端部は外傾、380～383はやや内折する形状を呈する。376・377は同一個体と思われ、376は波状部の捻転状を呈する部分に円孔を持ち、377は口端部を欠損する。378も波状部の捻転状を呈する部分に小円孔を持ち、これから横位沈線を1条巡らして端部に刺突を伴う。また内面にも浅い横位沈線を1条巡らす。379は円形の押圧を施して捻転状部を作り出し、これから浅い横位沈線を1条巡らす。380・381は端部に刺突を伴う横位沈線を1条巡らし、この沈線間が積み上げたような捻転状の単位を呈する。また380は内面にも横位沈線を1条巡らす。382は円形刺突文と、これから端部に刺突を伴う横位沈線を1条巡らし、この間が捻転状に高まる。383は波状部に円形刺突から短沈線を垂下する単位文と円形刺突を施して捻転状に高まり、刺突から横位沈線を1条巡らす。

384～387の口端は内折、388・389は外傾、390・391は僅かに内折する形状を呈する。384は波状部にやや

弧状を呈する8字状の貼付文を施す。385～387は波状部に重渦巻状の沈線文を施すもので、このうち387にはさらに円形刺突文と沈線区画内に円形刺突が看取される。388・389は円形刺突を中心に同心円状の沈線文を施すもので、このうち389は内面に施す。390は細い沈線で横位のJ字状や重弧状文を施す。391は波状部の重弧状文から端部に円形刺突を伴う横位沈線を1条巡らす。

392・393の口端は内折、394・395は僅かに内折、396は外傾する形状を呈する。392・393は波状部の重弧状沈線文から端部に円形刺突を伴う横位沈線を1条巡らし、この下位に刻みを施す。394・395は横位沈線を1条巡らし、横位沈線の下位に沿う連鎖状の刺突文と貼付文下に弧状沈線が看取される。396も横位沈線を1条巡らし下位に刻みを施すものであるが、細い沈線で刻みも細かい。

397～402は何れも外傾する器形を呈するが、400・401は僅かに内折する形状とも思われる。397～401は刻みを持つ隆帯を1条垂下するもので、397は波状部に機状突起を持ち、この左側面と下位に円形刺突を施す。398は隆帯の上端に円形刺突を施し、浅い横位沈線を1条巡らす。また内面口端下には円形貼付文を施す。399は波状部の円形貼付文から隆帯を垂下し、内面口端下には円形貼付文を施す。400は波状部に横位の弧状短沈線文を施し、これを単位に端部に刺突を伴う横位沈線を1条巡らす。401は平位の8字状貼付文から端部に刺突を伴う横位沈線を1条巡らして下位に刻みを施す。402は波状部に円形貼付文を施し、この下位から刻みを持たない扁平な低い隆帯を垂下する。また貼付文からは横位沈線を1条巡らし、内面口端下には円形の貼付文を施す。

403は3条の並行する沈線をやや弧状を呈する縦位に垂下する。

404の口端はやや内折、405は内折、406は外傾する形状を呈し、口端部に1条の横位沈線が看取される。407は外反する頸部に横位沈線が看取される。

408～423は頸部片で、408・409は貼付文を施すもの、410～412は刺突文を施すもの、413は連鎖状の刻みを持つ横位隆帯を巡らすもの、414～421は横位の並行沈線を巡らすもの、422は沈線文を施すもの、423は頸部の明瞭な区画文を持たないものに大別される。

408は上下左右に竹管による円形刺突を施す突起状の貼付文を付し、これから細い横位沈線を1条巡らす。409は貼付文を剝離するが、貼付文下に沿って弧状に垂下する沈線を施し、原体LRを横位施文する。

410～412は竹管による円形刺突文を連続して施すもので、410は円形刺突を沈線で囲む同心円状文から並行する横位沈線を巡らした帯状内に沿って1列充填し、この下位には原体LRを横位施文する。411は並行する幅状な横位沈線間に1列充填し、この下位には並行沈線で三角形の文様を描出する。412は円形刺突を施す隆帯を1条懸垂し、また頸部には同様の刺突文を横位に1列巡らし、隆帯を挟んでやや対弧状に垂下する沈線文を施す。

413は連鎖状の横位隆帯を1条巡らして区画し、この下位には原体LRを横位施文する。

414～421のうち、414～417は2～3条単位の並行沈線を横位に巡らして頸部を区画し、胴部には並行沈線で渦巻状の単位文を描出すると思われるもので、何れも横位から斜位や弧状に垂下する並行沈線が看取され、414は垂下する沈線間・415は横位沈線間の帯状内に原体LRを充填し、また415は横位と垂下する並行沈線の結部に押圧状の円形刺突文を施し、416・417は縄文の看取されないものである。418～421は頸部を画する横位沈線が看取されるもので、418・419は並行沈線間の帯状内に縄文を充填すると思われるもの、420・421は2条単位と思われる並行沈線下に縄文を施すもので、縄文は418・421が原体LR、419が原体LRの細縄文、420が原体Lを施文する。

422は重弧状文や端部に円形刺突を伴う横位の弧状沈線文を施す。

423は頸部の明瞭な区画文を持たずに胴部の文様を描出するもので、沈線で方形の区画内に渦巻状文を描出する構成と思われる。

424～493の胴部片は並行する沈線で文様を描出するもので、424～456が渦巻状文を描出する文様構成と思われるもの、457～493が垂下する文様構成と思われるものに大別され、さらに前者では424～443が区画内や沈線間に縄文を持つもの、444～456が縄文の看取されないもの、後者では457～485が縄文を持つもの、486～493が縄文の看取されないものに区分される。

424～443のうち、424～427は渦巻状文や対弧状の曲線的な単位文が看取されるもので、424は渦巻状文を持つ区画内に原体 LR を充填する。425は区画文の上部が貼付文を対弧状に挟む構成と思われ、区画内には原体 LR を充填し、貼付文は8字状と思われるが上半が欠損する。426は区画内に横位から垂下する渦巻文を持ち、この上位には横位沈線による帯状の区画が看取され、頸部を画するものと思われる。帯状内や区画内には原体 L の細縄文を充填し、渦巻文の基部には円形の刺突文を施す。427は三角形状と思われる区画文間(連結部下)に渦巻状文を描出し、原体 LR を充填する。また区画文の上端(連結)部には円形刺突文が看取される。

428～433は渦巻状文を介在すると思われる区画文部が看取されるもので、428・429は横位から斜位に垂下して三角形の区画文を描出すると思われ、垂下する並行沈線は428が2条・429が3条単位で、428には渦巻状文の端部と思われる弧状沈線が看取され、縄文は428が原体 RL、429が原体 LR を充填する。なお428の沈線は比較のため影が深く、本期Ⅱ群2類とすべきものであろうか。430は三角形の小区画文内に原体 LR を充填する。431・432は横位から弧状に垂下する2条単位の並行沈線、433は斜位に垂下する3条単位の並行沈線が看取され、区画内には何れも原体 LR を充填する。

434～439は渦巻状文部と思われる曲線的な文様が看取されるもので、434・435は2条単位の並行沈線による渦巻状文の端部と思われ、区画内には原体 LR を充填する。436・437は渦巻状に垂下する2条単位の並行沈線が看取され、沈線間の帯状内には436が原体 L・437が原体 LR を充填する。438・439は3条単位と思われる並行沈線を弧状に垂下する文様部が看取され、438は区画内・439は沈線間の帯状内に原体 LR を充填する。

440～443は区画文の下端部と思われる文様部が看取されるもので、440・441は2条単位の並行沈線でU状ないしV状の区画文を描出して原体 LR を充填し、440には区画内に蛇行沈線を1条垂下し、また渦巻状文の端部と思われる弧状沈線が看取される。442は斜位に垂下する並行沈線間の帯状内に原体 LR を充填し、区画文ないし区画文を斜位連結する文様の一部と思われる。443は2条単位の並行沈線を横位に巡らして区画し、この上位の区画内に原体 LR を充填する。

444～456のうち、444～446は渦巻状文を介在すると思われる区画文が看取されるもので、444は渦巻状文と思われる弧状沈線が垂下し、区画内には横位の長楕円状ないし流線的な沈線文を施す。445・446は3条単位の並行沈線を横位から斜位に垂下して三角形の区画文を描出する。

447～456は渦巻状文部の曲線的な文様が看取されるもので、447～450は2条単位の並行沈線で文様を描出し、447は渦巻状ないし円形文と思われる横位の弧状沈線が看取される。448～450は区画文の上部が渦巻状ないし円形の単位文を対弧状に挟む構成と思われ、このうち448の区画内には磨り消された不明瞭な縄文が僅かに看取され、縄文は原体 LR を充填したものと思われる。また449には懸垂する沈線が看取される。451は弧状に垂下する3条単位の並行沈線が看取される。

452~456は渦巻状文を介する区画文の下端部が看取されるもので、452・453は2条単位の並行沈線で文様を描出し、渦巻状文の下端を連結すると思われる横位の並行沈線を巡らす、453の渦巻状文部は僅かに弧状沈線が看取されるのみで上部を欠損する。454は渦巻状文の上・下位を挟むように並行する横位沈線を巡らして帯状に区画する。455・456は重渦巻状ないし同心円状の単位文間を帯状の長楕円状区画文で横位に連結する構成と思われ、455の区画文は2条単位の並行沈線で区画内に刻みを充填し、456は区画文の端部と思われる弧状沈線が僅かに看取される。

457~485のうち、457~462は渦巻状や重弧状の曲線的な単位を持って垂下する構成のもので、457は頸部を画する横位沈線が看取され、この下位に渦巻状から懸垂する沈線や弧状に垂下する沈線を施して区画し、原体LRを充填する。また懸垂する沈線間には連鎖状の刺突文を1列充填する。458~460は渦巻状の単位に連結する沈線が看取され、458は斜位・459は横位や縦位に垂下・460は横位に繋がる沈線で区画し、458・459が原体LR、460が原体RLの細縄文を充填する。461は頸部を画する横位沈線の下位に重弧状と思われる弧状沈線や斜位に垂下する沈線を施して区画し、原体LRを充填する。462は3条単位の並行沈線を懸垂するが、斜位から懸垂する単位の折部に重弧状文を施し、縦区画内には原体RLを充填する。

463~470は斜位や弧状に垂下する並行沈線が看取されるもので、463・463は4条単位の斜位に垂下し、463は縦位に垂下する沈線が看取される。465は5条単位・466は4条単位でA状、467は2~5条看取され交差する斜位、468は2条看取され斜位ないし弧状、469は3条単位で斜位や弧状、470は2条看取され弧状に垂下し、区画内の縄文は463・464・467・469が原体LR、465・468が原体RLを充填し、466は原体LRと思われるが、二次的な被熱により摩耗するため不明確である。

471は懸垂する沈線で区画して3条単位の並行沈線を縦位の連鎖状に垂下するもので、区画内には原体LRを充填する。

472~477は懸垂する構成のもので、472は2条単位、473・474は3条単位、475は4条単位の並行沈線を懸垂し、このうち472の沈線は太めで粗く、縦区画内には472・475が原体LR、473が原体LRの細縄文、474が原体RLを充填する。476・477は懸垂するH状の区画文を描出するもので、帯状を呈する区画内には476が原体LR、477が原体RLを充填する。また477はH状内の無文部に懸垂する沈線を1条充填し、区切れ部には2点単位の円形刺突文を横位に並べて施す。

478~484は懸垂及び斜位に垂下する並行沈線を繋げて三角形に区画すると思われるもので、並行沈線は478が3条単位、478~481が4条単位、482~484が3~4条看取され、縄文は何れも原体LRを充填するが、483・484は僅かに看取される不明瞭なものである。

485は刻みを持つ隆帯を1条垂下するもので、縄文は原体RLを縦位施文する。

486・487は渦巻状や重弧状の曲線的な単位を持って垂下するもので、486は渦巻状ないし対弧状文から垂下し、上位に2点、垂下する沈線の端部に1点の円形刺突文を施す。487は頸部を画する2条単位の並行沈線から3条看取される並行沈線を懸垂し、さらに上端に重弧状部を持つ2条単位の並行沈線を懸垂する。

488・489は斜位に垂下する並行沈線が看取されるもので、488は3条単位の並行沈線を横位から斜位に垂下し、さらに交差する斜位方向へ垂下して区画文を描出する。489は4条看取される並行沈線を斜位に垂下し、拓影図はないが内面にも2条の斜位沈線が看取される。

490は懸垂する沈線で区画して並行沈線を縦位の連鎖状に垂下するもので、懸垂する沈線は2条単位、垂下する沈線は2条及び3条の単位が看取される。

491・492は蛇行状ないし流線状を呈する曲線的な文様を描出するもので、491は器面が脆く摩耗しており

二次的な被熱によると思われる、492は2条単位の並行沈線を懸垂して区画し、曲線文を施す。

493は連続する円形刺突文を縦位に1列垂下するもので、上位には垂下する斜位沈線が僅かに看取される。

494～501のうち、494は口縁の突起部片、495は口縁部片、この他は胴部片に大別される。

494は波状口縁の波状部が山形を呈し、この頂部には押圧による凹部を持ち、外面には刻みを持つ隆帯をV状に施す。

495は平口縁で、口端下から2条単位の並行沈線を懸垂して区画し、区画内には原体LRを充填する。

496～501のうち、496～499は貼付文を持つもの、500は渦巻状の曲線文を描出するもの、501が流線的な曲線文を描出するものに大別される。

496～499のうち、496・497は8字状、498・499は円形状の貼付文を施すもので、前者は区画内に縄文を持ち、後者は縄文が看取されないものである。496は貼付文から横位沈線を巡らして区画し、下位には原体LRを横位ないし斜位施文する。497は貼付文から2条単位の並行沈線を縦位や斜位に垂下して区画し、米字状の構成を呈するものと思われる、区画内には原体RLを充填する。498は2～3条単位と思われる並行沈線を横位から八字状に垂下し、この結部に貼付文を施す。499は3条単位の並行沈線で文様を描出するもので、貼付文から横位に巡らして区画し、この端部はU状を呈する。貼付文の上位にはU状、下位には八字状に垂下し、曲線的な部分を持つが米字状に類する構成を呈すると思われる。

500は2条単位の並行する沈線で垂下する渦巻状文を描出する。501は懸垂する沈線で区画し、2条単位の沈線で蛇行状ないし流線状を呈する曲線文を描出する。

502～508は口縁部片で、504が口端部を欠損する他は何れも平口縁である。502～506は区画内や沈線間に縄文を持ち、502～504は微隆帯による区画文や刺突文・貼付文を持つもの、505は沈線文を施すもの、506は並行沈線で区画文を描出するものに大別され、507・508は縄文が看取されないもので並行沈線で文様を描出する。

502は微隆帯で渦巻状の単位文と、沈線でこれを挟むような区画文を描出し、区画内に原体RLを充填する。また渦巻状文の上部には円形刺突文を施す。503は2条単位の並行沈線で横位から垂下する渦巻状文を描出して上部に円形の貼付文を施し、沈線間の帯状内には原体LRを横位施文したと思われる縄文が僅かに看取されるが不明確である。504は上位に沈線を沿わせる微隆帯で渦巻状文を描出して区画し、原体LRを充填する。

505は沈線で重状の渦巻状文を描出して区画し、原体RLを充填する。この外・内面には赤色塗彩が認められる。

506は渦巻状の単位文を千鳥掛け状に連結する横位の文様帯を描出し、区画内に原体LRを充填し、単位文の上部には円形刺突文を伴う。

507・508は横位沈線を巡らした下位に文様を描出し、507は横位から渦巻状に巻き込む文様、508は重渦巻状ないし同心円状の沈線文を施す。

3類 509～529が相当し、主に地文に刺突文を施すものや蓋があり、509・510は深鉢の口縁部片、511～528は胴部片、529は蓋に大別される。

509・510は平口縁で、509は外反する括れ部(頸部)に連鎖状の刻みを持つ横位隆帯を1条巡らす。510は橋状の突起を持ち、橋状部には8字状の貼付文を施す。突起からは刺突を施す微隆帯を横位と縦位に1条施して区画し、円形刺突文を施すが、僅かに原体LRを縦位施文したと思われる縄文が看取され、別類ないし別群の可能性を含む。

511~528のうち、511~513は頸部を画すると思われる横位の隆帯・沈線が看取されるもの、514~518は棒状工具による粒状などの刺突を施すもの、519~521は先が櫛歯状を呈する工具による刺突を施すもの、522~528は爪形状の刺突を施すものに大別される。

511は横位隆帯の上下に沿って櫛歯状を呈する工具による刺突文を施し、512は横位微隆帯とこれに沿う沈線、513は微隆帯が僅かに看取され、隆帯上を含む以下に細かな爪形刺突文を密に施す。

514の刺突は縦位に並列するように整然と施し、515は縦や横方向、516・517は横方向の刺突で、518の刺突は雨垂れ状を呈する。

519~521の刺突は比較的深く、519は密、520は粗な刺突と思われ、521は横方向からの刺突を施す。

522は「返し」が看取されるもので、523~528は密に施し、このうち524~527の刺突は細かなもので、528は爪形としたが施文的には篋状工具による細かな刺突である。

529は蓋の破片で、推定径は10.6cmを測り、全体に磨き整形が顕著な無文で小円孔が1点看取される。

4類 530~553が相当し、530~540は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

530~540は何れも平口縁と思われ、530~533は口端部に刻みを施すもの、534~538は口端部に横位沈線を1条巡らすもの、539は細かな沈線文を施すもの、540は内面に文様を持つものに大別される。

530・531は内折する形状を呈する口端部に横位沈線を1条巡らし、これを挟んで横矢羽状を呈する刻みを施す。この下位には並行沈線で三角形の区画文を描出すると思われ、沈線間や区画内に原体LRを充填する。532・533は口端部が僅かに内折する形状を呈し、内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。外面には口端下に532が刻み、533が1条の横位沈線とこの下位に刻みを施し、この下位には532が3条単位の並行沈線を懸垂した縦区画内に縦矢羽状、533が斜位の沈線文を施す。

534~538は横位沈線を巡らした下位に並行沈線で文様を描出し、斜位や懸垂して三角形などの区画文を描出すると思われるもので、このうち534~536は区画内や沈線間に縄文を持つもの、537・538は縄文の看取されないものである。534は3条単位と思われる斜位の並行沈線、535は三角形の区画文の上部が看取され、536は懸垂する沈線間を斜位に連結する構成と思われる。縄文は534が原体RL、535が原体R、536は原体LRを充填する。537は斜位の並行沈線、538は懸垂する並行沈線及び僅かに斜位沈線が看取され、沈線の単位は537が3条、538が2条看取される。

539は横位沈線を1条巡らし、これから並行する多条の沈線を八字状に垂下する。

540は内面に曲線的な形状を呈する重状の沈線文を描出し、外面は磨き整形による無文である。

541~553のうち、541~545は並行沈線で文様を描出するもの、546~551は沈線文や条線文を施すもの、552・553は連続する刺突や刻み状の短沈線文を施すものに大別される。

541は押圧状の円形刺突文下に並行する沈線を多条懸垂し、この上位端から横位沈線を巡らすと思われ、沈線間を含む区画内には原体LRを縦位充填する。また外面には炭化物が付着する。542は懸垂する沈線から繋がる斜位沈線を垂下して区画し、三角形の区画文の端部と思われ、区画内には原体LRを充填する。543・544は同一個体と思われ、3条単位の並行沈線を斜位に垂下して区画し、単位間の帯状内に原体RLの細縄文を充填する。545は2条単位の並行沈線で三角形の区画文を描出し、縄文の看取されないものである。

546~549は懸垂する沈線間の縦区画内に沈線文を施すもので、546は1条懸垂する区画内に斜位や縦形状の短沈線文を施す。547は3条単位の並行沈線を懸垂し、548・549の懸垂する沈線は単位不明確で、区画内には547・548が斜位の沈線文、549が重状を呈する同心円状の沈線文を施す。550は2条単位の並行沈線で蛇

行状ないし流線状に垂下する曲線文を施す。551は櫛歯状工具による条線で木状の文様を描出し、粗製土器と思われる。

552は斜位に垂下してややV状を呈する並行沈線の区画内に原体LRを充填し、さらに連鎖状と思われる短沈線文を1列垂下する。553は3条単位の並行沈線を斜位に垂下する区画内に円形刺突文を1列垂下する。

5類 554～561が相当し、554・555が口縁の把手部片、556・557が口縁部片、558～561が胴部片に大別される。

554・555は橋状把手であるが、554は橋状部・555は頂部を欠損し、554は無で・磨き整形が顕著で、555は上下の基部から横位の微隆帯を1条巡らす。

556は平口縁で橋状の突起を持ち、口端下に横位沈線を1条巡らす。突起上位には円形刺突と側縁に沿う沈線を施し、下位には基部から横位の微隆帯を1条巡らし、並行する微隆帯で蕨手状などの曲線的な文様を描出する。557は把手部を欠損するが基部両側に円形刺突を施し、外反する括れ部から把手下位に沿う沈線を巡らし、この曲部に円形刺突を施す。またこの下位には横位沈線が僅かに看取される。

558～561のうち、561が沈線の他は微隆帯を施すものである。558は横位微隆帯の下位に並行する微隆帯で渦巻状文を描出すると思われ、横位との結部に円形貼付文を施す。559は並行する微隆帯で渦巻状の曲線文を描出し、この下位には横位微隆帯を1条巡らして面する。560は括れる頸部に横位微隆帯を1条巡らし、この下位には垂下する沈線が僅かに看取される。561は横位の並行沈線に連結する巖位の弧状沈線が看取され、渦巻状の単位文を横位に連結する2条単位の並行沈線を巡らす構成と思われる。

IV群

1類 562～752が相当し、562～748は直線的に開く形状の「朝顔形」を呈する深鉢、749～751は胴部が括れて外反する形状の「鐘形」を呈する深鉢、752が浅鉢に大別される。

562～748のうち、562～667が口縁部片、668～748が胴部片で748は底部まで含み、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものを主体とする。

562～667では、562～570が貼付文などの装飾が看取されないもの、571が貼付文の看取されるもの、572～641が刻みを持つ細い横位隆帯を巡らすもの、642・643が刻みを持たない細い横位隆帯を巡らすもの、644～664が口端部や内面に突起や貼付文・沈線文などを施すもの、665～667は特徴的な縄文帯を持つものに大別される。

562～570は平口縁で、横位に巡る縄文帯が看取されるもので、このうち569・570は細い沈線で口端下に幅狭に巡らす。縄文は562が原体L、この他が原体LRを充填する。

571は平口縁で8字状の貼付文を持ち、横位から貼付文下で弧状に垂下する曲線的な文様を描出し、帯状内に原体LRを充填する。

572～594は刻みを持つ横位隆帯を1条巡らすもので、572～577は貼付文の看取されるもの、578～589は隆帯のみが看取されるものに大別される。さらに前者では572～575は帯状内が縄文帯をなすもの、576・577は縄文の看取されないもの、後者では578～589が縄文帯をなすもの、590～594が縄文の看取されないものに区分される。

572～577は平口縁で、576が円形の他は8字状の貼付文を持ち、574・575を除いて文様を描出する沈線が貼付文下で弧状に褶曲する。文様は横位に巡る部分や三角形の区画文が看取され、縄文帯は細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

578～594は平口縁で、このうち587・589・591～594などは刻みが細かく、587は隆帯上位の口縁部が幅広

で、588は横位隆帯下に並行する沈線を巡らして帯状の区画を描出する。文様は横位に巡る部分や三角形形状の区画文が看取され、586には区画内に充填される沈線が看取され、592は弧状の褶曲部が看取されることから貼付文部を欠損するものと思われる。縄文帯をなすものは細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

595～612は刻みを持つ横位隆帯を2条巡らすもので、595は上位の隆帯・596～606は隆帯間に8字状の貼付文を持つもの、607～612は隆帯のみが看取されるものに大別される。さらに前者では596～604は帯状内が縄文帯をなすもの、605・606は縄文の看取されないもの、595は縄文・無文が不確定なもの、後者では607～611が縄文帯をなすもの、612が縄文の看取されないものに区分される。

595～606では、597・598・605が波状口縁の他は平口縁で、595はやや幅広の間隔で巡る上位の隆帯に貼付文が看取され、これが下位の隆帯に繋がる多段の貼付文であるかは欠損するため不明確である。また文様部は横位沈線が僅かに看取されるのみである。596～601は隆帯間を連結する8字状を呈するが、601は貼付文の上半を欠損する。602～606の貼付文は8字状の中心にも単位を持つ3段構成を呈するものである。文様は横位に巡る部分や区画文の上部が看取されるものが主で、このうち596は連弧状を呈する横位の半円状区画文を描出し、604は貼付文下に弧状の褶曲部を持ち、605・606は楕円状区画文を横位に並列する構成と思われる。縄文帯をなすものは何れも原体LRの細縄文を充填する。

607～612は平口縁で、このうち611・612は特に刻みが細かく、文様部は611で横位から弧状に垂下する曲線的な文様が看取される他は横位に巡る部分で、縄文帯をなすものは細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

613～615は刻みを持つ横位隆帯を多条の単位で巡らすもので、615が口端部を欠損する他は平口縁で、613が3条、614・615は5条の隆帯が看取され、刻みが特に細かく、614は接合はないが同一個体の2点を合わせて図示し、615は縦位に連続する多段の円形貼付文を施し、4段まで看取される。

616～641は刻みを持つ横位隆帯の単位が不明確なもので、616～628は文様部を欠損するもの、629～639は口端部を欠損するもの、640・641は横位隆帯部のみ看取されるものである。

616～619は1条看取されるもので、何れも平口縁で、このうち616は3段の8字状貼付文を持ち、また補修孔と思われる円孔が看取される。620～628は2条看取されるもので、何れも平口縁である。このうち621～622は同一個体と思われ、621で隆帯間に施すと思われる貼付文が看取される。623～625は隆帯間に8字状貼付文を持ち、特に625は8字状を重ねた4段構成を呈すると思われる。626～628は隆帯のみ看取されるものである。

629～635は1条看取されるもので、629～632は8字状と思われる貼付文の看取されるもの、633～635は隆帯のみ看取されるものである。このうち632は波状に巡る頂部に貼付文が看取され、633の隆帯は上端の割れ口部で僅かに看取され、634は横位から斜位への屈折部を持つ。文様は635が縄文を持たない他は帯状内が縄文帯をなし、横位に巡る部分や三角形形状の区画文が看取され、このうち629は貼付文下に褶曲部を持ち、631・632は区画内に沈線を充填し、縄文帯をなすものは細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

636～639は2条看取されるもので、636～638は隆帯間に8字状貼付文を持つもの、639は隆帯のみが看取されるもので、貼付文は何れも3段構成と思われる。文様は638が縄文を持たない他は帯状内が縄文帯をなし、横位に巡る部分や三角形形状の区画文が看取され、縄文帯をなすものは細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

640・641は口端及び文様部ともに欠損するもので、640が1条、641が2条看取される。

642・643は平口縁で、642は1条、643は幅広の間隔で2条看取される細い横位隆帯を巡らし、642は隆帯

下で三角形の区画文を描出する帯状内に原体LRの細縄文を充填する。

644・645は口端に貼付文や突起状の単位を持つもので、644は平位の8字状貼付文と刻みを施し、横位に2段巡らす帯状内に太・細を撚り合わせた原体LRを充填し、内面口端下には浅い横位沈線帯を1条巡らす。645は折り返し状の内折部が突起状に高まり、口縁部には刻みを持つ横位隆帯を1条巡らして突起下に8字状貼付文を施し、この下位には三角形の区画文を描出して貼付文下に褶曲部を持つ。

646～648は平口縁で、646・647は内面口端下、648は口端に刻みを施すもので、646は幅狭に並行する2条の横位沈線帯を巡らして刻み部を画し、外面には刻みを持つ横位隆帯を1条巡らした下位に三角形の区画文が看取される。647は口端下の刻み部を1条の横位沈線帯で画し、さらにこの下位には幅狭な横位沈線帯間の帯状内に刻みを充填し、刻み部が段状に並行する構成を呈する。648は口端に刻みを持つ他は無文である。

649～653は口端や内面口端下に沈線や貼付文などの文様を施し、外面には刻みを持つ細い横位隆帯を巡らすもので、649は突起状に高まる部分の内面に横位の楕円状沈線文や円形刺突文を施し、外面には8字状貼付文を持つ横位隆帯を1条巡らした下位に横位の帯状区画文を描出し、さらに区画内の上位に横位の弧状沈線帯を施して区画し、原体LRを充填する。650・651は8字状貼付文を持つ横位隆帯が1条看取され、内面には650が円形刺突文を横位に2点とこの上位の口端に刻み状の短沈線帯を施し、651は円形貼付文と長楕円状と思われる沈線帯を施す。652・653は明瞭な波状口縁で、652は波頂部両側面の円形刺突から口端に沿って沈線帯を施し、外面には横位隆帯が1条看取される。653は口縁に沿って2条の横位隆帯を巡らし、波状部下に8字状の貼付文を施すが、この上位は小円孔である。内面には波頂部側面に円形や8字状と思われる貼付文を施し、小円孔も貼付文状に高まる。

654～658は波状口縁の波状部が突起状を呈し、突起部や内面に沈線や貼付文を施すものである。654は頂部内面に円形刺突やこれに沿う沈線帯を施す突起を伏し、この基部には円形貼付文を施す。外面には斜位に垂下する沈線帯や原体LRの細縄文を充填する横位の文様部が僅かに看取される。655は波頂部側面に球状の小突起とこの基部に沿う沈線帯を施す。外面には頂部下に円形の貼付文を施す。656は頂部に平位の円形貼付文を施し、波状部には楕円状と円形の孔部を持つ円孔部は割れ口で看取され、楕円状や重丸状・弧状沈線文を孔部上位や孔部に沿って施す。内面には孔部間に円形刺突を施す。657は平坦な頂部側面に細い沈線帯で渦巻状文を描出し、波状部には円孔を持つ。内面には突起基部から円孔下に沿って並行する2条の横位沈線帯を巡らす。658は平坦な頂部に細い沈線帯で渦巻状文を描出し、側面には円形刺突、波状部には円孔を持つ。この下位には横位に巡る文様部が看取され、内面には円形の貼付文を施す。

659～662は波状口縁の波状部内面に沈線文を施すもので、659は折り返し状の内折部を持ち、幅狭な並行沈線帯で横位の楕円状文を描出する。660～662は重丸の渦巻状文を施すもので、660・661は同一個体と思われる、円形刺突を中心に渦巻状文を描出し、外面には660で垂下する刻みを持つ細い隆帯が1条と円孔が1点看取されるが、661は剣刺が著しい。662は円孔を中心に描出し、外面にも渦巻状文を施す。

663は平口縁で、外面には刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、内面には横位に巡る微隆起状部に原体LRを細縄文を横位施文する。664は平口縁で、外面には口端下に横位沈線帯を1条と、この下位には刻みを持つ細い隆帯が斜位に看取され、内面には口端下の微隆起状部に横位沈線帯を1条巡らす。

665・666は平口縁で、クランク状部を持って幅狭に並行する横位沈線帯を665が3条、666が多条巡らし、帯状内には原体LRの細縄文を充填する。667は波状口縁と思われ、刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らした下位に原体RLを横位施文し、これを切る並行沈線帯を横位に巡らす。内面口端下には幅狭に並行する横位沈線帯を巡らす。

668～748の胴部片は、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものを主とし、このうち668～699は三角形や菱形の文様が看取されるもの、700は方形と思われる文様が看取されるもの、701～710は曲線的な文様が看取されるもの、711～727は区画内に沈線を充填する文様が看取されるもの、728～741は文様が部分的に看取されるもの、742～744は沈線のみで縄文帯の看取されないもの、745～748は前記以外の文様が看取されるものに大別される。

668～699は細縄文を含め何れも原体LRを充填する縄文帯を持ち、668～685で三角形、686～699で菱形の区画文帯が看取される。前者のうちでは668～670は扁平的な区画文帯と思われ、675は割れ口部で三角形を構成する斜位沈線が看取され、677～679は区画内にさらに三角形文様を描出する重状構成を呈し、680・681は幅広い縄文帯を呈し、682～684は幅狭な縄文帯ではあるが区画内に縄文を充填すると思われ、684・685では屈折部や弧状に至むような沈線が看取される。後者のうちでは686～690は同一個体と思われ、686・691・692は菱形が繋がるX状部が看取され、695・696は区画内にも描出する重状構成を呈すると思われ、686・687・698は区画内に縄文を充填する部分が見取され、この点では686以下の同一個体も重状の文様構成を呈すると思われる。

700は方形と思われる区画文の端部が見取され、区画内に原体LRを充填する。

701～710は細縄文を含め何れも原体LRを充填する縄文帯を持ち、701・702は横位の連弧状に巡らして半円状の区画文を描出し、702は上下で相対する構成と思われ、701は沈線間の帯状内、702は半円状の区画内に縄文を充填する。703～706は渦巻状文を描出する構成と思われ、706では渦巻状と思われ、弧状単位から垂下する斜位沈線が看取され、単位文を斜位連結する構成を呈するものであろうか。707は渦巻状文を段状に描出する構成と思われ、708は曲線文の端部と思われ、弧状沈線が看取される。709・710は弧状に垂下する文様部が見取されるもので、709は区画内、710は沈線間の帯状内に縄文を充填する。

711～727では縄文帯をなす区画文帯が見取されるものと、沈線文のみが見取されるものがあり、前者の縄文帯は細縄文を含め何れも原体LRを充填する。看取される沈線文は711は横位、712・713は縄文帯に沿う斜位で三角形や菱形と思われ、714は斜位、715・716は縦矢羽状であるが716は横位から斜位へ屈折するように施し、717～719は三角形やこれを相対して菱形を構成すると思われ、720～723は菱形であるが720は横位を呈する上半部を主とし、723は菱形内に縦位沈線や僅かに看取される横位沈線を充填する。724は方形、725・726は対弧状の区画文内に沿って充填し、727は鍵穴状を呈する曲線的な沈線文を描出する。

728～741は細縄文を含め740が原体RLの他は原体LRを充填する縄文帯を持ち、728～730が斜位、731～741が横位に巡る文様部が見取されるもので、前者では728は区画内に縄文を充填するものと思われ、730は段状を呈し、重状の文様構成と思われる。後者では731で補修孔と思われる円孔、732で円形の凹部が見取され、穿孔途中の補修孔であろうか。また735・736は段状に巡らし、特に735は上端の割れ口にも横位沈線が見取され、737は横位の縄文帯下に沿う横位沈線が1条看取され、741は横位沈線がやや弧状に褶曲する。

742～744は三角形の区画文帯が見取され、このうち742は割れ口部で三角形を構成する斜位沈線が見取される。

745～748のうち、745・746は幅狭な並行沈線で文様を描出するもので、745は横位に巡らした下位にクラック状を呈する区画文を描出する部分が見取され、沈線間には原体LRの細縄文と思われる縄文が僅かに看取されるが不明瞭である。746は3条単位の並行沈線を横位に巡らす部分が見取される。747は横位に巡らす

帯状内に沿って櫛歯状工具によると思われる条線文を充填する。748は小型の深鉢底部で径4.0cmを測り、クランク状部を持つと思われる横位の帯状内に原体LRを充填し、底面に網代痕を持つ。上位の割れ口部を再調整した可能性があるが不確定である。

749～751は括れ部やこれに近い部分の胴部片で、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出し、帯状内は原体LRの細縄文を充填する縄文帯をなす。749・750は三角形状、751は横位に巡る文様部が看取されるもので、749は内面に並行する横位沈線を持ち、整形痕とも思われるが不明確である。

752は波状を呈する浅鉢の口縁部片で、頂部に球状の突起を持ち、この基部には8字状に繋がる3点の円形貼付文を施し、この中央には円形刺突を伴う。外面は左上から右下へ垂下する斜位の撫で整形が顕著な無文で、内面には波頂下に微隆帯を横位の重弧状に施し、この基部や下端中央に円形の貼付文を施す。

2類 753～779が相当し、753～778は口縁部が括れて外反する形状の「金魚鉢形」を呈する鉢、779は内湾する形状の「椀形」を呈する鉢に大別される。

753～778のうち、753～765が口縁部片、766～778が頸部や胴部片である。

753～765では、753は外面に微隆帯を施すもの、754～763は内面口端下に渦巻状文や刺突・貼付文・口縁に沿う横位沈線などを施すもの、764は口端に刻みを施すもの、765は外面口端下に横位沈線を施すものに大別される。

753は3単位の波状口縁で、口径14.0cm・最大径16.0cm・残存高5.8cmを測る。幅狭の口縁部が外反し、口端部は僅かに内折する器形を呈し、波状部下の頸部から懸垂する隆帯と、頸部に沿う横位隆帯を各1条施し、この結部に円形刺突文を施す。

754～763のうち、754～756は渦巻状文が看取されるもので、754は波頂部の渦巻状突起から3条の横位沈線を巡らし、外面の波頂部にも刺突痕が看取され、突起によるものであろうか。755は3条の横位沈線から垂下する渦巻状沈線文を施し、756は波状部の重渦巻状沈線文から横位沈線を巡らすと思われ、波状部の基部にあたる口端には刻みを施し、重渦巻状文の下位には横位沈線を1条巡らして面する。757～759は刺突や貼付文の看取されるもので、757は波状部に円形刺突を挟む対弧状の短沈線文を施し、これから延びる横位沈線が1条僅かに看取される。758は波状部の円孔が貼付文状を呈し、この下位に沿って弧状に褶曲する横位沈線を1条巡らす。759は折り返し状の内折部に円形の貼付文を施し、これから横位沈線を1条巡らす。760～763は横位沈線部のみが看取されるもので、760・761は2条、762・763は1条巡らし、760の外面には凹部が1点看取され、穿孔途中のものであろうか。

764は口端に刻みを施し、内面口端下に細い横位沈線を1条巡らす。765は口端が僅かに内折する形状を呈し、この内折部に横位沈線を1条巡らす。

766～778のうち、766～772は刻みを持つ細い隆帯の看取される頸部片である。766～770では垂下する隆帯が1条看取され、766は隆帯に沿う沈線を施し、767は斜位に垂下すると思われる。768は垂下する隆帯の下端が頸部の8字状貼付文に繋がり、貼付文の上位を結部として右側のみ横位隆帯を1条巡らす。769は1条、770は2条の横位隆帯を頸部に巡らし、垂下する隆帯との結部には円形貼付文を施す。この下位には769で沈線による三角形状と思われる区画文様が看取される。771・772は頸部に巡る隆帯が看取されるもので、771は1条巡らして8字状の貼付文を持ち、772は2条巡らす。

773～778は並行沈線で文様を描出す胴部片であるが、773～777は刻みを持つ細い横位隆帯による頸部区画が看取されるもので、773が1条の他は2条巡らす。また774・776は隆帯間に8字状・775は下位隆帯に円形の貼付文を持ち、774・775は貼付文から隆帯を1条懸垂する。横位隆帯下位の胴部には773は渦巻ないし

対弧状と思われる曲線的な文様を描出し、原体LRを充填する縄文帯を持つ。774・775は懸垂する隆帯で区画して相対する渦巻状や対弧状の曲線的な文様を描出する構成と思われ、775は原体LRの細縄文を充填する縄文帯を持つ。776は縦位や斜位に垂下して文様を区画し、区画内には原体LRの細縄文を充填する。777は重弧状の単位を持って3条単位の並行沈線を垂下する構成と思われ、区画内には原体LRを充填し、区画の上端には2条単位の並行沈線を横位に施す部分が看取される。778は頸部区画が看取されない胴部片で、2条単位の並行沈線を懸垂して区画し、相対する蛇行状ないし対弧状の文様を描出する構成と思われ、区画内には原体LRの細縄文を充填する。

779は内湾する器形の口縁部片である。平口縁で、突起ないし貼付文と思われる剝離部が看取され、これから刻みを持つ細い隆帯を八字状に垂下する。また剝離部を挟んで口端下には端部に円形刺突を持つ横位沈線を1条巡らす。

3類 780～799が相当し、787・794・799が深鉢胴部片、この他に口縁部片に大別され、多条単位の幅狭な並行沈線(集合沈線)を横位に巡らし、連鎖状や組紐状を呈する入組状(クランク状)沈線文を施すものを主体とし、器形的には780・795・796が寸割的な他は下彫り的な器形を呈するものと思われる。

780～783は連鎖状や組紐状を呈する沈線文を横位に巡らすものである。780は平口縁であるが口端には押圧による平位の8字状文が3単位看取され、連続して施されるものと思われる。横位沈線を1条巡らした下位に沈線文を上・下2段に巡らし、この下位には並行沈線を巡らして沈線間に原体LRの細縄文を充填する。781は波状口縁の頂部に平位の8字状貼付文を施し、6条単位と思われる並行沈線で画される帯状内に沈線文を施す。782・783は口端に刻みを施し、782は8条看取される並行沈線下に沈線文が看取され、783は沈線文の下位に5条看取される並行沈線を巡らす。

784～787は並行沈線を区切るように組紐状を呈する沈線文を縦位に施すもので、何れも沈線文や並行沈線間には原体LRの細縄文を充填する。784は波状口縁の頂部に平位の8字状貼付文を施し、6条単位の並行沈線の上端から沈線文を垂下し、この下端は開放して横位に巡ると思われる。785・786は並行沈線の上位から沈線文を垂下する構成と思われるもので、785は口端に刻みを施し、並行沈線は7条看取される。786は並行沈線が5条看取され、沈線文の下端は784と同様に開放して横位に巡ると思われる。787は垂下する沈線文から横位の沈線文を巡らして画する構成と思われ、並行沈線は5条看取される。

788・789は同一個体と思われ、並行沈線を区切るように縦長の組紐状を呈する沈線文を縦位に施すものである。波状口縁の波頂部には平位の円形貼付文を施し、7～8条看取される並行沈線の上端から沈線文を垂下し、並行沈線間には細かな刻みを施す。並行沈線の下位には、垂下する沈線文から横位の沈線文を巡らして画する。

790・791は並行沈線を区切るように組紐状を呈する沈線文を縦位に施し、沈線文や並行沈線間に列点文を充填するものである。790は波状口縁の頂部に平位の8字状貼付文を施し、この下位には内面側が貼付文を呈する円孔を持ち、口端には細かな刻みを施す部分が看取される。外面には並行沈線が5条看取される。791は5条単位の並行沈線を巡らして沈線文を垂下し、この下端から入り組むような沈線文を横位に巡らす。

792は区切り文状の単位を持つ並行沈線を巡らすもので、口端には貼付文と思われる高まりが看取され、内面口端下に沿って横位沈線を1条巡らす。外面には割れ口部を含め並行沈線が5条看取され、クランク状を呈するような区切り文部が看取される。

793～796は並行沈線を区切るように列点の単位を施すものである。793は波状口縁の頂部に平位の8字状貼付文を施し、並行沈線は4条看取され、沈線上に2列単位の列点を縦位に施す。794は8条の並行沈線と

縦位の列点が1列看取され、列点は2列単位と思われる。この下位には連鎖状ないし組紐状と思われる横位の沈線文を巡らす。795・796は同一個体で平口縁と思われ、5条単位の並行沈線上に縦位の列点を1列区切り文状に施し、この下位には2条単位の幅狭な並行沈線を横位の連弧状に巡らして半円状の区画文を描出すと思われ、沈線間には原体RLの細縄文を充填したと思われる縄文が看取される。

797～799は同一個体と思われ、4条単位の並行沈線を巡らして段状に区画すると思われ、幅狭な並行沈線で入組状の曲線的な単位文を描出す。

4類 800～835が相当し、粗製的と思われる沈線文を施す深鉢で、800～816が口縁部片、この他に胴部片に大別される。

800～816は何れも平口縁で、浅いものを含め内面口端下に横位沈線を1条巡らすものを主とし、800～803は横位の並行沈線に八字状に垂下する沈線が重複する構成のもの、804は三角形の区画文を描出すもの、805～812は斜位の沈線文を施すもの、813～815は斜格子状の沈線文を施すもの、816は曲線的な沈線文を施すものに大別される。

800～803は2条単位の並行沈線を八字状に垂下するもので、800は八字状に垂下した後に2条単位の横位沈線を巡らす。801～803は5条単位と思われる横位沈線を巡らした後に八字状に垂下し、801・802は横位沈線の上端から垂下し、803は上位から垂下する部分が看取される。801～803は同一個体であろうか。

804は1条の沈線による三角形の区画文が看取され、横位沈線間に並列して描出す構成と思われる。

805～812のうち、805・806は同一個体と思われ、幅狭な2条単位の並行沈線を横位に巡らして画し、この下位に斜位の沈線文を施す。807～812は口端下から斜位に垂下する沈線文を施すもので、このうち810・811の沈線は先が櫛歯状を呈する工具により、811は内面に擦痕状の条線が看取され、812は単位的な細い並行沈線が垂下するもので、八字状などの文様を呈する可能性を含む。

813～815のうち、813は斜格子状の沈線文を施した後、この上端に2条単位の並行沈線を横位に巡らして画し、814は横位沈線を1条巡らした下位に沈線文を施す。また814は口端が内折する形状を呈し、内面口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、口縁形状的には本期V群1類的な様相と思われる。815は口端下から沈線文を施す。

816は横位沈線で画し、相対する半円状を呈すると思われる沈線文を施す。

817～835のうち、817は横位の並行沈線に八字状に垂下する沈線が重複する構成のもの、818～823は三角形の区画文を描出すもの、824～826は斜位の沈線文を施すもの、827～835は斜格子状の沈線文を施すものに大別される。

817は4条看取される横位の並行沈線に八字状を呈する斜位沈線が重複し、文様的には801～803の口縁部片に近似すると考えられ、同一個体であろうか。

818～823は三角形の区画文を横位に並列して描出す構成と思われ、818～822は幅狭な並行沈線、823は1条の沈線で文様を描出す。818～820は同一個体と思われ、並行沈線は上位の横位沈線が3条単位の他は2条単位で、横位沈線を段状に巡らして画し、上下に相対する区画文を描出す。また区画文と横位沈線との接部にはU状に丸みを持つ部分が看取される。821は2条単位の並行沈線で描出し、横位沈線を巡らした下位に接部がU状を呈する区画文を描出すと思われるが、半円状などの曲線的な区画文を呈する可能性もあろうか。822は沈線が細く、3条単位の横位沈線を巡らした下位に2条単位の並行沈線で区画文を描出す。823は横位沈線間に区画文を描出すと思われ、上端の割れ口部に横位沈線が僅かに看取される。

824～826は横位沈線を1条巡らして画し、この下位に斜位の沈線文を施すもので、824・825の沈線文は順

く間隔が密で、825は細い沈線であるが粗い間隔と思われる。

827～835のうち、827～830は沈線文の上位や下位を画する横位沈線が看取されるもので、827・828は同一個体と思われ、左上から垂下する斜位沈線を施した後に横位沈線を上位に1条巡らし、この後に右上から垂下する斜位沈線を施す。829は沈線文の下位に横位沈線を1条巡らして画し、830は細い沈線で描出し、沈線文を施した後に横位沈線を上位に1条巡らす。831～835は斜格子状の沈線文のみが看取されるもので、何れも細い沈線で描出し、このうち834・835は格子目が粗いと思われる。また830～835の細い沈線は、先が楯歯状を呈する工具による。

5類 836～873が相当し、836～850は口縁の把手・突起部片、851～853は口縁部片、854～873は胴部片に大別される。

836～850のうち、836は内傾する形状を呈する円盤状の突起で、細い沈線で渦巻状文を描出する。

837～840は橋状を呈する把手である。837は橋状部を欠損するが、上位の基部には幅狭な並行沈線で方形の文様を描出し、頸部には横位沈線や幅狭な横位の長楕円状と思われる沈線文の端部が看取される。838・839は上位の基部が半球状、橋状部が半楕円状を呈するものであるが、839は下位を欠損する。橋状部には外縁に沿って沈線を施し、また838は把手下位に横位沈線が1条看取され、口端下には幅狭に並行する横位沈線間に列点を充填する文様部や弧状・斜位沈線が看取される。840は橋状部が三角形を呈し、この上位を粘土で肥厚して横位の短沈線を2条施し、口端下には弧状沈線が僅かに看取される。

841～845は内面側に円孔を持ち、貼付文などを施す把手である。841は頂部に貼付文と思われる剝離部が看取され、把手上には沈線を1条垂下し、把手下位には幅狭に並行する横位沈線が2条看取され、内面には口端下に沿って横位沈線を1条巡らす。842～845は頂部に突起状の円形貼付文を施し、これと基部の円形貼付文、内面側の円孔を組ませて8字状文を描出する。把手部には842が上位に円孔、843が斜位の8字状貼付文、844が縦位の○状沈線文を施し、842は把手下位・844は口端下から把手下位に沿う沈線、また842は口端や横位沈線下に刻みを施すと思われる。845は頂部の貼付文と思われる剝離部に円孔が看取され、把手部には8字状の貼付文を施し、把手下位には横位沈線が僅かに看取される。

846・847は対になる同一個体と思われる橋状把手で、把手の上・下位には貼付文を施すと思われるが上位は欠損し、下位には横位の8字状貼付文が看取され、貼付文を繋ぐように幅狭な2条の並行沈線を蛇行するように垂下し、この沈線は下位の貼付文を巡って繋がる。

848は頂部に渦巻状の突起を持ち、この上部に沿って帯状の沈線文を施し、突起の基部には円形刺突を施す。橋状部は楕円状ないし半楕円状を呈すると思われ、刺突状の沈線文を施し、上位の基部両側には円形刺突を施し、これを繋ぐように横位の長楕円状沈線文を施す。

849は球状を呈する波頂部から橋状把手を施すが橋状部を欠損し、波頂部には原体RLの細網文を施し、基部にはA状の沈線文が看取される。

850は球状の突起で、頂部や側面には勾玉状や8字状、円形などの貼付文を施す。

851～853は何れも平口縁で、851は並行沈線による帯状の区画で渦巻状文を描出し、帯状内に原体RLの細網文を充填する。852は口端下を1条の横位隆帯で肥厚し、隆帯上に横位沈線を1条巡らす。この下位には幅狭な並行沈線で横位の長楕円状文を段状に重ねるような文様を描出し、沈線間に沿って列点文を充填する。853は口端が小さく外傾する形状を呈し、2条単位の幅狭な並行沈線で渦巻状などの曲線的な文様を描出すると思われ、沈線間に沿って列点文を充填する。

854～873のうち、854～862は並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出し、沈線間や区画内に鋼

文帯をなすもの、863は刻みを持つ細い隆帯で文様を描出するもの、864~867は幅狭な区画内や沈線間に列点文を充填するもの、868・869は幅狭な多条の並行沈線(集合沈線)で文様を描出するもの、870~873はS字ないしト音記号状文や組紐状の沈線文を施すものに大別される。

854~862のうち、縄文帯は細縄文を含め859が原体 RL の他は原体 LR を充填する。854・855は円形の区画文を描出するもので、854は円形刺突を中心とする重状構成の円形区画文を上下に連結する8字状文を描出する。855は縄文帯で画される円形区画文内に沿って沈線文を充填する。856・857は楕円状の区画文を横位に並列する構成と思われるが、856はクランク状に褶曲するような沈線が看取される。858は横位から弧状に垂下する文様部が看取され、渦巻状文を呈するものと思われる。859は三角形の区画文部が看取される。860は微隆帯とこの内側に沿う沈線で横位の楕円状区画文を描出すると思われ、沈線による区画内に縄文を充填する。861は屈折するような横位隆帯を巡らし、隆帯上に原体 LR の細縄文を横位施文する。隆帯の下位には弧状ないし波状を呈する横位の縄文帯が看取される。862は刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、この下位には横位の縄文帯を段状に巡らす。

863は刻みを持つ隆帯で扁平な三角形の文様を描出し、斜位から横位への結部(角部)には円形貼付文が看取される。

864~867のうち、864は微隆帯を1条横位に巡らし、沈線やこれに沿う微隆線縁で隔される長楕円状文を縦位や横位の段状に描出して区画し、区画内に沿って列点を充填する。865~867は並行沈線を弧状に垂下するなどして曲線的な文様を描出し、列点文は865がやや幅広い沈線間、866が外縁にあたる沈線間、867が各沈線間に充填する。

868は横位から弧状や弧状に垂下する多条単位の沈線が看取され、869はやや弧状に垂下する6条単位と思われる沈線が段状に看取され、曲線的な文様を描出すると思われる。

870~873のうち、870・871は同一個体と思われ、3条単位の細い並行沈線を弧状や斜位に垂下して曲線的な文様を描出すると思われ、並行沈線に重複してS字ないしト音記号状の沈線文を施す。872・873は組紐状を呈する沈線文を施すもので、872は縦位から横位に巡る文様部、873は円形と思われる弧状から横位に巡る文様部が看取される。

6類 874・875が相当し、系統が不明確な深鉢の口縁部片で、何れも帯歯状工具による条線を横位に巡らす文様を持つものである。

874は平口縁で、内面口端下には浅い横位沈線を1条巡らす。外面には口端下の無文帯を挟んで横位の条線文を施す。875は波状口縁で、口端下に横位の条線文を施し、この下位には横位沈線による帯状内に原体 LR を充填する。内面には波状部に重溝巻状の沈線文を施し、これから横位沈線を1条巡らすと思われる。

V群

1類 876~934が相当し、876は深鉢口縁の突起片、877~915は深鉢の口縁部片、916~926は鉢の口縁部片、927~934は深鉢の胴部片に大別される。

876は大・小の単位間に平位の楕円状単位とこれに沿う浅い切り込み状の短沈線を組ませる突起を持ち、側面や中央に円形刺突を施す。内面には口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、この上位には刺突状の凹みが横位に3点看取される。

877~915のうち、877~879は同一個体で口端に鋸歯状の刻みを施し、並行沈線による帯状の区画で文様を描出するもの、880~902は並行沈線や幅狭な多条の並行沈線(集合沈線)を横位に巡らす文様部が看取されるもの、903~913は外面の文様部を欠損し、内面の文様が看取されるもの、914・915は口端部が強く内傾する

形状を呈するものに大別される。

877～879は内面口端下に2条単位の並行沈線を横位に巡らした後、口端に押圧による刻みを施して鋸歯状の口縁を作出する。外面には楕円状の区画文を横位に並列する構成の文様帯を描出し、帯状内は原体LRを充填する縄文帯、楕円状区画内は無文帯の構成をとる。

880～902のうち、887・891・897・899・902が波状口縁、この他は平口縁が主と思われ、並行沈線間には880～887が縄文を充填するもの、888が条線を充填するもの、889～902は充填文が看取されないものに大別される。

880～887のうち、880～884は細かなものを含め口端に刻みを施し、882は口端に平位の8字状と思われる突起を付すが半部を欠損する。内面口端下には884が不明瞭な他は微隆帯を1条横位に巡らし、この上位には882・883が横位に連続する円形刺突文を1列施す。また内面には何れも幅狭な横位の並行沈線を巡らすと思われる。横位の並行沈線による文様は、880は2条看取される沈線間に原体LRの細縄文を充填し、内面には2条看取される。881は4条巡らして原体LRを充填し、内面には4条巡らす。882・883は1条巡らす下位に原体Rないし原体RLと思われる縄文が看取されるが、882は刺座部があり、883は縄文を切る磨き状の浅い横位沈線が看取される。内面には下位の割れ口部で僅かに看取される。884は口端下に1条巡らし、無文帯を挟む下位には幅狭な3条が看取され、口端部の沈線下を含め原体LRを充填する。内面には4条巡らす。885は左下がりのクランク状と思われる区切り文部を持つ幅狭な並行沈線が5条看取され、沈線間には原体LRの細縄文を充填する。内面には下位の割れ口部を含め3条看取される。886は2条看取される幅狭な沈線間に原体LRの細縄文を充填すると思われ、内面には微隆帯上に刻みを施し、沈線は1条看取される。887は下位の割れ口部を含め3条看取される沈線間に原体LRを充填する。また右側の割れ口部で縦位の弧状沈線が看取され、対弧状の区切り文であろうか。内面には微隆帯上位に円形刺突を1点施し、沈線は1条看取される。

888は口端に刻みを施し、外面には2条看取される並行沈線間に沿って横位の条線文を充填し、クランク状と思われる縦位の区切り文を施す。また補修孔と思われる円孔が1点看取される。内面には口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、この下位には幅狭な横位の並行沈線が割れ口部を含め4条看取される。

889～902のうち、890～894・898～900・902は細かなものを含め口端に刻みを施し、897・899は口端から内面側に縦位の貼付文を持つ。内面口端下には889～892が横位沈線、893～902が微隆帯を1条横位に巡らし、この上位には897～900・902が横位に連続する円形刺突文を施すが、897・899は前記の貼付文を区切りとする片側に巡らす。また内面には何れも幅狭な並行沈線を主とする横位沈線を巡らす。横位の並行沈線による文様は、889は幅狭な5条が看取され、内面には口端下に2条巡らす。890は3条巡らし、内面には口端下に3条看取される。891は幅狭な7条、内面には口端下に3条巡らす。892は3条看取され、内面には4条巡らす。893は外・内面ともに幅狭な4条が看取される。894は6条看取され、沈線間は最上段がやや幅広い他は幅狭で、内面には微隆帯の上・下位に沿って巡らす。895は2条看取され、沈線間を磨き残す手法が看取される。内面には下位の割れ口部で僅かに看取される。896は口端部に細い1条と、この下位に幅狭な2条を巡らし、内面には微隆帯の上位に沿って1条と、この下位には割れ口部で僅かに看取される。897は幅狭な4条、内面には3条巡らす。898～902は区切り文が看取されるもので、898は7条看取されるうちの最上・下段がやや幅広い他は幅狭で、左下がりのクランク状と思われる区切り文部が看取される。899は左下がりのクランク状区切り文を持つ沈線が3条看取され、内面には割れ口部を含め2条看取される沈線間に細かな刻みを施す。900は2条看取される沈線間に斜位の短沈線を左下がりに施して区切り、沈線間を磨き残

す手法が看取され、内面には2条看取される。901・902は1条看取される沈線下に区切り文が看取され、901はクランク状ないし斜位、902が対弧状と思われる。内面には何れも微隆帯の下位に沿って巡らす。

903～913のうち、910・911が波状口縁の他は平口縁が主と思われ、905以外のものは細かなものを含め口端に刻みを施し、903～911は内面口端下に微隆帯を1条横位に巡らし、この上位には905～911が横位に連続する円形刺突文を施す。外面には905・910の割れ口部で僅かに横位沈線が看取される他は文様部を欠損する。内面には、903・908・911で2条、912で3条、913で太い2条と細い3条の幅狭な並行沈線が看取され、906は微隆帯下位に沿う沈線を巡らし、904・906・907・909・910は割れ口部で僅かに横位沈線が看取される。これらのうち、903は並行沈線の上位に細い斜位沈線が1条看取され、909は横位沈線の上位に字状ないし楕円状と思われる沈線文を描出し、沈線間には原体LRと思われる縄文が僅かに看取される。また912・913は上位の沈線間に細かな刻みを充填するもので、特に913は在地的な様相のものと思われる。

914・915は平口縁で、何れも口端に刻みを施す。914は2条単位の並行沈線を横位に巡らした帯状内に原体RLを充填し、内面には幅狭に並行する太い沈線が3条看取される。915は内傾する括れ部に沿う横位沈線が1条看取される。

916～926は何れも平口縁と思われ、916は並行沈線による帯状の区画で文様を描出するもの、917・918は端部に刺突を伴う多条の横位沈線を巡らすもの、919～926は幅狭な多条の並行沈線(集合沈線)を横位に巡らすものに大別される。

916は段状に巡る横位の区画を円形刺突や円形状と思われる区画文で縦位に区切るような構成の文様を描出し、帯状の区画内には原体LRを充填する。

917・918は横位沈線による帯状の区画内に原体LRを充填後、端部に押圧状の刺突を伴う横位沈線を多条施す。

919～926のうち、919・920は左下がりのクランク状区切り文が看取されるものである。919は口端に貼付文と思われる刺突部があり、口端下に横位沈線を1条巡らす。この下位に区切り文を持つ6条の並行沈線を巡らし、さらに下位には幅広の間隔で巡らす以下を欠損する。沈線間には口端部に巡る沈線を含めた上位2段に細い刻み、以下に原体LRを充填する。920は区切り文を持つ6条単位の沈線を巡らし、沈線間に原体LRの細縄文を充填する。921・922は6条単位の沈線を巡らし、沈線間には921が原体LRの細縄文、922が最上段に細かな刻みを充填する。923は6条単位の沈線を巡らし、この下位に無文帯を挟んでさらに並行沈線を巡らす段状の構成と思われ、沈線間には最上段に細かな刻み、以下に原体LRの細縄文を充填する。924・925は沈線間の最上段に細かな刻みを充填するもので、924は5条単位、925は4条単位の沈線を巡らす。926は並行沈線に重複する単位文を施すもので、4条単位の沈線を巡らして字状沈線文を施し、沈線間には原体LRの細縄文を充填する。この下位にも無文帯を挟んで同様と思われる文様部が僅かに看取され、段状の構成と考えられる。

927～934のうち、927～930は並行沈線を横位に巡らす沈線間に縄文を充填するもの、931は内面の文様が看取されるもの、932は外・内面に幅狭に並行する横位沈線を巡らすもの、933・934は内面に幅狭な並行沈線が看取されるものに大別される。

927～930のうち、927は4条・928～930は2条の並行沈線が看取され、沈線間には927が原体LRの他は原体RLを充填し、927は左右交互にずれる縦位の区切り文を施す。内面には928・930で横位沈線が1条看取される。

931は幅狭な横位の並行沈線を3条巡らし、これに重複するの字状と思われる沈線文を施す。この下位に

は割れ口部に横位沈線が看取され、この間に原体LRと思われる細縄文を充填する。外面は無文部である。

932は外面に4条、内面に3条看取されるが、外面は剝離が著しい。

933は横位の微隆帯を1条巡らした下位に2条巡らし、934は割れ口部を含め3条看取され、外面は933整形が粗い器面、934は横位や斜位の磨き整形による無文である。

2類 935～945が相当し、935・936は口縁部片、937～945は胴部片に大別される。

935・936は把手を欠損する平口縁で、935は把手の基部が残り、936は割れ口部で基部の高まりが僅かに看取される。何れも幅狭な並行沈線を横位に巡らして刻みを施すもので、935は口端に刻みを施し、口端下には把手部から幅狭な帯状沈線を横位に巡らし、この下位に2条看取される並行沈線と刻みを施す。936は内面口端下に横位の微隆帯と細い沈線を1条、口端にも横位沈線を1条巡らす。外面には口端下に2条単位の並行沈線、この下位に4条単位の並行沈線を巡らして刻みを充填し、刻みは無文帯を挟む上・下段の沈線間に施す。さらにこの下位には横位から斜位の沈線が僅かに看取され、区画文の一部と思われる。

937～945のうち、937は幅狭な横位の並行沈線に沿って刻みを施すもの、938～941は多条単位の並行沈線(集合沈線)で文様を描出するもの、942～944は櫛歯状工具による条線で文様を描出するもの、945は連鎖状ないし組紐状の沈線文を施すものに大別される。

937は3条看取される並行沈線の上位2段に刻みを施すもので、935の口縁部片と文様が近似し、同一個体であろうか。

938～941のうち、938は3～4条単位の横位沈線を段状に巡らし、上段の沈線に重複するの字状沈線文を施す。939・940は同一個体で算盤玉状に括れる器形と思われ、括れ部の上位にはS字状沈線文を繋ぐように4～5条単位の沈線を横位や斜位のクランク状に施し、括れ部にはための横位沈線を1条巡らして画する。この下位には斜位の沈線文を施す。941は曲線的な文様を描出する太い沈線に沿って多条の沈線を施し、帯状の区画内に充填する構成であろうか。

942～944のうち、942は並行沈線で方形の区画文を描出し、沈線間の帯状内に沿って条線文を充填する。また方形の端部(角部)には斜位の列点文を1列と、端部から延びる曲線的な沈線文を施す。943は横位から縦位に垂下する条線文を施し、縦位の条線文間に沿って列点文を1列施す。944は並行沈線で菱形ないし方形と思われる区画文を描出し、沈線間の帯状内に沿って条線を充填する部分と無文帯の構成をとり、これに重複する組紐状と思われる沈線文の一部が看取される。

945は並行する2条の横位沈線の上・下位に沿って連鎖状ないし組紐状の沈線文を段状に巡らす。

VI群 946～950が相当し、946が深鉢口縁の突起部片、この他は胴部片に大別される。

946は山形を呈し、頂部中央と両側面に大きめの円形刺突を施し、対弧状の短沈線文を施す。この下位には幅狭な並行沈線を横位に巡らした沈線間に沿って連続する円形刺突文を1列充填する。内面には押圧状の円形刺突を施す。

947～950のうち、947～949は同一個体と思われ、横位の並行沈線による帯状の区画を段状に巡らして文様を描出するが、中段は半円状の区画文をレンズ状に相対する構成で、帯状内には原体LRの細縄文を充填し、縄文帯には中段のレンズ状部を中心に対弧状の区切り文を施す。950は幅狭な並行沈線を横位に巡らした沈線間に沿って連続する円形刺突文を1列充填し、この下位には対弧状の沈線文を施す。

VII群

1類 951～959が相当し、何れも深鉢の口縁部片で、959が波状口縁の他は平口縁である。これらのうち、951～954は比較的厚手、955～959は薄手の器厚を呈するものに大別される。

951~954のうち、952・953は同一個体と思われ、擦痕状の横位条線が看取される。

955~959は斜位の撫で・磨き整形を施すもので、特に957は浅い沈線状を呈する撫での整形痕が顕著で、955・958は条線状を呈する整形痕が看取され、959は口端下を主体に磨きを施す。

2類 960~965が相当し、何れも注口部片である。このうち960は先端や基部に突起状の凸部を持ち、962~965は基部に沿って沈線を1条廻らし、さらに964は8字状の貼付文、965は細い沈線での字状文を施す。

3類 966~1155が相当し、底部片を一括する。966~976は底面に網代痕を持たないもの、977~1149は底面に網代痕を持つもの、1150~1154は底面に木葉痕を持つもの、1155は網代痕ないし縄文と思われる文様を持つものである。

996~976は何れも撫でや磨き整形が施され、径を推定し得るものは966が11.0cm、967が8.4cm、968が9.2cm、969が12.0cm、970が8.6cm、971が10.0cm、972が8.0cm、973が5.6cm、974が4.6cmを測る。これらのうち、966は外傾、967は直立、970は張り出すような器形を呈し、970は内面、974・976は割れ口部に炭化物が付着する。また967は底面に網代痕ないし縄文を持つように見えるが、摩耗しており不明確で、970は底面の中央が凹形状を呈する。

977~1149のうち、977~1031は下位に横位の撫でを施すものなどを含め張り出す器形を呈するもの、1032~1075は外傾や直立するような器形を呈するもの、1076~1090は大きく外傾する器形を呈するもの、1091~1149は器形が不明確なものや底面みの破片に大別される。

977~1031のうち、径を推定し得るものは977が12.6cm、978が10.4cm、979が15.0cm、981が11.0cm、982が12.0cm、983が10.0cm、984が11.0cm、985が8.2cm、987が8.0cm、990が10.0cm、992が8.6cm、994が8.9cm、995が12.0cm、996が7.8cm、997が10.6cm、998が8.6cm、999が11.0cm、1000が10.0cm、1001が9.0cm、1002が8.0cm、1003が15.0cm、1004が11.0cm、1005が11.2cm、1007が13.0cm、1010が10.0cm、1011が8.8cm、1012が10.0cm、1013が9.0cm、1014が13.0cm、1015が13.0cm、1018が11.8cm、1019が9.0cm、1020が10.0cm、1021が12.0cm、1022が12.4cm、1023が8.4cm、1024が8.0cm、1027が5.6cm、1028が12.0cm、1029が9.6cm、1031が7.0cmを測る。これらは撫でや磨き整形が施される無文で、977・1015は条線状、986・990・1000は沈線状、993は押圧状を呈する整形痕が看取される。

1032~1075のうち、1051・1061・1066・1068~1070・1072~1075が直立するような器形を呈する他は外傾するように立ち上がる器形で、また1064は張り出すような部分が看取される。径が推定し得るものは、1032が10.4cm、1033が8.8cm、1034が12.4cm、1035が10.0cm、1036が10.2cm、1037が15.0cm、1038が12.0cm、1039が12.9cm、1040が11.0cm、1042が14.0cm、1043が9.0cm、1044が10.0cm、1046が8.6cm、1047が12.8cm、1050が10.0cm、1051が7.4cm、1052が10.0cm、1053が9.2cm、1054が9.0cm、1055が8.0cm、1056が8.4cm、1057が10.0cm、1058が10.0cm、1059が11.0cm、1060が8.0cm、1062が6.6cm、1063が10.8cm、1064が8.0cm、1065が5.6cm、1066が7.8cm、1067が10.2cm、1068が8.0cm、1069が6.6cm、1070が7.8cm、1071が6.4cm、1072が8.2cm、1074が8.0cm、1075が6.0cmを測る。これらは撫でや磨き整形が施される無文で、1036は条線状の整形痕、1046・1053は傷状の条線が看取され、1040は底面中央が凹形状、1057は底面中央に網代痕を切る撫でが施され、1061は割れ口部に炭化物の付着が看取される。

1076~1090のうち、径が推定し得るものは1076が7.0cm、1078が10.0cm、1080が7.4cm、1081が6.4cm、1082が8.4cm、1083が8.0cm、1084が6.0cm、1086が8.0cm、1087が8.0cmを測る。これらは磨き整形が主体的に施される無文で、1076は底面の外縁、1080・1081は中央が僅かに凹形状を呈する。

1091～1149のうち、径が推定し得るものは1094が6.0cm、1095が10.0cm、1098が8.6cm、1099が8.0cm、1100が7.6cm、1113が8.0cm、1117が5.0cm、1141が12.6cm、1146が6.0cmを測る。これらのうち、1098・1110・1106・1112・1113・1115・1125・1132・1146は底面の外縁にあたる部分に撫でを施し、1129・1134・1147は内面中央が高まる形状を呈する。また1148・1149は摩耗により網代痕が不明瞭なものである。

以上の底部片の網代痕について、編み方は比較的太めのものでは「2本越え・1本潜り・1本送り」や「2本越え・2本潜り・2本送り」などが看取され、細いものでは「1本越え・1本潜り・1本送り」が多いように思われる。これらのうち、1093・1094では「2本越え・1本潜り・1本送り」が基調と思われるが、さらにこれに斜めに入る編み目が看取され、「籠目編み」によるものと思われる。その他、989にも「籠目編み」と思われる網代痕が看取される。

1150～1154のうち、径が推定し得るものは1150が11.0cm、1152が6.0cmを測り、1150は外反する器形を呈し、1154は内面中央が高まる形状と思われる。また1154は網代痕の上に木葉痕が重複する。

1155は径12.0cmを測り、やや張り出すような部分が看取される。

Ⅷ群 1156～1177が相当し、1156～1168は口縁部片、この他は胴部片である。

1156～1168のうち、1164～1166が「碗形」の可能性も含む鉢、1167・1168が鉢ないし深鉢と思われる他は深鉢と考えられる。

1156は外反する器形と思われ、口縁は僅かに台状に高まる波状を呈し、沈線で渦巻状部を持つ横位の楕円状ないし帯状区画文を描出し、原体LRを横位充填する。Ⅰ群かⅢ群・Ⅳ群の「鐘形」深鉢の可能性があると不明確である。

1157・1158は平口縁で、口端の断面が鋭角状を呈し、口端下の無文帯を挟む下位から原体RLを縦位施文する。

1159～1162のうち、1159・1160は平口縁、1161・1162は波状口縁である。1159は並行沈線による帯状の区画で文様を描出し、横位から垂下する文様部が看取されるが以下を欠損し、帯状内に原体LRを充填する。Ⅰ群～Ⅳ群の何れかに相当するものであろうが不確定である。1160～1162は横位沈線による帯状の区画内に原体LRを充填する文様部が看取されるもので、このうち1161・1162は細縄文である。1160は内面口端下に浅い横位沈線を1条巡らし、区画内には重弧状の沈線文を垂下する。また割れ口部に僅かに斜位沈線が看取され、重弧状文と繋がって渦巻状を呈する可能性を含む。1161は波頂部に円形刺突を施し、1162は波頂部から口唇に沿って端部に円形刺突を伴う横位沈線を巡らす。以上の3点はⅣ群～Ⅴ群に相当するものと思われるが不確定である。

1163は波状口縁の頂部に上位側が突起状に高まる平位の8字状貼付文を施し、この下位から並行する斜位沈線を交差して施し、斜格子状を呈する部分が看取される。文様的にはⅣ群4類に類似する要素とも思われるが、部分的に看取されるものであるため不明確である。

1164～1166のうち、1164・1165は平口縁で、口端部が僅かに外傾する形状を呈し、刻みを施す口端下に横位沈線を1条巡らす。また1165は内面口端下にも横位沈線を1条巡らす。1166は波状口縁で、割れ口部を含め4条看取される幅狭な並行沈線を横位に巡らし、区切り文状を呈する円形刺突文を縦位に施す。沈線は太めで、刺突文は2点看取される。

1167・1168は同一個体と思われるが、1168は6区・6B-11グリッドからの出土である。平口縁で、口端には刻みを施して口端下に横位の条線文を巡らし、この下位には断面が方形状を呈する横位ないしやや斜位の沈線が1～2条看取され、さらにこの下位は磨き整形による無文である。口端の刻みや沈線の様相などか

ら弥生まで下る可能性もあろうか。

1169～1177のうち、1171が深鉢ないし「金魚鉢形」と思われる他は、深鉢・鉢・注口土器を含む壺形など、不明確なものを主とする。

1169・1170は地文に縄文を施すもので、1169は無文帯の下位に原体 LR を横位施文し、外・内面で対になる円形の凹部を持ち、穿孔途中の円孔であろうか。1170は胴部が内湾するように括れる器形と思われ、括れ部から上位には原体 LR を横位施文し、下位は無文である。

1171は並行沈線で文様を描出するもので、横位の並行沈線を段状に巡らして区画するが、下段の沈線は千鳥掛け状ないしクランク状を呈し、区画内には上段から J 字状や重弧状を呈する沈線文を垂下する。Ⅲ群に並行するものと思われるが、器形など不明確な点が多いため本類に含めた。

1172は微隆帯で区画するもので、懸垂する 2 条単位と斜位に垂下する 1 条の微隆帯で区画し、区画内に沿うように沈線による帯状の区画を施し、原体 LR を充填すると思われる縄文が僅かに看取される。

1173・1174は同一個体と思われ、内湾する器形を呈すると思われ、3 条単位の幅狭な横位沈線を巡らした沈線間に沿って列点文を 1 列充填する。

1175～1177も内湾ないし算盤玉状に括れる器形と思われ、1175は沈線で流線状に褶曲して入り組むような曲線的な文様を描出し、沈線間には原体 LR の細縄文を充填する。1176はクランク状ないし S 字状に褶曲する横位沈線を 1 条巡らす。1177は括れ部の上位に沿って横位沈線を 1 条巡らす。

土偶

1178・1179の 2 点であり、1178は表土、1179は 5 J—6 グリッドの IV 層から出土している。

1178は右脚部と考えられる破片で、内股を呈すると思われるが下位を欠損する。また背面側に張り出す形状を呈し、文様は篋状工具による粗い沈線文を縦位や斜位に垂下して施すが、正面及び背面の中央には沈線間が隆起状に高まる部分が看取され、中心的な単位を示すものと思われる。また上位から下位に貫通する円孔があり、棒状を呈する芯材の痕跡と考えられる。形状や文様等から、時期は 3 期(中期)と考えられる。

1179は右腕部と考えられる破片で、磨き整形が顕著で、腕を僅かに前側へ反り出すような形状を呈し、文様は幅狭に並行する細い 2 条の沈線を肩部にあたる部分に沿うように後側へ巡らし、後側ではこの沈線を円形に繋げて区画し、この内側に同心円状の円形沈線文を充填する。形状や文様等から、時期は 4 期(後期)と考えられる。

土製円盤

1180～1189が相当する。文様は、1180で沈線が 1 条、1183・1189で原体 LR 縄文、1184で 2 条の並行沈線、1185で弧状や斜位沈線、1186で弧状の沈線間に原体 LR 縄文が看取される他は無文で、形状的には 1189 が長方形を呈する。側面は、ほぼ全周を研磨するものが 1180～1187、約 2/3 周を研磨するものが 1189、部分的に研磨するものが 1188 である。

時期不明土器

1190～1193が相当し、何れも胴部片であるが器形等も含め不明確なものである。

1190・1191は同一個体と思われ、刻みを持つ横位隆帯を 2 条巡らす。この上位には割れ口部で縦位の弧状沈線が僅かに看取され、下位の隆帯は 2 点の円形貼付文間で途切れる構成と思われ、これを単位に貼付文から同様の隆帯を八字状に施し、地文に原体 LR を斜位や縦位施文する。但し、破片の天地が不明確で、横位隆帯を頸部の区画文と見る場合には、八字状隆帯を施す下位側が口縁部となる可能性も想定されよう。

1192・1193は同一個体と思われ、細い横位隆帯を 1 条巡らし、この上位に沿って連続する円形刺突文を 1

列施し、地文には櫛歯状工具による条線文を横位に巡らす。内面は磨き整形が顕著で、晩期以降発生まで下の可能性もあろうか。

6区 (第307～322図：PL136～141)

3期

1群

5類 1～5が相当し、「鼓形」を呈する浅鉢の口縁部片で、1・2は交互刺突による文様を持つもの、3～5は沈線間に細かな刻みを施す文様を持つものに大別される。

1・2のうち、1は外反する括れ部に横位隆帯を1条巡らして交互刺突による刻みを施し、この下位には重渦巻状の沈線文や横位沈線が看取される。2は棒状工具による彫りの深い沈線で渦巻状文を描出し、横位沈線間に交互刺突を充填するが、これによる微隆線は連続する方形状を呈する。

3～5のうち、3は隆帯で楕円状ないし方形状の区画文を描出すると思われ、区画内に沿って重状の沈線文を施し、沈線間は刻みを充填する部分と無文部の交互構成をとる。4・5は同一個体と思われ、多条の沈線で重状を呈する横位の長楕円状文を描出すると思われ、沈線間は細かな刻みや鋸歯状を呈する刻みを充填する部分と無文部の構成をとる。

6類 6～9が相当し、段階的に古くなる可能性のものを含み、何れも深鉢と思われる胴部片である。

6は半截竹管による平行沈線を横位に巡らし、この下位には渦巻状突起から2条単位の隆帯を懸垂して縦区画すると思われ、地文に原体LRを縦位施文する。7は隆帯で渦巻状文を描出する。8は低い横位隆帯を1条とこの上位に沿う浅い沈線を巡らし、原体LRを隆帯上には横位、隆帯の下位には縦位施文する。9は半截竹管による平行沈線を横位に巡らし、この下位には地文に摺糸(L)を縦位施文する。

II群

1類 10～23が相当し、10～17は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

10～23のうち、10・11・13が口端部を欠損する他は平口縁と思われ、何れも隆帯やこれに沿う沈線で区画文を描出するものである。

10・11はクランク状や段状の区画文を描出するもので、10は2条単位の斜位隆帯によるクランク状部が看取され、原体RLを横位充填する。11は2条単位の横位隆帯で2段に区画すると思われるが上位を欠損し、区画内には原体RLを横位充填する。

12～16は連弧状ないし横位に区画すると思われるもので、12～15は上位に横位隆帯を1条巡らし、下位は2条単位の隆帯で区画すると思われるが、14・15は1条看取される以下を欠損する。区画内には何れも原体RLを横位充填する。16は上位を画する2条単位の横位隆帯を巡らして原体LRを横位充填するが、以下を欠損する。

17は渦巻状の単位文間に楕円状の区画文を描出する構成のもので、区画内には原体RLを横位充填し、下位の頸部は無文帯である。

18～23は懸垂文で縦区画するもので、18は2条単位の隆帯によるもの、19～22は3条単位の沈線によるもの、23は2条単位の沈線によるものに大別され、何れも縄文地に懸垂文を施し、19～21・23には頸部を画する隆帯や沈線が看取される。

18は懸垂文内に縦矢羽状の短沈線文を充填し、地文には原体LRを縦位施文する。

19～22のうち、19は地文に原体RLを縦位施文し、沈線による渦巻状単位文から頸部を画する横位沈線や

懸垂文を施す。20は2条単位の横位隆帯で頸部を画し、原体 RL を上位の口縁部に横位、下位の胴部には縦位施文する。21は連弧状と思われる横位隆帯で頸部を画し、胴部には原体 LR を縦位施文する。22は原体 RL を縦位施文し、懸垂文には浅い沈線を含む。

23は地文に原体 LR を縦位施文し、頸部を画する横位沈線から繋がる懸垂文を施し、さらに区画内に沈線を1条懸垂する。

2類1種 24・25が相当し、何れも深鉢の口縁部片で、隆帯やこれに沿う沈線で区画文を描出して区画内に沈線文を充填するもので、24は平口縁、25は波状口縁と思われる。

24は渦巻状の突起間を2条単位の隆帯で弧状に連結して区画すると思われ、区画内には縦位の沈線文を充填する。25は上位に1条、下位に2条単位の横位隆帯を巡らして連弧状ないし帯状に区画するが、下位の隆帯には突起状の区切り部を持ち、区画内には斜位の沈線文を充填する。

2類2種 26～28が相当し、26・27は深鉢口縁の把手・突起部片、28は深鉢口縁～胴部の大型片である。

26・27のうち、26は右側に反りながら立ち上がる形状で、頂部側面には渦巻状の隆帯文を施し、また基部の蕨手状部と孔部に沿って垂下する隆帯を繋げる。口端には横位沈線を1条、口端下には交互刺突を横位に1列巡らす。さらに左側には欠損する突起状の凸部が看取され、左右1対の把手間を橋状に連結するものと思われる。27は嘴状を呈し、棒状工具による彫りの深い沈線を縦位や斜位・蕨手状などに施し、沈線間が半隆起状を呈する。

28は「樽形」の器形を呈し、口径27.0cm・残存高10.7cmを測る。4単位と思われる波状口縁で、口縁部には波状部に隆帯で渦巻状の単位文を施し、沈線や2条単位の隆帯で端部が蕨手状を呈する横位のC字状区画文を並列する上下2段構成の文様帯を描出し、区画内には横位の交互刺突を1列、また区画内側に沿って刻みを充填する。胴部は2条単位の隆帯で渦巻状文を描出して区画すると思われ、斜位の沈線文を施す。

4類 29～33が相当し、「斬倉型」に比定される深鉢の胴部片で、上部に半截竹管の平行沈線や棒状工具による沈線を沿わせた隆帯で区画し、刻み状の細い沈線文を充填するものを主とする。

29は隆帯上部の沈線内に沿って連続する刺突を施し、この下位には横位の矢羽状沈線文を施す。30は横位の波状微隆線を1条巡らし、この下位には隆帯で渦巻状文を描出して区画し、斜位の短沈線文を充填する。31は渦巻状文部と思われる弧状隆帯が看取され、斜位や綾杉状を呈する沈線文を施す。32は懸垂する隆帯や半截竹管による平行沈線で渦巻状に垂下する文様を描出して区画し、斜位や縦矢羽状の沈線文を充填する。33は横位から懸垂する隆帯で方形状に区画し、縦位の刻み状の短沈線文を充填するもので、文様的には大木系とも思われる。

5類 34～36が相当し、所謂「越後大木」とされる系統と思われ、何れも縄文地に沈線で文様を描出する深鉢で、34・35は同一個体と思われる口縁部片、36は胴部片である。

34・35は平口縁で、原体 L を縦位施文後に沈線で横位から巻き込む渦巻状文や剣先状文を描出し、渦巻状文は2条単位の沈線による。

36は地文に原体 LR を縦位施文し、横位沈線で頸部を画すると思われ、この下位には渦巻状の単位を持つ横位沈線を施し、さらに下位には沈線で懸垂文や方形状と思われる区画文を描出する。

6類 37～43が相当し、43が胴部片の他は何れも口縁部片で、このうち37～39は「鼓形」を呈するもの、40～43は磨き整形が顕著で文様の看取されないものである。

37～39のうち、37は渦巻状の単位文間を隆帯で弧状に連結して区画すると思われ、区画内には原体 RL を横位充填する。38・39は沈線で渦巻状の単位文間に楕円状の区画文を描出する構成のもので、区画内には縦

位の沈線文を充填し、38はこの下位に渦巻状文を挟んで端部が蕨手状を呈する横位沈線を1条巡らす。

40～43のうち、43を除いて何れも平口縁で、42・43は同一個体と思われる。40は口縁部が括れて直立するような器形と思われ、40～42は口端を肥厚して外傾する形状を作出し、41・42はこの括れ部に横位沈線を1条巡らす。また41は口端部や内・外面、42・43は外面に赤色塗彩痕が看取される。

8類 44が相当し、深鉢口縁の把手部片である。大型の把手で、把手部の上位や側面には隆帯と彫りの深い沈線を縦位や弧状などに施し、下位の基部には左右対の円孔を持ち、内面側の円孔と合わせて中空状を呈する。曾利式ないし北関東的とされる大木の系統と思われる。

田群

1類 45～80が相当し、45～60は深鉢の口縁部片で58や60は胴部までの大型片、61～74は深鉢の胴部片、75～80は地文に条線文を施すものに大別される。

45～60は低い隆帯や幅広の浅い沈線などで区画文を描出し、区画内に縄文を施文するものであるが、欠損により縄文が看取されないものは可能性を含み、45・46・49・52・56は平口縁、47・48・53・54・60は波状口縁、この他は口端部を欠損する。

45～48は渦巻状の単位文間に楕円状等の区画文を描出すると思われるもので、45は単位文部のみが看取される。46は上位に横位沈線、下位に渦巻状の単位を持つ横位沈線で区画文を描出する。47は上位に押圧状の円形刺突を持つ渦巻状文と思われ、胴部は2条単位の沈線による磨り消し懸垂文で縦区画する。48は平縁を主として小波状に高まる口縁で、渦巻状文を介在するクランク状部が看取される。縄文は45を除いて46・48は原体 RL、47は原体 RLR を横位充填し、47は胴部に同原体を縦位施文する。

49・50は低い隆帯で楕円状等の区画文を描出すると思われるもので、49は区画間に両端が蕨手状を呈する縦位の沈線文を施し、50は幅広の低い隆帯で区画する。縄文は49が原体 LR、50が原体 RL を横位充填し、50には隆帯上にも縄文と思われる文様が看取されるが、摩耗しており判然としない。

51～55は渦巻状文内に縄文を持つと思われるもので、このうち52はクランク状部の上位、54は区画文の端部と思われる部分、55は区画文の上位に押圧状の円形刺突が看取され、53は波状部の内面に端部が蕨手状を呈する幅広の浅い横位沈線を施す。縄文は51・53が原体 RL を横位や斜位、54が原体 LR を横位、55が原体 R を横位や斜位充填し、52は割れ口部で僅かに看取されるのみで原体は不明確である。

56・57は区画文が入り組む文様構成と思われるもので、56は大型片で口径33.6cm・残存高9.5cmを測り、クランク状を呈すると思われる重状の楕円状区画文が看取され、57は胴部に沈線による懸垂文で縦区画する。縄文は何れも原体 RL で、56は横位や斜位、57は横位充填し、57は胴部に同原体を縦位施文する。

58・59は連弧状と思われる区画文を描出するもので、区画文は58が低い隆帯、59が幅広の沈線による。56は最大径20.8cm・残存高14.0cmを測り、胴部には幅広の浅い沈線で区画文を描出し、U状を相対する区画文や区画文間には両端が蕨手状を呈する縦位の沈線文を上下に重ねて懸垂状に施す。59は胴部を2条単位と思われる沈線による懸垂文で縦区画し、やや幅広な懸垂文間には蕨手状の沈線を1条垂下する。縄文は何れも原体 RL で、58は横位ないし斜位、59は横位充填する。胴部には同原体を58が区画内に縦位や斜位充填し、59が縦位施文する。

60は渦巻状の単位文を上下に重ねる文様を持つものである。低い隆帯で渦巻状の単位文間に楕円状や入り組むような区画文を描出する構成と思われ、さらに単位文下に垂下する渦巻状文を施す。地文は原体 RL の縄文で、区画内には横位、胴部には横位ないし斜位施文する。他の系統の要素を含むものと思われる。また全体的に艶く、内面は大きく剥離しており、二次的な被熱によるものであろうか。

61~74のうち、61は頸部を画すると思われる横位沈線の看取されるもの、62~74は懸垂文で縦区画するもので、62は3条単位の沈線によるもの、63~66は2条単位の沈線によるもの、67~69は沈線で単位不明なもの、70・71は蛇行沈線を垂下するもの、72・73は懸垂文による縦区画内に凹状沈線文を描出するもの、74は連続する刺突文を持つものに大別される。

61は浅い横位沈線を1条巡らし、原体LRを上位には横位、下位の胴部には縦位施文する。62は縦区画内に原体LRを縦位施文する。63~66では、63・64が原体RL、65が原体L、66が原体LRを縦位施文し、63・64には幅広い懸垂文の単位が看取され、66は縦区画内に蛇行沈線を1条垂下する。67~69では、何れも原体RLを縦位施文し、このうち68は懸垂文間が微隆起状を呈し、縦区画内には懸垂する磨り消し状の撫でが看取され、69は幅広い懸垂文である。70・71は同一個体と思われ、原体LRを縦位施文後に彫りの深い蛇行沈線を垂下して縦区画する。72・73も同一個体と思われ、凹状を相対してH状の区画文を描出する構成と考えられる。また区画文を描出する浅い沈線間が微隆起状を呈し、72では懸垂文部に押圧状の凹部が看取される。74は頸部を画すると思われる横位沈線間に沿って連続する円形刺突文を巡らし、刺突文は2列看取される。この下位の胴部は沈線による懸垂文で縦区画し、原体RLを重複するように施文すると思われる。

75~80は櫛歯状工具による条線地文のものを一括し、75は深鉢の口縁部片、この他は深鉢の胴部片で、76は沈線による懸垂文で縦区画するもの、77は条線文を切る斜位沈線が看取されるもの、78~80は地文のみ看取されるもので78が条線の比較的粗いもの、79・80が密なものに大別される。

75は平口縁で、やや弧状を呈する斜位や縦位に施す。76は2条単位の沈線による懸垂文で、縦区画内に縦位の条線文を施す。77は縦位の条線文を切る斜位沈線が1条看取され、連弧文の系統であろうか。78~80では、78・79は縦位、80は斜位の条線文が看取され、79は晩期の細密条線の可能性も考えられたが不確定で、80は沈線状を呈する磨きの整形痕が顕著である。

2類1種 81~97が相当し、地文に沈線文を持つものを主とし、81~90は深鉢の口縁部片、91~97は胴部片に大別される。

81~90は隆帯や沈線で区画文を描出するもので、86・87が口端部を欠損する他は平口縁である。

81は横位隆帯とこれに沿う沈線で帯状に区画するもので、区画内には縦位の短沈線文を充填する。

82~87は渦巻状の単位文間に区画文を描出すると思われるもので、82は隆帯による単位文間に楕円状の区画文を描出し、縦位の沈線文を充填する。

83~85は隆帯で単位文間を弧状に連結して区画すると思われ、83は1条の隆帯で区画して渦巻状文の上位が剝離し、84・85は1条~2条の隆帯で区画すると思われ、2条の隆帯間はやや幅広を呈し、区画内には83・84が縦位、85が斜位の沈線文を充填する。

86・87は隆帯による単位文と頸部を画する1条の横位隆帯が看取され、86は上位の口縁部には縦位の沈線文を充填し、下位の胴部には2条単位の沈線による懸垂文間に重弧状の短沈線文を充填し、地文には縦位の沈線文を施す。87は横位隆帯上に刻みを施し、この上位には横位沈線が僅かに看取され、下位の胴部には横位隆帯下に沿う沈線から縦位の沈線文を施す。

88・89は隆帯で楕円状の区画文を描出するもので、88は2条単位の隆帯で区画して斜位の沈線文を充填する。89は区画文の結部下位に隆帯で渦巻状文を施し、区画内には縦位の沈線文を充填する。

90は横位沈線で区画してやや弧状を呈する斜位の沈線文を施すが、割れ口部で縦位沈線が僅かに看取され、方形状の区画を呈するものであろうか。

91~97のうち、91~93は隆帯による懸垂文で縦区画するもの、94は沈線による懸垂文で縦区画するもの、

95～97は横位の条線文を施すものに大別される。

91～93のうち、91・92の隆帯は単位不明確で、縦区画内には91が縦矢羽状、92がやや斜状を呈する縦位の沈線文を施す。93は蛇行隆帯を1条垂下して縦区画し、綾杉状に入り組む斜位(鱗状)の沈線文を施す。

94は蛇行沈線文を1条垂下して縦区画し、縦矢羽状の沈線文を施す。

95～97は櫛歯状工具による条線文を横位に施すもので、95は2条単位の隆帯による懸垂文で縦区画する。

96・97は沈線による懸垂文で縦区画するもので、96は被熱により上位が巻き込むように収縮したもので、97の条線文はやや弧状ないし斜状を呈する。

2類2種 98～131が相当し、98・99は深鉢口縁の把手部片、100～104は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

98は山形を呈し、頂部には沈線と押圧による楕円状文を施し、外面には細い隆帯とこれに沿う沈線を∩状や外縁に沿って弧状に垂下する。99は円孔を持つが下位を欠損し、内面側に隆帯で渦巻状文を施し、外面は無文である。

100～104のうち、100・101は波状口縁、この他は平口縁で、100は隆帯で区画するもの、101は渦巻状の単位文を持つもの、102は連続する刺突文を施すもの、103は重状の沈線文を施すもの、104は口端部に刻みを施すものである。

100は上位に1～2条単位の沈線に沿わせる隆帯で段状に重なる楕円状の区画文を描出すると思われ、区画文の結部は褶曲するような曲線状を呈し、区画内には斜位の短沈線文を充填する。101は波状部の渦巻状沈線文から隆帯を懸垂して区画し、口端下には端部が蹶手状を呈する横位沈線が1条と、この下位には横位の弧状沈線文が看取される。102は1条の横位隆帯を巡らして口端下のやや幅広い無文帯を画し、横位隆帯の上位に沿って刺突文を1列施し、隆帯下位には斜位の沈線が僅かに看取される。103は口端下に塗切れ部を持つ幅広い浅い横位沈線を1条巡らし、上位には刻み状を呈する縦位の短沈線文、下位には渦巻状及びこれを囲むような重状の沈線文を施す。104は口端部を隆帯で肥厚して内側に突部を持つ平坦な形状を呈し、外面には口端下に横位隆帯を1条巡らして上位に刻みを施し、下位は撫で整形による無文である。

105～131のうち、105～107は刻みや連続する刺突文を施すもの、108・109は横位の文様帯を持つもの、110～113は隆帯で渦巻状文を単位に区画文を描出する構成と思われるもの、114～120は横位や懸垂する隆帯で区画する構成と思われるもの、121～125は隆帯で垂下する大柄の渦巻状文を描出すると思われるもの、126～129は隆帯や沈線による懸垂文が看取されるもの、130・131は主に地文が看取されるものに大別される。

105～107のうち、105は隆帯による渦巻状の単位文と頸部を画すると思われる横位隆帯が1条看取され、上位の区画内には弧状沈線が僅かに看取され、単位文下の横位隆帯上には刻み、隆帯下位に沿って刺突文を施す。106・107は無文帯の口縁部を横位隆帯で画すると思われ、106は2条看取される隆帯に沿って刻み状の刺突文を施す。107は横位隆帯から立ち上がる文様を持つと思われ、この上位に沿って円形刺突文を施し、下位には横位から斜位の沈線文が僅かに看取される。

108・109のうち、108は横位隆帯で画する上位に沿って波状ないし鋸歯状を呈する沈線を横位に1条巡らし、下位にはやや弧状を呈する縦位の沈線文を施す。109は低い2条の横位隆帯による帯状の区画内に横位の矢羽状沈線文を充填し、この下位には縦位や斜位の沈線文が看取され、縦位沈線は懸垂文とも思われる。整形を呈する大形の深鉢と考えられる。

110～113のうち、110・111は大柄の渦巻文ないし∩状の区画文間に渦巻状単位文を施すものと思われ、単

位文や区画文は1条の隆帯で描出する。地文には何れも斜位の沈線文を施すが、110には縦矢羽状に入り組む部分が看取される。112も1条の隆帯で区画文間に単位文を施すものと思われるが、単位文がやや扁平と思われ、地文には斜位の沈線文を施し、単位文の隆帯間にも刻み状に充填する。113は渦巻状文のみが看取されるものであるが、やや扁平で隆帯間が幅広と思われ、楕円状の区画文を呈する可能性もある。

114~120は2条単位の隆帯でH状の区画文を描出する構成と思われ、隆帯の結部には114~116が渦巻状、117が剣先状を呈する渦巻状の単位文を施し、地文には114が斜位、115が横位の矢羽状、116が綾杉状、117は縦矢羽状に入り組むような斜位の沈線文を充填するが、114は割れ口部で僅かに看取される。118・119は隆帯の結部に単位文が看取されないものであるが、118は懸垂する隆帯を横位隆帯上に重ねる凸部が看取され、119は懸垂する隆帯間に区切り状部を持ち、地文は118が一部綾杉状を呈する斜位、119が斜位の沈線文を充填する。120は形状ないしH状を呈する区画文の端部が看取されるもので、区画内には渦巻状の沈線文と斜位の沈線文を充填する。

121~125は何れも1条の隆帯で文様を描出するもので、121は渦巻状文や蛇行隆帯を垂下して区画し、斜位や横位、渦巻状文間には刻み状の短沈線や弧状を呈する沈線文を充填する。122・123はやや幅広の低い隆帯で渦巻状文を描出し、隆帯間には斜位の短沈線文を充填するが、沈線は122が細く、123は刻み状を呈する。124・125は渦巻状文の下端部と思われる区画文部が看取されるもので、124は区画文間にあたる部分で区画内には渦巻状文の端部と思われる縦位隆帯と斜位の沈線文が看取される。125は渦巻状に巻き込む部分が垂下する隆帯とも思われ、区画文はU状を呈する可能性があり、地文には斜位の沈線文を施す。

126~129のうち、126・127は隆帯による懸垂文で縦区画するもので、126は3条単位の懸垂文でH状を呈する区切り状部を持ち、127は2条単位の懸垂文で、さらにO状の沈線文や弧状と思われる横位隆帯で段状に区画すると思われ、地文には何れも縦位の沈線文を施す。128・129は蛇行沈線を垂下して縦区画するもので同一個体と思われ、128では渦巻状沈線文から垂下する単位が看取される。

130・131のうち、130は半截竹管の平行沈線を単位とする縦位や斜位の沈線文を施し、131は同心円状ないし重弧状を呈する曲線的な沈線文を施す。

3類 1種 132~138が相当し、「龍目文」が粗雑化したと考えられる文様を施す深鉢で、138が胴部片の他は口縁部片である。

132~137は何れも平口縁で、内湾する器形を主とするが134・137は外傾するような形状を呈し、132~134は内面口端下を肥厚して鐙状の突部を作出する。

132・133は隆帯による文様を施すもので、132は渦巻状文を描出して斜位の沈線文を施し、頸部には低い横位隆帯とこれに沿う沈線を巡らして区画する。133は曲線的な文様と思われるが上端を剣離しており、縦位の沈線文を施す。134は縦位の沈線文を施す。135・136は縦位沈線の上端を繋ぐようなH状の単位文を持つもので、135はH状文で縦区画して横位の沈線文を施し、H状内には3条の縦位沈線が看取される。136は縦位の沈線文を施した後、上端を蕨手状に曲げてH状の単位文を描出する。137は縦位の沈線文を施すが、沈線間がやや幅広である。

138は底部付近の破片で縦位の沈線文を施し、沈線が細く鋭い。

4類 139が相当し、深鉢の口縁部片である。口端を欠損するが、僅かに看取される斜位隆帯から波状口縁と思われ、幅広な無文帯を挟んで頸部には2条単位の横位隆帯を巡らし、これから上端が蕨手状ないし粗雑な剣先状を呈する2条単位の隆帯を懸垂すると思われる。口縁部の無文帯や横位隆帯上の単位文(主に剣先状文)等の要素としては、前記した2類2種の106・107・117なども新調的な要素を含むものであろうか。

7類 140～142が相当し、140は深鉢口縁の把手部片、141は深鉢の口縁部片、142は胴部片である。

140は橋状部を持つ円筒状の把手と思われるが不明確で、頂部は押圧状に凹み、この外面側には半円状の切り込み部が看取される。

141・142は同一個体と思われる、141は波状口縁である。口端部を肥厚して内側に鈎状の突起を出し、外面には口端下に沿う横位隆帯を2条巡らし、下位の隆帯は渦巻状文を伴う。隆帯下位には原体 RL を横位施文し、2条単位の縦位や斜位沈線で区画すると思われる、波状ないし鋸歯状の沈線を横位に1条巡らす。

IV群

1類 143～159が相当し、143～154は深鉢の口縁部片、155は深鉢の胴部片、156～158は壺形土器、159は両耳壺に大別される。

143～154は口縁部の文様帯が消失するもので、143・145～148・150・151が平口縁の他は波状口縁である。143は口端下まで縦文を施すもの、144・145は区画文間に蕨手状沈線を垂下するもの、146～149は口端下の幅状無文帯を1条の横位沈線で区画するもの、150～153は連続する刺突文を横位に巡らすもの、154は口端下の無文帯を1条の横位微隆帯で区画するものに大別される。

143は原体 R を口端下には横位、以下には縦位施文するが、口端下には横位の撫でを施すと思われる。

144・145は沈線による㊦状の区画文間に蕨手状沈線を1条垂下するものであるが、区画間は144が縄文地、145が無文地である。144は地文に原体 RL を縦位施文して磨り消し状の区画文と沈線文を施すと思われる、区画文の沈線は斜状に看取される。145は口径13.4cmを測り、区画文内に原体 RL を縦位充填する。

146～149のうち、146は沈線下に原体 RL を横位施文し、147は原体 L を沈線下には横位、以下には縦位施文する。148・149は沈線下位に区画文が看取されるもので、148は沈線によるU状等の曲線的な区画文を描出すると思われる、区画内に原体 LR を横位充填する。149は2条単位の沈線で横位のC字状区画文を描出すると思われる、地文には原体 LR を横位施文する。

150～153のうち、150・151は横位沈線を1条巡らした上位(口端下)に沿って円形や刻み状の爪形刺突文を1列施し、沈線下位には150が原体 LR、151が原体 RL を横位施文する。152は口端下の幅状無文帯を挟んで2列の円形刺突文を巡らし、この下位には2条単位の沈線で㊦状の区画文を描出して原体 RL を縦位充填する。153は口端部が内折する形状を呈し、この括れる無文帯部に沿って列点状の細かな円形刺突文を1列巡らす。この下位には原体 LR を横位及び斜位に施文し、曲線的な区画文を描出すると思われる磨り消し文の一部が斜状に看取される。この縁部は微隆線状を呈し、4期I群まで下る可能性を含む。

154は内湾するような形状を呈し、微隆帯の下位には沈線でV状の区画文を描出し、区画内には原体 RL を横位充填する。

155は微隆帯による懸垂文で縦区画するもので、やや湾曲する器形と思われる、区画内には原体 LR を縦位施文する。

156～158は口縁部片であるが、158は外傾すると思われる口端部が欠損し、何れも微隆帯で曲線的な文様を描出すると思われる。156は横位から㊦状の文様帯が看取され、157は橋状把手を持つと思われるが橋状部が欠損し、外面には赤色塗彩が看取される。158は横位や斜位の文様帯が看取され、内面には赤色塗彩が明瞭である。

159は両耳壺の把手部片と思われるが上部が欠損し、基部から横位隆帯を巡らして区画すると思われる、この下位には原体 RL を縦位施文する。

2類 160が相当し、兩垂れ状の短沈線文を施す深鉢の胴部片で、割れ口部で縦位や斜位の沈線が看取され、

円状ないし△状と思われる区画内に充填するものと考えられる。

3類 161・162が相当し、深鉢口縁の把手部片である。

161は舌状ないし嘴状を呈し、外面に両端部が蕨手状を呈する縦位の沈線文を1条垂下する。162は嘴状に立ち上がる形状を呈し、円孔やハ字状の橋状部を持つ中空状の把手で、把手の下位は沈線で文様を描出し、原体RLを縦位施文する縄文が看取される。

V群

2類 163～167が相当し、このうち167は台付の脚部片である。径は163が8.0cm、164が8.0cm、165が7.6cm、166が9.6cm、167が径7.4cmを測る。163は原体RLを縦位施文する縄文、164は懸垂文と思われる沈線が僅かに看取される。165は底面に擦痕状の条線が数条看取され、166は磨き整形による無文で、167は撫で整形が顕著である。

VI群

168～171が相当し、段階的に古くなるものを含み、168は隆帯状の突起片、169・170は深鉢の口縁部片、171は深鉢の胴部片である。

168は2条の横位隆帯とこれに沿う沈線による突起が貼付部から剝離したものと考えられる。169は平口縁で、口端下には微隆起状を呈する幅狭な無文帯を持ち、この下位には地文に原体Lを縦位施文すると思われるが、原体RLの擦り反しの可能性もあり不明確である。170は口端部を欠損し、半截竹管による平行沈線で楕円状と思われる区画文を描出し、区画内には平行沈線を横位に1条充填すると思われる。また区画間には隆帯ないし突起と思われる剝離部、区画文の上・下位には縦位沈線が僅かに看取される。阿玉台式の変容形としてⅡ式後半期に併行するものと考えられる。171は刻みを持つ横位隆帯を1条巡らして上位の無文帯を区画し、横位隆帯からは2条単位の隆帯を懸垂して縦区画し、区画内には重弧状沈線文や斜位の短沈線文が看取される。また懸垂文の上端には円形の押圧文を施す。

4期

I群

1類 172～189が相当し、沈線で曲線的な文様を描出し、沈線間の帯状内が縄文帯と無文帯の構成をとるので、172は深鉢口縁の把手部片、173～176は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

172は筒状に巻き込む形状を呈し、頂部下には横位に連続する円形刺突文を施し、円状と思われる文様を描出して帯状内に原体LRを充填する。

173～176のうち、173が波状口縁の他は平口縁と思われ、173は横位から斜位、174はやや弧状を呈する横位、175は斜位の文様部が看取され、175は口端に横位沈線を1条巡らし、縄文帯は173・175が原体LR、174が原体RLを充填する。176は縄文帯に沿って連続する円形刺突文を施すもので、J字ないし鉤状文を垂下してR字状を呈すると思われる文様部が看取され、縄文帯は原体LRを充填する。

177～189のうち、177は横位から斜位ないし弧状に垂下する文様部が看取され、178・179は縦位の長楕円状文を挟むような紡錘状文を描出するもので、177もこの可能性が有ると思われ、縄文帯は何れも原体LRを充填する。180はU状ないし横位のC字状と思われる文様部が看取され、縄文帯は原体LRを充填する。181は蕨手状ないし渦巻状の文様部が看取され、縄文帯は原体LRを充填する。182は弧状に垂下する文様部が看取され、縄文帯は原体LRを充填する。183～189はJ字状や鉤状文と思われる構成が看取されるもので、183は鉤状文の端部と思われる文様部、184・185は弧状やX状に連結する文様部、186～188はJ字状や鉤状文が入り組むような文様部、189は斜位の文様部が看取され、縄文帯は何れも原体LRを充填する。

2類 190～201が相当し、190～195は突起を持つもので190・191は深鉢口縁の把手部片、192～195は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

190・191のうち、190は円孔を持つ把手で、頂部には楕円状の押圧を施し、外面には縦位の長楕円状ないし対弧状、内面には8字状と思われる突起を施す。外面の突起上には原体LRを縦位施文し、内面には頂部下に円形刺突から横位沈線、突起上には円形刺突や円孔に沿う1～2条の沈線を施す。191は大きく立ち上がる形状で、頂部は嘴状に内折する双環状を呈し、内面には対弧状の突起を施す。外面にも突起を施すが、剥離しており形状は不明である。

192～195は波状口縁の波状部に突起を施すもので、192・193は8字状の突起と思われるが頂部を欠損し、192は突起下位に沿って連続する刺突文を施し、微隆帯や沈線で文様を描出する。193は突起上に原体LRを縦位施文し、さらに連続する円形刺突文や沈線を施す。194・195はJ字状ないし縦位の長楕円状突起から刻みを持つ隆帯を1条垂下するもので、突起上には端部に刺突を伴う沈線に沿わせ、口端下や隆帯に沿って沈線で帯状に文様を描出し、帯状内には原体LRを充填する。また内面の波状部にもC字状ないし円形の突起を施す。

196～201のうち、196～200は微隆帯で文様を描出するもの、201は沈線で単位的な大形文を持つ区画文を描出するものに大別される。

196～200のうち、196～199は微隆帯間の帯状内に沿って連続する円形刺突文を施すものである。196は斜状を呈する横位の微隆帯間に2列施し、この下位には弧状に垂下する微隆帯が看取される。197～199は同一個体と思われ、渦巻状ないし円形状と思われる単位文を挟むような横位の区画文を描出し、この上位を画する斜位の微隆帯は口縁に沿う波状を呈すると思われ、この微隆帯間や区画内には原体LRを充填する。また斜位の微隆帯に沿って沈線を1条巡らし、この沈線を挟んで2列の刺突文を施す。200は渦巻状の単位文を挟むような横位の区画文を描出し、区画内には原体LRを充填する。

201は円形状と思われる曲線的な単位文を挟む区画文の端部と思われ、区画内には原体RLと思われる縄文を充填する。

3類 202～209が相当し、202～207は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。

202～207は203が口端部を欠損する他は何れも平口縁で、直線のや外傾する器形を呈するものである。このうち202～206は口縁部の無文帯を1条の横位微隆帯で区画するもので、微隆帯の下位には202・203が原体RLを縦位施文する。204・205は沈線、206は微隆帯で区画するもので、204はA状の沈線文、205・206は幅広く懸垂して縦区画し、何れも原体LRを縦位充填する縄文帯と無文帯の構成をとる。207は口端下の円形貼付文から微隆帯を1条懸垂し、地文の看取されないものである。また円形貼付文から横位の微隆帯を巡らす可能性があるが、欠損により不明瞭である。

208は微隆帯、209は沈線で文様を描出するもので、208は割れ口部で僅かに弧状に垂下する微隆帯が看取され、地文には原体LRを縦位施文する。209は2条単位の沈線でU状を上下に相対する曲線的な区画文を描出し、原体RLの縦位施文と思われる縄文が僅かに看取される。

II群

1類 210～218が相当し、210・211は深鉢口縁の把手部片、212～214は深鉢の口縁部片、この他は胴部片である。

210・211は波状部が橋状に立ち上がる把手で、210は内面頂部に8字状の突起を施し、外面の把手下位には沈線で帯状の文様を描出し、原体LRを充填する。211は内面基部に楕円状の貼付文を施し、外面には沈

線で文様を描出すると思われ、把手上から把手下位に垂下する沈線が看取される。

212～214は波状口縁で、212・213は把手ないし突起の頂部を欠損するが、212はこの基部の四隅に円形刺突を施し、口端部が内折する形状を呈する。文様は何れも沈線で曲線的な文様を描出して縄文帯を持たないもので、212は横位から垂下する文様部、213はやや弧状を呈する文様の端部が方形に看取され、214は鉤状文が看取される。

215～218のうち、215は沈線で曲線的な文様を描出して縄文帯を持たないもの、216～218は縄文の看取されるものや縄文帯を持つものに大別される。

215は渦巻状ないし蕨手状の曲線的な文様部が看取される。216も渦巻状と思われる曲線的な文様を描出し、僅かに原体LRと思われる縄文が看取される。217はJ字状の文様部と思われるが帯状の沈線間が幅広く、縄文帯は原体LRを充填する。218は直線的に垂下する懸垂状の文様構成と思われ、縄文帯は原体LRの細縄文を充填し、縄文が重複する部分が看取される。

2類 219～225が相当し、219・220は深鉢口縁の把手部片、221～224は深鉢の口縁部片、225は胴部片である。

219・220のうち、219は筒状に巻き込む形状と思われ、透かし状を呈する円孔を持ち、円形の貼付文や刺突を施す。220は橋状の把手部片で、上位に垂下する箇での整形痕が看取される。

221～224は何れも波状口縁で、波状部に突起や貼付文を施すものである。221は入り組む8字状と思われる橋状の突起を持ち、この基部には円形の貼付文を施す。これから刻みを持つ横位隆帯を1条巡らし、この下位には縦位の沈線が僅かに看取される。222は8字状の貼付文を施し、頂部の口端には円形刺突が看取される。223は沈線に沿わせる円形文を横位に重ねたような文様を施す。224は波状部の内・外面に円形貼付文と、外面の口端下に横位沈線を1条施す。この下位は無文地で、上位に浅い沈線に沿わせる貼付文が看取され、対弧状ないし8字状を呈すると思われるが下位を欠損する。

225は沈線で結紐文状の区画文を描出するもので、円形の単位文を挟む構成を呈し、区画内には原体LRを充填する。

3類 226が相当し、押圧による刻みを施した横位隆帯を1条巡らす深鉢の口縁部片である。押圧は比較的大きめで、平口縁と思われるが口縁と隆帯が並行せず、隆帯は波状を呈する斜位に巡るものと思われる。

4類 227～233が相当し、227・228は口縁の把手・突起部片、この他は口縁部片に大別される。

227・228のうち、227は捻転状を呈する把手で、内面側に円孔を持つ。口縁の内折部には並行する2条の横位沈線を巡らし、沈線間の帯状内に沿って連続する円形刺突文を1列充填する。内面には円孔に沿って沈線を1条巡らす。228はラッパ状に開く突起と円孔を持ち、突起下位には竹管による刺突、また円孔に沿う沈線や重弧状の短沈線文を施す。

229～233のうち、229・230は沈線による区画内に縄文を充填するもの、231は沈線による区画内に縄文が看取されないもの、232・233は地文に条線文を施すものに大別される。

229・230は帯状の長楕円状文を横位に巡らすもので、このうち229は沈線による重渦巻状の単位文が看取され、縄文は何れも原体LRを充填する。

231は円形刺突文を沈線で囲む同心円状文を単位文とし、上下に施す円形刺突文を挟んで帯状の長楕円状文を横位に巡らすと思われる。

232・233は同一個体と思われ、波状口縁で鋸状に強く内折する形状を呈し、以下の胴部には櫛歯状工具による縦位の条線文を施す。形状や地文などから大木10式の系統と考えられる。

5類 234が相当し、深鉢の胴部片である。2条単位の沈線が横位に連続するV状の区画文を描出すると思われ、沈線間に沿って連続する円形刺突文を1列充填し、地文には櫛歯状工具による縦位の条線文を施す。文様などから北陸的な系譜の土器と考えられる。

川群

2類 235～289が相当し、235～281は口縁部が括れて外反する形状の「金魚鉢形」を呈する鉢、282～287は胴部が括れて外反する形状の「鐘形」や直線的に開く形状の「朝顔形」を呈する深鉢、288・289は内湾する形状の「碗形」を呈する鉢に大別される。

235～281のうち、235～245は口縁部片、246～281は頸部や胴部片に大別される。

235～245では、235は突起状の単位を持つもの、236は刺突文などを施すもの、237・238は小捻転状を呈するようなC字状ないし弧状に微隆起する単位部を持つもの、239・240は口端部が内折する形状で単位文を持つもの、241は口端部に刻みを施すもの、242・243は無文の口縁(口頸)部に隆帯を垂下するもの、244・245は口縁(口頸)部や頸部の文様が看取されるものに大別される。

235は口端部が外傾する形状で、波状部に橋状の小突起を持ち、この上位には切込み状の短沈線と、この両端部にあたる内・外面に円形刺突を施し、小突起からは横位沈線を1条巡らす。

236は口端部が外反する形状で、波状部に円形刺突文とこれを囲む弧状沈線を施し、これから横位沈線を1条巡らす。

237・238は口端部が外傾する形状で、237は波状部に押圧状の円形刺突を施して捻転状部を作出し、これから横位沈線を1条巡らす。238は波状部の捻転状を呈する部分に円孔を持ち、これから横位沈線を1条巡らし、内面には円孔上位に沿う弧状沈線を施す。

239は微隆起及びこれに沿う沈線による円形状の単位文が看取され、渦巻状などを呈すると思われる。また帯状の長楕円状沈線文を横位に巡らして単位文間を連結すると思われる。240は沈線でC字状ないし横位の対弧状を呈する単位文を描出し、また円形刺突が1点看取される。

241は口端部が内折する形状で、波状部の円孔に沿って縦位の弧状沈線を施し、これから横位沈線を1条巡らした下位に刻みを施す。

242は口端部が外傾する形状で、243は口端部を欠損し、何れも刻みを持つ隆帯を1条垂下する。242は波状部の円形刺突から横位沈線を1条巡らし、円形刺突から隆帯を垂下する。また内面には横位に並んで8字状を呈する円形刺突文を施す。243は同様の隆帯を横位に1条巡らして頸部を画し、懸垂する隆帯との結部には8字状の貼付文を施す。

244は口端部が外傾、245は僅かに内折する形状を呈し、244は内面口端下に横位沈線が1条看取される。244は2条単位の並行沈線による曲線的な区画文の端部が弧状に看取され、区画内には原体LRを充填する。245は頸部の沈線文が僅かに看取され、曲線的な単位文ないし横位に巡る波状沈線の一部と思われるが不明確で、この上位の口縁(口頸)部は無文である。

246～258は頸部片で、246・247は貼付文を持つもの、248は刺突文を施すもの、249・250は刻みを持つ横位隆帯を巡らすもの、251～258は主に横位の並行沈線を巡らすものに大別される。

246・247のうち、246は刻みを持つ隆帯を1条懸垂する端部に円形貼付文を施し、貼付文を挟む対弧状の沈線文や僅かに横位沈線が看取される。247は8字状の貼付文と思われるが剝離しており、これから2条単位の並行沈線を横位に巡らす。

248は竹管による円形刺突文を連続して施すもので、並行する横位沈線を巡らした帯状内に沿って1列充

填する。

249・250は刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らすもので、249には隆帯上に円形の貼付文が看取される。隆帯の下位には何れも並行沈線で垂下する構成の文様を描出すると思われ、249は貼付文下で重弧状を呈すると思われる沈線、250では懸垂する単位を挟んで八字状に垂下する3条単位の並行沈線が看取される。

251～258のうち、251～255は2～3条単位の並行沈線を横位に巡らして頸部を区画し、胴部には渦巻状の単位文を描出すると思われるもので、何れも横位から斜位や弧状に垂下する並行沈線が看取されるが、254は割れ口部で僅かに看取されるのみである。また251・252は並行沈線上に8字状を呈する貼付文ないし円形刺突が看取されるが252はこの上位を欠損し、251・252は胴部の区画内、253～255は頸部も含む並行沈線間や区画内に何れも原体LRを充填するが、252は僅かに垂下する並行沈線間にも看取される。

256～258は1～2条単位の横位沈線で頸部を画し、胴部には並行沈線で垂下する構成の文様を描出するもので、256は3条単位で懸垂する単位間に重弧状文を施し、257は4条単位で重弧状の単位から斜位ないし対弧状に垂下する構成、258は3条単位で懸垂する単位を挟んで斜位に垂下する構成と思われる。

259～281の胴部片は並行する沈線で文様を描出するもので、259～271が渦巻状文を描出する文様構成と思われるもの、272～281が垂下する文様構成と思われるものに大別され、さらに前者では259～266が区画内や沈線間に縄文を持つもの、267～271が縄文の看取されないもの、後者では272～278が縄文を持つもの、279～281が縄文の看取されないものに区分される。

259～266のうち、259は縦位の区画文の上部が渦巻状文を対弧状に挟む構成で、区画内には原体LRを充填する。

260～263は渦巻状文を介在すると思われる区画文が看取されるもので、260・261は三角形の区画文を描出すると思われ、260は斜位、261は横位から斜位に垂下する並行沈線が看取され、区画内には何れも原体LRを充填する。262・263は方形状を呈する区画文が看取されるもので、262は2条単位の並行沈線で段状の構成と思われる区画文を描出し、また割れ口部には渦巻状文の一部と思われる斜位沈線が看取される。263は8字状の下位と思われる円形貼付文が看取され、貼付文から懸垂する沈線を挟むように区画し、この下位には渦巻状文の端部と思われる弧状沈線が看取される。以上2点の区画内には何れも原体LRの細縄文を充填する。

264～266は渦巻状の単位文部が看取されるもので、並行沈線は264・265は2条単位、266は2条から3条と思われ、縄文は何れも原体LRを充填するが、266の縄文は部分的に看取される。

267～271のうち、267・268は渦巻状の単位文部が看取されるもので、267は単位文の上位に並行する横位沈線が2条看取され、単位文は何れも3条単位の並行沈線で描出すると思われる。

269～271は渦巻状文を介在する区画文の下端部が看取されるもので、269は並行する2条の弧状沈線が看取され、渦巻状文の端部と思われる。270・271は渦巻状の単位文間を連結する構成が看取されるもので、270は2～3条単位の並行沈線を斜位から横位、さらに斜位に施して連結し、271は3条単位の並行沈線で垂下するように渦巻状文を描出し、連結する沈線は割れ口部で僅かに看取される。

272～278のうち、272・273は重弧状の曲線的な単位を持って垂下する構成のもので、272は8字状と思われる貼付文下の重弧状文から4条単位の並行沈線を対弧状に垂下して区画し、原体LRを充填する。273は懸垂する単位間に重弧状文を施し、区画内には原体LRと思われる縄文を充填する。274は縦位ないしやや斜位に垂下する4条の並行沈線が看取され、区画内には原体LRを充填する。275～278は懸垂及び斜位に垂下する並行沈線を繋げて三角形に区画すると思われるもので、並行沈線は275が4～5条、276が3条、

277・278が4条看取され、縄文は何れも原体LRを充填する。

279～281のうち、279は懸垂する単位を挟んで4条単位の並行沈線に対弧状に垂下する構成と思われ、この上位には斜位沈線が僅かに看取される。280・281は懸垂する並行沈線が看取されるものであるが、280には弧状に褶曲する沈線が看取され、並行沈線は何れも5条看取される。

282～287のうち、282・283は「鐘形」を呈する深鉢、284～287は「朝顔形」を呈する深鉢で、前者では282が口縁部片、283が胴部片、後者では284・285が口縁部片、286が口縁～胴部的大型片、287が胴部片に大別される。

282は波状口縁で、並行沈線による帯状の区画で円形区画文を上下に連結する8字状文を描出し、帯状内には原体LRを充填すると思われるが、摩耗しており不明瞭で、二次的な被熱によると思われる。283は刻みを持つ隆帯を1条懸垂し、地文に原体LRを横位や斜位施文する。

284は平口縁で、口端及び口端下の円形貼付文から横位沈線を1条巡らし、貼付文や沈線下位には渦巻状と思われる円形状の沈線文や原体LRを縦位施文する縄文が僅かに看取される。285は波状口縁で、円形刺突を中心とする重状の沈線文を波頂部には渦巻状、外・内面には同心円状に施し、外面にはさらに重弧状の沈線文が看取され、地文に曲線的な沈線文を施すと思われる。

286は平口縁で、口径32.0cm・残存高24.7cmを測り、口端部は内折する形状で2単位と思われる平位の楕円状突起を持ち、口端下に浅い横位沈線を1条巡らす。この下位には1条の横位隆帯を上・下位に巡らして胴部の文様帯を区画し、さらに区画内には2条単位の隆帯と3条単位の並行沈線を懸垂して縦位に区画し、隆帯による懸垂文内には凹状や懸垂する沈線を施し、区画内には並行沈線で沈線状ないし蛇行状に垂下する曲線的な文様を描出する。懸垂文は各2単位で、隆帯による懸垂文は口端の突起下に施す。

287は集合する多条の並行沈線で弧状に褶曲するX字状の文様を描出する。

288・289は口縁部片で、何れも平口縁である。288は2条単位の並行沈線で蕨手状に入り組む単位を持って横位から弧状に垂下する構成の区画文を描出し、沈線間を含め原体LRを充填する。また並行沈線の端部には円形刺突を伴う。289は横位の長楕円状を呈する帯状の区画文を沈線で描出し、区画内には端部に円形刺突を伴う横位沈線を1条充填する。また上下に施す円形刺突を挟んで縦位の弧状沈線が看取され、円形状の単位文の一部と思われる。

3類 290～308が相当し、主に地文に刺突文を施すものや蓋があり、290～293は深鉢の口縁部片、294～306は胴部片、307・308は蓋に大別される。

290～293は何れも平口縁で、290～292は橋状の突起を持ち、292は頂部に円形刺突を施し、293は外反する括れ部(頸部)に細い横位沈線を1条巡らす。地文には290が「返し」の看取される粗い爪形状、291が篋状工具による細かな爪形状、292が棒状工具による粒状、293が密な爪形状の刺突文を施す。

294～306のうち、294・295は頸部を画すると思われる横位沈線が看取されるもの、296は深い刺突を施すもの、297・298は先が櫛歯状を呈する工具による刺突を施すもの、299～305は爪形状の刺突を施すもの、306は突起を施すものに大別される。

294は1条巡らした下位に粗い粒状の刺突を施し、295は上位の割れ口部で僅かに横位沈線が看取され、地文には細密な爪形状の刺突を施す。

296は篋状などの鋭利な工具による細かな刺突を施す。297・298の刺突も比較的深く、297は粗く施し、298の刺突は兩垂れ状を呈する平面形状である。

299～305のうち、299～302は「返し」の看取される細かな刺突を施し、303～305は細かく密に施すもの

で、特に305は横位に連続する刺突を段状に整然と施す。

306は鋭状ないし瘤状を呈する突起を貼付するもので、突起は5点看取される。

307・308は蓋の破片で、307は推定径10.2cmを測り、外面は磨き整形による無文で、内面には渦巻状と思われる沈線文を施し、小円孔が1点看取される。308は把手と思われる剝離部が看取され、この間を繋ぐように対弧状の貼付文を施し、貼付文の上位には沈線に沿わせる。

4類 309～323が相当し、309～315は深鉢の口縁部片、この他は胴部片に大別される。

309～315のうち、309～312は平口縁、313・315は波状口縁、314は平縁を主として小突起状部を持つ口縁で、309・310は口端部に刻みを施すもの、311～314は口端部に横位沈線を1条巡らすもの、315は内面に文様を持つものに大別される。

309は内折する形状を呈する口端部に横矢羽状の刻みを施し、この下位には並行沈線で三角形の区画文を描出すると思われ、沈線間や区画内に原体LRを充填する。310は2条看取される縦位の短沈線から横位沈線を1条巡らした下位に刻みを施し、この下位には懸垂する沈線を挟んで斜位の沈線文が縦矢羽状に看取される。

311～314のうち、311は横位隆帯を1条巡らした上位に沿って沈線を施し、隆帯の下位には横位沈線が1条看取される。312は横位沈線の下位に2条単位と思われる並行沈線を懸垂して縦区画し、原体RLを縦位充填すると思われる。313は波状部を欠損し、幅広の浅い横位沈線を1条巡らす。この下位には横位沈線を1条巡らし、これから並行沈線で垂下する渦巻状と思われる文様を描出し、沈線間に原体LRを充填する。314は小突起状部の円形刺突から1条及び並行する2条の横位沈線を巡らし、刺突下には横位の8字状貼付文から刻みを持つ細い隆帯を1条懸垂し、これを扶むように集合する多条の並行沈線に対弧状に垂下する。また横位の長楕円状と思われる沈線文や、弧状に垂下する沈線間に横位の短沈線文を施す文様が看取される。315は中央及び上下の円形刺突を単位に重状を呈する同心円状の沈線文を施し、外面は磨き整形が顕著な無文である。

316～323のうち、316～318は並行沈線で文様を描出するもの、319～323は連続する刺突文や刻み状の短沈線文を施すものに大別される。

316は懸垂する沈線に斜位沈線を繋げて区画し、並行沈線は2条単位と思われ、区画内には原体LRを充填する。317は懸垂する並行沈線が看取され、単位は不明瞭であるが沈線間が幅広である。318は懸垂する3条単位の沈線に2条単位の斜位沈線を繋げて三角形に区画すると思われる。

319～323のうち、319・320は並行沈線間に刺突文を充填するもので、319は縦位の並行沈線や腕手状に巻き込む沈線で区画し、区画内には原体LR、縦位の沈線間に連鎖状の刺突文を充填する。320は横位から懸垂する方形の区画に沿って刺突文を充填し、区画内にはさらに2条単位の並行沈線を懸垂状に施して原体LRの細縄文を充填する。321～323は連鎖状の短沈線文を縦位に垂下するもので、321は斜位に垂下する並行沈線の区画内に原体LRを充填し、さらに短沈線文を2列施す。322は八字状に垂下、323は懸垂ないしやや斜位に垂下する並行沈線の区画内に短沈線文を1列施す。

IV群

1類 324～394が相当し、324～388は直線的に開く形状の「朝顔形」を呈する深鉢、389～391は胴部が括れて外反する形状の「鐘形」を呈する深鉢に大別される。

324～388のうち、324～352が口縁部片、353～388が胴部片で388は底部まで含み、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものを主体とする。

324～352では、324～328が貼付文などの装飾が看取されないもの、329・330が貼付文の看取されるもの、331～350が刻みを持つ細い横位隆帯を巡らすもの、351が口端部に押圧による刻みを施すもの、352が沈線文を施すものに大別される。

324～328は平口縁で、324～327は三角形の区画文、328は横位に巡る部分が看取されるもので、このうち324は三角形を相対する構成と思われる縦位の区画部が看取され、325・326の区画文はやや扁平で、328は細い沈線で口端下に幅狭に巡らす。沈線間の帯状内は327を除いて縄文帯をなし、細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

329は波状口縁、330は平口縁で8字状の貼付文を施し、329は三角形の区画文を描出して貼付文下が弧状に褶曲し、区画内に充填される沈線が看取される。330は弧状に褶曲する曲線的な文様を描出する。帯状内には何れも原体LRの細縄文を充填する。

331～342は刻みを持つ横位隆帯を1条巡らすもので、331は口端下に貼付文の看取されるもの、332～335は口端から刻みを持つ隆帯を1条懸垂して横位隆帯に繋げるもの、336～339は横位隆帯上に貼付文の看取されるもの、340～342は隆帯のみが看取されるものに大別される。

331は口端下に刻みを持つ円状ないし円形状の貼付文を施し、三角形の区画文を描出して帯状内には原体LR、区画内には沈線を充填する。

332～335のうち、隆帯の結部には332が8字状、333・334が円形の貼付文を施し、335は欠損しており不明瞭である。332は縦位に画される区画文の端部が看取され、方形ないし三角形を呈するものと思われ、原体LRを充填する。333～335は横位に巡る部分が看取されるものであるが、333は貼付文下を含め弧状に褶曲する曲線的な文様を描出すると思われ、帯状内に原体LRを充填する。334は区画内にやや弧状を呈する横位沈線を充填する。335は割れ口部で横位沈線が看取される。

336～339のうち、338が波状口縁の他は平口縁で、何れも8字状の貼付文を施すが、336は刺突ではなく押圧による不明瞭なものである。文様は337が横位に巡る部分の他は三角形の区画文が看取され、このうち336は区画内に沿う沈線が看取され、338は縦位の区画部を持ち相対する構成と思われる。帯状内には細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

340～342は平口縁で、文様は340が三角形の区画文、この他は横位に巡る部分が看取され、このうち340は区画内に充填すると思われる沈線が看取され、帯状内には何れも縄文が看取されないものである。

343～350は刻みを持つ横位隆帯の単位が不明瞭なもので、343～346は文様帯部を欠損するもの、347～349は口端部を欠損するもの、350は横位隆帯のみ看取されるものである。

343～345は1条、346は2条看取されるもので、何れも平口縁で、343・344は隆帯上、346は隆帯間に8字状の貼付文を施す。

347～349は1条看取されるもので、347・348は8字状の貼付文を持つが、347はこの上位を欠損する。文様は347が貼付文下に褶曲部を持つ三角形ないし楕円状の区画文と思われ、348は三角形の区画文、349は横位に巡る部分が看取され、帯状内には細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

350は口端及び文様帯部ともに欠損するもので、横位隆帯は1条看取される。

351は平口縁で、口端部に押圧による円形の刻みを施し、これが平位の8字状に看取される。この下位にはやや斜状を呈する横位の文様部が看取され、帯状内には原体LRを充填する。

352は波状口縁で、波状部に渦巻状の沈線文を施し、これから並行する2条の横位沈線を巡らし、この上位には渦巻状に沿うような弧状の短沈線文が看取される。

353～388の胴部片は、並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出するものを主とし、このうち353～363は三角形や菱形の文様が看取されるもの、364・365は方形状と思われる区画文が看取されるもの、366～384は区画内に沈線を充填する文様が看取されるもの、385・386は文様が部分的に看取されるもの、387・388は沈線のみで縄文帯の看取されないものに大別される。

353～363は細縄文を含め何れも原体LRを充填する縄文帯を持ち、353～357・363は三角形、358～362は菱形の区画文部が看取される。このうち353～355は扁平的な区画文と思われ、356・358～363は区画内にさらに三角形や菱形文を描出する重状構成を呈し、359・360は菱形が繋がるX状部が看取される。

364・365は方形状と思われる区画文の端部が看取され、364は区画内を三角形に画すると思われる斜位の並行沈線が看取され、区画内に原体LRを充填する。365は原体LRを充填する縄文帯で区画し、区画内には横位の凹状を呈する曲線的な沈線文を施す。

366～384では縄文帯をなす区画文部が看取されるものと、沈線文部のみが看取されるものがあり、前者の縄文帯は細縄文を含め何れも原体LRを充填する。看取される沈線文は、366は三角形の区画文を挟むような横位、367は区画内に沿う三角形、368・369は縄文帯に沿う斜位、370・371は斜位、372は縦位沈線を挟む縦矢羽状、373・374は三角形、375～382は菱形に充填すると思われる。このうち、371は区画の沈線に交差する方向に施し、374は三角形を相対する菱形と思われ、375は三角形ないし菱形状を呈する可能性があり、376・377は縦矢羽状を呈する下半部を主とし、381は菱形が繋がるX状部が看取され、382はやや方形を呈する。383・384は円形状を呈する曲線的な区画内に沿って充填する。

385・386は横位に巡る文様部が看取され、縄文帯は細縄文を含め何れも原体LRを充填する。

387は菱形が繋がるX状部、388は横位に巡る文様部が看取され、388は径5.9cmを測る。

389～391は並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出し、帯状内は細縄文を含め何れも原体LRを充填する縄文帯をなすもので、389は口縁部片、390は胴部の大型片、391は胴部片に大別される。

389は平口縁で、横位に巡る文様部が看取される。390は最大径22.0cm・残存高9.3cmを測り、菱形の区画文を描出して区画内には三角形を相対するような菱形の沈線文を充填するが、沈線は縦位を主に施す。また区画文の連結下にあたる三角形の区画内には、区画に沿って沈線文を充填する。391は横位に巡る文様部が看取される。

2類 392～394が相当し、口縁部が括れて外反する形状の「金魚鉢形」を呈する鉢で、392・393は口縁部片、394は胴部片に大別される。

392・393は刻みを持つ細い隆帯を施すもので、392は平口縁で、外・内面の口端下には重弧状と思われる縦位の短沈線文を施し、外面には隆帯を1条垂下する。393は口端部を欠損し、頸部に横位隆帯を1条巡らし、これに懸垂して繋がる隆帯が僅かに看取され、この結部には円形の貼付文、またこの下位には弧状の沈線文を施す。

394は頸部に8字状の貼付文を施し、この下位には渦巻状ないし対弧状と思われる曲線的な沈線文が看取され、これを単位に垂下して区画する構成と思われ、区画内には原体LRの細縄文を充填する。

4類 395～398が相当し、粗製的と思われる沈線文を施す深鉢で、395は口縁部片、この他は胴部片に大別される。

395は平口縁と思われ、横位沈線を1条巡らした下位に横位の重弧状や斜位の沈線文を施す。

396～398は斜格子状の沈線文を施すもので、396は沈線文の上位に並行する2条の横位沈線を巡らして区

画し、397は地文に原体LRを斜位施文後に沈線文を描出し、398は2条単位と思われる縦位の沈線文を施文後に斜位沈線を交差させ、粗い斜格子状を呈する。

5類 399~411が相当し、399~401は把手部片、402・403は口縁部片、この他は胴部片に大別される。

399~401のうち、399は吊り手状を呈する把手部片で棒状を呈し、磨き整形が顕著で上位側に黒斑が看取される。400・401は横状を呈する把手部片で、何れも磨き整形が顕著である。

402は平口縁、403も平口縁と思われ、402は口端部を肥厚して鉤状に外傾する形状を作出し、並行沈線による帯状の区画でやや曲線的な三角形の文様を描出し、帯状内に原体LRを充填する。403は口端下に巡る1条の横位隆帯から2条単位の隆帯を懸垂して方形に区画し、区画内には並行する斜位沈線や隆帯に沿う縦位沈線が看取され、三角形に画する構成と思われる。

404~411は並行沈線による帯状の区画で幾何学的な文様を描出し、沈線間の帯状内や区画内が縄文帯をなすものである。404・405は同一個体と思われ、横位から縦位に垂下する曲線的な文様を描出し、縄文帯は原体LRを充填する。また無文帯部には刻みを持つ細い隆帯を施し、この端部には8字状の貼付文を施す。406は円形状の区画文を上下に連結する8字状文を描出し、帯状内や区画内の縄文帯は原体LRを充填する。407は円形状ないし対弧状の曲線的な区画内に沿って沈線を充填し、縄文帯は原体LRの細縄文を充填する。408は三角形、409~411は横位に巡る文様部が看取され、このうち409・410は2段看取される上位がやや弧状を呈し、曲線的な文様を描出すると思われ、縄文帯は何れも原体LRの細縄文を充填する。

V群

1類 412~418が相当し、412~417は深鉢の口縁部片、418は胴部片に大別される。

412~417のうち、412は幅狭な並行沈線を横位に巡らす文様が看取されるもの、413は並行沈線による帯状の区画内が縄文帯をなすもの、414~417は外面の文様帯部を欠損し、内面の文様が看取されるものに大別される。

412は平口縁で、2条看取される幅狭な横位沈線間に原体LRを充填する。内面には口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、円形の貼付文を施す。この下位には2条看取される幅狭な並行沈線を横位に巡らし、貼付文から縦位の区切り文を施す。

413は波状口縁で、波状部の割れ口部で円孔が看取される。横位沈線による帯状内に原体LRを充填し、この上位には円孔を囲むような横位のC字状ないしの字状を呈する沈線文を施す。内面には口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、この下位には円孔に沿う縦位の弧状短沈線と、幅狭に並行する2条の横位沈線を施す。

414~417のうち、415が平口縁の他は波状口縁で、414は波頂部、416・417は口端に刻みを施すが、417の刻みは細く不明瞭である。また何れも内面口端下に横位の微隆帯を1条巡らし、414~416は微隆帯の上位に沿って横位に連続する刺突文を1列施し、416・417は微隆帯上に細かな刻みを施し、この下位には幅狭に並行する横位沈線が416・417で2条看取され、414は割れ口部で1条看取される。外面は何れも磨き整形で、414は割れ口部で横位沈線が1条看取される。

418は大型片で、並行沈線による帯状の区画を横位の波状に巡らす文様部が看取され、帯状内には原体LRを充填し、この下位に沿って波状を呈する横位沈線を1条巡らす。この文様帯の下位は左上から右下への磨き整形が顕著で、内面には上位の割れ口部で横位沈線が看取される。

2類 419が相当し、胴部片である。幅狭な並行沈線を横位に巡らして沈線間に刻みを施すもので、並行沈線は5~6条、刻みは無文帯を挟んで2段看取される。

Ⅷ群

1類 420～422が相当し、深鉢の口縁部片である。何れも平口縁で、撫での整形痕が浅い沈線状に看取され、420は横位や斜位、421は横位、422は縦位の整形痕が顕著である。

2類 423が相当し、注口部片である。比較的短い注口部で、撫で整形痕が顕著である。

3類 424～444が相当し、底部片を一括する。424・425は底面に網代痕を持たないもの、426～443は底面に網代痕を持つもの、444は底面に木葉痕を持つものである。

424は下位に横位の撫でを施すもの、425は大きく外傾する器形を呈するもので、径は424が10.8cm、425が8.8cmを測る。

426～443のうち、427・428・430～434・436は張り出す器形を呈し、435は底部、443は底面のみの破片で、この他は外傾する器形を主とする。径が推定し得るものは、426が13.2cm、427が10.8cm、428が15.6cm、429が10.0cm、430が13.4cm、431が13.0cm、432が11.0cm、433が11.0cm、434が8.0cm、435が6.7cm、436が8.0cm、437が12.4cm、438が6.0cm、439が9.2cm、440が10.0cm、441が9.0cm、442が10.4cmを測る。これらは撫でや磨き整形が施されるものであるが、438では幅狭な並行沈線の帯状内に原体LRの細縄文を充填する文様が僅かに看取される。また435の底面は外縁が摩耗しており、網代痕を切る撫でが看取される。

444は外傾する器形を呈し、径は10.8cmを測る。

Ⅷ群 445が相当し、深鉢の胴部片で、原体LRを横位施文する縄文のみが看取される。

耳栓

446の1点で、6E-10グリッドのⅢ層から出土している。半部を欠損するが、側面部が僅かに括れて膨らむ形状を呈し、側面には押圧による円形文を施す。

土製円盤

447～452が相当する。文様は、447・448で原体RL縄文、449で原体LRと思われる縄文、452で並行する弧状沈線が看取される他は無文である。側面は449が部分的に研磨する他は何れもほぼ全周を研磨する。

時期不明土器

453～455が相当し、何れも胴部片であるが器形等も含め不明確なものである。

453・454は同一個体と思われる、撫で整形による無文で、453は括れて外反する器形と思われる。何れも器面が脆く摩耗しており、二次的な被熱によると思われる。

455は擦痕状を呈する細い横位沈線が2条看取され、この下位は磨き整形による無文である。

7区 (第322図：PL141)

3期

Ⅳ群

2類 1が相当し、深鉢の口縁部片である。平口縁で、沈線で冂状の区画文を描出して斜位の短沈線文を縦矢羽状に充填すると思われる。

9区 (第322図：PL141)

4期

Ⅳ群

1類 1が相当し、直線的に開く形状の「朝顔形」を呈する深鉢の口縁部片である。平口縁で、横位隆帯の剥離部が看取され、刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らすと思われる。この下位には並行沈線による帯状の区画で三角形の区画文を描出し、帯状内には原体LRの細縄文を充填する。また区画文の端部には斜位に屈折する部分が看取され、貼付文下の褶曲部と思われる。

土製円盤

2が相当し、並行沈線を縦位から斜位に繋げる文様が看取され、側面はほぼ全周を研磨する。

時期不明土器

3が相当し、深鉢の胴部片と思われる。細い横位沈線が1条看取され、この下位に原体Lを縦位施文する。前期の可能性も想定されるが判然としない。

94区 (第322図：PL141)

土製円盤

1が相当する。文様は無文で、側面はほぼ全周を研磨する。

(2) 石器

平成8年度までの調査における遺構外からの出土石器は、製品やその可能性を含むものの総点数で約1,176点を数える。各区ごとの内訳では2・3区で約6点、4区で約47点、5区で約875点、6区で約223点、7区(一部6区を含む)で約5点、9区で約2点、94区で約1点、96区で約1点、97区で約1点、遺構ながら区不明のものが約4点、時代別遺構からの出土したものが約11点などである。このように、点数的には土器と同様に5区からの出土量が圧倒的で、次いで6区、4区の順となる。また器種別には、遺構外出土の総数で石鏃が約414点・石鏃が約69点・石槍が約1点・石匙が約8点・スクレイパーが約183点・打製石斧が約218点・磨製石斧が約33点・石核が約5点・磨石が約75点・凹石が約101点・多孔石が約16点・石皿が約30点・石棒が約14点・垂飾が約3点・石製品が約6点を数え、各区ごとの内訳については以下の本文中に述べるが、分布的な出土傾向は上記の出土総点数と同じ様相を呈している。また層位的にはIII層がややIV層を上回る状況が認められる。さらにチップ等を含む剥片類は約6,973点を数える。こうした石器類については、製品やその可能性を含むものなどについて、良品や特徴的と思われる資料を取り上げて図示した。以下、石器を各器種ごとに大別し、各区ごとに観察する。

2・3区 (第323図：PL142)

石鏃 2点出土している。1・2とも凹基無茎鏃で、1は三角形、2は先端部を欠損するが二等辺三角形の平面形を呈する。側縁は1ではやや弧状に膨らむような形状、2では脚部付近に僅かに弧状を呈する部分が看取される。以上の石材は何れも黒曜石である。

石匙 1点出土している。1は摘み部を持つ横長の長楕円状の平面形を呈すると思われるが、摘み部を残して半部を欠損する。側縁には細かな剝離調整が施され、刃部は直線的な形状と思われる。以上の石材は流紋岩である。

スクレイパー 1点出土している。1はスクレイパーとしたもので、縦長の剥片を素材とすると考えられ、上端部が鋭角状に窄まるような楕円状の平面形を呈し、右側縁から下端部を主に連続する剝離痕が看取される。以上の石材は黒色安山岩である。

打製石斧 1点出土している。1は分銅形を呈する比較的大型のもので、上・下の両端部を刃部とするものと思われ、上端部が直線的、下端部が緩い弧状の平面形を呈する。以上の石材は黒色頁岩である。

4区 (第323・324図：PL142)

石鏃 3点出土している。1・2は平基無茎鏃、3は凹基無茎鏃である。1は基部左側に緩い弧状を呈する凹部が看取されるが、残る右側は直線的で、平基と考えられる。側縁にも凹部が看取されるが、平面形は三角形を呈する。2は基部の右側端部を欠損すると思われるが、3辺とも直線的な形状で、平面形は二等辺三角形を呈する。3は挟りの深い凹基鏃で、側縁は直線的で平面形は二等辺三角形を呈する。以上の石材は1・2が黒曜石、3がチャートである。

石鏃 3点出土したうち、2点を図示した。1は摘み部を持たないもので、刃部先端を欠損するが、両側縁に細かな剝離調整が看取される。2は横長の摘み部の破片で、刃部は折れて欠損している。摘み部の上端中央には僅かに挟れる部分が看取され、平面形はハート形状を呈している。以上の石材は何れも黒曜石である。

打製石斧 20点出土したうち、15点を図示した。これらは形状等から、1～8が短冊形、9～15が楕円形に大

別されるが、不明確な属性のものを含む。短冊形としたもののうち、3～5・8は表面に自然面が残り、1次のな剥片を素材とすると思われる。平面的な形状では、3・7は両側縁が直線的で明瞭な形状を呈するものと思われる。これ以外では、1・2・6は片側縁が直線的で、残る側縁に抉れるような凹部や突部・弧状に膨らむような部分が看取され、4・5・8は刃部側が僅かに撥形状に開くような形状と思われる。撥形としたもののうち、9は片側縁が直線的で残る側縁が斜状に開く形状を呈し、10・11は片側縁に弧状に反るような形状が看取される。12～15は括れるように側縁の刃部側が膨らむ形状を呈し、12は刃部を欠損するが14までは鋭角的な弧状を呈する平面形の刃部と思われ、15の刃部は緩い弧状の平面形を呈する。以上の石材は1・12が珪質頁岩、2～4が黒色頁岩、5・6・8・9・11・14・15が細粒輝石安山岩、10が粗粒輝石安山岩、7が変質安山岩、13が頁岩である。

磨製石斧 1点出土している。1は基部側のみで刃部側の半部を欠損している。丁寧に研磨して整形しており、撥形に開く平面形と思われ、基部や下端部には剥離による欠損部が看取される。以上の石材は変質安山岩である。

石核 1点出土している。1は比較的小型のもので、やや不整な台形状の平面形を呈し、回転させるように打面を転移しながら剥片剥離を行ったものと思われる。以上の石材は珪質凝灰岩である。

磨石 6点出土したうち、2点を図示した。1は長楕円状を呈する球状の円礫、2は隅丸長方形形状を呈する縦長の扁平な円礫を素材とし、2の下端部には敲打によると思われる剥離痕が看取される。以上の石材は何れも粗粒輝石安山岩である。

以上、4区から出土した石器について記載したが、この他にスクレイパーとしたものが4点出土しているが、図示は行わず未掲載としたものである。

5区 (第325～346図: PL143～153)

石鏃 332点出土したうち、110点を図示した。1～3が有茎鏃、4～22が平基無茎鏃、23～98が凹基無茎鏃、99～110が円基鏃や大型の石鏃として大別されるが、不明確な属性のものを含んでいる。

1～3は何れも平基有茎鏃と思われるが、2は脚状に突出するような形状を呈している。1・2は鏃身の先端を欠損し、また基部は1が端部・2が基部以下を欠損するが、鏃身の側縁は何れも直線的で、二等辺三角形形状の平面形を呈する。3は茎部が長く延びる形状で、鏃身の側縁は直線的で三角形形状の平面形を呈する。

4～22は平基としたが、10・12・17・19・23などの基部には僅かながら凹状を呈する部分が看取され、また9は基部が折れている可能性がある。これらの側縁部は全体的には直線的な形状を呈するものが多いが、12は片側縁が僅かに弧状に膨らむような形状、17は弧状に膨らむ基部側から先端部が直線的に窄まる形状を呈する。また7・18は抉れるような凹部、22は片側縁が弧状に反るような形状が看取され、さらに16では両側縁に括れるような凹部を持って先端部が直線的に窄まる形状を呈する。これらの平面形は、不整なものを含むが4～10が三角形形状、11～22は幅広や幅狭などの差はあるが二等辺三角形形状を呈し、このうち19～22は比較的大型のもので、19はやや幅の広い形状、20～22は幅の狭い細長いような形状を呈する。

23～98は凹基としたが、23～47は比較的持ちが浅く不明瞭なものである。これらのうち23・26～30・32～34・41・44・45などは平基との判別が難しいと思われるもので、特に29・30は基部の片側に脚と思われる突部を持つ他は直線的な平面形状を呈している。これらの側縁部は直線的な形状を呈するものが多いが、38・43・44などは弧状に膨らむ基部側から先端部が直線的に窄まる形状、45は両側縁が膨らむような緩い弧状の平面形を呈する。また39は細かな剥離調整が施される右側縁が直線的、残る左側縁では調整が看取されない部分

が僅かに弧状に膨らむような形状を呈する。これらの平面形は、不整なものを含め23・26・29・31・34・40は三角形状、27・28・32・33・41~47は幅広や幅狭などの差はあるが二等辺三角形状を呈し、このうち47は比較的大型のものである。

48~92は挟りが明瞭と思われるもので、凹部は弧状や三角形の平面形を呈し、緩く挟れるものや小さく挟れるものと、鋭角状などに深く挟れて脚部の突出が明瞭なものに大別され、前者を48~67まで、後者を68~92までと見たが、48は両脚の端部を欠損し、66・68などは片側の脚部のみが突出する形状を呈し、82・83などは弧状に大きく挟れるが比較的緩いような形状と思われるものなど、不明瞭なものを含む。これらの側縁部は直線的な形状を呈するものが主体であるが、49・55・57・65・66・91・92などは弧状に膨らむ基部側から先端部が直線的に窄まる形状、51・69などは片側縁が直線的、残る側縁が弧状に膨らむような形状、52・63などは側縁に挟れるような凹部や細かな凹凸が看取される形状、54・59・84などは両側縁や片側縁が弧状に反るような形状を呈するものなどが見られる。これらの平面形は、不整なものを含め48・54・55・66・68・84~92は三角形状、49~53・56~65・67・69~83は幅広や幅狭などの差はあるが二等辺三角形状を呈し、これらのうち76~83は比較的大型のものである。

93~98は、側縁に括れ部や括れるように反る形状が看取され、先端部が鋭角状に窄まる形状を呈するもので、特に97・98の側縁には鋸歯状を呈する細かな剝離調整が顕著である。平面形は何れもやや不整な二等辺三角形状を呈している。

99~110は大型の石鏃で、110は基部を欠損し、103・104・105・107・109が平基、この他は円基状を呈し、110が不明な他は何れも無基である。側縁は99・105・110が直線的と見られる他は、100・102~106で弧状に膨らむような形状、101・108で細かな凹凸が看取される形状、107は片側縁が弧状に膨らみ、残る側縁に細かな凹部が看取され、109の側縁は反るような凹状を呈する部分が看取される。平面形は110が定形的な二等辺三角形状を呈すると思われる他は、不整な三角形や二等辺三角形状を呈している。

以上の石材は3~9・14~16・18・23~28・37~43・48~57・68~70・76~81・92~96・101・102・110が黒曜石(計51点)、1・2・11・12・19・20・30~36・59・60・63・67・91・97・98・103・104が珪質凝灰岩(計22点)、13・17・29・44・45・58・61・62・71~75・83~87・105・107がチャート(計20点)、46・47・64~66・88~90・99が黒色安山岩(計9点)、10・21・82・100が赤碧玉(計4点)、106・108が珪質頁岩(計2点)、22が黒色頁岩(計1点)、109が粗粒輝石安山岩(計1点)である。

石槍 1点出土している。1は「木葉形」状の平面形を呈するもので、横長の剝片を素材としている。両側縁は緩く弧状に膨らみ、先端部は直線的に窄まる鋭角、基部はやや鋭角状を呈する弧状の平面形状を呈し、側縁には連続する細かな剝離調整が施されている。以上の石材は黒色頁岩である。

石鏃 53点出土したうち、12点を図示した。1~5は明瞭な握み部を持たない縦長の形状を呈するもので、刃部の両側縁には連続する細かな剝離調整が施されている。6は刃部の破片で、上・下は折れて欠損している。比較的幅が広く、大型のものと思われる。7~12は握み部を持つものである。7~9は横長の形状を呈する明瞭な握みを有し、これから弧状に括れて刃部が延び、何れも両側縁に細かな剝離調整を施すが、8は先端を欠損している可能性がある。10は弧状に膨らむや縦長の握み部が看取されるもので、刃部の先端を欠損している。11はやや不整な方形形状を呈する大型の握みを持つもので、刃部は短く突出する形状である。12は括れる部分が看取されることから握み部を持つものと思われるが、上端部は折れて欠損している可能性があり不確定である。以上の石材は2~4・7・11がチャート、1・5・8が珪質凝灰岩、6・10・12が黒曜石、9が黒色頁岩である。

石匙 6点出土しているが、不明確なものを含む。1は定型的な石匙の完形品である。握み部は円形状、身部は横長の長楕円状を呈する平面形で、全体的に細かな剝離調整を施して丁寧に整形しており、刃部の平面形は緩い弧状を呈している。2は横長の長方形状を呈する平面形で、握み部は僅かに突出するような形状である。側縁や刃部には細かな剝離痕が看取され、刃部は直線的な平面形を呈している。3は隅丸な部分を持つ横長のやや不整な長方形状を呈する平面形を呈し、握み部は方形状を呈する。握み部の両側に主に剝離調整を施し、側縁部から刃部にかけては連続する細かな剝離痕が看取され、刃部は弧状の平面形を呈する。4は扁平な長方形状・5は台形状の平面形を呈する突起を持ち、身部は横長の長楕円状の平面形を呈しているが、側縁や刃部の剝離痕が不明瞭で、剥片などの可能性が強いものと思われる。6は縦長の形状を呈するもので、握み部は茎状に突出し、身部は側縁が膨らむやや不整な二等辺三角形状を呈し、握み部から身部上半の側縁に細かな剝離痕、以下の側縁には微細剝離痕が看取される。以上の石材は1がチャート、2が黒曜石、3が流紋岩、4・5が黒色頁岩、6が珪質頁岩である。

スクレイパー 116点出土しているが不明確なものを含み、42点を図示した。これらは大きさ等から、1~10が小型のもの、11~18が比較的小型のもの、19~42が中~大型のものと大別される。

1~10のうち、1~9は縦長、10は横長の形状を呈するものである。前者のうち、4はほぼ全周に細かな剝離痕が看取され、この他は上・下端部や両側縁の何れかを主に細かな剝離痕や微細剝離痕が認められるものである。特に1・5~8は上・下端部を主に細かな剝離痕や微細剝離痕が看取されるもので、楔形石器とされる可能性を含むものである。10は横長の剥片を素材とし、下端側にあたる側縁には抉れるような凹部があり、上端側から右側にあたる側縁を主に細かな剝離痕、この他の側縁には微細剝離痕が看取される。このため主たる刃部は上端側と思われ、この平面形は弧状を呈する。

11~18のうち、11~16は縦長、17・18は横長の形状を呈するものである。前者のうち、11は両側縁に細かな剝離痕が看取され、特に左側が顕著である。平面形は両側縁が緩く弧状に膨らみ、先端が鋭角的に窄まる木葉形状を呈し、形状的には石槍の可能性を含むものと思われるが不明瞭である。12は左側縁、13・15は下端部、14は両側縁、16は左側縁を主に剝離痕が看取され、形状的に13・15は楔形石器とされる可能性を含むものと思われる。17・18は下端部にあたる側縁を主に剝離痕が看取され、この平面形は何れも直線的な形状を呈するが、17は上端部に突起が看取され、断面形は肉厚な鈍角状であり、石錐の握み部の天地を逆に認識したものである。

19~42のうち、19~30は縦長、31~42は横長の形状を呈するものであるが、29は定型的な方形状の平面形を呈している。19~30のうち、19は右側縁、20・30は上端部を除く3辺、22は下端部、25・27・29は上・下端部に剝離痕が認められる。また21・26は上端部を除く3辺、24は下端部、23は上・下端部、28はほぼ全周に剝離痕や微細剝離痕が看取される。これらのうち、形状的に25・27・29などは楔形石器とされる可能性を含むものと思われる。31~42のうち、31は下端部に微細剝離痕が看取されるが不明瞭で、形状等から打製石斧などの調整剥片である可能性が強いと思われる。32は上端部を除く3辺に微細剝離痕、33は上端部を除く3辺に剝離痕、34・35・39~41は下端部を主として側縁にかけて連続する細かな剝離調整、36は側縁に部分的な剝離痕や微細剝離痕、37は右側縁から下端部を主に剝離痕や微細剝離痕、38はほぼ全周に剝離痕や微細剝離痕、42は上・下端部を主に剝離痕が看取される。これらのうち、比較的刃部が明瞭に認められるものは34・35・38~41であり、刃部の平面形は34・35・38・40が直線的、39・41がやや弧状を呈する形状である。

以上の石材は16・20・24・26・27・29~31・33・37・38・40が黒色頁岩、2・6・7・12・22・25・28・35が黒色安山岩、15・17・21・32・34が珪質頁岩、18・19・39・41・42が細粒輝石安山岩、9・11・36が珪

質凝灰岩、1・10が黒曜石、3・23が赤碧玉、5・8がチャート、13・14が珪質変質岩、4が流紋岩である。**打製石斧** 160点出土したうち、48点を図示した。これらは形状等から、1～23が短冊形、24～38が撥形、39～48が分銅形、49がその他と大別されるが、欠損しているものについては可能性を含むものがある。

短冊形とした1～23は、長さに対して幅の狭い形状のものが主体的であるが、22・23などは幅が広く、特に23は基部側の半部を欠損しているが大型品と思われる。素材的には、表面に自然面の残るものが多く、原石の周囲を削ぐように作出した1次的な剥片を素材とすると思われ、特に5・15は表面の殆どを自然面が占め、5は横長、15は縦長と考えられる剥片を素材としている。また剥片の形状としては、前記の他に3・6・9・14・18・22・23などが横長、2・4・12・21などが縦長の剥片を素材とすると思われる。また20は両面に節理による剝離面が認められ、板状の剥片を素材とすると思われる。側縁の平面形では、10・13などは刃部側の側縁が僅かに撥形状に開くような形状を呈し、また3・14などは片側ないし両側縁が膨らむような弧状を呈する形状が看取される。刃部や基部の平面形では、緩いものを含め弧状を呈するものや直線的な形状が多く、これらのうち1・2・5は両端部ともに弧状を呈し、全体的には長楕円状の平面形状を呈するもので、また14は両端部・19は基部の平面形が鋭角的に窄まる弧状を呈している。さらに22の基部は斜状を呈するが、折れて欠損したものを再調整した可能性が考えられる。

撥形とした24～38は、刃部側に最大幅を持ち、この幅に対して縦長の形状のものが主体であるが、29～30は幅と長さが近い寸胴な平面形状を呈する。素材的には、上記の短冊形と同様で表面に自然面の残るものが多く、1次的な剥片を素材とすると思われ、特に27・36などはその殆どを自然面が占めている。また剥片の形状としては、29～31・34・37などが横長、27・32・33・35・36・38などが縦長の剥片を素材とすると思われる。側縁の平面形では、25は片側が直線的で、残る側縁が括れるように弧状に膨らむ形状を呈している。また26・31・38は刃部側の両側縁が僅かに括れるように膨らむ形状を呈し、刃部を欠損すると思われる34もこれに類する形状と思われる。この他に32・35は刃部側の開きが不明瞭で、短冊形に近いような形状で、32の右側縁には括れるような凹部があるが、欠損したものである。刃部や基部の平面形では、緩いものを含め弧状を呈するものや直線的な形状が多いが、24の基部は幅状に窄まる形状、37の基部は鋭角的に窄まる形状を呈している。

分銅形とした39～48は、39・40が比較的小型の他は大形品が多く、特に48は形状等において特徴的と思われる。また、括れ部の挟りが明瞭なものとやや不明瞭なものが見取される。素材的には、39・41・43・45～47の表面に自然面が残り、特に39はその殆どを自然面が占める1次的な縦長の剥片を素材とし、挟り部を主として側縁に剝離調整を施している。また剥片の形状としては、前記の他に42が縦長の剥片と思われ、また48は両面に節理による剝離面が占め、板状の剥片を素材としている。側縁の平面形では、45の挟り部がやや浅く不明瞭と思われる他は、ほぼ左右対称となる挟り部が看取され、このうち40は基部側に挟り部を持ち、また47は上半部を欠損するが左側縁に深い挟りを持つものと思われる。また39～44・47は比較的深い挟り、45・46・48は両側縁が弧状に反るように大きく括れる形状を呈している。両端部の平面形は、緩いものを含め弧状を呈するものが主体的であるが、44・46・47の下端部は直線的な形状を呈し、48は直線的に近いような緩い弧状を呈している。また42の両端部には使用痕と思われる摩滅痕が看取される。

49は上記の大別では短冊形に含まれる形状と思われるが、表面に自然面が残る肉厚なもので、礫を素材として表皮を削ぎ取るように剝離調整を施したものと考えられ、平面形は側縁の右側が直線的、左側には突部が看取され、両端部は弧状を呈するもので、形状等では石核の可能性を含むものと思われる。

以上の石材は6・14～18・20～23・26・34～38・42・46が細粒輝石安山岩、2・4・12・28・29・31～33・

41・44・45が黒色頁岩、5・7・13・27・39・40・47～49が粗粒輝石安山岩、3・8・9・30が頁岩、19・24・25・43が珪質頁岩、10・11が変質安山岩、1が変玄武岩である。

磨製石斧 23点出土したうち、13点を図示した。これらは大きさ等から、12・13が小型品として大別され、この他は1～3が完形、4は刃部側のみで基部側を欠損するもの、5～9は基部側のみで刃部側を欠損するもの、10は刃部側に再調整と思われる剥離痕の看取されるもの、11は側縁部のみ看取される破片である。

1～11は、何れも楕形に開く平面形と思われ、1・2・7～9は幅が狭く細長いような形状、この他は幅が広い形状を呈している。1は刃部に剥離した欠損部があり、2は刃部や基部・表面に敲打等によると思われる細かな凹みや剥離痕が看取される。3は長さに対して幅の広い寸胴な平面形で、また断面が厚みのある形状を呈し、刃部の整形痕(研磨痕)が顕著であることなどから、刃部側の半部が折れて欠損したものを再調整した可能性が考えられる。4は全体的に表面が粗く劣化しており、被熱によるものと思われる。5～10には、表面に敲打や地の面の残りと思われる浅い凹状を呈する痕跡が看取され、また8～10には剥離痕があり、特に10は刃部に集中するため再調整によるものと思われる。11は断面に厚みがあり、大型の形状を呈する可能性を含むものである。

12・13は小型品である。12は楕形に開く平面形で、丁寧に研磨して整形しており、線状の整形痕が看取される。13は楕円状の平面形を呈し、丁寧に研磨されているが刃部側と思われる端部に欠損部があり、刃部は不明瞭である。形状的には整形途中の未製品の可能性も推測されるが、不確定である。

以上の石材は1～3・5～9・11が変玄武岩、12・13が変質蛇紋岩で、4・10はホルンフェルスの可能性が示唆されるものである。

石核 4点出土したうち、2点を図示した。1は上端部に自然面が残り、上面観での平面形はやや不整な台形状、正面観での平面形は逆三角形形状、立体的にはやや錐状の形態を呈する。打面を転移しながら連続的な剥片剥離を施したと思われ、形状的にはさらに三角錐状に長い形態であったと考えられる。2は不整な長方形形状の平面形を呈し、珪化している石材のため地の面に相当すると思われる凹部が多数看取される。このため剥片剥離の単位が不明瞭であり、原石の可能性が強いものと思われる。以上の石材は1が黒曜石、2がぎょくずいである。

磨石 57点出土したうち、24点を図示した。これらは礫の形状等から、1～15が楕円状・長楕円状・隅丸方形状などの平面形を呈する扁平な円礫、16～20が円形状・楕円状などの平面形で肉厚な球状を呈する円礫、21～24は長楕円状・長方形形状などの平面形を呈する縦長の礫を素材とするものに大別される。

1～15は、断面の厚みに差はあるが、扁平な円礫を素材としている。平面形は、不整なものを含め1・5・6・10が隅丸長方形形状、9・11・12が長楕円状と思われる他は楕円状を呈する。磨り面は、12が片面のみの他は両面に認められ、14・15には浅い凹み、13には傷状の浅い凹みが看取される。

16～20は断面に厚みを持つ球状の円礫を素材とし、平面形は19がやや楕円状を呈する他は円形状を呈し、磨り面は何れも両面に認められる。また20は両面に浅い凹みが看取される。

21～24は、24が長方形形状の平面形で縦長の棒状を呈する円礫を素材とする他は、板状の小礫を素材とする小型品である。21～23は長楕円状を呈する縦長の平面形で、両面の他に側面にも研磨した痕跡が看取されるものである。

以上の石材は1～9・11・13～19・23が粗粒輝石安山岩、10・12が変質安山岩、20がひん岩、21が雲母石英片岩、22が黒色片岩、24が珪質変質岩である。

凹石 81点出土したうち、38点を図示した。これらは素材となる礫の形状や、看取される凹みの状態などに

よって大別される。

1～15は扁平な円礫を素材とし、両面に凹みが看取されるものである。平面形は、不整なものを含め4が円形状、7・8が隅丸の方形・長方形と思われる他は、楕円状や長楕円状を呈し、凹みは浅いものを主体に1～数点が看取される。特徴的なものとして、4は両面の中央に明瞭な凹みを持ち、裏面は3点が集中するものである。また10・11・15では縦位に連続する凹みが看取される。

16～23は断面に厚みを持つやや扁平ないし球状の円礫を素材とし、両面に凹みが看取されるものである。平面形は、不整なものを含め20が隅丸形状と思われる他は、円形状や楕円状を呈し、浅い凹みが1～数点看取されるものが主体的であるが、16・18では多数看取され、また21は上端部・20では裏面の側縁を主に浅い剝離状の凹みが認められる。

24～32は、扁平な円礫を素材とし、片面に凹みが看取されるものである。平面形は、不整なものを含め27がやや隅丸長方形と思われる他は、楕円状や長楕円状を呈し、凹みは1～数点が主体的である。特徴的なものとして、24・25は片面が全面的に石皿状に凹む形態のもので、石製品として区分すべきものとも思われ、また24には地の形状と思われる凹部が看取される。さらに29では、縦位に連続する凹みが裏面で看取される。

33・34は、断面に厚みを持つ球状の円礫を素材とし、片面に凹みが看取されるものである。平面形は何れも円形状を呈し、凹みは33が中央に1点・34が中央に集中して数点看取される。また34は側縁部にも凹みを持ち、さらに剝離状の欠損部が認められる。

35～38は縦長の棒状を呈する円礫を素材とし、両面に凹みが看取されるものである。平面形は、不整なものを含め何れも長楕円状と思われるが、35・38は半部を欠損している。断面は37が扁平な他は厚みを持つもので、特に38は楕円状の形状を呈している。凹みは浅いものが1～数点看取されるものが主体的であるが、35はほぼ相対する凹みが1点づつ認められる。また形状的に特徴的なものとして、38は棒状に磨り上げて整形しているものと思われ、石棒の可能性を含むものである。

以上の石材は1～7・12・15～17・21～23・26～32・34～36が粗粒輝石安山岩、9～11・19が珪質変質岩、13・14・18・20が石英閃緑岩、8がひん岩、24がスコリア、25がスコリア質安山岩、33が角閃石安山岩、37が変質安山岩、38がデイサイトである。

多孔石 15点出土したうち、13点を図示した。これらの素材となる礫は何れも大型で、礫の形状等で13を除いて同様な形状の礫を素材としている。

1～12は角張るような大型の礫を素材とし、不整形ながら1～6は方形・長方形・台形状など、7～12は三角形・菱形などの平面形を呈し、9を除いて両面に多数の凹みを有するが、2の裏面は図示していない。これらの断面は、1・3はやや定型的な長方形を呈し、また9・10などは扁平な形状と思われる。特に9は表面のみに凹みを有するもので、裏面は平坦な形状を呈することから、元となる多孔石の表面が節理状に欠損した可能性が推測される。これとは逆に、10は両面に凹みを有するもので、剝片状に割れた礫を素材とした可能性が考えられる。また、規則的とするには不明確な様相ではあるが、1の裏面は縦位に連続するような凹み、2では直線的に連続する凹み、7ではほぼ同様の凹みが横位に3点並ぶ部分などが看取される。

13は楕円状の平面形を呈する大型の円礫を素材とするもので、両面に比較的細かな凹みを多数有し、図示はないが両側面にも凹みが多数看取される。

以上の石材は全て粗粒輝石安山岩である。

石皿 28点出土したうち、10点を図示した。これらは何れも大型の礫を素材とし、5を除いて扁平な形状を

呈し、1・2は多孔石の機能を有するもの、3・4は素材の形状を生かすような平坦な機能面を持つもの、5～8は機能面が緩い皿状に湾曲するもの、9・10は機能面に明瞭な縁を持ち、定型的な整形を施したものと大別される。

1は長楕円状を呈する平面形と思われ、機能面は平坦で両面に凹みが看取される。2の機能面は緩い皿状に湾曲する形状で、裏面に多孔石の機能を有している。3はやや不整な長楕円状、4は半部を欠損するが隅丸長方形状と思われる平面形で、3は両面・4は片面に機能面が認められる。5は断面に厚みを持つ形状を呈し、6は不整な長楕円状の平面形を呈し、中央が凹むように浅く湾曲している。7・8は側縁部の破片で、機能面は深く湾曲している。9は長楕円状を呈する平面形と思われ、機能面は明瞭な縁を持って凹む平坦な形状で、断面は箱形状(凹状)を呈している。10も機能面の断面が箱形状(凹状)を呈するもので、上・下端部を欠損するが縦長の平面形と思われ、裏面に脚部を作出している。脚部は横位に並んで対になる2点が認められ、この平面形は方形ないし長方形状を呈する。全体的な脚数については、上・下端部を欠損するため不確定である。

以上の石材は2～6・8～10が粗粒輝石安山岩、1がひん岩、7が緑色片岩である。

石棒 13点出土したうち、6点を図示した。これらは形状等から、1・2は頭部を持つもの、3～6は欠損しており頭部等の全体的な形状が不明確なものに大別される。

1は先端部以下が折れて欠損しており、また先端には節理状に欠損している部分があり、特に半面が顕著である。残存する先端は平坦な形状で、頭部の平面形は半円状を呈するが、この中位に溝を施して脚状部を作出し、2段の形態を呈するものである。2は基部を欠損するもので、頭部は半円状の平面形を呈し、以下は棒状に磨り上げて整形している。3～6は太く大型のもので、3は半面が節理状に欠損している。何れも棒状に磨り上げて整形しているが、特に6は上端面を研磨して平坦な面を作出し、この面に多孔石の機能を有する特徴的なものである。

以上の石材は1・3が緑色片岩、4・5が流紋岩、2が黒色片岩、6がデイサイトである。

垂飾 2点出土している。1は大珠で、丁寧に研磨して整形しているが地の面にあたると思われる浅い凹部が僅かに看取され、平面形は下端部が斜状を呈する不整な長方形状を呈する。また中央や上端側に穿孔を施し、この断面は円錐形が相対するような〈状を呈することから、両面側から穿孔を施したものと思われる。2は下端側が窄まるような長楕円状の平面形を呈するもので、丁寧に研磨して整形しており、中央上端側に穿孔を施している。

以上の石材は2が葉ろう石で、1はひすい輝石か石英質岩の可能性が示唆されているものである。

石製品 4点出土したうち、明瞭なものを2点図示した。1は板状の扁平な製品で、上・下端部を欠損するが残存する側縁から楕円状の平面形を呈するものと思われる。また下端側の欠損部には、穿孔を施したと見られる円孔の半部が看取され、垂飾や漁具などの可能性が想定されるが不確定である。2は円形状の平面形を呈する球状の製品で、地の面にあたる浅い凹部が看取されるが磨った整形痕が看取されるものである。以上の石材は1が軽石、2がスコリアである。

6区 (第347～353図：PL154～157)

石鏃 62点出土したうち、21点を図示した。1が基部の形状が不確定なもの、2が平基無茎鏃、3～17が凹基無茎鏃、18～21が凹基鏃や大型の石鏃として大別されるが、不確定な属性のものを含んでいる。

1は基部を欠損するものであるが、平面的には有茎状の突部を持つものである。側縁は直線的で、平面形

は二等辺三角形形状を呈するものと思われる。

2は平基無茎錐で、平面形は二等辺三角形形状を呈するが、側縁は弧状に膨らむような基部側から先端部が窄まる形状を呈している。

3～17は凹基としたもので、これらの凹部の形状は弧状や三角形の平面形を呈し、緩く挟れるものや小さく挟れるものと、鋭角状などに深く挟れて脚部の突出が明瞭なものに大別され、前者を3～14まで、後者を15～17までと見たが、3・6・11などは片側の脚部のみが突出する形状を呈し、5は挟りは比較的浅いように思われるが、三角形に鋭く挟れるため脚部が突出するような形状を呈するものなど、不明確なものを含む。これらの側縁部は直線的な形状を呈するものが主体的であるが、6・13は先端部が括れるように内傾して窄まる形状、10は弧状に膨らむような形状、11は片側縁に挟れるような凹部、残る側縁に弧状に膨らむような部分が看取される形状、12・15は側縁に括れ部や括れるように反る形状が看取され、先端部が鋭角状に窄まる形状、16は側縁が僅かながら緩く弧状に反るような形状を呈するものなどが見られる。これらの平面形は、不整なものを含め5・9・10は三角形、3・4・6～8・11～17は二等辺三角形形状を呈し、特に14～17は幅が狭く細長いような形状を呈するものである。

18～21は大型の石錐で、18・19は平基、20・21は円基状を呈し、何れも無茎である。側縁は18・19は片側縁が弧状に膨らむ形状、20は基部側が弧状を呈する他は直線的な形状、21は凹凸のある形状を呈している。平面形は何れも不整な二等辺三角形形状を呈するが、18・19は幅広、20・21は幅が狭く細長いような形状を呈している。

以上の石材は1～6・11～13・15・21が黒曜石、7・8・16～18がチャート、9が赤碧玉、10が黒色安山岩、14が黒色頁岩、19が流紋岩、20が珪質変質岩である。

石錐 11点出土したうち、4点を図示した。1～4は明瞭な握み部を持たない縦長の形状を呈するもので、何れも刃部の両側縁には細かな剝離調整が施されている。1は上端部及び刃部先端を欠損し、2は左側縁を主に連続する剝離調整を施している。3は縦長の剝片を素材とする三角錐状の形態を呈するもので、4は左側縁の上端に突部が看取され、握みやこれに類する部分の可能性が考えられる。以上の石材は全て黒曜石である。

石匙 1点出土しているが、不明確な内容を含むものである。1は半月状を呈する突部が握み部と思われ、身部は横長の楕円状を呈する平面形で、握み部の基部や下端部を主に剝離痕が看取される。以上の石材は黒色頁岩である。

スクレイパー 58点出土しているが不明確なものを含み、22点を図示した。これらは大きさ等から、1～8が小型のもの、9～22が中～大型のものと大別される。

1～8のうち、2が横長、この他は縦長の形状を呈するものである。これらのうち、3はやや定型的な方形状を呈する平面形で、ほぼ全周に細かな剝離痕が看取される。この他は上・下端部や両側縁の何れかを主に細かな剝離痕や微細剝離が認められるものである。特に1・5・8などは上・下端部を主に細かな剝離痕が看取されるもので、楔形石器とされる可能性を含むものと思われる。

9～22のうち、9～13は縦長、14～21は横長、22は三角形の形状を呈するものである。9～13のうち、9は左側縁、10は下端部、11は左側縁から下端部、12は右側縁、13は両側縁を主に剝離痕が看取され、また9の上・下端部や12の左側縁などには微細剝離が認められる。素材的には、12・13などは縦長の剝片を素材とし、特に13は表面に自然面が残る1次的な剝片である。14～21は、下端部に当たる側縁を主に剝離痕や微細剝離が看取されるものである。これらのうち、14は上端部に自然面が残る、逆三角形の平面形を呈する。

15～18は片側の側縁が鋭角状に突出する平面形を呈し、特に16は抉れるように湾曲して上端部には摘み状の突起があり、何れも刃部にあたる下端部は直線的な平面形である。19は長方形の平面形を呈し、表面には自然面が残り、刃部にあたる側縁は直線的な形状を呈する。20・21は刃部にあたる下端部が弧状の平面形を呈するもので、何れも上端部には摘み状を呈する突起部を持ち、特に21は突起部から右側縁にかけて連続する剝離痕が看取される。22は形状的には鐔状を呈するもので、表面には自然面が残り、下端部を主に剝離痕や微細剝離が看取される。

以上の石材は9・16・17・19・20が黒色頁岩、8・10・12・22が黒色安山岩、1・2・14が黒曜石、5～7がチャート、13・18・21が細粒輝石安山岩、3が流紋岩、4が珪質変質岩、11が粗粒輝石安山岩、15が珪質頁岩である。

打製石斧 51点出土したうち、35点を図示した。これらは形状等から、1～15が短冊形、16～30が楕形、31～34が分銅形、35がその他と大別されるが、欠損しているものについては可能性を含み、また短冊形と楕形については判別が不明瞭と思われるものがある。

短冊形とした1～15は、長さに対して幅の狭い形状のものが主体であるが、9は定型的な方形を呈する平面形で、側縁には微細剝離が看取される他は不明瞭で、スクレイパーなどの可能性が強いものと思われる。素材的には、3～8・10の表面に自然面が残り、特に7では側面にも看取され、原石の周囲を割くように作出した1次的な剝片を素材とすると思われる、4・6は横長の剝片を素材としている。また剝片の形状としては、前記の他に2が横長、9が縦長の剝片を素材とすると思われる。側縁の平面形では、2・3・15などは刃部側の側縁が僅かに楕形状に開くような形状、4～6・8などは片側ないし両側縁が膨らむような弧状を呈する形状が看取される。また12は刃部側とした側縁が窄まるような形状を呈し、楕形の基部側の破片を誤認した可能性がある。刃部や基部の平面形では、緩いものを含め弧状を呈するものや直線的な形状が多く、1・5・10などの刃部は斜状を呈するが、折れて欠損したものと思われる。

楕形とした16～30は、刃部側に最大幅を持ち、この幅に対して縦長の形状のものが主体であるが、18は幅と長さが近い寸胴な平面形状、19はやや幅広く短冊形に近いような長方形の平面形状を呈し、また28は刃部側の半部を欠損するが大型品である。素材的には、19・21・23～25・27に自然面が残り、特に21はその殆どを自然面が占めている。剝片の形状としては、20・21・24・28・29などが横長、26などが縦長の剝片を素材とすると思われる。側縁の平面形では、21は刃部側の側縁が僅かに抉れるように開く形状、25は刃部側の両側縁が僅かに抉れるように膨らむような形状を呈し、基部側を欠損する29・30、刃部側を欠損する28も両側縁が弧状に膨らむ形状と思われるが、29・30は分銅形を呈する可能性もあり不確定である。刃部や基部の平面形では、緩いものを含め弧状を呈するものや直線的な形状が多いが、26の基部は鋭角的に窄まるような形状を呈している。

分銅形とした31～34は比較的大型のものである。素材的には、32・34に自然面が残り、特に32はその殆どを自然面が占めている。また剝片の形状としては、33・34が横長、32が縦長の剝片を素材とすると思われ、特に33は片面を節理による剝離面が占め、板状の剝片を素材としている。側縁の平面形では、34の挟りが比較的浅いと思われる他は、ほぼ左右対称となる挟り部が看取され、31は刃部側・32は基部側に挟り部が位置している。両端部の平面形は、32を除いて直線的な緩い弧状、32は鋭角的な弧状を呈している。また、31は両端部・33は上端部を欠損するが下端部に使用痕と思われる摩滅部が看取される。

35は上記の大別では不確定なもので、刃部側の破片であるが大型である。横長の剝片を素材とすると思われ、残存する側縁は片側が直線的、残る側縁が斜状に開くような形状を呈し、楕形状と思われるが不確定で

ある。刃部の平面形は直線的な緩い弧状を呈し、斜状を呈する部分は折れたものと思われる。

以上の石材は3・8～10・13～18・21～23・25・31が黒色頁岩、4・5・7・11・12・19・20・24・26・30・32・33・35が細粒輝石安山岩、2・6・34が粗粒輝石安山岩、1・29が変質安山岩、27が硬質頁岩、28が変質玄武岩である。

磨製石斧 8点出土したうち、3点を図示した。これらは大きさ等から、3が小型品として大別され、この他は1が完形品、2は側縁部のみ看取される破片である。

1は撥形に開く平面形を呈し、幅の広い形状である。全体的に丁寧に研磨して整形しており、線状の整形痕が看取されるが、側縁部や裏面には地の面にあたる浅い凹部が看取される。2は表面から側縁部を残す破片で、裏面は剝離状に欠損している。丁寧に研磨して整形しており、残存する側縁からは幅の狭い形状で撥形に開く平面形と思われるが不確定である。

3は小型品で、撥形に開く平面形と思われるが刃部を欠損している。丁寧に研磨して整形しており、線状の整形痕が看取される。また基部には細かな剝離痕が看取される。

以上の石材は1が凝灰質砂岩、2が珪質頁岩、3が変質蛇紋岩である。

磨石 9点出土したうち、5点を図示した。これらは礫の形状等から、1・3・4が楕円状や長楕円状の平面形を呈するやや扁平な円礫、2が楕円状の平面形で肉厚な球状を呈する円礫、5が長楕円状の平面形を呈する小型の棒状礫を素材とするものに大別される。

1・3・4は断面の厚みに差はあるが、やや扁平な円礫を素材としている。平面形は1がやや幅狭な長楕円状、3・4は楕円状を呈し、磨り面は1・3が両面、4が片面に認められ、4の残る片面には突部があり、また側面も含め凹みが看取される。2は断面に厚みを持つ球状の円礫を素材とし、平面形は楕円状を呈し、磨り面は両面に認められる。5は長楕円状の平面形で縦長の棒状を呈する小礫を素材とするが、下端部を欠損している。全面を研磨しており、棒状に磨り上げたような様相が看取されることから小型の石棒の可能性を含むものであるが、不確定である。

以上の石材は1が流紋岩、2～4が変質安山岩、5が細粒輝石安山岩である。

凹石 18点出土したうち、10点を図示した。これらは素材となる礫の形状や、看取される凹みの状態などによって大別される。

1～4は扁平な円礫を素材とし、両面に凹みが看取されるものである。平面形は、不整なものを含め1が隅丸形状、2が長楕円状の他は楕円状の平面形を呈し、凹みは浅いものを含め1～数点が看取され、特に1では両面でほぼ相対するような凹みが1点ずつ看取され、4では細かな凹みの集中部が2点認められる。

5～7は断面に厚みを持つやや扁平ないし球状の円礫を素材とする。平面形は、不整なものを含め何れも楕円状を呈し、凹みは5・6が両面、7が側面で看取され、浅いものを主体に数点認められる。これらのうち、5では浅い凹みの集中部が看取される。

8～10は縦長の棒状を呈する礫を素材とするものである。平面形は、不整なものを含め何れも長楕円状を呈し、凹みは浅いものを主体に数点認められる。これらのうち、8には縦位に連続するように集中する凹み、10には側縁部や上端部に剝離状の浅い凹みが看取される。また9は縦位に連続する3点の凹みを持ち、形状や石材等から石棒の破片を転用した可能性が考えられる。

以上の石材は1・3・5～8が粗粒輝石安山岩、2が溶結凝灰岩、4が珪質変質岩、9が緑色片岩、10が変質安山岩である。

多孔石 1点出土している。1はやや不整な楕円状の平面形を呈する大型の円礫を素材とし、図示はないが

側面や裏面にも凹みが多数看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

石棒 1点出土している。1は大型のものであるが、先端部及び基部を欠損する。棒状に磨り上げて整形しており、表面には凹みが数点看取される。以上の石材はデイサイトである。

垂飾 1点出土している。1は小型の玉類で、円形状の平面形を呈する白玉状の製品で、中央に円孔を施し、丁寧に研磨して整形している。以上の石材は蛇紋岩である。

石製品 1点出土している。1は軽石を素材とするもので、平面形はやや不整な楕円状、断面はやや厚みのある球状を呈する。地の面にあたる浅い凹部が多数看取されるが、磨った痕跡が認められるものである。以上の石材は軽石である。

以上、6区から出土した石器について記載したが、この他に石皿が1点出土しているが、図示は行わず未掲載としたものである。

6・7区 (第354図: PL157)

打製石斧 1点出土している。1は基部側のみで刃部側の半部を欠損している。表面に自然面が残り、側縁は片側が直線的、残る側縁は凹凸のある平面形を呈する。基部は緩い弧状の平面形で、短冊形ないし楕形を呈するものと思われるが不確定である。以上の石材は細粒輝石安山岩である。

磨石 1点出土している。1は円形状の平面形を呈する扁平な円礫を素材とするが、下端側の側縁を欠損しており、磨り面は両面に認められる。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

7区 (第354図: PL157)

スクレイパー 1点出土している。1は横長の剥片を素材とし、やや不整であるが幅の狭い横長の長楕円状を呈する平面形である。この下端側にあたる側縁に連続する細かな剝離調整を施して刃部を作出し、この平面形は直線的な形状を呈している。以上の石材は黒色安山岩である。

打製石斧 1点出土している。1は上半部を欠損するもので、左側縁に挟まれるような括れ部が看取され、分銅形を呈すると思われるが不確定である。素材となる剥片は縦長と思われ、刃部にあたる下端部は弧状の平面形を呈する。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

磨製石斧 1点出土している。1は基部を欠損するもので、側縁は直線的に平行し、幅広い形状を呈することから短冊形の平面形と思われる。丁寧に研磨して整形しており、刃部には細かな剝離痕が看取される。以上の石材は変玄武岩である。

9区 (第354図: PL157)

打製石斧 1点出土している。1は刃部を欠損するもので、左側縁は弧状に反るような形状を呈し、右側縁は直線的であるが挟まれるような凹部が看取され、全体的には楕形を呈するものと思われる。基部の平面形は斜状を呈し、自然面が僅かに残っている。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

石製品 1点出土している。1は丸みを持つ三角形の平面形を呈し、被熱を受けて橙色に変色した部分が看取される。以上の石材はスコリア質安山岩である。

96区 (第354図: PL157)

凹石 1点出土している。1は大型の円礫を素材とするもので、長楕円状の平面形を呈すると思われるが半

部を欠損し、凹みは表面で2点看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

97区 (第355図：PL157)

打製石斧 1点出土している。1は比較的大型で分銅形と思われるものであるが、挟りは左側縁が明瞭で、右側縁は相対する部分が僅かに扶れるような形状を呈する。表面の殆どを自然面が占め、1次的な縦長の剥片を素材とするとと思われる、側縁は右側縁を主に連続する剥離調整を施し、両端部の平面形は直線的な緩い弧状を呈する。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

区不明(表採) (第355図：PL157)

スクレイパー 1点出土している。1はやや横長の形状であるが、素材となる剥片は縦長の形状と思われる。平面形は片側が鋭角的に突出するような台形状を呈し、この下端側にあたる側縁を主に微細な剥離痕が看取される。以上の石材は黒色頁岩である。

打製石斧 1は短冊形を呈するもので、刃部側を欠損している。幅が狭く細長いような形状で、側縁は直線的、基部は弧状の平面形を呈する。以上の石材は黒色頁岩である。

多孔石 1点出土している。1は大型の礫を素材とし、丸みを持つ三角形の平面形を呈し、図示はないが側面や裏面にも凹みが看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

石皿 1点出土している。1は楕円状を呈する大型の扁平な円礫を素材とし、縁を持って皿状に湾曲する機能面を礫の中央に作出し、機能面の平面形は縦長の長楕円状を呈するが、この上端部は鋭角状に窄まるような形状をなしている。また機能面の縁部や側縁に凹みが看取される。以上の石材は粗粒輝石安山岩である。

第3節 弥生時代

1 遺構外出土遺物

平成8年度までの調査において、弥生時代と考えられる遺構は確認されていない。しかし、多量の縄文土器に混在して、弥生時代と思われる土器片が僅かに看取された。

弥生時代の遺物として取り上げた土器は、4区・5区・6区から出土している。時期的には中期～後期、また古墳時代初頭の可能性を含むものもある。しかし、特に中期と思われる土器については、縄文時代の後・晩期を主とする土器との判別が困難であった。

また逆に、縄文時代とした土器の中にも弥生時代の可能性を含むものがある。この代表的なものは、5-14号配石No1、5-92号土坑No1、5-123号土坑No1の各土器などである。

5-14号配石No1は、口端部に折り返し状の段部を持ち、器形的には壺形土器の口縁部片の可能性が想定される。

5-92号土坑No1は、縄文後期の堀之内1式の可能性が強いと思われるが、器形的には壺形土器の口縁部の可能性が想定される。

5-123号土坑No1は、文様的には縄文後期の称名寺1式とも思われるが、下位から立ち上がる渦巻状の区画文を太く深い沈線で描出するもので、東北部の系統にある弥生土器の可能性も想定されるものと思われる。

また、土器の他にも打製石斧の中には比較的大型のものが看取され、石鏃の可能性も含めて検討する必要があると思われるものがある。

以上のような状況にあるため、上記の遺物や以下に観察する遺物については、今後さらに多岐による分析が必要とされるものである。

4区（第356図：PL158）

1は壺形土器と思われる胴部片で、斜位の条痕文を施す。また、僅かに縄文と思われる文様が看取されるが、条痕文に切られており不明瞭である。内面は丁寧な横位の撫で調整を施す。胎土は粗砂・礫を少量含み、焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈する。時期は中期と考えられる。

2は台付の脚部片で、磨き調整が活れ部の上位では斜位、下位では横位に施される。胎土は粗く粗砂・礫を多量含み、焼成は良好で、色調は鈍い橙色を呈する。胎土等の要素では、縄文時代の可能性もあり検討を要する。

5区（第356図：PL158）

1は壺形土器と思われる胴部下半の大型片で、最大径は36.8cmを測る。沈線で結紐文と思われる区画文を描出して原体LRの細縄文を充填する。この下位は斜位の撫で整形後に磨きを施す無文であるが、器面がやや粗く摩耗するため二次的な被熱によると思われ、内面下半部には炭化物の付着が看取される。胎土は粗砂・礫を多量含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。時期は中期と考えられるが、縄文時代後期の称名寺式ないし堀之内式には結紐文と同様の文様構成を持つものが看取され、検討を要する。

2は壺形土器と思われる胴部片で、3条看取されるのっぺりとした太く浅い横位沈線を並行して巡らし、

この下位は斜位の撫で整形後に磨きを施す。胎土は礫を多量・粗砂を少量含み、焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。沈線の様相では三角連繋文などの文様を描出する可能性が推定されるが、縄文時代後期の加曾利B1式の可能性もあり検討を要する。

3は台付の脚部と思われ、底径は6.4cmを測る。外面には縦位の磨き、上位にあたる内面には横位を主体とする磨き、脚部の内側には横位の撫で及び部分的に磨きの調整を施す。胎土は粗砂・礫を多量含み、焼成は良好で、色調は鈍い橙色を呈する。調整や器形などから蓋の可能性も考えられ、時期は弥生時代末から古墳時代初頭と考えられる。

6区 (第356図：PL158)

1は壺形土器の胴部片で、斜位の条痕文を施す。胎土は粗砂・礫・赤色粒を多量含み、焼成は良好で、色調は外面が黒褐色・内面が鈍い赤褐色を呈し、外面には炭化物が付着する。時期は中期と考えられる。

2は壺形土器の胴部片で、並行する2条の沈線をクランク状に横位に巡らし、この下位に斜位や横位の条痕文を施す。沈線の上位や沈線間は無文である。胎土は粗砂・礫を多量含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。時期は中期と考えられる。

3は底部片と思われるもので、刻みを持つ細い横位隆帯を1条巡らし、底面に突起上に高まる部分が看取されることから、高坏の可能性が推定されるが不確定である。胎土は粗砂・礫を多量に含み、焼成がやや軟質で、色調は橙色を呈する。縄文時代後期の可能性もあり、検討を要する。

4は高坏の脚部ないし蓋と思われるもので、結合部の断面では「ホゾ」を切って連結した痕跡が看取され、またこの部分に強い横位の撫でを巡らす。このため、この下位の裾部が膨らむような器形を呈し、この点では蓋の可能性が強いように思われる。器面は外・内面ともに磨き調整を施し、外面で縦位の単位が看取される。胎土は細砂を多量、礫・石英を少量含み、焼成は良好で、色調は鈍い橙色を呈する。時期は弥生時代末から古墳時代初頭と考えられる。

第4節 古墳時代

1 遺構外出土遺物

古墳時代についても、弥生時代と同様に遺構は確認されていない。しかし、土師器と考えられる土器片が、縄文土器に混在する形で数点確認された。

土師器と考えられる土器片は、2・3区の沢地部の包含層や5区の台地上から出土している。器種では、坏が3点・甕が1点であり、このうち2・3区から出土した2点の坏は「内斜口縁」の器形である。これらの時期は、5世紀後半～6世紀・7世紀代と推測される。

以下、各区ごとの出土土器を観察するが、本遺跡の所在する長野原町域において該期の土器は極めて稀少である。このため、当地域の古墳時代の様相を推察する上で重要な資料と思われる、さらに今後の調査によって該期の資料が蓄積されることに期待したい。

2・3区（第356図：PL158）

1・2は内斜口縁の坏の口縁部片で、幅狭の口縁が外傾して立ち上がる形状を呈するが、2は口縁を欠損する。口縁下の頸部には横位の撫でを巡らし、この下位は左上から右下への斜位の撫で調整を施す。胎土は1が礫を多量・粗砂を少量、2が礫を少量含み、2点とも焼成は酸化焰で良好、色調は鈍い赤褐色を呈する。時期は5世紀後半～6世紀前半と考えられる。

5区（第356図：PL158）

1は甕の胴部片で、最大径は31.4cmを測る。整形は外・内面ともに筧削り後に磨き調整を施す。外面の削りは上半が右上から左下、下半が左上から右下へ施され、磨きは縦位や斜位に施されるが単位は不明確である。内面の削りは横位に施され、磨きは上半は僅かに看取される程度で、下半はやや丁寧で横位や斜位に施されるが単位は不明確である。胎土は粗砂・礫を少量含み、焼成は酸化焰で良好、色調は鈍い黄褐色を呈する。時期は5世紀後半～6世紀前半と考えられる。

2は坏の口縁～底部片で、底径は約9.0cmを測る。稜を持って幅広の口縁部が大きく外傾する形状を呈するが口縁部を欠損しており、底部は外縁にやや丸みを持つが平らな形状で、やや扁平な器形と思われる。口縁部には横位の撫で後に磨き調整、底面には筧削り後に撫で調整を施すと思われる、内面には横位や斜位の撫で調整を施す。胎土は粗砂・礫を少量含み、焼成は酸化焰で良好、色調は鈍い黄褐色を呈する。時期は6世紀後半～7世紀代と考えられるが検討を要する。

第5節 平安時代

1 住居跡

5-4号住居跡 (第357図: PL159)

位置 5H~1-11~12グリッドに位置し、台地上東側で南面する緩傾斜地に立地する。確認面 IV~V層面で確認された。遺構の外形は不明瞭であったが、5-6号集石がカマドであることが判明したことにより住居跡を確認した。なお、6号集石は欠番にしている。重複 5-12号住居跡の上面に構築されている。

覆土 黒色土の単一的な堆積である。均質な層で自然堆積と考えられ、この層下の床面付近に焼土と灰の混土層が部分的に堆積している。形状 平面は、不整な隅丸方形を呈する。規模 長軸3.58m×短軸3.55mである。方位 規模の長軸でN-7°-W、カマド部でN-65°-Wを測る。壁高 最大で19cmを測り、北壁がやや傾斜する他はほぼ直に立ち上がる。床面 平坦で、住居跡中央から南壁にかけて長方形に貼床が確認され、この中央部は硬質である。周溝 確認されていない。柱穴 ビットが2基確認された。ビット1は西壁中央部、ビット2は南西隅に位置するが、柱穴であるか不確定である。カマド 住居跡南東隅の壁に付設されている。南東隅の壁部は斜めに直線的な平面形を呈し、これを正面とするように壁を外側に掘り込んで構築されている。住居内に突出する袖部は確認されず、燃焼部と思われる焼土範囲の一部が住居内にかかる他は、燃焼部や煙道部は壁外に位置する。規模は、壁からの奥行が78cm、幅は壁部で48cm・掘り込みの端部で16cmである。焼土範囲の平面は、掘り込みの軸に沿うような楕円状を呈し、長径60cm×短径32cmである。また焼土範囲を含めた奥行の全長は、107cmを測る。掘り込みの底面は平坦で、壁外に向かって緩い傾斜で立ち上がる。この掘り込みの上面に6号集石があり、集石の礎が天井部などの構築材と考えられるが、崩落していると思われ判然としない。主体となる集石の範囲は長軸150cm×短軸78cmを測り、この周囲に散在する礎があるが伴うものか不確定である。また北壁の東寄りには、床面に円形の掘り込みを伴って壁外へハ状に張り出す部分がある。規模は、掘り込みを含めた奥行の全長が57cm・最大幅が70cm、掘り込みの長径は36cm・短径は30cm・床面からの深さは11cmを測る。この底面は、壁外に向かって緩い段状を呈する立ち上がりである。この付近の床面には焼土分布が認められ、カマドの可能性が想定されるが判然としない。

掘り方 床面構築土は黒褐色土で2層に分層され、床面からの厚さは最大で20cmを測る。上層は、貼床部中央の硬質部にあたる堅く締まった層で、下層は締まりの弱い軟質な層である。貼床部以外の床面は、南壁以外の壁に沿う帯状の地床部で、貼床部下面是地床面から長方形に掘り込まれる状況を呈し、この底面は平坦で南西隅に向かって緩く傾斜している。地床部も含めた掘り方は、VI層面にあたる。出土遺物 土器244点、石器類42点が出土している。遺物は覆土中からの出土が殆どであるが、カマド部の集石下で焼土上面にあたる位置から、口縁の一部を欠損する須恵器の坏が1点出土しており、本住居跡の時期を示す資料と考えられる。しかし、この他に須恵器や土師器の出土は認められず、土器は混入した縄文中期後葉~後期中葉のものが主体である。石器類は、砥石が床面付近と掘り方から計2点出土した他は、混入した縄文時代の磨石・石鏃・スクレイパー・剥片類などである。所見 北壁部のカマド状の張り出し部や掘り方の形状から、改築などによる拡張の可能性が想定されるが不確定である。出土遺物から、時期は10世紀末~11世紀初頭で平安時代中葉と考えられる。

ビット規模(長径×短径×深さ・cm)

P 1	78×64×47	P 2	47×36×(20)						
-----	----------	-----	------------	--	--	--	--	--	--

出土土器 出土した244点の土器のうち、住居跡に伴う土器はカマドから出土した須恵器の坏が1点のみであり、残る243点は覆土中に混入したものやカマドの集石部から出土した縄文土器である。なお、縄文土器については、以下に「混入遺物」として一括している。

1はカマド部の集石下・焼土上面から出土した須恵器の坏で、口縁の一部を欠損するがほぼ完形で、口径12.6cm・底径7.0cm・器高4.5cmを測る。粘土紐を巻き上げ後に轆轤整形を施し、轆轤は右回転で底部糸切りである。胎土は礫を少量含み、焼成は酸化焰による軟質で、色調は鈍い黄褐色を呈する。外・内面に油煙状の黒色物質が付着し、灯明用として使用されたと思われる。北信濃地域の影響を受けている可能性が示唆され、時期は10世紀後半～11世紀初頭と考えられる。

出土石器 出土した石器類42点のうち、住居跡に伴うものは床面付近と掘り方から出土した砥石が2点であり、残る40点は覆土中に混入したものやカマドの集石部から出土した縄文時代の石器類である。なお、縄文時代の石器については、土器と合わせて以下に一括している。

2・3は砥石で、2は床面付近・3は掘り方からの出土である。2は平面・断面ともに長方形を呈し、表裏・両側面を主に研磨しており、研磨面は何れも平坦である。また上・下端面には僅かに凹凸があり、部分的に摩滅痕が看取される。3は片側面のみが残存する砥石の破片で、平面形は不整な長方形を呈し、断面は薄く剥片状に欠損したものである。残存する側面にあたる研磨面は平坦で、欠損後に被熱を受けたと思われ、側面から表・裏面には煤ないし油煙状の付着物が看取される部分がある。さらにこの部分の外縁は、付着物のある表面が剝離状に欠損した部分である。以上の石材は何れもデイスイトである。

(5-4号住居跡混入遺物) (第358図：PL159)

平安時代の住居跡である5-4号住居跡に混入していた縄文時代の遺物を一括する。

土器 カマドに変更となった5-6号集石から出土した1・3・6・7・14・18の6点、覆土中から出土した前記以外の12点を合わせた18点を図示した。これらのうち、5・9が深鉢の口縁部片、11・12が注口土器の口縁部片・13が注口部片、14が注口土器ないし鉢の胴部片、4が壺形土器の胴部片、15～17が底部片、18が土製円盤の他は深鉢の胴部片である。1は地文に原体Lを縦位や斜位施文後、蛇行沈線を1条垂下する。2は沈線で垂下するU状の区画文を描出し、原体LRを斜位充填する。3は微隆帯を1条横位に巡らし、さらにこれから1条懸垂して縦区画し、横位隆帯の上位に沿って連続する円形刺突文を1列と、隆帯の結部に円形の貼付文を施し、区画内には原体Lを縦位充填する。4は微隆帯とこれに沿う幅広い浅い沈線で渦巻状文を描出する。5～7は地文に沈線文を施すもので、5は横位隆帯とこれに沿う沈線で帯状に区画すると思われる、区画内に縦位の沈線文を充填する。6は2条単位でやや弧状に垂下する沈線、7は懸垂する隆帯とこれに沿う沈線で区画し、6は横位ないし斜位、7は斜位の沈線文を施す。8は並行沈線による帯状の区画で弧状の曲線的な文様を描出し、帯状内に原体LRを充填する。9は刻みを持つ細い横位隆帯が1条看取され、この下位には並行沈線による帯状の区画を横位に巡らす文様部が看取され、帯状内に原体LRを横位充填する。10は横位沈線による帯状の文様部が看取され、帯状内に原体LRを横位充填するもので、下位の割れ口部にも同様の縄文が看取され、帯状の区画を段状に巡らす構成と思われる。11は横位の微隆帯を1条とこの上位に沿う沈線を巡らし、微隆帯の下位には沈線で縦位の長楕円状文や、これに区切られる横位の長楕円状文を段状に重ねて描出し、微隆帯上位を含め沈線による区画内に沿って各1列の列点文を充填する。12は把手を持つ口縁で、把手の内面側に円孔を持ち、口縁部は外傾する器形で口端部が内折する形状を呈し、口端には刻みを施す。把手頂部には円形貼付文を施し、把手部には短沈線を1条やや弧状に垂下する。外傾する括れ部には刻みを巡らし、この下位には幅広い並行する多条の横位沈線を巡らす。13は磨き整形が顕著な無文で、

芯部を粘土で肥厚して作出する。14は器面が摩耗しており不明瞭であるが、小さなC字状の沈線文やこの下位には短沈線状に見える横位の弧状沈線が段状に看取され、雲形状の文様構成であろうか。15～17は底面に網代痕を持つ底片で、径は15が13.0cm、16が16.8cm、17は6.0cmを測り、15はやや張り出し、16は直立、17は外傾するような器形を呈し、何れも無でや磨き整形による無文である。18はやや弧状を呈する沈線による区画内に原体Lを充填する文様が看取され、側面は約3/4周を研磨する。

石器 石鏃が4点・スクレイパーが2点・磨石が2点・石皿が1点の他は剥片類で、19・21・24・25が覆土中からの他は、カマドに変更となった5～6号集石から出土したものである。19～22は石鏃である。19は平基無茎鏃で、側縁は右側で僅かに凹部が看取される他は直線的で、三角形の平面形を呈する。20は凹基無茎鏃で、先端を欠損している。側縁は先端部が括れて窄まるような形状を呈し、平面形はやや不整な二等辺三角形を呈する。21・22は大型の石鏃である。21は基部が鋭角状に突出する凸基状を呈し、茎部とも思われるが不確定である。側縁は反るような形状で、平面形は不整な菱形を呈している。22は幅が狭く細長いような形状で、基部は円基状を呈し、側縁は右側に凹凸があり、左側は直線的で先端が弧状に窄まるような形状で、平面形は不整な木葉状を呈する。23・24はスクレイパーとしたものである。23は小型のもので、半円状ないし台形状の平面形を呈し、上・下端部を主に細かな剝離痕が看取される。24は横長の形状で、表面には自然面が残り、裏面には節理と思われる剝離面が看取され、上・下端部にあたる側縁を主に細かな剝離痕が看取されるが不明瞭で、剥片の可能性が強いものである。25・26は磨石である。25は扁平な円礫を素材とする側縁部片で、円形状ないし楕円状の平面形と思われるが不確定である。26は楕円状を呈する扁平な円礫を素材とし、裏面や側面に浅い凹みが看取され、また右側縁には剝離状の欠損部がある。27は不整な長楕円状を呈する縦長の扁平な円礫を素材とし、機能面は平坦で、浅い凹みが数点看取される。以上の石材は19が黒色安山岩、20・21・23が黒曜石、22が細粒輝石安山岩、24が黒色頁岩、25～27が粗粒輝石安山岩である。

2 遺構外出土遺物

平安時代と考えられる遺物は、須恵器の破片が数点確認されたのみで、図示した1点は5区の台地上から出土したものである。

弥生時代や古墳時代と比較して、平安時代では住居跡が1軒でも存在する状況にありながら、その遺物が極めて稀薄な様相といえる。概要でも述べたように、住居跡の存在からすれば他の遺構やさらなる遺物の存在が想定される場所であり、特に遺物を伴わない土坑などはその可能性を含むものがあるように思われる。

この例では6-116号土坑が挙げられ、覆土中に混入していた炭化物の年代測定値が7世紀後半～8世紀後半を示しているものである。しかし、覆土の観察や形状等の要素、遺構外も含めて該期の遺物が極めて少ない状況などから推測された調査時の所見としては、縄文時代の所産と考えられる。また、年代測定と併せて行われたテフラ検出分析結果との比較においても、年代観の齟齬から何らかの作用による土壌汚染の可能性が示唆されている。従って、本文では6-116号土坑については縄文時代の所産としている。

但し、攪乱等の明確な汚染状況が確認されていない点では、この年代観も不確定要素を含むことになろう。現状での確定的な要素は、6-116号土坑の構築時期が少なくとも7世紀後半～8世紀後半以前ということであり、これが縄文時代まで明確に溯れるかが問題である。この齟齬を図ろうとすれば、長期間に及ぶ埋没過程において縄文時代の陥穴が該期まで凹みとして残る可能性などが想定されるが、具体性に乏しい内容であることは否めない。

このため、6-116号土坑の年代観についてはさらに充分な検証を行う必要があり、類例土坑の蓄積を持って詳細な比較検討を行うべき問題と思われる。また、その結果によっては、本遺跡で発見された土坑の年代観を再検証する必要性が生じることも予想されよう。なお、類例土坑については、平成12年度に実施された八ツ場ダム関連の発掘調査において、同様の問題を含む可能性の土坑が発見されていることを併記しておく。

以下、出土した土器について観察するが、上記の問題については今回の調査における反省でもあり、また今後の調査や研究の視点に係わる重要な課題として考えたい。

5区 (第356図：PL158)

1は壺の胴部片と思われ、外面は叩き調整による平行叩き目が縦位に看取され、内面は横位の撫で調整を施す。胎土は礫を多量含み、焼成は還元焰で良好、色調は青灰色を呈する。平安時代の所産と考えられるが、詳細な時期は不確定である。

第6節 中・近世

1 遺構

本遺跡では、中・近世(不確定なものを含む)の所産と推測される遺構として土坑・溝・暗渠・道路跡などが確認されている。以下、これらの遺構について概略を記すが、紙面等の都合により個別図を省略したものが、これらについては全体図を参照されたい。

土坑 (第359～360図; PL160)

土坑は、4区で1基・5区で1基・6区で2基・7区で2基・8区で1基の計7基を数える。遺構番号では、4-27号、5-112号、6-72号・75号、7-24号・25号、8-4号土坑である。これらの個々の説明は、「土坑一覧表」にあるとおりで、時期は全て近世を上限とする可能性が推測される。本文では、各土坑の特徴などについて、「井戸」・「耕作に関連する土坑」・「不確定な土坑」とした「一覧表」にある種別に沿って包括的に記したい。

「井戸」と推定されるものは、5-112号土坑である。本土坑は、5区台地上の中央やや東寄りに位置し、旧街道にあたる現道の南側に近接している。平面形は楕円形を呈し、覆土はロームやAs-YPkを主体とする不均質な層で人為埋没と考えられる。V層面で確認されたが、掘込みが極めて深く、確認面から200cm近くまで掘削したが底面が検出されない状況であったため、最終的には南半部を露天掘削する裁削り調査の方法で断面形状を確認している。断面形は、下半部に内傾する状況が看取され、袋状に近い台形状を呈している。また、底面付近には大型の角礫を主体として充填されたような状況の礫層、この下位にあたる底面には5～10cm程の黒色土層の堆積が確認されている。以上の結果において、300cmを超える掘削深度を持つこと、礫層の機能的な可能性などから井戸と推定している。出土遺物は、覆土中から土器2点と石器類2点が出土しているが、何れも縄文時代と考えられる遺物であり、覆土中に混入したものと考えられる。

「耕作に関連する土坑」と推定されるものは、6-72号・75号、7-24号・25号の各土坑である。これらは、耕作の支障となる礫を埋め込むための土坑と想定され、一覧表には「礫の廃棄坑」と仮称して表記している。これらのうち、6-75号、7-24号・25号は、擾乱により南半部が不明である。また、7区の2基は重複しているが、新旧は不確定である。覆土は、各土坑ともにロームなどを多量に混入する不均質な層で人為埋没と考えられ、廃棄されたと推測される礫は6-72号土坑で確認されている。平面形は、楕円形や隅丸長方形を基調とするが、不整的な様相が認められる。断面形は、台形状を主体とする状況が看取されている。このように、礫を伴う土坑は6-72号土坑のみであるが、残る3基も近似する様相を呈しているため、これらの土坑を「礫の廃棄坑」として推定した。出土遺物は、6-72号土坑の覆土中から打製石斧が1点、6-75号土坑から土器5点、7-24号土坑から土器2点・石器類(銅片類)1点が出土している。これらのうち、6-75号土坑において内耳鍋の破片が1点認められた他は、覆土中に混入したと思われる縄文時代の遺物である。

「不確定な土坑」は、4-27号、8-4号の各土坑である。4-27号土坑は、平面形は長方形を呈するが、北西隅には隅丸状の様相が看取され、覆土はロームを主体とする不均質な層で人為埋没と考えられる。断面形は、袋状を呈する部分もあるが、壁面崩落によると考えられ、方形を基調とすると考えられる。特徴としては比較的深く掘削されており、確認面からの深さは146cmを測る。このことから井戸の可能性も想定されたが、所見に乏しく判断としない。遺物は、覆土中から陶磁器片が3点と、刀子1点・釘2点が出土してい

る。8-4号土坑は、平面形は溝状ともいえる長楕円形を呈し、覆土はロームを多量に混入する不均質な層で人為埋没と考えられる。断面形は台形状を呈し、こうした形状などから暗渠や耕作によるサク状遺構の可能性が想定されたが、所見に乏しく不確定であり、遺物も出土していない。

この他には、土坑として調査された遺構の中に時期不明の倒木痕や根株痕と考えられるものが含まれている。また、ピットとして調査された遺構が6区で5基・7区で7基の計12基を数える。これらについては、有機的な属性等に乏しいため、参考として全体図に平面図を掲載し、「一覧表」に形状や規模を示した。さらには、近・現代の所産と考えられる土坑も調査されている。これらについては欠番としたが、6-50号土坑からは混入した縄文時代の石器が1点出土している。

溝・暗渠・道路跡 (PL161・162)

溝は、6区で6-1~5号溝、7区で7-1~3号溝の計8条が確認されたが、自然流路と考えられるものを欠番としており、実質的には6-3号、7-1号・3号の計3条を数える。6-3号溝は、6W-8~7C-6グリッドにかけて位置し、6-4号溝に切られる。南西側は現道により削平されている。北東から南西に向かって走行し、確認部の全長は9.7m、断面は浅いU字状や台形状を呈し、規模は上幅が50cm・下幅が12cmである。硬化している覆土の状態から道路状遺構の可能性はある。時期は出土遺物がないため判断としないが、形状や覆土の状態などから近世を上限とするものと考えられる。7-1号溝は、7D-14~15グリッドに位置する。北から南に向かって走行し、確認部の全長は4.0m、断面は浅いU字状を呈し、規模は上幅が56cm・下幅が18cmである。底面には礫が点在するが、北側には詰めたような状態で集中する箇所がある。覆土は黒色土とロームの混土で人為埋没と考えられ、礫の状況から暗渠の可能性はある。時期は出土遺物がないため判断としないが、形状や覆土の状態などから近世を上限とするものと考えられる。7-3号溝は、7N-7~8グリッドに位置する。北側は調査区外に延び、南側は現有道路により削平されている。北から南に向かって走行し、確認部の全長は8.07m、断面は壁面が直に立ち上がり方形状を呈し、規模は上幅が49cm・下幅が34cmである。南側に伴う土坑状の掘り込みには礫が詰められ、また溝内にも人為的に組まれた状態の礫があり、最下部には砂の堆積が認められる。礫の状況から暗渠の可能性があり、北側の調査区外に本溝を伴う何らかの施設が存在が想定される。時期は出土遺物がないため判断としないが、形状などから近世を上限とするものと考えられる。

暗渠は、2・3区で1条確認されている。3A~C-17~19グリッドにかけて位置し、傾斜面の方向に沿うように高位の北西側から低位の南東側に向かって走行し、この方位はN-30°Wを測る。トレンチ調査により部分的に検出された状況であるが、これらを繋げた走行規模は、確認部の全長で11.54mを測る。暗渠は、蓋石を伴う石組みで囲まれた水路が埋設されている形態のもので、掘り方にあたる溝の規模は上幅160cm・下幅92cm・深さ72cm、石組みの規模は上幅56cm・下幅90cm・深さ48cmを測る。本遺構は、さらに北西側及び南東側の調査区外へ延びる様相が認められ、調査区外部の傾斜面にある湧水点の水を沢に排水するための施設と推定される。出土遺物は図示していないが、掘り方にあたる溝の覆土中から陶磁器片が数点出土している。時期は、近世を上限とするものと推定される。

道路跡は、5区台地上の現道下で確認されている。これは、現道に沿って不明瞭ながら段差や平坦面、浅い溝状の痕跡が看取されたもので、規模等は不確定である。また、調査区壁では、道路の路肩を補強したと考えられる集積の断面が確認されている。これらは、「道陸神峠道」と呼ばれる旧街道に関連する造作の痕跡と推測され、時期は中・近世を上限とするものと推定される。

2 遺構出土(混入)遺物

前項で記した遺構からは、覆土中から軟質陶器片や鉄器類、また混入したと考えられる縄文時代の土器片や石器類が出土している。以下、欠番とした土坑からの出土も含め、これらの遺物について観察したい。

出土遺物 (第361図：PL163)

4-27号土坑 覆土から出土した鉄製品2点を図示した。1は刀子で長さ9.4cm・幅2.0cm・厚さ0.9cm・重量16.9gを測り、鍛造品である。2は角釘で折れ曲がっており、長さ(5.5)cm・太さ0.5cm・重量6.0gを測り、鍛造品である。

5-112号土坑 覆土中に混入した縄文時代の遺物を3点図示した。1は深鉢と思われる口縁部片である。波状口縁で、波状部に8字状の貼付文を施し、内面には口端下に横位沈線を1条巡らす。2は磨製石斧であるが、基部側のみで刃部側の半部を欠損している。撥形に開く平面形と思われ、基部の上端には敲打によると思われる細かな凹みが集中している。全体的には丁寧に研磨して整形しているが、表面には浅い凹みが数点、裏面には地の面の残りと思われる浅い凹部が看取される。また断面形が楕円状を呈し、やや太形の形状とも思われるが不明確である。3は凹石としたもので、不整な長方形の平面形を呈する礫を素材とし、表面には凹みが多数看取され、形状的には多孔石とすべきものとも思われる。石材は、2が変玄武岩・3が粗粒輝石安山岩である。

6-72号土坑 覆土中に混入した縄文時代の遺物を1点図示した。1は大型の打製石斧で、基部を欠損する。表・裏の両面に自然面が残り、扁平な円礫を素材としてこの側縁を鋭くように剝離調整を施したものと考えられ、断面に厚みを持つ。側縁は刃部側が僅かに斜状に開くような形状で、撥形を呈すると考えられるが、緩く括れる分銅形の可能性もあり不確定である。刃部の平面形は緩い弧状を呈する。以上の石材は黒色頁岩である。

6-75号土坑 覆土から出土した軟質土器1点を図示した。1は内耳鍋の口縁内耳部片であるが欠損しており、この左側に小さな円孔が1点看取され、外面側は剝離している。胎土は緻密であるが礫を僅かに含み、焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。在地産と思われるが不確定である。

(6-50号土坑) 6-50号土坑は、6Y-3グリッドに位置する。近・現代の所産と考えられたため欠番としたが、この土坑の覆土中から縄文時代の石器が1点出土しており、ここに報告する。1は石錐である。柄みを持たない形状で、左側縁を主に連続する細かな剝離調整が看取される。石材は黒曜石である。

7-ピット6 7-ピット6は7M-4グリッドに位置し、覆土中から砥石が1点出土している。1は砥石の破片で、断面が薄く剥片状に欠損したもので、研磨面は表面と右側面に残存している。石材は頁岩である。

3 遺構外出土遺物

中・近世の遺構外出土遺物は、多量の縄文時代遺物に混在するように陶磁器片や鉄製品・キセル・古銭などが出土している。

陶磁器では、瀬戸・美濃産のものが比較的多い傾向が認められ、その他には肥前産や産地が不確定なもの、在地産の軟質陶器と考えられるものなどが看取される。また点数は稀少であるが、輸入磁器である青白磁や青磁の破片が出土している。

鉄製品も点数は少ないが、製品としては刀子や釘・カスガイと思われるものがある。キセルは、銅製の吸い口部と胴首部がある。

古銭は、寛永通宝が3点・北宋銭と考えられるものが2点の計5点が出土している。

なお、これらの遺物の出土層位について、傾向としては表土からの出土が主体的であるが、Ⅲ層出土とされる遺物も看取される。現状において、基本層序Ⅲ層の年代観は配石等の構築状況などから縄文時代以降で中世までは下らないと考えられる。このため、「Ⅲ層出土」として取り上げた中・近世遺物については、出土状況を誤認したことを認めざるを得ない。従って、上記のような遺物については、「攪乱等により混入したものとご理解いただきたい。

本遺跡地には、「真田道」の一つである「道陸神峠道」と呼ばれる旧街道が東西に横断している。また「加沢記」には、永禄6年(1563)の「長野原合戦」において王城山に布陣した斎藤方が、白砂川を挟んで対岸山上にある長野原城の真田方と対峙した状況が記されており、本遺跡地も戦場となっていた可能性がある。

さらに近世では、天明3年の浅間山噴火による被災遺跡の調査例が増加し、その具体的な様相が明らかになりつつある中で、泥流被害を受けなかった区域の様相については判然としていない感もある。

以上を踏まえれば、今回の調査における出土遺物については、前記のような歴史的・地理的環境との関連性が想定され、また上位段丘面における近世の様相を推察する上での具体的な資料となろう。しかし、現状では未だ資料に乏しい内容であることは否めず、今後の調査による資料の蓄積に期待したい。

以下、出土した遺物について各区ごとに観察する。

2・3区 (第362図：PL163)

1～3は軟質陶器の内耳鍋と思われる口縁部片で、何れも粘土紐で作出後に轆轤回転による撫でを施し、胎土は粗砂を多量含み、焼成は良好である。色調は1が黒褐色、2が褐灰色、3が鈍い赤褐色を呈する。何れも在地産と思われるが不確定である。

4は「寛永通寶」で、書体から「古寛永」と考えられ、径約2.4cm・孔径約0.6cm・厚さ約0.11cm・重量2.8gを測る。5は鉄製の刀子で先端部を欠損し、長さ(5.2)cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm・重量6.1gを測り、鍛造品である。

4区 (第362図：PL163)

1・2は施軸陶器の攪鉢で、1は口縁部片、2は底部片である。1・2とも轆轤整形で、1は外面から内面口縁下に軸が掛かる。胎土は粗砂を多量含み、焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。2は右回転の底部糸切りで、底面にはトチンと思われる点状の突部、外面には軸の垂れる部分が看取される。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は外面が灰赤色、内面が褐灰色を呈する。1・2ともに産地は不明である。

5区 (第362・363図：PL163)

1は青白磁の小破片で、碗の胴部下位と思われ、外面に線彫りによる文様を施し、軸には細かな買入が看取される。時期は12～13世紀代と考えられる。2～4は青磁の碗で、2・3は胴部片、4は底部片である。2・3は線彫りによる蓮弁文と思われる文様を施し、2の軸には線状の買入が看取される。4は切り出しの底部と思われるが欠損部があり不明瞭で、外面の稜部と内面の外縁に沿って線彫りを巡らし、軸には細かな買入が看取される。以上3点の時期は13世紀中～後葉と考えられる。

5は瀬戸・美濃産陶器の皿で口径10.0cm・高台径6.0cm・器高2.3cmを測り、底面中央を除いた高台脇から全面に透明釉を施し、軸には細かな買入が看取される。時期は17世紀代と考えられる。6は瀬戸・美濃産磁器の碗で高台径5.4cm・残存高4.7cmを測り、外・内面にコバルトでやや淡い染付を施し、全面に透明釉を施す。時期は19世紀代と考えられる。7は肥前産磁器の蓋で径10.8cm・掴み部径4.6cm・器高3.0cmを測り、外・内面にコバルトによる染付を施し、全面に透明釉を施す。時期は19世紀代と考えられる。8は肥前産磁器の坏で口径7.0cm・高台径2.0cm・器高3.7cmを測り、全面に透明釉を施す。時期は19世紀代と考えられる。9は産地不明の陶器で、急須の口縁部片である。口縁の平面形が方形を呈すると思われ、内面口端下には鈎状部を持つ。外面には黒褐色の染付が看取され、内面の鈎状部を除く口縁から外面に透明釉を施し、軸には細かな買入が看取される。また、鈎状部下位の内面にも外面と同色による染付の一部が看取される。詳細な時期は不明瞭である。

10・11は土製品で、10は泥人形の腕ないし脚部・11は泥面子と考えられる。10は撫でと思われる整形痕が看取され、また貫通する小孔があり、繋ぐ際に芯材を入れたものと思われる。11は円盤状を呈し、裏面は平坦な形状で、表面には波状ないし重弧状の文様を持つ。

12・13は磁石である。12は半部を欠損するもので、研磨面は表裏・両側面に認められ、特に表・裏面の使用度が高く、反るように湾曲しており、この湾曲が相対して断面が最も薄くなる部分から折れたものと思われる。13は端部の破片で、研磨面は折れた欠損面を除く全面に認められ、断面は薄い形状で、特に表・裏面の使用度が高いと思われ、僅かではあるが反るように湾曲している。以上の石材は12が砥沢石、13が細粒凝灰岩である。

14～16は古銭である。14は「天□通寶」の文字が判読され、右の文字は不明瞭であるが書体から北宋銭の「天禧通寶」(初铸1017年)と考えられ、径約2.45cm・孔径約0.6cm・厚さ約0.11cm・重量2.9gを測る。15・16は「寛永通寶」で、15は背面に「文」の文字がある「新寛永」の「文銭」で、径約2.52cm・孔径約0.55cm・厚さ約0.12cm・重量3.3gを測る。16は書体から「新寛永」と考えられ、背面に11波の波文を持つ4文銭で、径約2.8cm・孔径約0.6cm・厚さ約0.16cm・重量6.1gを測る。

17は銅製のキセルで、先端を欠損するが吸い口部と思われ、長さ(4.4)cm・太さ約0.9cm・重量3.4gを測り、銅板を巻き付けた接合部が線状に看取される。18は鉄製の刀子で先端を欠損し、長さ(6.3)cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重量6.2gを測り、鍛造品である。19は鉄製のカスガイで片側を欠損し、長さ(10.8)cm・残存する打ち込み部の長さ4.0cm・幅0.9cm・厚さ0.45cm・重量21.2gを測り、鍛造品である。

6区 (第363図：PL163)

1は肥前産磁器の皿で、口径8.0cm・高台径4.2cm・器高2.3cmを測る。内面に淡い染付を描き、全面に透明釉を施すが、釉がはやけて灰白色がかかる。時期は19世紀代と考えられる。2は瀬戸・美濃産磁器の蓋で径9.0cm・掴み部径4.0cm・器高2.6cmを測り、外・内面にコバルトによる染付を描き、全面に透明釉を施す。時期

は19世紀代と考えられる。

3は器種が不明確な鉄片で欠損しており、長さ(5.9)cm・幅1.8cm・厚さ0.7cm・重量21.7gを測る。割がれるようなヒビが入り、鍛造品と考えられる。

7区 (第363図: PL163)

1は古銭である。「元□通寶」の文字が判読され、右の文字は不明瞭であるが「元」の書体から北宋銭の「元祐通寶」(初鑄1086年)と考えられ、径約2.32cm・孔径約0.65cm・厚さ約0.1cm・重量2.4gを測る。

8区 (第363図: PL163)

1は砥石の破片である。剥片状に薄く欠損したもので、表面と側面の一部に研磨面が残存する他は、全て欠損面である。残存する研磨面は平坦な形状である。石材は頁岩である。

9区 (第363図: PL163)

1は鉄製の角釘で、長さ7.4cm・太さ0.6cm・重量7.0gを測り、鍛造品である。

94区 (第363図: PL163)

1は肥前産磁器の皿の底部で、底径9.2cm・残存高2.0cmを測る。内面に淡い染付を描き、底面の高台脇から中央の凹みまでの外縁部分を除き透明釉を施す。時期は19世紀代と考えられる。

2は泥面子と思われる土製品で、鼻が高いことから天狗の顔と考えられ、縦1.7cm・横1.5cm・厚さは最大で0.8cmを測る。また顔の裏側は平坦な形状である。

96区 (第363図: PL163)

1は青磁皿の小片で、口縁に沿って内面に線彫りを施す。時期は15世紀代と考えられる。

2は瀬戸・美濃産陶器の坏で、口径6.4cm・高台径3.2cm・器高4.0cmを測る。胴部下部の一部から高台部・底面を除いて灰釉を施し、釉には細かな貫入が入る。時期は18～19世紀代と考えられる。

区不明(表採) (第363図: PL163)

1は銅製のキセルの雁首部であるが雁首を欠損する。長さ(5.8)cm・太さ0.9～1.1cm・重量3.3gを測り、銅板を巻き付けた接合部が線状に看取される。

第5章 自然科学分析

本遺跡の調査では、理化学分析によって得られる情報を抽出し、調査精度の向上や自然・生活環境を考察する上での資料とすることを主目的に、テフラ検出分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析・種実同定・炭化材の樹種同定・黒曜石の産地同定の各分析を委託して実施した。

上記の分析のうち、テフラ分析・放射性炭素年代測定・植物珪酸体分析・種実同定分析は、試料採取地点によって5区・6区を中心とする台地～傾斜部と、2・3区の沢地部とに大別される。なお、前記した分析及び花粉分析については、採取地点をまとめる形で実施したことをお断りしておきたい。この一例として、2・3区の沢地部における放射性炭素年代測定の試料2・植物珪酸体分析及び花粉分析の試料4・種実同定の試料1の採取地点は、何れも同一層順である。

以下、第1節～第7節において各分析結果を報告するが、分析の目的や概要等については各節のはじめに記している。

第1節 テフラ検出・屈折率測定

1. はじめに

本遺跡は、約2万年前と考えられている「応桑泥流堆積物層」を基層とする台地上に立地している。この上位には浅間草津黄色軽石(As-YPk)の堆積が顕著に認められ、さらにこの上位層には黄色ロームや黒色土が堆積し、縄文時代の遺構構築面は基本層序のIV層面が上限にあたる状況と考えられる。

以上の様相にあって、台地～傾斜部では基本層序IV層中や遺構覆土に白色や黄色を呈する小軽石粒が多数に混入している。また、この上位のIII層中には同様の色調を呈する小軽石粒が極僅かながら含まれている。これらの小軽石粒については、該当する示準テフラが不明確な状況であった。このため、これを分析することによって遺構の構築年代に関する情報が得られる可能性を考え、IV層基調と考えられる数基の土坑覆土を試料としてテフラ検出分析を実施した。また台地上では、基本層序確認においてAs-YPk層(VIII-2層)上位にも同様の軽石層が看取された。この軽石層には該当する示準テフラが認められない可能性が高まったため、この分析を行った。2・3区の沢地部については、基本層序が台地～傾斜部とは大きく異なり、腐植質土の堆積や湧水などが見られた。このため、台地～傾斜部では検出し難いテフラが沢地部の堆積土中に含まれている可能性を考え、2・3区の基本層序確認土層からの採取試料による分析を行った。

この結果、台地～傾斜部の土坑覆土試料による分析では数種のテフラが検出され、縄文時代では浅間火山から噴出した軽石や、約5,000年前に草津火山から噴出した草津熊倉軽石(KS-K)の可能性が示唆される軽石が確認されている。また沢地部では、下位から浅間板鼻黄色軽石(As-YP)、浅間C軽石(As-C、4世紀前～中葉)、浅間B軽石(As-B、1108年)・浅間粕川テフラ(As-Kk)に由来する可能性の軽石が検出されている。

このうちAs-Cについては、6-105号土坑覆土最上位の試料でも検出されており、該期にも土坑が凹みとして残っていたか、或いは何らかの作用による土壌汚染などの可能性が想定される。また6-116号土坑覆土試料では、テフラ粒子検出結果と後述する放射性炭素年代測定結果との相違が認められ、分析報告では何らかの作用による土壌汚染の可能性が示唆されている。また、台地上においてAs-YPk上位で認められた軽石層について、屈折率測定結果はAs-YPkの特徴と一致することから、As-YPkの二次堆積層であると考えられる。これにより、基本層序では本層をVIII-2層としている。

なお、長野原町教育委員会による坪井遺跡の二次調査では、基本層序において上位からAs-C、浅間D軽

石(As-D)、浅間六合軽石(As-Kn)を含む可能性の土層が確認されている。これと比較すれば、長野原町域においてAs-Cの降下が周知されることになり、また本遺跡では不明確であった縄文時代のテフラがAs-DやAs-Knである可能性も想定されるが、これについてはさらに今後の分析による追認が必要である。

2 長野原一本松遺跡の地質(土層)とテフラ(1)

1. はじめに

長野原一本松遺跡の発掘調査では、後期更新世末の浅間草津黄色軽石(As-YPk)より上位の土層をよく観察することができた。また多くの土坑も検出された。そこでテフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行い、土層の堆積年代に関する資料を収集するとともに、土坑の構築年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、5-120号配石、6-116号土坑、6-105号土坑、6-102号土坑、6-109号土坑の5地点である。

2. 土層の層序

(1) 5-120号配石

ここでは約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間草津黄色軽石(As-YPk, 新井, 1962)の上位の土層が認められた。この地点では、As-YPkの最上部にある黄色軽石混じり褐色細粒火山灰層(層厚4cm)とその上位の灰色細粒火山灰層(層厚1cm)のさらに上位に、下位より桃色がかかった褐色土(層厚6cm)、砂質褐色土(層厚2cm)、逆級化構造の認められる黄色軽石層(層厚26cm, 軽石の最大径37mm)、黄色細粒軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径18mm)、黄色軽石を少量含む褐色砂質土(層厚14cm, 軽石の最大径17mm)が認められる(図1)。

(2) 6-116号土坑

この土坑の覆土は、下位より黒色土(層厚11cm)、ロームブロック混じり黒褐色土(層厚16cm)、ローム粒子を少量含む黒褐色土(層厚11cm)、黒褐色土(層厚31cm)が認められる(図2)。

(3) 6-105号土坑

円形の土坑の覆土は、下位よりロームブロック混じり暗褐色土(層厚20cm)、ロームブロックに富む黒褐色土(層厚30cm)、ロームブロックを多く含む暗褐色土(層厚10cm)、ロームブロックに富む暗褐色土(層厚49cm)、ロームブロックを少量含む黒褐色土(層厚6cm)、黄色軽石混じり黒褐色土(層厚30cm, 軽石の最大径32mm)が認められる(図3)。

(4) 6-102号土坑

円形の土坑の覆土は、下位よりローム粒子混じり黒褐色土(層厚14cm)、ローム粒子混じり褐色土(層厚7cm)、ローム粒子を比較的多く含む暗褐色土(層厚32cm)、黄色軽石とローム粒子混じり黒褐色土(層厚36cm, 黄色軽石の最大径22mm)が認められる(図4)。

(5) 6-109号土坑

ここでは、下位より暗褐色土(層厚9cm)、黄色細粒軽石混じり黒色土(層厚19cm, 軽石の最大径13mm)が認められる(図5)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

土坑の覆土について基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの試料合計31点を対象にテフラ検出分析を行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの降灰層準を求めることにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分の除去。
- 3) 乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。いずれの試料にも、下位に層位のあるAs-YPkに由来する黄白色で発泡の良い軽石が含まれている。したがって、この軽石については記載から除外した。

6-116号土坑では、3種類の軽石が認められた。試料番号11を除くいずれの試料にもスポンジ状に比較的良く発泡した軽石(3.6mm, 仮にA型軽石と呼ぶ)が含まれている。また試料番号13には、スポンジ状に比較的良く発泡した黄褐色軽石(最大径4.0mm, B型軽石)が含まれている。これらの軽石は、その特徴から縄文時代に浅間火山から噴出した軽石の可能性が考えられるが、テフラの層序やテフラ粒子の特徴把握が十分行われていないことから、現段階においてその起源を明らかにすることは難しい。一方試料番号9には、micro-phenocrystを多く含み、発泡のあまり良くない白色軽石(最大径1.1mm, C型軽石)が少量認められた。この軽石の特徴は約5,000年前に草津火山から噴出した草津熊倉軽石(KS-K, 早田ほか, 1987)の特徴によく似ており、草津火山起源の可能性が考えられる。いずれの試料にも、透明な火山ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの形態としては、スポンジ状あるいは繊維束状に発泡した軽石型のほか、平板状のバブル型も認められる。

6-105号土坑では、試料番号29、19、15、13、9の5試料を除く試料にA型軽石(最大径3.2mm)が認められた。また試料番号17にB型軽石が認められた。さらに試料番号1には、上述3タイプの軽石とは異なる2タイプの軽石が検出された。一種類はスポンジ状によく発泡した灰白色軽石(最大径1.5mm, D型軽石)である。この軽石については、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来する可能性が考えられる。もう一種類の軽石は、あまり発泡の良くない白色軽石(最大径1.1mm, E型軽石)で、班品に角閃石が認められる。この軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来する可能性が考えられる。いずれの試料にも、透明な火山ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの形態としては、スポンジ状あるいは繊維束状に発泡した軽石型のほか、平板状のバブル型も認められる。

6-102号土坑では、試料番号17、7、3の3試料を除くいずれの試料からもA型軽石(最大径2.3mm)が検出された。いずれの試料にも、透明な火山ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの形態としては、スポンジ状あるいは繊維束状に発泡した軽石型のほか、平板状のバブル型も認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

発掘調査の際に新発見のテフラとされていた5-120号配石の2層単の軽石、さらに6-105号土坑の軽石3試料について、屈折率測定を行い特徴の記載を行った。屈折率の測定は、位相差法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。5-120号配石の試料番号1には、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石や磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.501-1.505(中央値: 1.502-1.504)、斜方輝石の屈折率(γ)は1.707-1.712である。5-120号配石の試料番号2にも斜方輝石のほか単斜輝石や磁鉄鉱が重鉱物として含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.501-1.505(中央値: 1.502-1.504)、斜方輝石の屈折率(γ)は

1.707-1.711である。

6-105号土坑の試料Aには、重鉱物として斜方輝石のほか単斜輝石や磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は1.501-1.505、斜方輝石の屈折率(γ)は1.707-1.712である。重鉱物の組み合わせや屈折率などから、3試料の軽石はいずれも同じテフラに由来する可能性が大きい。しかもこれらの軽石の特徴は、下位にあるAs-YPkに含まれる軽石の特徴と一致することから、As-YPkに由来している可能性が強く指摘される。

5. 考察

長野原一本松遺跡においてテフラ検出分析を行い、示標テフラとの層位関係から、土坑の構築年代に関する資料の収集が試みられた。分析の結果から、As-C起源と思われる軽石が検出された6-105号土坑については、少なくとも4世紀中葉以前と推定された。ただし、ほかのテフラ粒子については降灰層準を示す顕著な濃集は認められなかった。さらに今回とくに検出が試みられた鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前, 町田・新井, 1978)も、長野県軽井沢町周辺や高山村域の黒ボク土から検出されている(新井, 1979ほか)にもかかわらず、今回は検出されなかった。

後述する放射性炭素年代測定結果と比較すると、とくに6-116号土坑の炭の年代測定結果($1,340 \pm 50$ y.B.P.)がテフラ粒子の検出状況を考慮すると新しく出ているように見える。おそらく何らかの作用により汚染された可能性が考えられよう。

6. 小結

長野原一本松遺跡において地質調査、テフラ検出分析さらに屈折率測定を行い、示標テフラの検出を試みた。その結果、浅間草津黄色軽石(As-YPk, 新井, 1962)のほか、浅間火山や草津白根火山起源と思われるテフラ粒子が検出された。土坑の構築年代は4世紀中葉以前と推定されるが、テフラ粒子の顕著な濃集層準は認められなかった。したがって土坑の構築年代については放射性炭素年代測定に期待したい。

参考文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79。
 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.137, p.41-52。
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p。
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土器器と須恵器。群馬県教育委員会編「五箇原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119。
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312。
 早田 勉・鹿堂 健・新井房夫(1988)草津白根火山起源, 熊倉軽石層の噴出年代, 東北地理, 40, p.272-275。

遺構	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	粒大径	量	色調	形態
116号土坑	1	+	灰	1.1	++	透明	pa/bw
	3	+	灰	1.1	++	透明	pa/bw
	5	+	灰	1.2	++	透明	pa/bw
	7	+	灰	1.6	++	透明	pa/bw
	9	+	灰、白	1.7, 1.1	++	透明	pa/bw
	11	-	-	-	++	透明	pa/bw
	13	+	灰、黄褐色	3.6, 4.0	++	透明	pa/bw
105号土坑	1	+	灰白、白	1.5, 1.1	++	透明	pa/bw
	3	+	灰	2.2	++	透明	pa/bw
	5	+	灰	1.7	++	透明	pa/bw
	7	+	灰	1.4	++	透明	pa/bw
	9	-	-	-	++	透明	pa/bw
	11	+	灰	3.2	++	透明	pa/bw
	13	-	-	-	++	透明	pa/bw
	15	-	-	-	++	透明	pa/bw
	17	+	黄褐色	2.9	++	透明	pa/bw
	19	+	灰	-	++	透明	pa/bw
	21	+	灰	1.7	++	透明	pa/bw
	23	+	灰	0.8	++	透明	pa/bw
	25	+	灰	1.3	++	透明	pa/bw
27	+	灰褐色	1.6	++	透明	pa/bw	
29	-	-	-	++	透明	pa/bw	
102号土坑	1	+	灰	2.2	++	透明	pa/bw
	3	-	-	-	++	透明	pa/bw
	5	+	灰	1.2	++	透明	pa/bw
	7	-	-	-	++	透明	pa/bw
	9	+	灰	1.7	++	透明	pa/bw
	11	+	灰	1.2	++	透明	pa/bw
	13	+	灰	1.8	++	透明	pa/bw
17	-	-	-	++	透明	pa/bw	

++++: 多くに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 粒大径の単位は, mm, bw: パズル型, pa: 軽石型.

遺構	試料	量	色調	形態
5-120号配石	1	opx+cpx, wt	gl(a): 1,501-1,505 (1,502-1,504)	opx(y): 1,707-1,712
	2	opx+cpx, wt	gl(a): 1,501-1,505 (1,502-1,504)	opx(y): 1,707-1,711
6-105号土坑	A	opx+cpx, wt	gl(a): 1,501-1,505	opx(y): 1,707-1,712

測定は位相法 (藤井, 1972) による. opx: 斜方輝石, cpx: 单斜輝石, wt: 重晶石, gl: 火山ガラス.

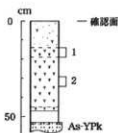


図1 5-120号配石壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

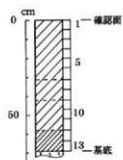


図2 6-116号土坑の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

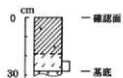


図5 6-109号土坑の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

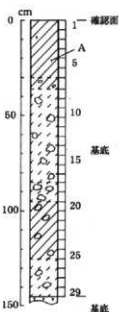


図3 6-105号土坑の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

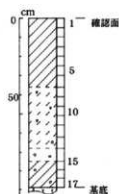


図4 6-102号土坑の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

- 軽石
- 粗粒火山灰
- 黒色土
- ▨ 黒褐色土
- ▧ 暗褐色土
- 褐色土
- 砂
- romeブロック
- rome粒子

3. 長野原一本松遺跡の地質(土層)とテフラ(2)

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域の後期更新世以降に形成された地層中には、浅間火山さらに榛名火山など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

長野原一本松遺跡の発掘調査では、年代の不明な土層が検出された。そこで土層の年代に関する資料を得るために、地質調査を行い地質層序を記載するとともに、テフラ検出分析を行うことになった。調査分析の対象となった地点は、長野原一本松遺跡2・3区の地点である。

2. 土層の層序

長野原一本松遺跡2・3区

この地点では、約2万年前の浅間火山の山体崩壊に由来し、前橋泥流堆積物(新井, 1967)に連続する応桑岩層なだれ堆積物(荒牧, 1968, 早田, 1990)が厚く堆積する吾妻川左岸の平坦面をきって形成された谷の堆積物を観察することができた(図1)。ここでは、応桑岩層なだれ堆積物(層厚10cm以上)の上位に、下位より灰色砂礫層(層厚8cm, 礫の最大径22mm)、暗褐色砂層(層厚17cm, 礫の最大径33mm)、灰色砂礫層(層厚9cm, 礫の最大径32mm)、黒褐色泥炭層(層厚4cm)、灰色砂層(層厚0.5cm)、黒褐色泥炭層(層厚0.8cm)、灰色砂層(層厚3cm)、黒褐色泥炭層(層厚2cm)、黄白色軽石(最大径15mm)に富む黄灰色砂質土(層厚39cm, 礫の最大径166mm)、黄色軽石を含む黒色土(層厚18cm, 軽石の最大径8mm)、黄色軽石混じり黒灰色土(層厚17cm, 軽石の最大径13mm)、黄色軽石混じり黒色土(層厚28cm, 軽石の最大径12mm)、褐色砂質表土(層厚26cm)が認められた。

これらの土層に含まれる黄色および黄白色の軽石は、よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から、約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962)の一部の浅間草津黄色軽石(As-YPk, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

長野原一本松遺跡2・3区において、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの土層試料11点について、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。長野原一本松2・3区では、いずれの試料にも、As-YPkに由来する白色軽石が認められた。また試料番号16から11にかけては、発泡の良い淡灰色軽石(最大径4.3mm)がごく少量ずつ認められた。このテフラについては、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来する可能性が考えられる。また試料番号1に含まれる淡褐色軽石は、比較的によく発泡している。この軽石は、その岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)また

は1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ(As-Kk, 早田, 1991, 1995)に由来すると考えられる。

4. 小結

長野原一本松遺跡2・3区において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、応森岩屑なだれ堆積物(約2万年前)の上位に、下位より浅間板鼻黄色軽石(As-YP)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)に由来する軽石、さらに浅間Bテフラ(As-B, 1108年)や浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)に由来する軽石を検出することができた。

参考文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1967)前橋泥流の噴出年代と岩宿1文化期—日本の第四紀期の¹⁴C年代XXXIII—, 地球科学, 21-3, p.46-47.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代に降る示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質, 地質研専報, 14, p.1-45.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 早田 勉(1990)群馬の自然と風土, 群馬県史通史編, 1, p.39-129.
 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
 早田 勉(1995)テフラからさぐる浅間山の活動史, 御代田町誌, 自然編, p.22-43.

表1 テフラ検出分析結果

遺跡	地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
長野原一本松	2・3区	1	+	白>黒濁	3.1,1.2
		3	++	白	3.7
		5	++	白	3.9
		7	++	白>黒濁	2.3,2.5
		9	++	白	3.7
		11	++	白>黒濁	2.3,2.9
		13	++	白>黒濁	3.1,1.3
		15	++	白>黒濁	3.8,1.8
		16	++	白>黒濁	4.4,4.3
		17	++	白	3.2
		19	++	白	6.9

++++: 多くに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
 -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

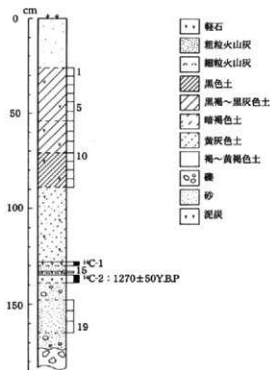


図1 長野原一本松遺跡2・3区の土層柱状図
 数字はテフラ分析の試料番号
¹⁴C-1 数字は放射性炭素年代測定
 の試料番号

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

年代測定分析は、土坑の構築年代や土層の堆積年代を検証することを主目的として、採取した土壌試料中に含まれる炭化物の¹⁴Cを測定した。この試料は、台地～傾斜部では6-102号土坑・6-105号土坑・6-116号土坑の覆土、沢地部にあたる2・3区では腐植質土である。

この結果、補正を加えた暦年代幅においては概ね6-102号土坑が縄文時代中～後期頃、6-105号土坑が前～中期頃と思われるが、6-116号土坑は7世紀後半～8世紀後半の年代観が示された。これについて、前述のテフラ分析との比較においては、放射性炭素年代測定結果が新しく出ているとの所見が示され、何らかの作用による土壌汚染の可能性が示唆されている。

しかし、発掘調査において明確な擾乱等が確認されていない現状では、これを一概に土壌汚染とするには問題が残るように思われる。この可能性としては、「縄文時代の土坑が該期まで凹みとして残っていた」・「セクション観察において重複等を誤認した」などが想定されるが、何れも不明確な状況である。本報文では、調査時や科学分析の所見に拠って6-116号土坑については縄文時代の所産としたが、この年代観については問題を含むものと思われる。

また、平成12年度のハツ場ダム関連事業における発掘調査でも、同様の問題を含む土坑が確認されている。6-116号土坑の年代については、こうした類似土坑との検証を踏まえる必要があると思われ、今後の調査・研究における検討課題と言わざるを得ないのが実状である。さらには、類似土坑の検証如何によっては、遺物を伴わない土坑の年代観を再検討する必要が生じることも想定され、今回の調査の反省点として認識すると共に、発掘調査や分析等の資料が蓄積されることに期待したい。

以上は、台地部の土坑覆土における年代測定結果であるが、2・3区の沢地部では6-116号土坑に近い年代観が示されている。これは、補正による暦年代幅において最大7世紀後半～9世紀後半の年代が示されている。沢地部においては、5世紀後半から6世紀代と考えられる土師器片の出土が確認されており、またテフラ分析結果と比較しても、6-116号土坑の結果にあるような大幅な齟齬は無いように思われる。

2. 長野原一本松遺跡の放射性炭素年代測定結果(1)

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法(表1)

試料名	地点(区画)・層序	種類	前処理・測定	測定法
№1	102号土坑覆土表底部5cm	土層	酸化剤・低炭素処理 ベンゼン合成	β測定
№2	105号土坑覆土表底部5cm	土層	酸化剤・低炭素処理 ベンゼン合成	β測定
№3	116号土坑	炭	酸化剤 ベンゼン合成	β測定

2. 測定結果(表2)

試料名	¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 突出(1σ)	測定値 Beta
№1	3,890±70	-20.8	3,940±70	BC2400	90942
				(BC2400~2225)	
№2	5,200±80	-21.1	5,270±80	BC4055	90943
				(BC4225~3980)	
№3	1,340±30	-27.0	1,310±30	AD650	90944
				(AD665~775)	

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5,568年を用いた。

2) δ¹³C測定値

第5章 自然科学分析

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と歴年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

3. 長野原一本松遺跡の放射性炭素年代測定結果(2)

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法(表1)

地点	試料	種類	採取地・調査	測定法
2-3区	2	埋藏室抄土	藤島沖・石巻遺跡	AMS法

2. 測定結果(表2)

地点	試料	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	測定値 beta-
2-3区	2	1310 \pm 50	-27.5	1270 \pm 50	交点: AD770 2 σ : AD663~885 1 σ : AD663~809	109385

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年 AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない。

第3節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体分析は、植生等の古環境を推測することを主目的に実施した。この試料は、前述の分析と同じ5区・6区の台地～傾斜部に位置する5-120号配石・6-102号土坑・6-105号土坑・6-116号土坑からの採取試料、及び2・3区基本層序確認断面から採取した試料である。

台地～傾斜部においては、5-120号配石が台地上の他は台地西側の傾斜部に位置している。5-120号配石では、下部遺構の壁面から採取したAs-YPk直上のローム層を試料としたが、植物珪酸体は検出されなかった。6区の傾斜部に位置する3基の土坑では、覆土からの採取試料を分析した結果、ヨシ属の植物珪酸体が卓越している傾向が認められ、台地縁部の傾斜部については比較的湿潤な土壤条件であったことが推測される。また、この他にはウシクサ族やクマザサ属なども見られ、台地～傾斜部における植生を窺わせるものと考えられる。

2・3区の沢地部では、現状でも湧水などが認められる環境であり、分析でも湿潤な土壤条件に生育するヨシ属などの植物珪酸体が検出されている。この他には、キビ族・ススキ属・ウシクサ族・クマザサ属なども検出され、周辺の植生を示唆するものと考えられる。さらには、オオムギ属が少量ながら確認され、調査地点も含めた周辺においてムギ類の栽培が行われていた可能性が推定される。

2. 長野原一本松遺跡における植物珪酸体分析(1)

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、5-120号配石、6-116号土坑、6-105号土坑、6-102号土坑から採取された計10点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105°C・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μ m・約0.02g)
 - ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁹g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属(ヨシ)の

換算係数は6.31、ススキ属型(ススキ)は1.24、ネザサ属は0.48、クマザサ属は0.75である。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族(大型)、Bタイプ、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

その他

4. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

(1) 5-120号配石

浅間草津黄色軽石(As-YPK)直上層(試料1)について分析を行った。その結果、植物珪酸体はまったく検出されなかった(表1)。同層の堆積当時は、何らかの原因でイネ科植物の生育には適さない環境であったものと推定される。

(2) 6-116号土坑(図1)

土坑底部の覆土(試料1～3)について分析を行った。その結果、ウシクサ族や棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、クマザサ属型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、全体的にヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、6-116号土坑の埋没当時はヨシ属が生育するような比較的湿潤な土壌条件であり、周辺ではウシクサ族やススキ属、クマザサ属なども見られたものと推定される。なお、ヨシ属が数物などとして人為的に土坑に入れられていたことも想定されるが、対比試料(周辺の土壌など)との検討がなされていないことから判断が困難である。ここでは、土坑覆土の比較的上部でもヨシ属が多いことから、周辺の植生が反映されている可能性が高いと考えられる。

(3) 6-105号土坑(図2)

土坑底部の覆土(試料1～3)について分析を行った。その結果、ヨシ属、ウシクサ族、クマザサ属型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、全体的にヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、6-105号土坑の埋没当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な土壌条件であり、周辺ではウシクサ族やクマザサ属なども見られたものと推定される。

(4) 6-102号土坑(図3)

土坑底部の覆土(試料1～3)について分析を行った。その結果、ヨシ属、ウシクサ族、クマザサ属型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、全体的にヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、6-102号土坑の埋没当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な土壌条件であり、周辺ではクマザサ属なども見られたものと推定される。

5. まとめ

以上のように、6-116号土坑、6-105号土坑、6-102号土坑の埋没当時は、いずれもヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと推定される。

参考文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一般種イネ科栽培 植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学, 9, p.15-29.

表1 長野原一本松遺跡における植物珪酸体分析結果

検出植物(単位: ×100個/cm ²)	5区			6区		
	116号土坑			105号土坑		
	120号	1	2	1	2	3
イネ科						
キトシ属	26	27	7			15
ヨシ属	43	55	68	37	24	22
ススキ属	14	14	7			7
ウシクサ属	264	296	183	22	166	15
ウシクサ属(大型)			14			8
目タイア	21			7		25
クサ科						
ネギ科		14				
クマザサ属	85	41	48	30	55	81
ホトシ属	114	102	143			67
その他のイネ科						
奥波毛起属	21	20	7	7	8	7
神杖珪酸体	797	692	507	195	79	87
葉部珪酸体	59	41	34	7	32	68
葉心部珪酸体	823	848	652	172	158	171
葉部珪酸体						135
葉心部珪酸体						161
その他						8
植物珪酸体総数	6	2399	2022	1739	290	521
				439	375	287
				325	287	325

イネ科	おもな分類群の検出生産量(単位: kg/d-m ²)					
	ヨシ属	ススキ属	ネギ科	クマザサ属	その他のイネ科	その他
ヨシ属	2.63	2.45	4.29	2.58	1.48	1.41
ススキ属	0.18	0.17	0.08			
ネギ科			0.07			
クマザサ属	0.41	0.21	0.51	0.23	0.41	0.31
その他のイネ科				0.51	0.51	0.33

※試料の検出量を1.0に設定して算出。

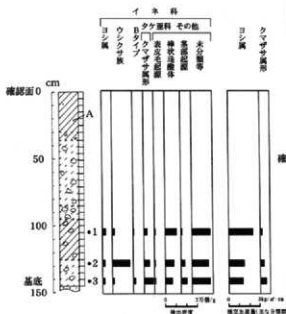


図2 6-105号土坑の植物珪酸体分析結果

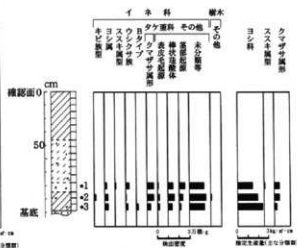


図3 6-102号土坑の植物珪酸体分析結果

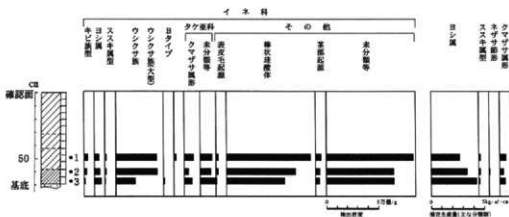


図4 6-116号土坑の植物珪酸体分析結果

3. 長野原一本松遺跡における植物珪酸体分析(2)

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、長野原一本松遺跡の6-105号土坑覆土(試料1~10)の計10点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

2. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

1) 試料の絶乾(105°C・24時間)

2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μ m・約0.02g)

※電子分析天秤より1万分の1gの精度で秤量

3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理

4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)

5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去、乾燥

6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレバラート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94、ヒエ属型(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属型(ススキ)は1.24、ネザサ属は0.48、クマザサ属は0.75である。

3. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来:キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族(大型)、Aタイプ(くさび型)、Bタイプ、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他:表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

4. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

長野原一本松遺跡、6-105号土坑覆土(図1)

土坑の覆土(試料1~10)について分析を行った。その結果、土坑底部(試料10)では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、クマザサ属型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。試料9~試料4でもおおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも比較的数量である。覆土上部(試料1~3)では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、クマザサ属型なども検出された。おもな分類群の推定生産量(図の右側)に

4. 長野原一本松遺跡における植物珪酸体分析(3)

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

2. 試料

分析試料は、2・3区の土層断面から採取された5点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)

2) 試料約1gに対して直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)

3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理

4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散

5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去

6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属(ヨシ)の換算係数は6.31、スキ属(スキ)は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来: キビ族型、ヨシ属、スキ属型(スキ属など)、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)

類の表皮細胞由来: オオムギ族(ムギ類)

[イネ科—タケ亜科]

機動細胞由来: ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節とチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状(ブナ科コナラ属など)

(2) 植物珪酸体の検出状況

試料1から試料5までの層準について分析を行った。その結果、試料5では棒状珪酸体やその他(未分類等)が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型なども少量検出された。1270±50y.B.P.の放射性炭素年代測定値が得られた試料4およびその上層(試料2、3)でも、おおむね同様の結果である。試料1でも同様の分類群が検出されたが、全体的に密度が高くなっている。また、試料1ではオオムギ族(類の表皮細胞)が700個/㎡と少量検出された。ここで検出されたのは、ムギ類(コムギやオオムギなど)と見られる形態のもの(杉山・石井, 1989)である。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、全体的にヨシ属が卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

以上の結果から、試料5から試料1までの層準の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、ネザサ節、クマザサ属なども見られたものと推定される。また、試料1の層準では、調査地点もしくはその近辺でムギ類の栽培が行われていたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二(1987)遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究。第2号, p.27-37。
 杉山真二・石井克己(1989)群馬県子持村、FP直下から検出された炭化物の植物珪酸体(プラント・オパール)分析。日本第四紀学会要旨集, 19, p.94-95。
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学, 9, p.15-29。

表1 長野県一本松遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/㎡)	P-3区				
	1	2	3	4	5
分類群 \ 試料					
オオムギ類(類の表皮細胞)	7		7	13	7
キビ族型	50	7	30	7	21
ヨシ属	97	40	30	7	24
ススキ属型	7	7			14
ウシクサ族型	20	20	15	13	21
ウシクサ属(大型)			7		
クマザサ属					
オオムギ属型	50	15	22	26	7
クマザサ属型	58	15	15	7	14
ミヤコザサ属型				7	
未分類等	76	22	15	7	
その他(未分類)					
表皮毛起源		22	7	20	
棒状珪酸体	412	250	127	177	110
茎部起源	14				
未分類等	830	461	200	261	213
検出総量					
オオムギ類(コナラ属など)		15			
植物珪酸体総量	1215	851	553	826	471
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/a/m ²)					
ヨシ属	6.14	2.81	1.88	0.41	1.20
ススキ属型	0.29	0.20			0.17
ネザサ節型	0.27	0.07	0.11	0.13	0.05
クマザサ属型	0.42	0.13	0.11	0.25	0.10
ミヤコザサ属型		0.04		0.02	
クマザサ節の比率 (%)					
オオムギ属型	20	21	40	22	24
クマザサ属型	61	49	61	25	70
ミヤコザサ属型				10	

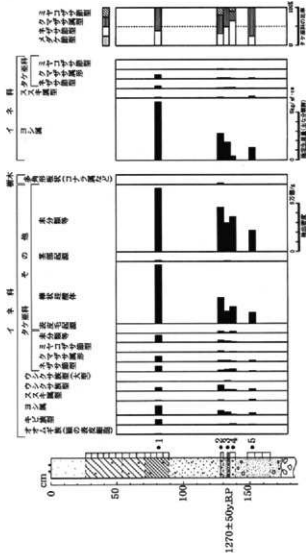
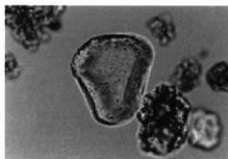
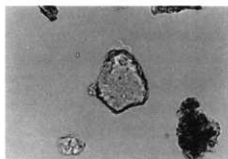


図1 2・3区における植物珪酸体分析結果

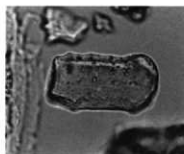


スピロ藻類 (試料2)

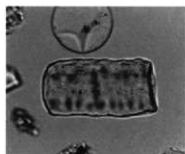


ツマザマ藻類 (試料2)

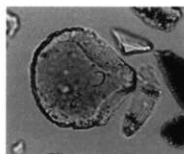
写真1 植物細胞体分析(2)顕微鏡写真(400倍×50%)



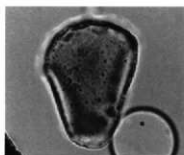
キビ藻類 (試料5)



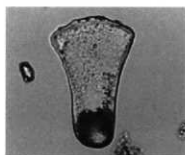
キビ藻類 (試料4)



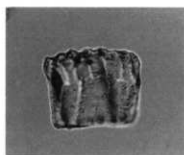
キビ藻類 (試料5)



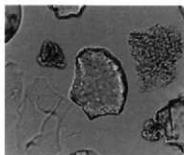
ウシクサ藻類 (大型) (試料3)



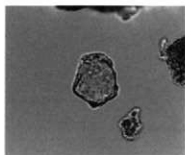
ウシクサ藻類 (大型) (試料4)



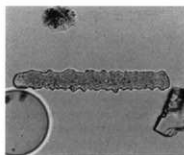
キゼツ藻類 (試料3)



ツマザマ藻類 (試料2)



エキコサヤ藻類 (試料4)



線状細胞体 (試料2)

写真2 植物細胞体分析(3)顕微鏡写真(400倍×50%)

第4節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、植生等の古環境を推測することを主目的として実施した。この試料は、2・3区の基本層序確認断面から採取したものである。

分析の結果では、樹木花粉よりも草本花粉の比率が高い部分があり、さらに草本花粉の中でもカツリグサ科やイネ科・ヨモギ属が優占する傾向が認められている。また、キンボウグ科・ナス科・セリ科・タンポポ科・キク科があり、イネ属も検出されている。以上のことから、陽当たりの良い湿地からやや乾燥した環境であったと推定され、さらにはイネ科の花粉から調査地点を含む周辺で水田が営まれていた可能性も推測される。さらには、これらを取り巻く森林植生を示唆するカシ類やマツ類などの樹木花粉が検出されており、特にマツ類は二次林の要素を含むものである。

2. 長野原一本松遺跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、2・3区の土層断面から採取された5点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で雑などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結果

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉17、シダ植物胞子2形態の計35である。これらの学名と和名および粒数を表と図に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を列記する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシダ属—アサダ、クリ—シイ属、コナラ属アカガシ亜属、カエデ属、ブドウ属、ニワトコ属—ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ナアシコ科、キンボウグ属、カラマツソウ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、セリ科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

4. 花粉群集の特徴と推定される植生と環境

試料4では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。種類が多く多様な環境に生育するカヤツリグサ科とイネ科、やや乾燥した陽当たりのよいところに生育するヨモギ属が優占する。他に、やや湿ったところから乾燥地に生育するキンボウグ科、ナス科、セリ科、タンポポ亜科、キク亜科が伴われ、イネ属型も出現する。

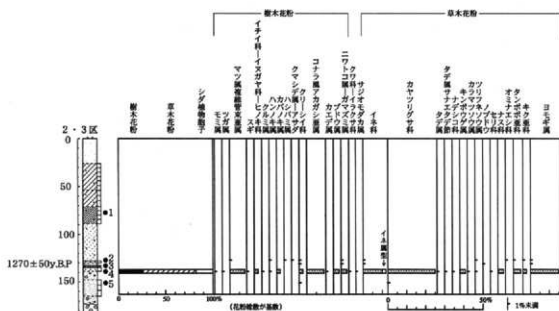
以上のことから、1270±50y.B.P.の放射性炭素年代測定値が得られた試料4の堆積当時は、これらの草本が生育する陽当たりの良い湿地からやや乾燥地の環境であったと推定される。また、当時は調査地点もしくはその周囲で水田が営まれていたものと推定される。森林植生としては、やや離れたところにカシ類(コナラ属アカガシ亜属)やマツ類(マツ属複雑維管束亜属、ニヨウマツ類)などが分布していたものと推定される。マツ類は二次林要素であり、周辺の森林が人為干渉により二次林化していたことを示唆している。

参考文献

- 中村純(1973)花粉分析。古今書院、p.82-110。
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
高倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5巻、60p。
中村純(1986)日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13巻、91p。
中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究、13、p.187-193。
中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。

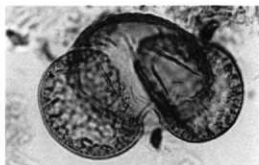
表1 長野原一本松遺跡における花粉分析結果

学名	和名	2・3区			
		1	2	3	4
Nonreticulate pollen					
<i>Adiantum pollen</i>	蕨花粉				
<i>Alnus</i>	ヤシ栗			1	
<i>Taxus</i>	ツグミ			1	
<i>Pinus sibirica, Diploxys</i>	マツ属植物花粉類	1		11	
<i>Corymbium japonica</i>	スズバ			1	
<i>Taxaceae-Cupressales-Cupressaceae</i>	イチョイ科・イヌササ科・ヒノキ科			2	
<i>Juniper</i>	カドノミ			1	
<i>Alnus</i>	ハシノキ属	1		1	
<i>Betula</i>	スズノキ属			2	
<i>Corylus</i>	ハシノミ	1			
<i>Corymbium japonica</i>	タマリシイ属, アサギ			1	
<i>Castanea vesicosa-Castanea</i>	タマリシイ属	5	1	3	1
<i>Quercus sibirica, Cocciferae</i>	コナラ属アカガシ属類			12	
<i>Acer</i>	カエデ属			1	
<i>Ficus</i>	ブナ科属			4	
<i>Ulmaceae-Ulmaceae</i>	ユリカシ科, ヨシボシ科	1	1	3	
Microfossil pollen					
<i>Microrosaceae</i>	タマリシイ科			1	
Nonreticulate pollen					
<i>Alnus</i>	ヤシ栗花粉			1	
<i>Quercus</i>	イノ木属	18	3	13	
<i>Ostrya type</i>	カキノミ	1	17	7	
<i>Corymbium</i>	カキノミノミ			34	
<i>Polyporus sord.</i>	タゲ属			1	
<i>Polyporus sord. Punctatis</i>	タゲ属サナタゲ属			1	
<i>Caryophyllaceae</i>	タゲシコ科			1	
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ属			4	
<i>Flabellum</i>	カタハシノミ			4	
<i>Impatiens</i>	ツツジノミ	2		1	
<i>Asperulaceae-Asperulaceae</i>	ノボリ			1	
<i>Umbelliferae</i>	セリ科			1	
<i>Solanaceae</i>	ナス科			4	
<i>Violaceae</i>	オミナズミ科			1	
<i>Lactonidae</i>	タンポポ科			5	
<i>Compositae</i>	キク科			1	
<i>Asteraceae</i>	アスター科			2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			14	3
Pollen spores					
<i>Monolete type spores</i>	シダ植物孢子		9	4	13
<i>Triolete type spores</i>	三葉植物孢子		3	1	18
Adventitious pollen					
<i>Adiantum</i>	蕨科・蕨花粉	0	10	2	43
<i>Nonreticulate pollen</i>	蕨科・蕨花粉	0	2	0	1
<i>Nonreticulate pollen</i>	蕨科	0	42	34	92
Total pollen	花粉総数	0	52	20	136
Unknown pollen	未特定花粉	0	0	1	4
Pollen spores	シダ植物孢子	0	13	7	31



第5章 自然科学分析

写真1 花粉分析 花粉・胞子遗体顕微鏡写真



1 マツ属植物花粉



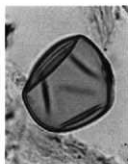
2 イチイ科-イヌギヤク
-ヒノキ科



3 ハンノキ属



4 ブドウ属



5 イヌ科



6 カヤツリグサ科



7 ナナシコ科



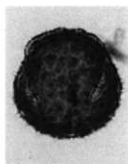
8 ツリフネソウ属



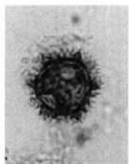
9 ノドツ



10 ナス科



11 オシナエシ科



12 タンゴザン科



13 コモイ属



14 シダ植物単葉類胞子



15 シダ植物三葉類胞子

— 45μm

第5節 種実同定

1. はじめに

種実同定は、植生等の古環境を推測することを主目的として実施した。この試料は、台地～傾斜部に位置する6-102号土坑・6-105号土坑・6-116号土坑の覆土試料、及び2・3区基本層序確認断面からの採取試料である。

分析の結果、台地～傾斜部における土坑覆土試料では、何れからも種実は検出されなかった。この要因は、土壌生成作用によって有機物が分解されたためと考えられている。2・3区からは多数の種実が検出され、樹木より草本のものが多い傾向が認められている。具体的には、カラムシ属・カヤツリグサ科・カヤツリグサ属が優占する状況である。樹木では、少量ながらキイチゴ属・サンショウ・ブドウ属などが検出され、隔当たりのよい林縁に生育するものである。

2. 長野原一本松遺跡における種実同定(1)

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、長野原一本松遺跡の6-102土坑底部の覆土(種1、2)、6-105土坑底部の覆土(種3、4)、6-116土坑底部の覆土(種5、6)の計6点である。

2. 方法

試料(堆積物)500ccを0.25mmの篩を用いて水洗選別を行い、その残渣を双眼実体顕微鏡で観察した。必要に応じて落射顕微鏡観察も行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属の階級で示した。

3. 結果

分析の結果、種実はいずれの試料からも検出されなかった(写真参照)。種実が検出されないのは、土壌生成作用によって種実などの有機物が分解されたためと考えられる。

参考文献

- 笠原安夫(1985)日本雑草図説、幾堂堂、49p。
松谷暁子(1988)電子顕微鏡でみる縄文時代の栽培植物、畑作文化の誕生、日本放送出版協会、p.91-120。

3. 長野原一本松遺跡における種実同定(2)

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、2・3区の土層断面から採取された2点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 方法

試料(堆積物)を秤量し、0.25mm目の篩を用いて水洗選別を行う。肉眼および双眼実体顕微鏡によって観察を行い、同定と計数を行う。同定は形態的特徴および現生標本との対比によって行い、同定レベルによって科、属、節、種(の階級)で示した。

3. 結果

樹木7、樹木と草本を含むもの1、草本17の分類群が同定された。以下に特徴を記す。

(樹木)

- 1) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinuss* 殼斗 ブナ科
褐色で椀状を呈し、鱗片が覆瓦状に並ぶ。
 - 2) モモ *Prunus persica* Batsch 核バラ科
褐色でやや両端の尖る楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面には特有の隆起がある。蜜歯類による食痕がある。
 - 3) サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 ミカン科
黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。長さmm、幅mm。
 - 4) ケイチゴ属 *Rubus* 核バラ科
淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。
 - 5) ウルシ属 *Rhus* 種子 ウルシ科
茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。断面は扁平である。
 - 6) ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科
茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。
 - 7) サルナシ *Actinidia arguta* Planch. ex Maq. 種子 マタタビ科
茶褐色で楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。
〔樹木・草本を含むもの〕
 - 8) ウコギ属 *Aralia* 種子 ウコギ科
淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2〜3本走る。
〔草本〕
 - 9) イネ科 *Gramineae* 果実
褐色で紡錘形を呈す。胚と条線がある。表面は滑らかである。
 - 10) ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科
黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4〜8本の針状の付属物を持つ。
 - 11) カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科
黒褐色〜黒色で倒卵形を呈す。A〜Dの4形態に分類される。
 - 12) カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実
黒褐色〜灰色で倒卵形を呈す。A〜Cの3形態に分類される。
 - 13) コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科
淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7〜9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。
 - 14) カラムシ属 *Boehmeria* 種子 イラクサ科
ゆがんだ卵形を呈し両端は尖る。表面はやや粗い。種皮は厚くやや堅い。A〜Cの3形態に分類される。
 - 15) タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科
黒褐色で卵形を呈す。表面にやや光沢がある。断面が三角形のAと楕円形のBとに分類される。
 - 16) オトギリソウ属 *Hypericum* 種子 オトギリソウ科
暗褐色で円柱状長楕円形を呈す。表面に不明瞭な網目模様が発達する。
4. 種実群集の特徴と推定される植生と環境

試料1からは、多くの種実が検出された。樹木より草本が多く、カラムシ属、カヤツリグサ科、カヤツリグサ属でほとんどを占める。草本では他にホタルイ属、コナギ、タデ属、オトギリソウが出現する。カラムシ属は林縁や路傍に多い草本である。カヤツリグサ科、カヤツリグサ属、タデ属は水湿地植物を主に多様な環境に生育する種類を含む。ホタルイ属、コナギは抽水植物であり、オトギリソウは山野に普通に生育する。樹木では少量であるが、キイチゴ属、サンショウ、ブドウ属などが検出され、いずれもやや隔当たりの良い林縁に生育する種類が多い。

以上のことから、1270±50y.B.P.の放射性炭素年代測定値が得られた試料1の堆積当時は、これらの植物が生育するやや湿地的な環境であったと推定される。また、この時期にはモモの栽培が行われていたものと考えられる。モモは、弥生時代以降の西南日本の遺跡から普通に出土している。

参考文献

笠原安夫(1985)日本雑草図説。興賢堂、494p.

笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣 出版、p.131-139.

表1 長野原一本松遺跡における種実同定結果

学名	全種数 (100g中)		2-3区
	種数	個数	
<i>Aster</i>	属名		
<i>Quercus acut. Prine</i>	コナギ属コナギ属	種子	1
<i>Pinus peuce. Benth</i>	モモ	種	1
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	種	1
<i>Zanthoxylum piperitum DC</i>	サンショウ	種子	2
<i>Rhus</i>	ウツク属	種子	2
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	1
<i>Artemisia arguta Planch. et Nig.</i>	サルメソウ	種子	1
<i>Aster-Hab</i>	属名・草本		
<i>Ardis</i>	ウツク属	種子	1
<i>Betula</i>	属名		
<i>Crataegus</i>	イボ科	果実	3
<i>Spiraea</i>	オナモミ属	果実	4
<i>Cyperus A</i>	カヤツリグサ属A	果実	30
<i>Cyperus B</i>	カヤツリグサ属B	果実	1
<i>Cyperus C</i>	カヤツリグサ属C	果実	14
<i>Cyperus D</i>	カヤツリグサ属D	果実	4
<i>Cyperus E</i>	カヤツリグサ属E	果実	1
<i>Cyperus F</i>	カヤツリグサ属F	果実	5
<i>Cyperus G</i>	カヤツリグサ属G	果実	130
<i>Mastigophora vaginulata Presl</i>	コナギ	種子	2
var. <i>plumifera</i> Echin. Link.			
<i>Berberis A</i>	カラムシ属A	種子	6
<i>Berberis B</i>	カラムシ属B	種子	31
<i>Berberis C</i>	カラムシ属C	種子	188
<i>Polygonum A</i>	タデ属A	果実	1
<i>Polygonum B</i>	タデ属B	果実	3
<i>Polygonum C</i>	タデ属C	果実	3
<i>Polygonum D</i>	オトギリソウ属	種子	1
<i>Elaeagnus</i>	オトギリソウ属	種子	1
Total	種数	個数	360 11
<i>Unknown</i>	不明		10

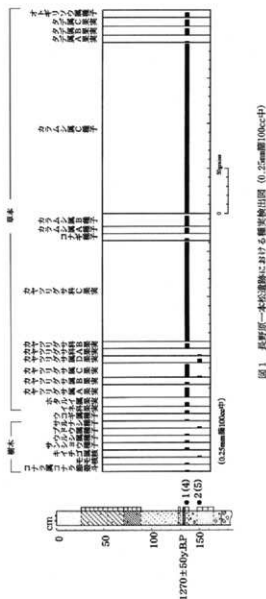
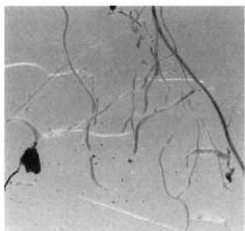


図1 長野原一本松遺跡における種実検出層 (0.25m間隔100cm中)

第5章 自然科学分析

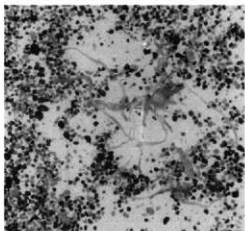
写真1 種実同定(1)顕微鏡写真



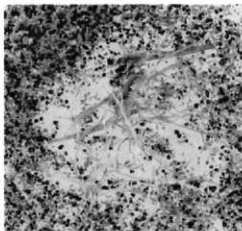
1 6-102号土紙 種1 ——— 0.2mm



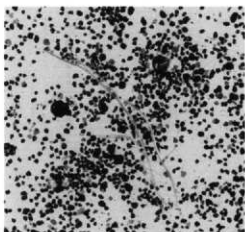
2 6-102号土紙 種2 ——— 0.2mm



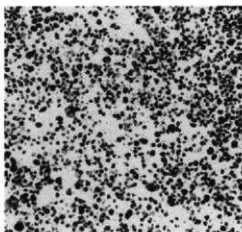
3 6-105号土紙 種3 ——— 0.2mm



4 6-105号土紙 種4 ——— 0.2mm



5 6-116号土紙 種5 ——— 0.2mm



6 6-116号土紙 種6 ——— 0.2mm

写真2 種実同定(2)顕微鏡写真



1 コナラ属コナラ節 2mm



2 コナラ属コナラ節 2mm



3 モモ 5mm



4 キイチゴ属 1mm



5 サンショウ 1mm



6 ウルシ属 1mm



7 ブドウ属 1mm



8 ヤムナンシ 0.5mm



9 ワコザ属 0.5mm



10 イネ科 0.5mm



11 ホタルイ属 0.5mm



12 キヤツリダマ属A 0.5mm



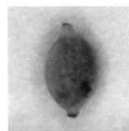
13 キヤツリダマ属B 0.3mm



14 キヤツリダマ属C 1mm



15 キヤツリダマ属D 0.5mm



16 キヤツリダマ科C 0.5mm



17 コナギ 0.3mm



18 カラムシ属C 0.3mm



19 タダ属B 0.2mm



20 オトギリソウ属 0.2mm

第6節 炭化材の樹種同定

1. はじめに

樹種同定は、6-108号土坑から出土した炭化材を試料とし、植生等の古環境を推測することを主目的として実施した。6-108号土坑は台地縁辺の傾斜部に位置し、陥穴と考えられる土坑である。試料とした炭化材は、覆土上面と中位から出土したもので、覆土に焼土や被熱による痕跡などは認められなかったため、炭化した状態で土坑埋没時に混入したものと考えられる。

分析の結果、樹種はニレ科のケヤキであることが判明し、周辺の森林植生を窺わせる資料といえよう。

2. 長野原一本松遺跡から出土した炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、6-108号土坑の覆土から出土した炭化材である。

2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面・放射断面・接線断面)を製作し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

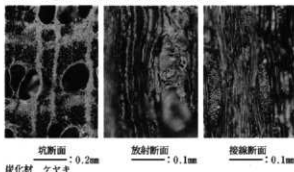
結果を表1に示し、各断面の顕微鏡写真を示す。

以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 長野原一本松遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料	樹種(和名/学名)
炭化材	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino

写真1 長野原一本松遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1~2列配

列する環孔材である。孔部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1~7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州の温帯域に分布し、適湿な肥沃地に多い。落葉の高木で、通常高さ20~25m、径60~70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の組織、木材の構造。文永堂出版、p.49-100。

第7節 黒曜石の産地同定

1. はじめに

黒曜石の産地同定分析は、広域的な交流や流通などを示す上で硬玉と共に代表的な資料とされている黒曜石について、その産地を具体化することによって本遺跡における社会的な様相を検証するための情報抽出を図ることなどを目的として実施された。

資料は、本遺跡から出土した石鏃・スクレイパー等の製品や剥片について、遺構やグリッドに示される出土地点などを考慮して144点が選定された。また、本遺跡以外にも長野原地域から出土した黒曜石について分析し、当地域の総体的な傾向を踏まえた上で個々の状況の共通点や差異を認識することが、本遺跡を含め長野原地域における広域的な歴史的環境を考察する上で有効と考えられたことから、本遺跡との対比資料として横壁中村遺跡を始めとする長野原地域で発掘調査された遺跡からの出土資料も選定されている。

なお、本遺跡出土の分析資料について、製品で遺存の良好なものについては本書に図化して掲載したが、この他は都合により省略しており、また掲載図に示される遺物番号と分析資料番号との対照については、遺物一覧表を参照されたい。

分析の結果としては、本遺跡における144点については和田峠系とされる黒曜石が135点を占め、圧倒的な状況を呈し、これは他の遺跡における傾向と共通する様相として認められるが、この他に本遺跡からは麦草峠や冷山の葎料系とされるものが4点確認されており、和田峠系が主体的な状況にあって異質な存在とする所見が示されている。

2. 蛍光X線分析(XRF)による長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡出土黒曜石の原産地同定

(株)第四紀地質研究所

1 はじめに

黒曜石はガラス光沢を有する石英安山岩質～流紋岩質のガラス質火山岩である(平凡社1979)。火山岩の主要元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, Kなどであり、分析値はこれらの酸化物濃度で表示することは地質学分野では慣例である。

従来、考古学分野での分析の多くは少量～微量元素を対象とする分析が主流であり、分析結果もFe/Zr, Ca/Kなど(薬科・東村, 1973)、あるいはRb/(Rb+Sr+Y+Zr)など(望月ら, 1994)の比でだし、この比に基づいた分類と産地同定をおこなっていた。

筆者は地質学的・岩石学的方法である火山岩の主要元素の酸化物濃度による岩石分類と産地同定を試みた。地質学分野での岩石分類ではSiO₂が52～66%を安山岩、66%以上を流紋岩と規定している(斎藤ほか1998)。この方法によると、試料の黒曜石のSiO₂量が66%以上の流紋岩質マグマに由来するか、SiO₂量が52～66%の安山岩質マグマに由来するののかについての検討が可能になり、産地同定をするうえでの岩石学的な前提が成立する。

この問題意識は、能登による考古試料の非破壊分析の可能性と短期間における大量分析の可能性に基づいて、筆者が分析領域の広いエネルギー分散型蛍光X線装置(XRF)を使って原産地試料の黒曜石を分析した。なお、分析対象元素をSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, Rb, Sr, Y, Zrの13元素とした。その結果、主要～微量元素は酸化物濃度、微量元素は積分強度で分類をおこない有意な分析結果を得た(井上ほか2000)。なお、遺跡出土試料についても、一部の極度に風化が進んでいるものを除いて非破壊による分析方法

を進めている(井上、2000、能登、2000)。

2 分析法と分析試料

2-1 分析法

分析は日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 JSX-3200で行なった。

露頭より採取した黒曜石を打ちかき、比較的平滑な面を分析面とする未整形試料をX線照射範囲が直径、約15mmの試料台上に直接のせ分析した。

実験条件はバルク FP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, Rb, Sr, Y, Zrの13元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、100%にノーマライズされた形式での酸化物の重量%で表示した。Rb, Srについてはさらに積分強度も表示した。(Rb-Sr, Zr-Yなどは積分強度での分類であり、分析試料の大きさによる影響を受ける。)

主要元素の酸化物濃度(重量%)で $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$, $\text{Na}_2\text{O-Fe}_2\text{O}_3$, $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の3組の組み合わせで図を作成した。微量元素のRb-Sr, Zr-Y図は積分強度で作成した。これらの図の中から黒曜石の産地ごとの化学組成上の特性を検討した。

3 黒曜石の分析結果

図-1 原産地黒曜石採取位置図に示すように、採取地域は関東・中部・東海と広い地域にわたる。

黒曜石は筆者らが直接現地へ赴いて、採取したものである。

蛍光X線分析(XRF)による原産地黒曜石の分析結果は、表-1 原産地黒曜石化学分析表に示した。これらの結果より、黒曜石については、表-2 関東・中部・東海地方原産地黒曜石化学組成表に取りまとめた。はじめに、原産地黒曜石の分析結果、次いで、遺跡出土黒曜石の分析結果と原産地黒曜石の分析結果との対比による原産地の同定について述べる。

3-1 原産地黒曜石の分析結果

3-1-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$

図-2 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように SiO_2 の値が低い領域から、75~77%は伊豆箱根系、76.5~78%は蓼科系、75.5~77.5%は和田峠系-1、76.5~78%は和田峠系-2、77.5~78%は神津島、75.5~78%は栃木県の高原山で、各領域で分れる。全体的には伊豆箱根系は SiO_2 が低い領域、蓼科系や和田峠系は中間領域、神津島は高い領域に集中する。高原山の黒曜石は中間にあり、和田峠系や蓼科系と領域を同じくする。 Al_2O_3 量は11.5~13.5%と領域が狭い。

3-1-2 $\text{Na}_2\text{O-Fe}_2\text{O}_3$

図-3 $\text{Na}_2\text{O-Fe}_2\text{O}_3$ 図に示すように、 Fe_2O_3 が1.5%以上の領域には伊豆箱根系と栃木県の高原山の黒曜石が分布し、 Na_2O が低い領域から高い領域にわかって高原山、柏峠、上多賀、鍛冶屋、畑宿と産地ごとに分類される。

信州系の和田峠系-1と和田峠系-2、蓼科系、神津島の各黒曜石は Fe_2O_3 が1.5%以下で、0.5~1.0%の狭い領域に集中し、その中でやや Fe_2O_3 の高い領域に和田峠系-2の男女倉5と蓼科系が分布し、 Na_2O が高い領域には和田峠系-1と和田峠系-2の星ヶ塔の黒曜石が分布する。神津島の黒曜石は Na_2O の値が高い領域に集中する。

3-1-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$

図-4 K_2O-CaO 図に示すように CaO が1%以上の領域にあって、 K_2O が1~4%の領域には伊豆箱根系、栃木県の高原山の黒曜石が分布し、 K_2O が低い方から畑宿、鍛冶屋、上多賀、柏峠、高原山と分類される。

信州系の黒曜石は K_2O が4~6%、 CaO が0~1%の狭い領域にあり、蓼科系の麦草峠と冷山は CaO が高い領域にあり、 CaO が低い領域には和田峠系-1の東餅屋、西餅屋、小深沢と和田峠系-2の星ヶ塔と男女倉5の黒曜石が分布し、分類される。神津島の黒曜石は伊豆箱根系と信州系の領域とは異なり、 K_2O と CaO がともに低い領域にあって異質である。

3-1-4 Rb-Sr

図-5 Rb-Sr 図に示すように、Rbの積分強度が0~750、Srの積分強度が500~2000の領域には伊豆箱根系と神津島、Rbが750~1400、Srが700~1500の領域には蓼科系と栃木県の高原山、Rbが1000~2000、Srが0~800の領域には和田峠系-2の星ヶ塔と男女倉5、Rbが1900~3300、Srが0~700の領域には和田峠系-1の東餅屋、西餅屋、小深沢が集中し、領域によって原産地の地域がおおむね分類できる。ここでの特徴は K_2O-CaO の相関において近接する領域にある和田峠系-1と和田峠系-2が分類されることである。

高原山の黒曜石は蓼科系と領域を同じくし、神津島の黒曜石は伊豆箱根系と蓼科系の両方の領域に重複し、高原山と神津島の黒曜石はこのRb-Srの相関では判然としない。

3-1-5 Zr-Y

図-6 Zr-Y 図に示すように、和田峠系-1と和田峠系-2はZrの積分強度が5500~1700、Yが0~800と広い領域で混在し、伊豆箱根系の黒曜石はZrが1100~2500、Yが200~600の広い領域で混在し、原産地の分類は困難である。神津島と高原山の黒曜石も同様に分散し、特定できない。岩石学的分析ではZrとYは黒曜石の分類においてはあまり有効な元素とはいえない。

3-2 遺跡出土黒曜石の分析結果

遺跡出土黒曜石の分析結果は各遺跡ごとに取りまとめた。分析結果は第1表化学分析表に示す通りである。分析結果に基づいて第1図 $SiO_2-Al_2O_3$ 図、第2図 $Na_2O-Fe_2O_3$ 図、第3図 K_2O-CaO 図、第4図 Sr-Rb 図を作成した。分析結果に基づいて原産地を特定し、その結果を遺跡ごとに第2表原産地分類表に取りまとめた。遺跡出土黒曜石と原産地黒曜石を対比するにあたって第3表黒曜石原産地分類の基準ののって行なった。

各遺跡毎の分析数と検出された原産地の黒曜石の比率などを取りまとめたものが第4表遺跡出土遺物・原産地対比表である。

3-2-1 各遺跡ごとの分析結果

1) 長野原一本松遺跡(4)

分析総数は144個、和田峠系-2が109個で76%、和田峠系-1が26個で18%、両者で94%を占める。蓼科系は4個で3%、不明(Rb大)が3個、不明(Rb小)が1個、不明(Si小、Al大)が1個の構成となる。

2) 坪井遺跡

分析総数10個はすべて和田峠系-2である。

3) 花畑遺跡

分析総数は2個、和田峠系-1と和系-1 (K_2O 大) が各1個の構成となる。

4) 西久保I遺跡

分析総数は4個、和田峠系-2が3個、和田峠系-1が1個の構成となる。

5) 石畑遺跡

分析総数は3個、和田峠系2H?が2個、和田峠系-1が1個の構成となる。

6) 横壁中村遺跡

分析総数は119個、和田峠系-2が87個で73%、和田峠系-1が20個で17%、両者で全体の90%を占める。次いで、和系-2 (K₂O 大)が6個で5%、不明(Rb 小)が4個で3%、和田峠系-2 H?が2個で2%の構成となる。

4 まとめ

1) 第4表遺跡出土遺物・原産地対比表には各遺跡の分析数、原産地の分類数、パーセント(%), および、総分析数とそのパーセント(%)が表示してある。

分析総数は6遺跡、282個で、和田峠系-2が209個で74.1%、和田峠系-1が49個で17.4%、両者で全体の91.5%を占める。次いで、和系-2 (K₂O 大)が6個で2.1%、不明(Rb 小)が5個で1.8%、和田峠系-2 H?と礫系系が各4個で各1.8%、不明(Rb 大)が3個で1.1%、不明(Si 小、Al 大)と和系-1 (K₂O 大)が各1個で各0.4%の構成となる。

2) 長野原一本松遺跡(4)では礫系系が4個検出され、和田峠系が主体の中では異質な黒曜石である。

3) 不明、和田峠系-2 H?, 和田峠系-2 L?, 和系-1、2などは和田峠系の中の周辺部に位置するなど原岩に近い部分での支脈と推察される。

引用文献

- 井上 謙、田中耕作(2000)東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析(XRF)、「北越考古学」、第11号、23~38。
井上 謙(2000)三ツ木皿沼遺跡出土黒曜石の理化学分析、三ツ木皿沼遺跡報告書、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、412~418。
斎藤正徳、富田晋高(1994)基礎からよくわかる地学I B、(株)旺文社。
能登 健(2000)三ツ木皿沼遺跡出土黒曜石の理化学分析、三ツ木皿沼遺跡報告書、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、512。
望月明彦、地谷信之、小林克次、武藤由里(1994)遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡 BB V層の原産地推定から—群馬県考古学研究、26、1~24。
山本 薫、柴田 敏、高松武次郎(1997)ガラス質黒色安山岩製石器の石材産地推定方法に関する研究—蛍光X線分析法とプレパレート法による石材産地推定結果の比較と評価—縄文時代文化研究会、縄文時代、第8号、1~30。
藤科晋男、東村武信(1973)蛍光X線分析法によるサメカイト石器の原産地推定、考古学と自然科学、6、33~42。

表1 化学分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Rh ₂ O ₃	SnO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Total	Rh[Σ]	Sr[Σ]	備考	原産地	
長野県-3-1	4.167	0.167	11.992	77.1563	4.5840	0.4643	0.1888	0.0758	0.6088	0.166	0.037	0.0025	0.0107	100.000	1316	294	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-2	4.1892	0.2099	11.8245	76.5293	4.1194	0.0887	0.6757	0.30	0.044	0.073	0.0313	0.0001	0.0189	360	419	中野群フレイト	中野群-2		
長野県-3-3	3.3798	0.234	12.0462	78.1094	4.7951	0.5207	0.1888	0.0895	0.6762	0.199	0.074	0.0063	0.0131	100.000	1374	497	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-4	5.1161	0.2966	12.1043	75.6803	5.1851	0.6311	0.0802	0.1245	0.7218	0.059	0.0319	0.0080	0.0130	99.9938	2938	0	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-5	4.7027	0.2023	11.9651	77.9012	4.8995	0.5417	0.1347	0.0848	0.6911	0.019	0.0319	0.0080	0.0137	100.000	1161	124	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-6	4.1192	0.2309	12.1939	77.8994	4.6887	0.5236	0.1058	0.1058	0.6704	0.6352	0.0336	0.0074	0.0104	100.000	1061	980	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-7	4.3901	0.3894	12.3422	76.8096	4.7441	0.5032	0.1058	0.0777	0.6492	0.1338	0.0077	0.0097	0.0091	100.000	1083	213	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-8	3.035	0.3378	12.1728	78.3185	4.6258	0.5202	0.1247	0.086	0.686	0.134	0.047	0.0074	0.0104	100.000	1162	107	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-9	4.195	0.1718	12.1728	78.3185	4.8219	0.5032	0.1058	0.0777	0.6492	0.1338	0.0077	0.0097	0.0091	100.000	1083	213	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-10	4.195	0.1718	12.1728	78.3185	4.8219	0.5032	0.1058	0.0777	0.6492	0.1338	0.0077	0.0097	0.0091	100.000	1083	213	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-11	4.4290	0.3358	12.4754	76.4071	4.9157	0.5757	0.1341	0.0871	0.7065	0.0725	0.0064	0.0040	0.0123	100.000	1384	491	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-12	4.6776	0.3358	12.1651	76.4071	4.9078	0.5000	0.1310	0.0801	0.6339	0.0815	0.0050	0.0027	0.0109	100.000	1688	396	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-13	3.9012	0.2455	11.9882	77.1222	4.7140	0.5179	0.1884	0.0827	0.6165	0.0149	0.0442	0.0029	0.0129	100.000	1172	324	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-14	4.1665	0.2819	12.4908	76.4034	4.6002	0.6189	0.1133	0.0853	0.7051	0.0147	0.0776	0.0055	0.0077	99.9999	1354	600	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-15	5.6247	0.2417	11.9509	76.3127	4.7965	0.5168	0.1240	0.0914	0.6990	0.0216	0.0067	0.0063	0.0120	100.000	1640	492	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-16	6.3570	0.3084	11.9817	76.8885	4.9433	0.5432	0.1897	0.0979	0.6490	0.0690	0.0057	0.0051	0.0120	100.000	1290	453	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-17	4.7629	0.0000	12.7422	75.2018	4.9011	0.8996	0.2190	0.0455	0.8858	0.0114	0.0173	0.0018	0.0146	100.000	952	1417	中野群フレイト	中野群-2	
長野県-3-18	4.1246	0.0000	13.8046	75.2682	5.2127	0.5829	0.1390	0.0803	0.553	0.174	0.0657	0.0049	0.0059	0.139	100.000	1264	425	中野群製品	中野群-2
長野県-3-19	4.1892	0.0000	12.9987	76.3214	5.1941	0.4837	0.1119	0.0762	0.6566	0.136	0.0049	0.0059	0.0139	100.000	1385	443	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-20	4.3994	0.0000	12.9450	76.2984	4.9521	0.5083	0.0914	0.0965	0.6967	0.0338	0.0018	0.0048	0.0089	100.000	1275	147	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-21	4.3072	0.0000	13.2125	75.6311	5.3113	0.5082	0.1219	0.0811	0.6905	0.122	0.0045	0.0053	0.0122	100.000	1127	407	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-22	4.3754	0.0000	12.8164	76.1388	5.1663	0.4707	0.1050	0.0917	0.6505	0.1054	0.0059	0.0051	0.0097	100.000	1458	452	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-23	4.1088	0.0000	12.9996	76.6315	5.0118	0.4702	0.1040	0.0952	0.6399	0.106	0.0051	0.0018	0.0071	99.9999	1412	283	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-24	4.1088	0.0000	13.1745	76.2318	5.0178	0.3649	0.1050	0.0952	0.6399	0.106	0.0051	0.0018	0.0071	99.9999	1412	283	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-25	4.1892	0.0000	13.1745	76.2318	5.0178	0.3649	0.1050	0.0952	0.6399	0.106	0.0051	0.0018	0.0071	99.9999	1412	283	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-26	4.1892	0.0000	13.2586	75.853	5.2134	0.5514	0.1258	0.0927	0.7129	0.14	0.0055	0.0056	0.0112	100.000	1268	781	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-27	3.9876	0.0000	12.9040	76.5397	5.0442	0.5197	0.0640	0.1039	0.6933	0.0301	0.0010	0.0018	0.0123	99.9999	2585	88	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-28	3.9485	0.0000	12.8854	76.5614	5.1708	0.5312	0.1225	0.0888	0.6812	0.0263	0.0073	0.0051	0.0064	100.000	1783	624	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-29	4.9531	0.0000	12.9408	75.4509	5.4619	0.6086	0.1201	0.0850	0.6812	0.0263	0.0051	0.0064	0.0126	100.000	2125	416	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-30	4.9210	0.0000	13.1102	76.6218	4.8267	0.5169	0.0612	0.0961	0.6961	0.0320	0.0015	0.0046	0.0097	100.000	2781	131	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-31	4.0977	0.0000	12.8364	76.2382	5.3891	0.5042	0.1238	0.0788	0.6832	0.0186	0.0048	0.0019	0.0130	99.9999	1417	394	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-32	4.0688	0.0000	13.8375	75.3313	5.0113	0.5026	0.0901	0.0972	0.7805	0.0399	0.0046	0.0065	0.0124	100.000	2878	50	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-33	4.3314	0.0000	12.9205	75.6881	5.3858	0.5270	0.1220	0.0722	0.7195	0.0440	0.0062	0.0039	0.0139	100.000	1165	511	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-34	3.9770	0.0000	13.1106	76.2960	5.0889	0.5077	0.1167	0.0741	0.6721	0.0151	0.0049	0.0049	0.0120	100.000	1309	424	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-35	4.0644	0.0000	12.9825	76.4717	5.0355	0.5109	0.0676	0.1085	0.7113	0.0297	0.0049	0.0049	0.0150	100.000	2351	0	中野群製品	中野群-1	
長野県-3-36	3.9899	0.0000	13.1389	75.6554	5.6842	0.5003	0.0688	0.108	0.7099	0.0331	0.0040	0.0040	0.0040	100.000	2821	0	中野群製品	中野群-1	
長野県-3-37	3.7191	0.0000	12.6542	77.4389	4.8045	0.4681	0.1145	0.0726	0.6390	0.1030	0.0046	0.0026	0.0104	100.000	1475	367	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-38	4.9740	0.0000	12.3687	76.3170	4.9175	0.5443	0.182	0.0967	0.735	0.026	0.0015	0.0087	0.0143	99.9999	2427	135	中野群製品	中野群-1	
長野県-3-39	4.3171	0.0000	13.4788	75.2832	4.6812	0.9174	0.2267	0.0254	1.197	0.0132	0.0148	0.0011	0.0120	99.9999	2427	135	中野群製品	中野群-1	
長野県-3-40	3.9770	0.0000	12.9825	76.4717	5.0355	0.5109	0.0676	0.1085	0.7113	0.0297	0.0049	0.0049	0.0150	100.000	2351	0	中野群製品	中野群-1	
長野県-3-41	3.9770	0.0000	13.1527	76.3185	4.9927	0.5303	0.1010	0.0786	0.6333	0.0143	0.0044	0.0044	0.0156	99.9999	1277	528	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-42	3.9906	0.0000	12.8810	76.8584	4.8346	0.4760	0.1719	0.0925	0.6333	0.0002	0.0002	0.0119	99.9999	2918	16	中野群製品	中野群-2		
長野県-3-43	3.8545	0.0000	12.4594	77.0442	5.1883	0.4896	0.0676	0.1047	0.6866	0.0026	0.0026	0.0138	0.0002	2363	223	中野群製品	中野群-2		
長野県-3-44	4.6575	0.0000	12.5981	77.2216	4.8954	0.4555	0.0954	0.0633	0.7178	0.0132	0.002	0.0069	0.0131	100.000	1143	353	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-45	3.9119	0.0000	14.0666	75.2155	5.2295	0.5018	0.1559	0.0839	0.784	0.0144	0.0074	0.0040	0.0108	100.000	1207	613	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-46	4.1413	0.0485	12.7053	76.6290	5.1884	0.5187	0.1143	0.0715	0.6387	0.0146	0.0034	0.0022	0.0042	100.000	1294	293	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-47	4.2629	0.0000	12.8491	76.3617	5.2074	0.5296	0.1107	0.0759	0.6360	0.0105	0.0044	0.0010	0.0069	100.000	980	400	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-48	4.1887	0.0000	12.5429	76.7790	5.1622	0.4874	0.1095	0.0679	0.7029	0.0079	0.0029	0.0069	0.0069	100.000	1233	862	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-49	3.8656	0.0000	12.4326	76.7459	5.7336	0.4784	0.1732	0.0926	0.9335	0.0283	0.0015	0.0039	0.0118	100.000	2495	129	中野群製品	中野群-2	
長野県-3-50	4.3724	0.0000	12.9992	75.9990	5.2289	0.5447	0.1000	0.0865	0.6997	0.0167	0.0030	0.0034	0.0113	99.9999	1461	258	中野群製品	中野群-2	

圖 1 主成分分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SeO	V ₂ O ₅	ZrO ₂	Total	RbCl	SeCl	備考	原産地
長野県-本-01	3.882	0.000	12.530	76.790	5.151	0.539	0.121	0.828	0.121	0.024	0.013	0.037	0.127	100.000	1807	109	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-02	4.022	0.000	12.410	77.304	4.863	0.458	0.144	0.825	0.619	0.159	0.039	0.065	0.167	99.999	1300	311	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-03	3.939	0.000	12.678	76.257	4.767	0.460	0.127	0.805	0.603	0.159	0.063	0.047	0.190	99.999	1534	321	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-04	3.786	0.000	13.169	75.218	5.077	0.381	0.128	0.832	0.829	0.168	0.068	0.067	0.136	100.001	1399	453	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-05	4.036	0.000	13.322	75.813	5.273	0.343	0.129	0.832	0.837	0.169	0.081	0.040	0.148	99.999	1446	614	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-06	3.706	0.000	12.784	76.425	4.824	0.475	0.174	0.794	0.748	0.165	0.065	0.040	0.150	99.999	1360	453	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-07	3.706	0.000	13.079	77.253	4.851	0.475	0.174	0.794	0.748	0.165	0.065	0.040	0.150	99.999	1360	453	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-08	3.623	0.000	12.491	77.252	4.932	0.346	0.172	0.837	0.697	0.168	0.040	0.042	0.117	99.999	1540	373	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-09	4.423	0.000	12.708	76.144	5.172	0.533	0.185	0.764	0.869	0.169	0.016	0.066	0.161	99.999	1368	155	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-10	4.697	0.000	12.504	77.252	4.918	0.459	0.163	0.731	0.631	0.169	0.043	0.038	0.072	99.999	978	137	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-11	4.021	0.000	12.751	76.918	4.967	0.452	0.154	0.773	0.652	0.131	0.055	0.020	0.060	100.000	1083	448	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-12	4.193	0.000	12.967	76.363	5.054	0.511	0.161	0.742	0.718	0.120	0.057	0.026	0.127	100.000	1389	441	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-13	4.389	0.000	12.280	77.629	4.847	0.476	0.192	0.667	0.618	0.172	0.044	0.020	0.128	100.001	1406	34	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-14	4.654	0.000	12.754	76.859	4.834	0.498	0.160	0.766	0.672	0.162	0.004	0.020	0.143	100.001	1338	362	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-15	4.654	0.000	12.855	76.923	5.203	0.519	0.163	0.858	0.659	0.165	0.048	0.061	0.166	100.001	1468	414	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-16	4.269	0.000	12.952	75.847	4.359	0.598	0.120	0.739	0.878	0.149	0.035	0.032	0.144	100.000	1317	599	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-17	3.666	0.000	13.279	76.710	4.948	0.483	0.110	0.719	0.790	0.159	0.064	0.062	0.125	100.001	1276	506	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-18	3.496	0.000	13.719	75.858	5.091	0.482	0.109	0.885	0.792	0.160	0.056	0.042	0.085	100.001	1372	290	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-19	3.330	0.000	13.899	76.126	4.644	0.543	0.102	0.785	0.853	0.152	0.049	0.040	0.126	99.999	1321	418	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-20	4.191	0.000	12.779	75.876	5.219	0.370	0.163	0.835	0.710	0.165	0.061	0.044	0.148	100.002	1385	590	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-21	4.183	0.000	12.779	76.630	4.634	0.519	0.074	0.750	0.642	0.149	0.039	0.035	0.096	100.000	1679	472	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-22	4.368	0.000	12.649	76.751	4.743	0.473	0.093	0.787	0.648	0.148	0.032	0.030	0.120	100.000	1679	472	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-23	4.368	0.000	12.649	76.751	4.743	0.473	0.093	0.787	0.648	0.148	0.032	0.030	0.120	100.000	1679	472	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-24	4.486	0.000	13.526	75.897	5.345	0.528	0.126	0.728	0.693	0.155	0.039	0.046	0.118	100.000	1074	296	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-25	4.202	0.000	13.146	75.474	5.354	0.583	0.126	0.728	0.693	0.155	0.039	0.046	0.118	100.001	1374	296	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-26	4.317	0.000	13.118	76.269	4.971	0.514	0.098	0.787	0.647	0.123	0.063	0.063	0.158	99.999	2642	0	中絶湖フレイツ	相模湖-1
長野県-本-27	4.281	0.000	12.626	76.862	5.127	0.491	0.100	0.699	0.732	0.154	0.064	0.021	0.106	100.000	1738	521	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-28	3.218	0.000	13.045	76.856	4.810	0.484	0.116	0.771	0.494	0.139	0.055	0.038	0.110	100.000	1174	574	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-29	3.767	0.000	13.145	76.393	5.260	0.476	0.152	0.707	0.607	0.155	0.081	0.036	0.069	100.000	1528	680	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-30	3.528	0.000	13.876	73.812	4.829	0.493	0.154	0.763	0.702	0.184	0.066	0.024	0.136	100.002	1506	448	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-31	3.837	0.000	12.678	77.043	5.074	0.487	0.164	0.687	0.621	0.169	0.061	0.048	0.120	100.000	1400	492	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-32	4.131	0.000	13.879	74.981	4.761	0.778	0.109	0.999	0.518	0.104	0.064	0.049	0.159	99.999	2456	505	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-33	4.250	0.000	12.793	76.526	4.948	0.457	0.094	0.667	0.608	0.177	0.053	0.038	0.158	99.999	1374	405	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-34	3.184	0.000	12.629	77.126	4.967	0.495	0.105	0.739	0.847	0.208	0.084	0.067	0.158	99.999	1630	644	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-35	3.475	0.000	12.879	75.885	5.472	0.506	0.105	0.754	0.754	0.153	0.032	0.031	0.181	100.000	2676	259	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-36	3.054	0.000	12.588	77.444	4.713	0.474	0.072	0.684	0.617	0.155	0.074	0.011	0.116	100.000	1676	556	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-37	4.024	0.000	12.784	76.851	4.922	0.467	0.122	0.867	0.672	0.148	0.039	0.041	0.155	100.000	1351	565	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-38	3.958	0.000	12.940	77.964	4.832	0.467	0.122	0.867	0.672	0.148	0.039	0.041	0.155	100.000	1351	565	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-39	3.958	0.000	12.940	77.964	4.832	0.467	0.122	0.867	0.672	0.148	0.039	0.041	0.155	100.000	1351	565	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-40	3.859	0.000	12.910	76.715	4.972	0.718	0.106	0.916	0.338	0.138	0.022	0.090	0.167	100.001	1215	316	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-41	3.927	0.000	13.871	76.847	4.902	0.492	0.120	0.811	0.683	0.178	0.025	0.020	0.225	99.999	2529	158	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-42	4.181	0.000	12.600	75.631	5.128	0.607	0.130	0.681	0.789	0.176	0.057	0.060	0.141	99.999	1414	196	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-43	4.028	0.000	13.042	76.358	4.895	0.540	0.087	0.440	0.199	0.268	0.024	0.063	0.095	100.000	2249	185	中絶湖フレイツ	相模湖-2
長野県-本-44	4.611	0.000	12.827	76.419	5.121	0.539	0.119	0.698	0.889	0.160	0.058	0.022	0.125	100.002	1079	484	中絶湖フレイツ	相模湖-2
伊井 1	3.128	0.000	12.684	77.593	4.731	0.461	0.117	0.695	0.603	0.172	0.081	0.067	0.165	99.999	1583	561	フレイツ	相模湖-2
伊井 2	3.767	0.000	12.269	77.809	4.876	0.502	0.132	0.767	0.649	0.178	0.067	0.035	0.127	100.001	1537	569	フレイツ	相模湖-2
伊井 3	3.744	0.000	12.817	77.812	4.670	0.484	0.168	0.714	0.612	0.159	0.030	0.041	0.134	100.001	1220	256	フレイツ	相模湖-2
4	4.026	0.000	12.663	77.507	5.274	0.523	0.139	0.815	0.727	0.173	0.029	0.054	0.182	100.000	1468	242	フレイツ	相模湖-2
5	4.045	0.000	12.494	77.365	4.762	0.503	0.084	0.768	0.637	0.171	0.049	0.027	0.134	99.999	1482	416	フレイツ	相模湖-2
6	3.854	0.000	12.201	77.839	4.771	0.432	0.110	0.796	0.424	0.173	0.063	0.022	0.089	100.000	1605	588	フレイツ	相模湖-2

表1 元素 化学分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	StrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Total	Rb[μ]	Str[μ]	備考	原産地
輝石 6	4.3248	0.000	12.4890	10.132	4.9945	4.4784	0.1014	0.7673	6.5329	0.0194	0.0036	0.0001	0.0150	100.000	1.867	309	フレイク	和国沖本-2
輝石 7	4.3062	0.000	12.7837	76.6775	4.4833	4.1312	0.0768	6.6493	6.5925	0.0039	0.0011	0.0011	0.0141	99.999	1.808	326	フレイク	和国沖本-2
輝石 8	3.9744	0.000	12.5090	77.6399	4.9439	4.5986	0.0669	6.0741	6.4139	0.0152	0.0044	0.0019	0.0103	99.999	1.355	357	フレイク	和国沖本-2
輝石 9	3.8477	0.000	12.8143	76.9762	4.8111	5.1160	0.1033	6.0785	6.6609	0.0166	0.0044	0.0035	0.0068	100.000	1.642	353	フレイク	和国沖本-2
正長石 1	3.8840	0.000	12.5635	76.9721	5.0022	5.0065	0.0742	6.0972	6.7661	0.0296	0.0000	0.0017	0.0165	100.000	2.473	104	フレイク	和国沖本-2
正長石 2	3.2522	0.000	12.7637	75.252	7.9334	6.5612	0.1078	6.1496	6.1014	0.0013	0.0017	0.0069	0.0000	100.000	2.749	104	フレイク	和国沖本-2 (K.O.大)
和国沖本-1	4.1431	0.000	12.8469	76.8191	5.0443	5.3541	0.1006	6.0781	6.6234	0.0274	0.0061	0.0008	0.0162	100.000	2.274	500	製品	和国沖本-1
和国沖本-2	4.1431	0.000	12.7229	76.7975	4.9669	5.3153	0.1139	6.0861	6.6234	0.0189	0.0048	0.0052	0.0162	100.000	1.868	377	フレイク	和国沖本-2
和国沖本-3	4.1431	0.000	12.7229	76.7975	4.9669	5.3153	0.1139	6.0861	6.6234	0.0189	0.0048	0.0052	0.0162	100.000	1.868	377	フレイク	和国沖本-3
和国沖本-4	4.2972	0.000	12.7826	76.1998	5.1987	6.0331	0.1074	6.0769	6.7211	0.0221	0.0059	0.0156	0.0149	99.999	1.689	379	フレイク	和国沖本-4
和国沖本-5	4.2972	0.000	12.7826	76.2628	5.0369	5.2006	0.1067	6.1846	6.1846	0.0021	0.0029	0.0059	0.0156	99.999	2.680	179	フレイク	和国沖本-5
和国沖本-6	4.6122	0.000	12.9677	74.2884	5.9253	5.8837	0.1333	6.0965	6.7987	0.0278	0.0064	0.0082	0.0158	100.000	1.715	474	フレイク	和国沖本-6
和国沖本-7	3.7933	0.000	16.1382	73.1511	4.9739	6.6231	0.1751	6.1155	6.0344	0.0156	0.0074	0.0039	0.0169	99.999	1.245	609	フレイク	和国沖本-7
和国沖本-8	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-8	和国沖本-8
和国沖本-9	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-9	和国沖本-9
和国沖本-10	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-10	和国沖本-10
和国沖本-11	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-11	和国沖本-11
和国沖本-12	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-12	和国沖本-12
和国沖本-13	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-13	和国沖本-13
和国沖本-14	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-14	和国沖本-14
和国沖本-15	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-15	和国沖本-15
和国沖本-16	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-16	和国沖本-16
和国沖本-17	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-17	和国沖本-17
和国沖本-18	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-18	和国沖本-18
和国沖本-19	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-19	和国沖本-19
和国沖本-20	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-20	和国沖本-20
和国沖本-21	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-21	和国沖本-21
和国沖本-22	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-22	和国沖本-22
和国沖本-23	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-23	和国沖本-23
和国沖本-24	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-24	和国沖本-24
和国沖本-25	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-25	和国沖本-25
和国沖本-26	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-26	和国沖本-26
和国沖本-27	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-27	和国沖本-27
和国沖本-28	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-28	和国沖本-28
和国沖本-29	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-29	和国沖本-29
和国沖本-30	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-30	和国沖本-30
和国沖本-31	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-31	和国沖本-31
和国沖本-32	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-32	和国沖本-32
和国沖本-33	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-33	和国沖本-33
和国沖本-34	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-34	和国沖本-34
和国沖本-35	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-35	和国沖本-35
和国沖本-36	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-36	和国沖本-36
和国沖本-37	4.2923	0.1470	12.1419	76.6697	5.0627	6.2318	0.1337	6.1093	6.7144	0.0225	0.0127	0.0035	0.0106	100.000	1.580	865	和国沖本-37	和国沖本-37

表1 化学分析表

試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	ReO ₃	SiO ₂	V ₂ O ₅	ZrO ₂	Total	ROH	Si(II)	備考	原産地
標本14-38	3.4767	0.000	16.0678	72.3324	4.8237	0.7974	0.1795	0.9823	1.0987	0.0157	0.0060	0.0052	0.0117	100.0001	1735	465	中級輝石
標本14-39	3.4112	0.000	13.1572	76.3115	4.6622	0.5501	0.1244	0.9837	0.6947	0.0236	0.0072	0.0161	0.0158	100.0002	1106	578	中級輝石
標本14-40	3.4192	0.000	13.1809	76.0853	5.2992	0.6246	0.0941	0.9987	0.7919	0.0320	0.0060	0.0089	0.0103	100.0001	2532	0	中級輝石
標本14-41	4.7246	0.000	17.0506	5.0520	5.1883	1.180	0.9795	0.6903	0.0154	0.0003	0.0101	0.0120	100.0000	1323	459	中級輝石	
標本14-42	3.6984	0.000	12.8173	76.4810	5.6454	0.4999	0.149	0.9722	0.6400	0.0130	0.0000	0.0038	0.0167	100.0001	1054	476	中級輝石
標本14-43	4.1812	0.000	12.7488	76.2855	5.1838	0.5855	0.1420	0.9750	0.7830	0.0222	0.0042	0.0156	0.0186	100.0001	2708	478	中級輝石
標本14-44	4.4967	0.000	12.7650	76.1433	5.0179	0.1390	0.9719	0.9719	0.5013	0.0102	0.0000	0.0000	0.0167	100.0001	2106	521	中級輝石
標本14-45	4.5823	0.000	12.7650	76.1433	5.0179	0.1390	0.9719	0.9719	0.5013	0.0102	0.0000	0.0000	0.0167	100.0001	2106	521	中級輝石
標本14-46	4.5823	0.000	12.7650	76.1433	5.0179	0.1390	0.9719	0.9719	0.5013	0.0102	0.0000	0.0000	0.0167	100.0001	2106	521	中級輝石
標本14-47	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-48	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-49	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-50	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-51	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-52	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-53	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-54	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-55	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-56	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-57	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-58	4.2425	0.000	13.0391	76.3835	5.1878	0.4987	0.1903	0.9791	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-59	4.0763	0.000	12.7398	76.5968	5.2733	0.4828	0.1196	0.9860	0.6454	0.0151	0.0056	0.0068	0.0095	100.0000	1528	446	中級輝石
標本14-60	4.4001	0.000	13.1173	75.1886	4.6729	0.1918	0.9719	0.9719	0.5013	0.0102	0.0000	0.0000	0.0167	100.0000	1528	454	中級輝石
標本14-61	4.5647	0.000	13.0391	76.3835	5.2531	0.5017	0.1390	0.9719	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-62	4.5647	0.000	13.0391	76.3835	5.2531	0.5017	0.1390	0.9719	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-63	4.5647	0.000	13.0391	76.3835	5.2531	0.5017	0.1390	0.9719	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-64	4.5647	0.000	13.0391	76.3835	5.2531	0.5017	0.1390	0.9719	0.6568	0.0131	0.0088	0.0043	0.0115	100.0000	1124	743	中級輝石
標本14-65	3.9284	0.000	13.1084	76.5802	5.1348	0.5258	0.1311	0.9825	0.7115	0.0178	0.0059	0.0061	0.0137	100.0000	1414	456	中級輝石
標本14-66	4.4671	0.000	12.9163	76.6446	5.0851	0.5491	0.1301	0.9770	0.6851	0.0190	0.0074	0.0049	0.0142	99.9999	1592	698	中級輝石
標本14-67	4.2353	0.000	13.3335	75.1379	5.1295	0.5635	0.0823	0.9823	0.6823	0.0329	0.0002	0.0072	0.0155	99.9999	2616	18	中級輝石
標本14-68	3.8439	0.000	13.2209	76.4402	4.9646	0.5278	0.0756	0.9873	0.7568	0.0413	0.0000	0.0136	0.0180	100.0000	3048	0	中級輝石
標本14-69	3.8528	0.000	13.1195	75.8395	5.6503	0.5239	0.1948	0.9764	0.7302	0.0189	0.0004	0.0008	0.0154	100.0000	1440	31	中級輝石
標本14-70	4.6543	0.000	13.4316	74.9571	5.1654	0.7053	0.1034	0.9831	0.8360	0.0302	0.0061	0.0059	0.0165	100.0000	2591	513	中級輝石
標本14-71	1.374	0.000	17.7759	69.9440	9.1800	9.442	1.397	0.9887	1.0995	0.0275	0.0104	0.0027	0.0201	100.0001	1738	629	中級輝石
標本14-72	3.2658	0.000	12.7109	77.1877	5.1169	0.5124	0.1983	0.9708	0.6722	0.0152	0.0054	0.0066	0.0154	100.0001	1282	434	中級輝石
標本14-73	4.1758	0.000	13.8345	75.0101	4.2472	0.5860	0.0854	1.007	0.9889	0.0303	0.0000	0.0001	0.0180	100.0000	2999	0	中級輝石
標本14-74	4.1758	0.000	13.8345	75.0101	4.2472	0.5860	0.0854	1.007	0.9889	0.0303	0.0000	0.0001	0.0180	100.0000	2999	0	中級輝石
標本14-75	4.1758	0.000	13.8345	75.0101	4.2472	0.5860	0.0854	1.007	0.9889	0.0303	0.0000	0.0001	0.0180	100.0000	2999	0	中級輝石
標本14-76	4.1758	0.000	13.8345	75.0101	4.2472	0.5860	0.0854	1.007	0.9889	0.0303	0.0000	0.0001	0.0180	100.0000	2999	0	中級輝石
標本14-77	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-78	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-79	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-80	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-81	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-82	3.9602	0.000	12.9201	76.9888	4.8157	0.4944	0.1112	0.9869	0.6444	0.0142	0.0017	0.0127	0.0139	99.9999	2438	180	中級輝石
標本14-83	4.4840	0.000	12.6693	77.3558	4.8453	0.5345	0.1074	0.9704	0.7010	0.0290	0.0090	0.0098	0.0232	100.0001	1823	557	中級輝石
標本14-84	3.9410	0.000	12.9175	75.7873	5.3048	0.5197	0.1158	0.9649	0.7197	0.0148	0.0036	0.0036	0.0160	100.0001	1186	322	中級輝石
標本14-85	3.8310	0.000	12.9770	77.0973	5.0502	0.4942	0.1083	0.9853	0.6414	0.0120	0.0005	0.0060	0.0160	100.0001	1186	705	中級輝石
標本14-86	4.2940	0.000	12.9847	76.2805	5.0704	0.9406	0.1079	0.9705	0.6909	0.0143	0.0086	0.0091	0.0124	100.0001	1186	705	中級輝石
標本14-87	3.6721	0.000	13.0978	77.2819	4.4547	0.4832	0.1207	0.9837	0.6478	0.0175	0.0050	0.0011	0.0114	100.0002	1356	382	中級輝石
標本14-88	4.3853	0.000	13.0188	75.6988	5.2834	0.5248	0.1027	0.9838	0.6744	0.0146	0.0036	0.0019	0.0090	100.0000	1205	219	中級輝石

第 1 表 化學分析表

試 料 名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	V ₂ O ₅	ZrO ₂	Total	備 考	原 產 地	
標樣#414-88	4.728	0.000	12.9784	75.4452	5.3374	0.5232	0.116	0.782	0.6884	0.0202	0.0042	0.0063	0.0141	100.0000	1667	338	中國、ブレイク
標樣#414-89	4.0560	0.000	12.7297	76.7261	5.1350	0.4971	0.091	0.0752	0.4256	0.0108	0.0037	0.0025	0.0122	100.0000	927	306	中國、ブレイク
標樣#414-90	3.9995	0.000	13.6063	75.3206	5.3920	0.6549	0.104	0.917	0.8523	0.0392	0.0022	0.0050	0.0120	100.0001	2488	180	中國、ブレイク
標樣#414-91	3.9974	0.000	12.9935	77.0564	4.9991	0.4829	0.028	0.0743	0.6430	0.0195	0.0041	0.0012	0.0169	100.0000	1593	331	中國、ブレイク
標樣#414-92	3.9460	0.000	12.6905	77.0566	4.9368	0.4811	0.063	0.0741	0.6484	0.0143	0.0040	0.0048	0.0145	100.0000	1227	337	中國、ブレイク
標樣#414-93	4.2342	0.000	12.6988	76.9280	4.8168	0.5738	0.0701	0.0839	0.6959	0.0249	0.0025	0.0085	0.0179	99.9999	2038	425	中國、ブレイク
標樣#414-94	4.2342	0.000	12.6988	76.9280	4.8168	0.5738	0.0701	0.0839	0.6959	0.0249	0.0025	0.0085	0.0179	99.9999	2038	425	中國、ブレイク
標樣#414-95	4.0520	0.000	14.1699	75.3112	5.0253	0.5613	0.125	0.652	0.787	0.0146	0.0046	0.0081	0.0132	99.9999	1188	448	中國、ブレイク
標樣#414-96	4.0520	0.000	14.1699	75.3112	5.0253	0.5613	0.125	0.652	0.787	0.0146	0.0046	0.0081	0.0132	99.9999	1188	448	中國、ブレイク
標樣#414-97	4.0079	0.000	12.5281	77.1484	4.9981	0.4983	0.036	0.0718	0.6025	0.0147	0.0060	0.0054	0.0176	100.0001	2163	318	中國、ブレイク
標樣#414-98	4.5528	0.000	13.5318	76.7502	4.8800	0.4238	0.1166	0.6034	0.8324	0.0130	0.0043	0.0038	0.0078	99.9999	1110	359	中國、ブレイク
標樣#414-99	3.9407	0.000	13.1349	76.3073	5.2252	0.4972	0.098	0.0754	0.6663	0.0210	0.0047	0.0028	0.0137	99.9999	1636	358	中國、ブレイク
標樣#414-100	4.2843	0.000	12.7224	76.8627	4.8266	0.5099	0.0849	0.0770	0.6065	0.0141	0.0035	0.0028	0.0103	100.0000	1231	301	中國、ブレイク
標樣#414-101	4.4589	0.000	12.7560	76.6411	4.8548	0.4768	0.065	0.0665	0.6087	0.0145	0.0041	0.0028	0.0093	100.0000	1357	375	中國、ブレイク
標樣#414-102	4.2583	0.000	13.5379	75.6701	4.9314	0.5615	0.0905	0.1022	0.7834	0.0399	0.0000	0.0068	0.0100	100.0000	2603	0	中國、ブレイク
標樣#414-103	1.7054	0.000	13.2013	76.8041	6.8138	0.5209	0.130	0.0767	0.7083	0.0189	0.0130	0.0036	0.0159	99.9999	1410	904	中國、ブレイク
標樣#414-104	3.9013	0.000	12.7374	76.5321	5.3610	0.5255	0.018	0.0801	0.6965	0.0149	0.0079	0.0021	0.0115	100.0001	1766	652	中國、ブレイク
標樣#414-105	3.7928	0.000	13.3618	76.3209	4.9910	0.5201	0.123	0.0825	0.7293	0.0262	0.0057	0.0050	0.0162	99.9999	1400	389	中國、ブレイク
標樣#414-106	4.3791	0.000	12.6687	76.6180	4.9934	0.4758	0.190	0.0748	0.6400	0.0127	0.0032	0.0033	0.0132	100.0000	1161	291	中國、ブレイク
標樣#414-107	4.0263	0.000	12.7008	76.8564	5.0783	0.4801	0.175	0.0798	0.6311	0.0140	0.0017	0.0058	0.0107	99.9998	1126	334	中國、ブレイク
標樣#414-108	4.8841	0.000	12.9572	76.2884	4.9205	0.5150	0.091	0.0753	0.6255	0.0125	0.0043	0.0037	0.0119	99.9999	1357	386	中國、ブレイク
標樣#414-109	4.8841	0.000	12.9572	76.2884	4.9205	0.5150	0.091	0.0753	0.6255	0.0125	0.0043	0.0037	0.0119	100.0000	2640	0	中國、ブレイク
標樣#414-110	4.8817	0.000	12.9572	76.2884	4.9205	0.5150	0.091	0.0753	0.6255	0.0125	0.0043	0.0037	0.0119	100.0000	2640	0	中國、ブレイク
標樣#414-111	4.8817	0.000	12.9572	76.2884	4.9205	0.5150	0.091	0.0753	0.6255	0.0125	0.0043	0.0037	0.0119	100.0000	2640	0	中國、ブレイク
標樣#414-112	4.8817	0.000	12.9572	76.2884	4.9205	0.5150	0.091	0.0753	0.6255	0.0125	0.0043	0.0037	0.0119	100.0000	2640	0	中國、ブレイク
標樣#414-113	3.1022	0.000	13.9808	74.8727	5.4955	0.7143	0.084	0.0712	0.9807	0.0227	0.0054	0.0034	0.0212	100.0000	840	197	中國、ブレイク
標樣#414-114	4.0609	0.000	12.7788	76.4265	5.1860	0.5258	0.0869	0.1074	0.7563	0.0290	0.0034	0.0033	0.0151	99.9999	2341	269	中國、ブレイク
標樣#414-115	4.2408	0.000	12.5712	76.6488	5.1105	0.5184	0.146	0.0770	0.6859	0.0164	0.0064	0.0030	0.0091	100.0001	1327	568	中國、ブレイク
標樣#414-116	4.2781	0.000	12.6078	76.5608	5.2090	0.5320	0.195	0.0744	0.6878	0.0155	0.0030	0.0010	0.0091	99.9999	1275	305	中國、ブレイク
標樣#414-117	4.2005	0.000	12.7586	76.6827	4.8864	0.4964	0.028	0.0778	0.6965	0.0181	0.0023	0.0073	0.0259	100.0000	717	87	中國、ブレイク
標樣#414-118	3.8231	0.000	13.0450	76.1569	5.1515	0.5149	0.194	0.0788	0.6945	0.0157	0.0086	0.0000	0.0142	100.0000	1247	670	中國、ブレイク
標樣#414-119	3.8231	0.000	12.8687	76.7051	5.2158	0.4967	0.068	0.0747	0.6736	0.0173	0.0037	0.0054	0.0090	99.9999	1368	288	中國、ブレイク
標樣#414-120	4.1920	0.000	13.1379	75.7892	5.4778	0.5332	0.149	0.0711	0.9327	0.0154	0.0046	0.0043	0.0167	99.9998	1141	333	中國、ブレイク
標樣#414-121	3.8231	0.000	13.9987	75.8576	5.0743	0.5090	0.1481	0.0798	0.8434	0.0171	0.0036	0.0040	0.0142	99.9999	1292	266	中國、ブレイク

第2表 原産地分類表

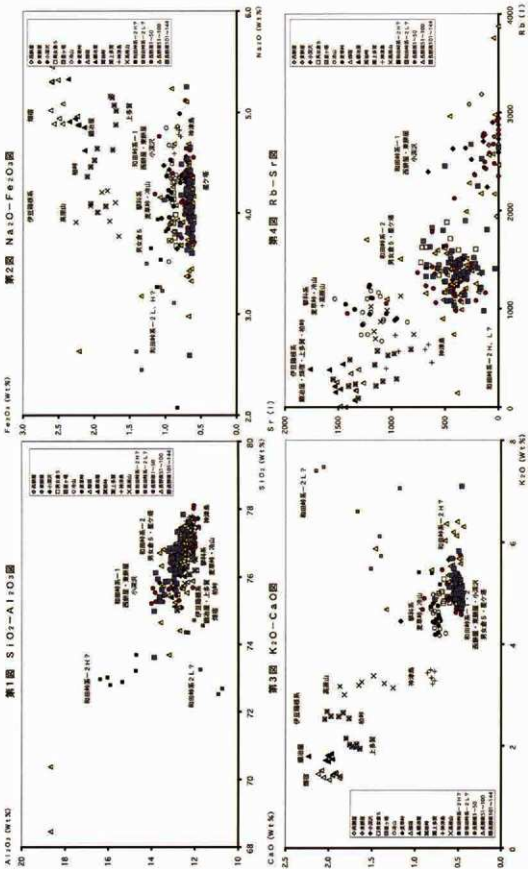
試料名	備考	黒曜石原産地	試料名	備考	黒曜石原産地
坪井-1	フレイク	和田峠系-2	花畑-1	フレイク	和田峠系-1
坪井-2	フレイク	和田峠系-2	西久保1-1	製品	和田峠系-1
坪井-3	フレイク	和田峠系-2	石畑-1	製品	和田峠系-1
坪井-4	フレイク	和田峠系-2	花畑-2	フレイク	和系-1 (K20大)
坪井-5	フレイク	和田峠系-2	坪井-1	フレイク	和田峠系-2
坪井-6	フレイク	和田峠系-2	坪井-2	フレイク	和田峠系-2
坪井-7	フレイク	和田峠系-2	坪井-3	フレイク	和田峠系-2
坪井-8	フレイク	和田峠系-2	坪井-4	フレイク	和田峠系-2
坪井-9	フレイク	和田峠系-2	坪井-5	フレイク	和田峠系-2
坪井-10	フレイク	和田峠系-2	坪井-6	フレイク	和田峠系-2
花畑-1	フレイク	和田峠系-1	坪井-7	フレイク	和田峠系-2
花畑-2	フレイク	和系-1 (K20大)	坪井-8	フレイク	和田峠系-2
西久保1-1	製品	和田峠系-1	坪井-9	フレイク	和田峠系-2
西久保1-2	フレイク	和田峠系-2	坪井-10	フレイク	和田峠系-2
西久保1-3	製品	和田峠系-2	西久保1-2	フレイク	和田峠系-2
西久保1-4	フレイク	和田峠系-2	西久保1-3	製品	和田峠系-2
石畑-1	製品	和田峠系-1	西久保1-4	フレイク	和田峠系-2
石畑-2	フレイク	和田峠系-2H?	石畑-2	フレイク	和田峠系-2H?
石畑-3	フレイク	和田峠系-2H?	石畑-3	フレイク	和田峠系-2H?

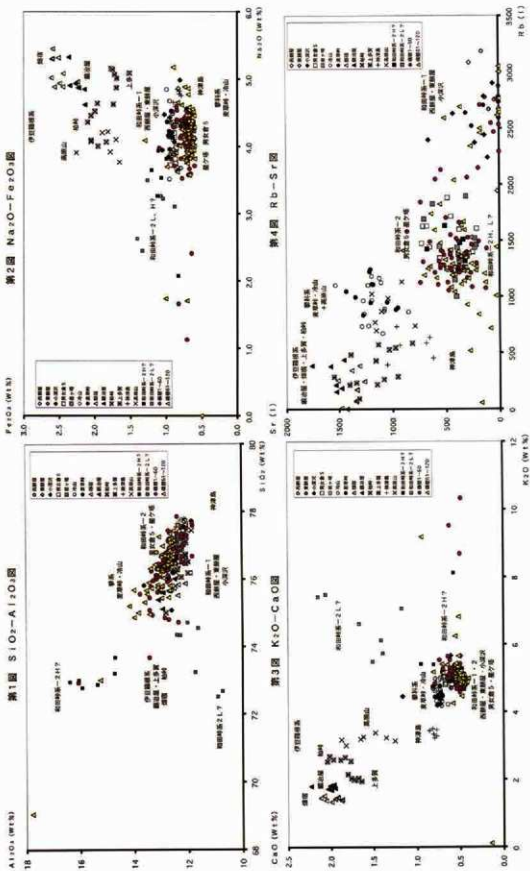
第3表 黒曜石原産地分類基準

原産地	分類特性
和田峠系-1	西條郡・東條郡・小泉町の3町体で共通
和系-1 (K20大)	Rb-Srで和田峠系-1、KzOが6%以上 和田峠系-1の支脈?
和系-1 (O20大)	Rb-Srで和田峠系-1、CaOが1~1.5% 和田峠系-1の支脈?
和田峠系-2	嵐ヶ台・男女堂の2町体で共通
和田峠-2L?	SiO ₂ の値が低く、Al ₂ O ₃ の値が高い 宇野台ノ麓遺跡の分析時に検出
和田峠-2H?	SiO ₂ の値が低く、Al ₂ O ₃ の値が高い 宇野台ノ麓遺跡の分析時に検出
和系-2 (K20大)	Rb-Srで和田峠系-2、KzOが6%以上 和田峠系-2の支脈?
和系-2 (O20大)	Rb-Srで和田峠系-2、CaOが1~1.5% 和田峠系-2の支脈?
不明 (嵐ヶ; 嵐大)	SiO ₂ が66~72%、Al ₂ O ₃ が14~20%
不明 (嵐ヶ; 嵐小)	SiO ₂ が66~72%、Al ₂ O ₃ が10~14%
不明 (Rb大)?	Rbが3500以上
不明 (Rb小)?	Rbが90~1000
畑系	珪酸素: Fe ₂ O ₃ が1.5%以上、CaOが1%以上
柳村系	炭素時・舟山の2町体で共通
高瀬山	珪酸素: Fe ₂ O ₃ が1.5%以上、畑村に近い
津島	津島・志麻島の両島の町体で共通
安山質	SiO ₂ が52~66%の安山質領域にある 安山質領域の黒曜石
不明 (青島)	分析された組成は原産地黒曜石の組成とは対比されない
不明 (青島)	分析された組成は原産地黒曜石の組成とは対比されない
不明	分析された組成は原産地黒曜石の組成とは対比されない

第4表 遺跡出土遺物・原産地対比表

原産地	遺跡	遺物	遺物数	原産地	遺物	遺物数	原産地	遺物	遺物数	原産地	遺物	遺物数	原産地	遺物	遺物数		
和田峠系-1	150	17	49	17	4	17	4	17	4	17	4	17	4	17	4		
和系-1 (K20大)	120	17	20	17	2	17	2	17	2	17	2	17	2	17	2		
和系-1 (O20大)	120	17	133	17	1	133	1	133	1	133	1	133	1	133	1		
和田峠系-2	109	76	209	74	1	209	74	1	209	74	1	209	74	1	209	74	
和田峠-2L?	10	100	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5	
和田峠-2H?	2	87	2	2	87	2	2	87	2	2	87	2	2	87	2	2	87
和系-2 (K20大)	1	3	75	3	75	3	75	3	75	3	75	3	75	3	75	3	75
和系-2 (O20大)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明 (嵐ヶ; 嵐大)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明 (嵐ヶ; 嵐小)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明 (Rb大)?	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
不明 (Rb小)?	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
畑系	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
柳村系	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
高瀬山	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
津島	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
安山質	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明 (青島)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明 (青島)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
不明	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	144	10	2	4	2	119	2	292	100	1	1	1	1	1	1	1	1





第6章 ま と め

長野県一本松遺跡は、吾妻川上流域の左岸に形成された河岸段丘面に立地し、JR 長野原草津口駅の北側に展開する上位段丘面が遺跡地で、この西側には吾妻川と白砂川の合流点が位置する。遺跡地には、八ツ場ダム建設に関連して、工事用道路である「一本松・幸伸進入路」や代替地造成等の工事が計画されており、これに伴って平成6年から発掘調査が開始され、現在も継続中である。本書は、年度を区切りとして平成6年度～8年度までの調査成果について報告するもので、この対象となる調査区は進入路区域を主体としている。このため、調査区は路線に沿って東西に細長い区画を呈し、段丘面上のほぼ中央部を横断するトレンチ状に調査が行われた状況である。この結果、縄文時代を中心とする遺構・遺物、また僅かながら弥生・古墳・平安・中世・近世の遺構や遺物が検出され、本遺跡の一端を明らかにすることができた。なお、平成9年度以降の調査資料については現在整理中であり、さらに今後は造成地を対象とする比較的広範囲な調査も予定される。従って本章では、本遺跡の主体である縄文時代の遺構・遺物について、現状における所見等を述べてまとめたい。

縄文時代の遺物について

縄文時代の遺物については、編年や地域性等に係わる土器の様相を述べたい。本遺跡出土の土器は、分類にも示したとおり早期から晩期のものが認められるが、早期・前期・晩期の土器は稀少であり、中期と後期が多数を占める。さらに中期では後葉、後期では前葉の時期が中心的な傾向にあり、本遺跡の主体となる時期を示すものといえよう。以下、主体的な中期と後期の土器群について、大まかな特徴を捉えながら段階的に整理してみたい。

中期

分類では3期とした時期で、前葉～中葉の土器は少ない状況であり、図示した土器においては遺構外出土の4区№104が五領ヶ台式の可能性を含み、6区№170が阿玉台Ⅱ式末に併行するものと考えられる。また分類において「その他」とした土器の中には、該期に含まれる可能性のものがあるように思われるが、型式や類型が不明確であり検討を要する。

I群とした三原田式(加曾利EⅠ式)併行期では、三原田式・焼町類型・井戸尻式・勝坂式などの破片が認められている。これらは、4区埋没谷部の包含層中から比較的多く出土しているが、量的には少ない傾向にあり、5区・6区の台地縁辺部を中心に破片として看取される状況である。遺構出土では、6-177号土坑№1が器形復原できた資料で該期と考えられる。これらの時期は、各型式や類型の新相にあたる終末期に相当すると思われる。

II群とした加曾利EⅡ式併行期では、加曾利EⅡ式・唐草文系土器・曾利式系・新潟系などの土器が認められているが、後出するIII群(加曾利EⅢ式併行期)やIV群(加曾利EⅣ式併行期)の土器群と比較すると、出土量は少ない状況である。この段階の土器としては、遺構出土では6-8号配石№1～3、6-25号配石№1、5-9号住居跡№1、遺構外出土では6区№28などの深鉢が代表的である。

6-8号配石の3点は、キャリバー状の器形を呈する頸部に明瞭な無文帯を持ち、口縁部の文様帯などから加曾利EⅡ式の新しい段階に相当するものと思われる。6-25号配石№1は、外反する口縁部が無文帯で、胴部は膨らむ器形を呈し、頸部には褶曲するような波状隆帯を横位に巡らす。地文には縄文を施し、全体的には曾利Ⅱ式の影響下にあるものと考えられる。5-9号住居跡№1は、隆帯による腕骨状の懸垂文や地